

第4節 弥生時代後期

1 土坑

SK3004 (第191図) H-3地区に位置する。SD3007を切り、NR3001によって南側半分を削平されており、その平面形態は、やや南北に長い半円形を呈する。残存径約1.6m、深さ約0.4mを測る。埋土は、粘土、シルト、砂(細粒砂~粗粒砂)と、シルトと砂がブロックに混合して堆積している。遺物は、砂、粘土のブロック中に集中している。この土坑からは土器以外に、貨泉、変形した銅鏃が出土したが、他にスッポン、木片、木炭などの自然遺物も多く、種々雑多な物が出土している。この状況は、この土坑の性格の一面を示している様である。

出土遺物(第192・193・194図)

〔土器〕(1~8) 高杯形、壺形、鉢形土器等が出土した。第IV-V様式である。

壺形土器(1・5) (1)は復元口径14.6cmを測り、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもつ。端部に2度粘土を付加する。(5)は体部片で、竹管円形浮文を施し、赤色顔料を塗布する。生駒西麓型の胎土である。

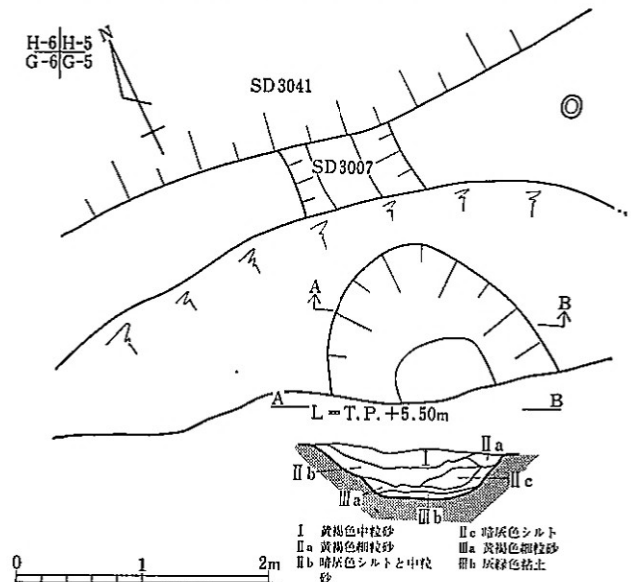
高杯形土器(2・3・4・7・8) (2・3)は稜をもって直口する口縁部をもつ。(2)は復元口径20.8cm、(3)は25.2cmを測る。(3)の内面はヘラナデ調整である。(4)は復元口径21.6cmを測り、稜をもって内彎する口縁部をもち、端部に凹線2条を施す。内面に棒状凸帯を口縁部から杯底部に貼りつけている。体部外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整の上をヨコナデ調整である。(7)は復元裾部径6.5cmを測り、透し穴は5ヶ所である。(8)は脚部片で、復元裾部径9.0cmを測り、脚裾部に凹線を施す。

鉢形土器(6) 復元口径13.8cmを測り、直口の碗状を呈する。内外面ヘラナデ調整である。

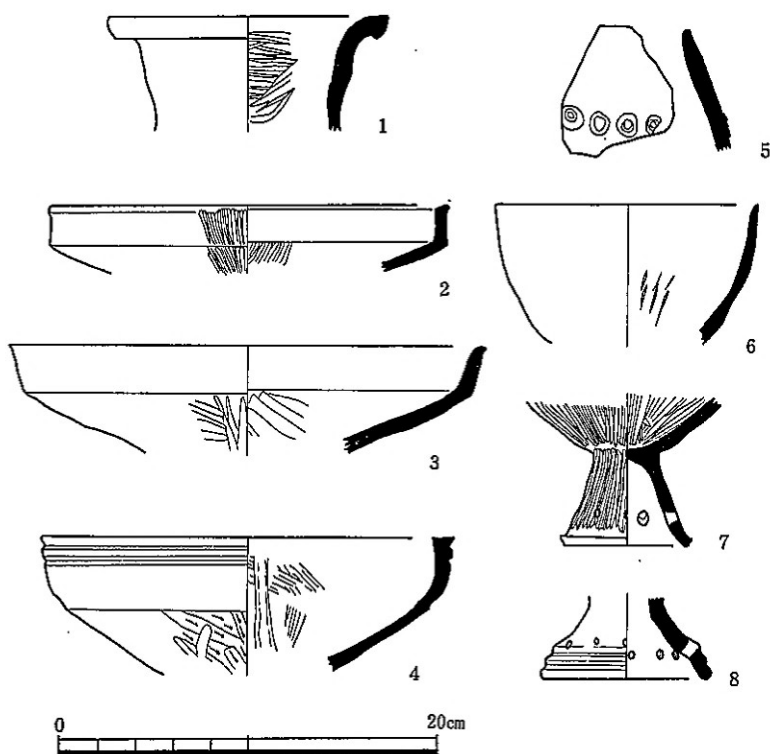
〔石器〕(9・10) 石鏃、石槍が出土した。

石鏃(9) 長さ3.0cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重量0.8gをそれぞれ測る。尖基無茎式で柳葉形を呈する。薄い剝片を利用して作られ、両面とも中央に大剝離面を残し、縁辺のみに調整剝離を施す。

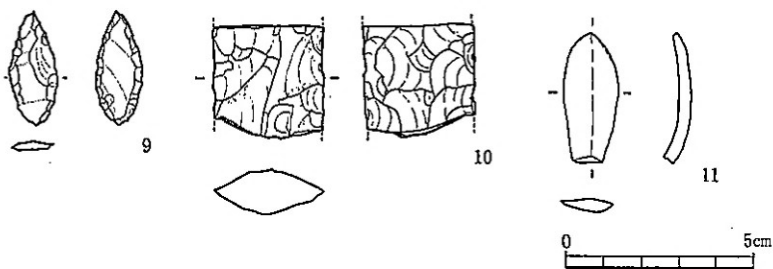
石槍(10) 現存長2.9cm、幅2.9cm、厚さ1.2cmを測る。中央部のみ残存。断面はレンズ状を呈する。両面とも側辺から剝離調整を施す。



第191図 SK3004遺構平面図及び土層断面図(1/40)



第192図 SK3004出土遺物実測図



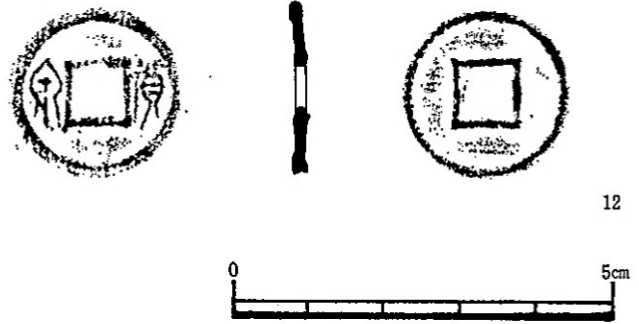
第193図 SK3004出土遺物実測図

〔青銅器〕 (11・12) 銅鏃、貨泉が出土した。

銅鏃 (11) 柳葉形を呈する有基式の銅鏃であったと考えられるが、基部を消失し変形している。残存全長3.4cm、幅1.4cmを測る。断面は扁平な菱形を呈するが、あまり錆は明瞭ではなく、また磨滅もしている。

貨泉 (12) 第1層の中粒砂から出土した。完形である。径2.70~2.75cm、重量3.75g、厚さ0.20cmを測る。縁の幅は0.15~0.22cmで、一定していない。この為、径1.89cmの内円は、外径と若干ずれているように見られる。0.91×0.92cmの方形の郭の中には、0.56×0.53cmの方形の穴が開けられている。この内孔は、内縁に対して右下がりに若干のずれが見られる。内縁上面は、突

き叩かれた様な痕跡がみられ、これによって縁はつぶされており、裏面はこの部分がふくらんでいる。最初に発行された時に定められた法量一径1寸(約2.25cm)、重量五銖(約3.19g)一と本遺跡出土の貨泉と比較すると、径、重量とも大形である。



第194図 SK3004出土遺物実測図

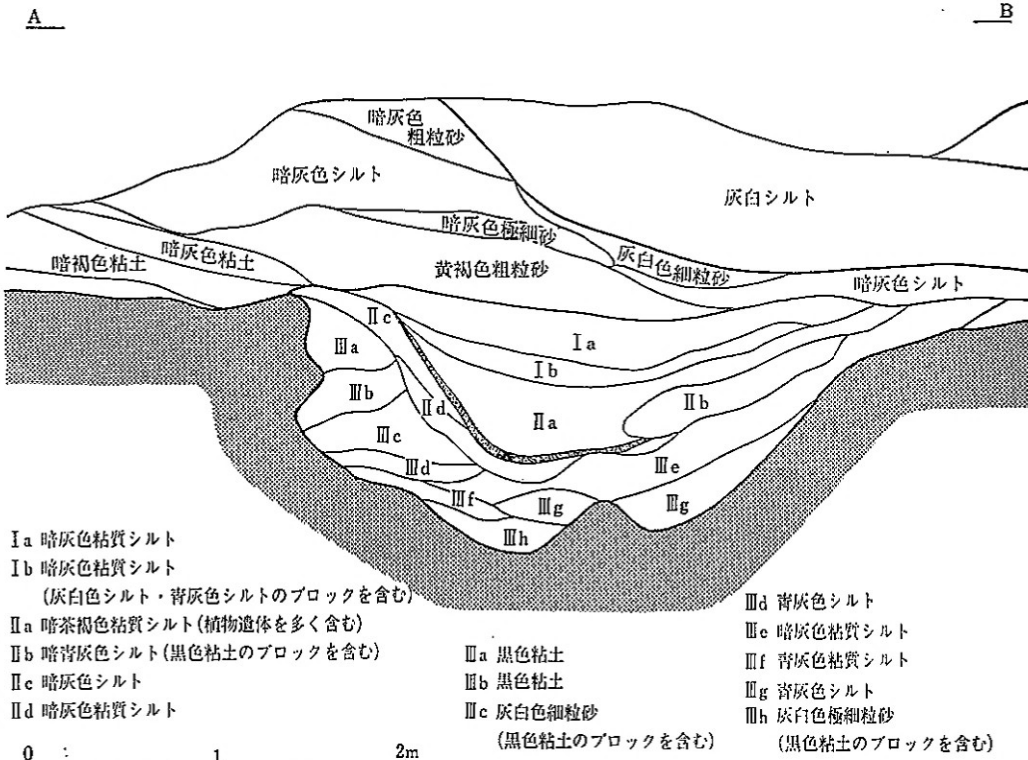
本遺跡では、今回の調査区から西約200mで行なわれている近畿自動車道関係の調査区からも3枚の貨泉が出土している。亀井遺跡からの出土数は計4枚となる。近畿自動車道から出土した貨泉は、いずれも本調査区出土と比べると法量が小さい。参考に他地域の貨泉出土地を掲げておく。

第2表 貨泉出土地名表

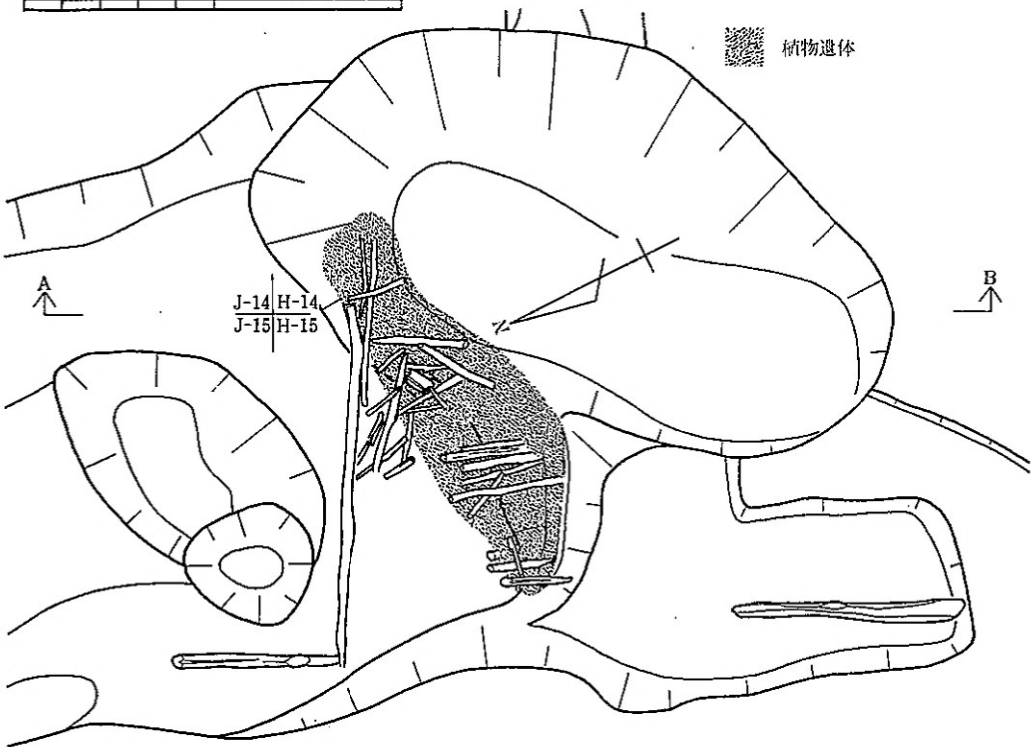
地名	遺構	伴出品	数
長崎県下県郡豊玉村佐保シゲノダン		馬鐸・鉄矛・その他	1
// 宍岐郡芦辺町原の辻		細形銅剣・鉄刀子・その他	1
福岡県志摩町御床松原15		鉄矛	1
// 直方市感田			1
広島県福山市津之郷町本谷	包含層		1
京都府熊野郡久美浜町湊宮函石浜		銅銖	2
大阪府東住吉区瓜破西之町		銅銖	2

本表は、古代史発掘4「弥生時代青銅器出土地名表」(1975年 講談社)から抜粋し、作製した。

SK3039(第195図) I-15区、SD3036の底面で検出された。平面形は長楕円形を呈する。長軸1.75m、短軸0.98m、深さ1.60mを測る。地山の青灰色シルト層とその下位の黒色粘土層を掘り抜き、灰白色極細粒砂層まで掘り込まれている。断面形は、すり鉢状を呈する。埋土は、I層-暗灰色粘質シルト、II層-暗茶褐色粘質シルト、III層-青灰色シルト・黒色粘土がブロック状に混入する層の3層に大別できる。II層からは、植物遺体、土器が多く出土しており、西北側にはIII層上面に自然木が多く出土した。この自然木は、SD3037と直交して南北方向に堆積していた。意識的に打ち込まれたものはなかった。更にこの自然木を覆うように厚さ2cmで、植物遺体の層が堆積している。主軸方向は、N-51°-Eである。遺物は中期の土器が出土しているが、堆積、切合等から後期の遺構と考えられる。



- Ia 暗灰色粘質シルト
- Ib 暗灰色粘質シルト
(灰白色シルト・青灰色シルトのブロックを含む)
- IIa 暗茶褐色粘質シルト(植物遺体を多く含む)
- IIb 暗青灰色シルト(黒色粘土のブロックを含む)
- IIc 暗灰色シルト
- IId 暗灰色粘質シルト
- IIIa 黒色粘土
- IIIb 黒色粘土
- IIIc 灰白色細粒砂
(黒色粘土のブロックを含む)
- IIId 青灰色シルト
- IIIe 暗灰色粘質シルト
- IIIf 青灰色粘質シルト
- IIIg 青灰色シルト
- IIIh 灰白色極細粒砂
(黒色粘土のブロックを含む)



第195図 SK3039遺構平面図及び土層断面図(1/40)

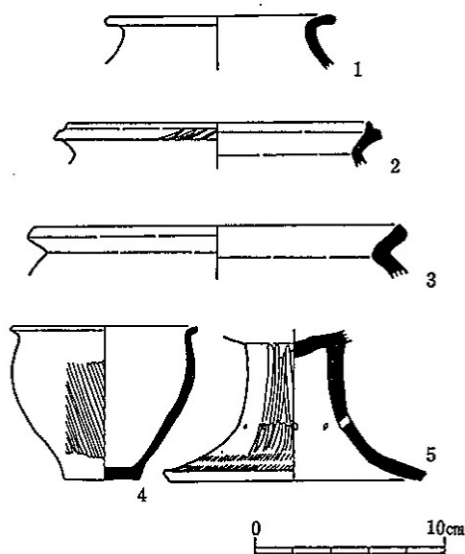
出土遺物（第196図）

〔土器〕（1～5） 甕形、小型甕形、高杯形土器等が出土した。第Ⅲ～Ⅳ様式である。

甕形土器（1・2・3）（1）は復元口径12.2cmを測り、水平に曲がる口縁部をもつ。生駒西麓の胎土である。（2）は復元口径16.0cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張し、外面に刻目を施す。（3）は復元口径19.5cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや肥厚する。

小型甕形土器（4） 口径9.7cm、器高8.2cmを測り、丸味のある体部に短く外反する口縁部をもつ。内面はナデ調整である。生駒西麓型胎土である。

高杯形土器（5） 脚部片で、脚裾部径は14.3cmを測り、透し穴は8ヶ所である。裾部外面に列点文を2段に施す。生駒西麓型の胎土である。



第196図 S K3039出土遺物実測図

2 井戸

S E 3004（第197図） K一2区で検出され、平面形は円形、掘方径1.15～1.25m、深さ1.0mを測る断面逆台形である。埋土は4層に大別され、下から黒灰色粘土混り地山ブロック土層、黒灰色粘土層、地山のブロックを多く含む黒灰色粘土、地山ブロック含む黒灰色粘土層である。

出土遺物（第198図）

〔土器〕（1・2） 壺形土器、鉢形土器が出土した。第Ⅴ様式である。

壺形土器（1） 復元口径18.0cmを測り、下方に拡張する口縁部をもつ。端部に竹管文を施す。生駒西麓型の胎土である。

鉢形土器（2） 復元口径11.0cmを測る碗状のものであるが、口縁端部内外に赤色顔料を塗る。

S E 3005（第199図） K一2区北半部で検出した。第Ⅴb層の最上面から掘り込まれており、西半部は攪乱を受けている。掘方径約1.6m、深さ約1.8mを測り、湧水層である砂礫層まで達している。井戸最下面には、直径約0.7mの1段くぼんだ部分があり、井戸枠の抜き取られた跡と推定された。埋土は3層に大別できる。上層の黒灰色粘質土は、周囲の包含層との区別が容易でない。中層は土器片、木片、植物遺体を多量に含む黒色有機質土の互層で、炭、灰の薄層が幾層も認められた。下層は掘方の側壁が崩れ落ちた土で、地山の青灰色シルトや黒灰色粘土が乱雑な堆積状況を示している。下層の上面で完形の壺形土器2点が、また、井戸枠の支持材と考え

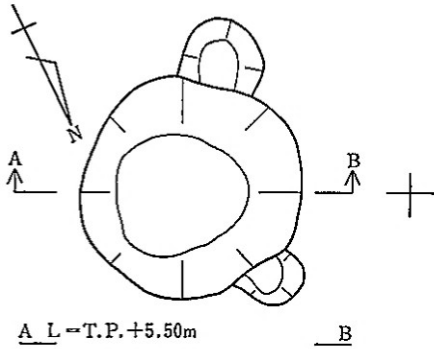
られる棒状の木材2本が掘方壁面に押しつけられたような状態で出土している。

出土遺物 (第200図)

〔土器〕 下層の部分で、壺形土器2点が出土した。第V様式である。これらの壺形土器は、S

E3005廃棄時に井戸枠が抜き取られ、側壁が崩れ落ちた上に投棄されたと思われるような出土状態であった。

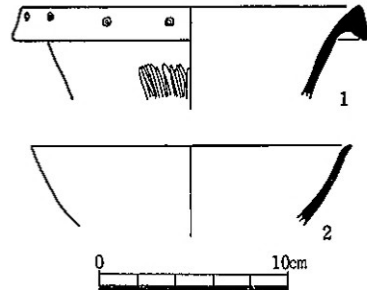
壺形土器 (1・2) (1)は口径10.9cm、器高21.3cm、最大腹径15.6cm、底部径6.4cmを測る。中央が最もふくらむ体部に、口縁部はやや外反して短く立ち上がり、端部は丸く納まる。底部は周囲がややくびれ、底面中央が少し凹む。色調は淡黄赤褐色を呈し、胎土には1~2mmの砂粒を多く含むが、焼成は良好である。調整は比較的大雑把



- Ia 黒色粘土
- Ib 黒色粘土・炭を含む
- Ic 黒色粘土・青灰色シルト
- II 黒褐色粘土
- III 黒色粘土と青灰色シルトをブロック状に混入のブロックを含む

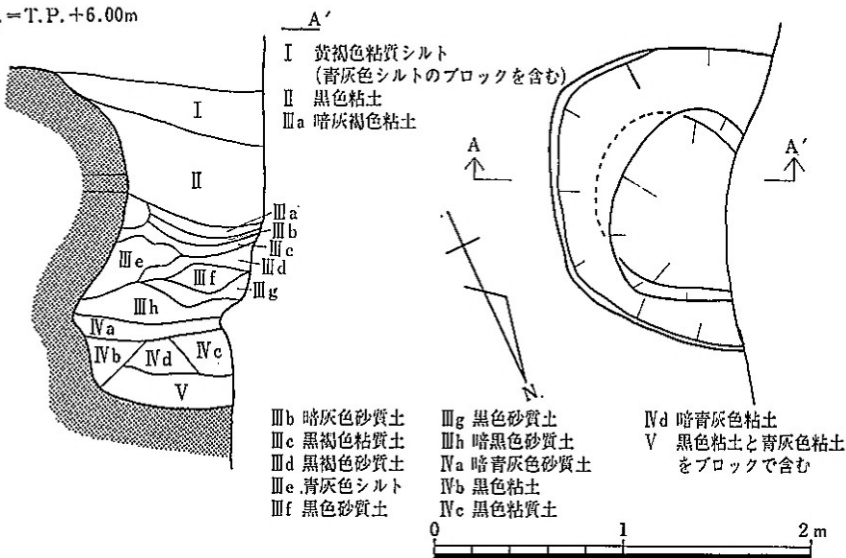


第197図 SE3004遺構平面図及び土層断面図 (1/40)



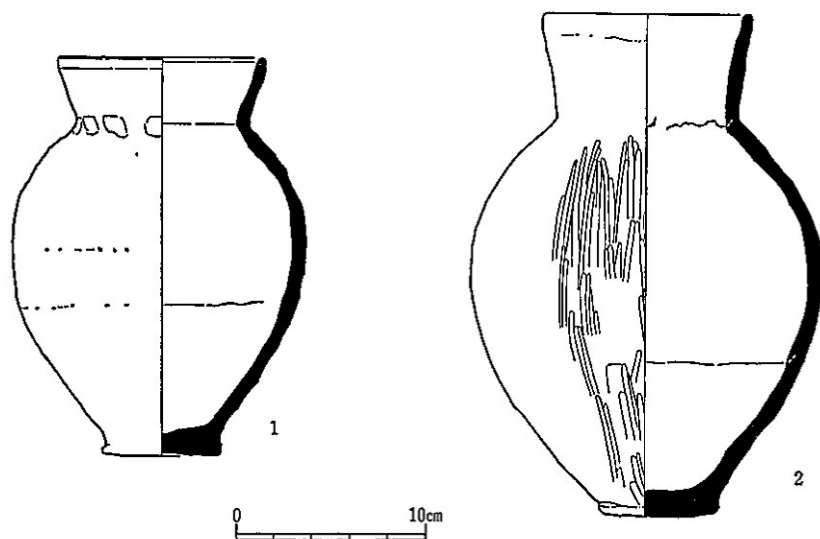
第198図 SE3004出土遺物実測図

A L=T.P.+6.00m



- I 黄褐色粘質シルト (青灰色シルトのブロックを含む)
- II 黒色粘土
- IIIa 暗灰褐色粘土
- IIIb 暗灰色砂質土
- IIIc 黒褐色粘質土
- IIId 黒褐色砂質土
- IIIe 青灰色シルト
- IIIf 黒色砂質土
- IIIg 黒色砂質土
- IIIh 暗黒色砂質土
- IVa 暗青灰色砂質土
- IVb 黒色粘土
- IVc 黒色粘質土
- IVd 暗青灰色粘土
- V 黒色粘土と青灰色粘土をブロックで含む

第199図 SE3005遺構平面図及び土層断面図 (1/40)



第200図 SE3005出土遺物実測図

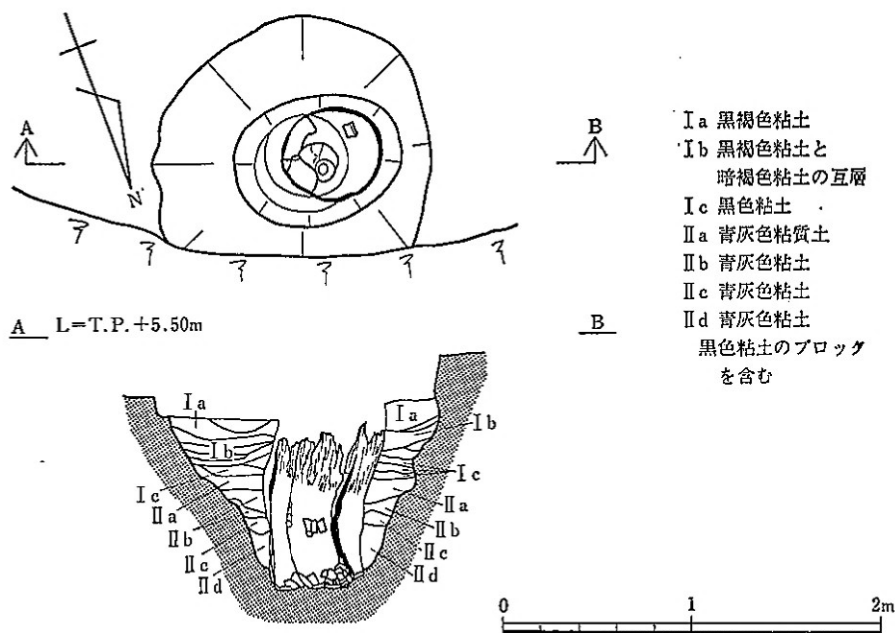
で、口縁部内外面をヨコナデする他、体部外面は、粘土紐の接ぎ目が残る程度の指ナデ、内面はヘラケズリの上に大まかな指ナデを施すだけで、くびれ部には指頭痕が残る。(2)は口径11.1cm、器高26.5cm、最大腹径18.7cm、底部径6.4cmを測る。中央やや下が最もふくらむ体部に、口頸部はわずかに外反して立ち上がり、端部は丸く納まる。突出した底部は、周囲がややくびれる。色調は暗赤褐色を呈し、生駒西麓型の特徴的な胎土で、焼成は良好である。口縁部をヨコナデし、体部外面にはいねいなヘラミガキを施す。ヘラミガキは底面にも及んでいる。体部内面にはナデを加える。外面全体に著しい磨滅が見られることから、釣瓶として使用されていたとも考えられる。

SE3006 (第201図) K-3区、第Ⅱb層の上面で検出した。北側の一部は攪乱を受けている。掘方径約1.5m、底部径約0.6mで、掘方中央に直径約0.5mの1木をくり抜いた井戸枠が残存していた。井戸枠の現存高は約0.8mを測る。井戸枠の埋土中より、完形の壺形土器2点と、口縁部のみを欠く壺1点が重なって出土した。井戸枠内の埋土は、炭を多く含む黒色粘土である。掘方埋土は、黒褐色粘土、暗褐色粘土が互層となつてつき固められた状態を示しており、おおむね周囲の包含層と同様の土質であることから、SE3006の本来の掘り込み面は、他の後期の井戸と同様、第Ⅱb層の上面であったと推定される。

出土遺物 (第202図)

〔土器〕 井戸枠内より、第Ⅴ様式の壺形土器が3点出土した。

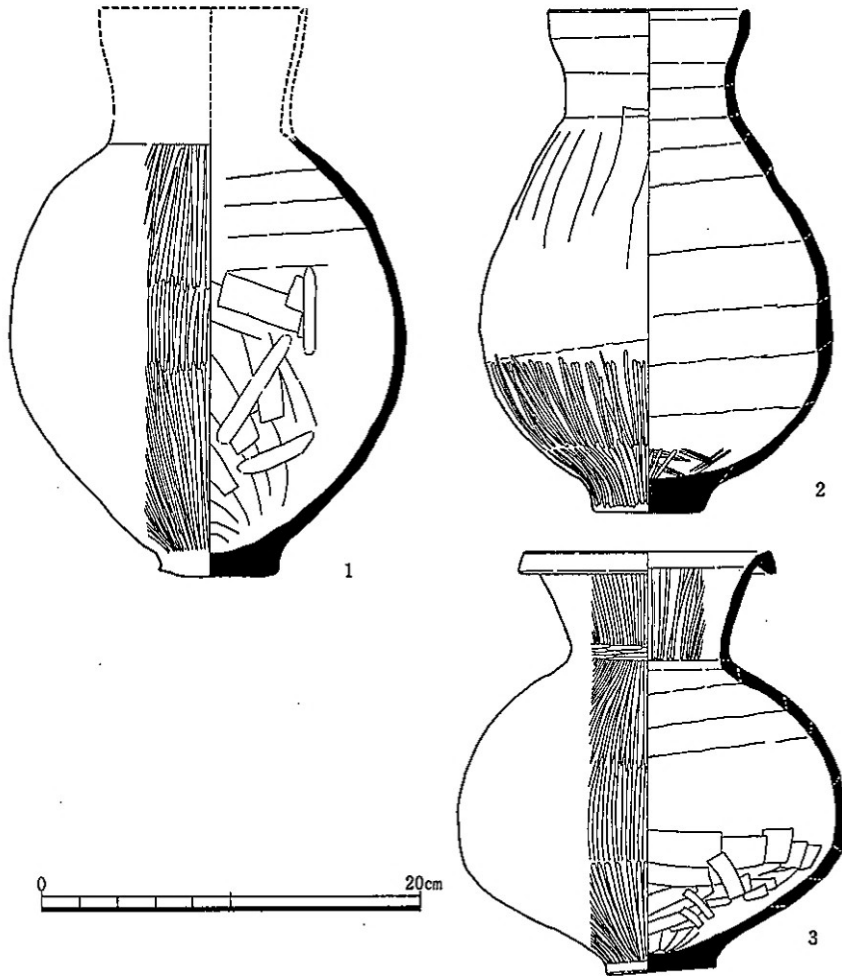
壺形土器 (1・2・3) (1)は口縁部を欠くが、肩部以下は現存する。最大腹径は21.1cm、底部径は6.5cmを測る。中央部が最もふくらむ体部を有し、小さな底部の周囲はややくびれる。色調は橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多く混入するが、焼成は良好である。体部外面は3段に分けていねいなヘラミガキを施し、内面上半部は大まかなナデ、下半部にはヘラ状工具による



第201図 SE 3006遺構平面図及び土層断面図(1/40)

ていねいなナデを加える。外面は著しく風化している。(2)は口径10.5cm、器高26.7cm、最大腹径18.8cm、底部径5.9cmを測る。下半部がふくらむ体部に、口頸部はゆるやかにくびれながらやや外反し、口縁端部はつまみ上げて直立する。突出した厚い底部を有する。色調は明褐色を呈し、精良な胎土で、焼成は良好である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上半部は荒いハケ状のナデを施すが、下半部はていねいにヘラミガキする。また、底部内面もていねいにヘラミガキするが、体部内面は粘土紐の接ぎ目がよくわかる程度の大まかなナデを施すのみである。(3)は完形であり、口径13.0cm、器高22.3cm、最大腹径20.5cm、底部径5.8cmを測る。中央が大きくふくらむ球形の体部に、口頸部は強くくびれて、やや外反して立ち上がる。端部は断面三角形の粘土帯を貼り付けて外側へ折り返す。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓の特徴的な胎土で、焼成は良好である。口縁部にはヨコナデを施し、頸部は内外面ともていねいなヘラミガキする。体部外面にも3段に分けてていねいなヘラミガキを施すが、くびれ部のみ横方向のヘラミガキを加える。体部内面の上半部は大まかなナデ、下半部はていねいなハケ状のナデを施す。

井戸杵(第201図) これは1木をくり抜いたもので、厚さは最大約6.0cmを測る。上部は著しく腐蝕しているが、下半部の保存状態は非常に良好であった。外面は樹皮をはいだ後、手斧でていねいな面取りを施し、下端は断面が三角形になるように仕上げてある。また内面の仕上げには、突きノミのような工具を使用したと思われる痕跡が観察された。これらの工具痕は非常に鋭利な感じを受け、鉄器によるものである可能性が高い。1ヶ所節穴と思われる穴があり、外側から別の板材でふさいでいた。



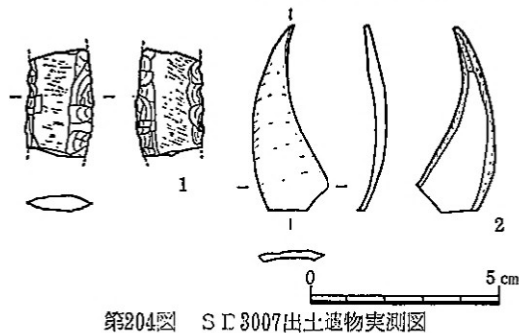
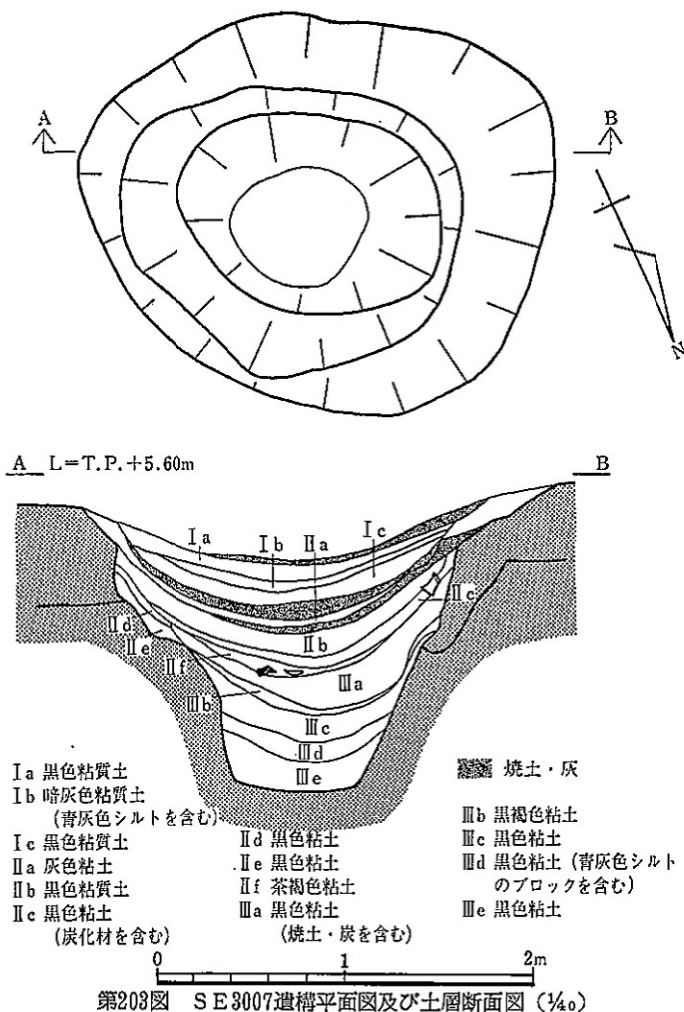
第202図 SE3006出土遺物実測図

SE3007 (第203図) K-3区、第Ⅱb層上面で検出した。掘方径約2.5m、底部径0.6mの下すぼまりの断面で、深さ約1.6mを測る。覆土はほぼ3層に大別できる。上層は炭、灰の薄層が幾層にも重なって形成されており、中層との間は焼土層となっている。井戸廃棄後の凹みの中で火を使用したためと考えられる。中層は数層の灰の薄層を挟んだ黒色粘土で、若干の土器片を含んでいる。下層は地山の青灰色シルトを含む黒灰色粘土で、少量の土器片を含んでいる。各層はいずれも中央が凹んだ堆積をしており、漸次に埋没した様子を示している。

出土遺物 (第204図)

〔土器〕 中期後半から後期の土器片が各層から出土したが、いずれも小片で、漸次に埋没していく課程で流入したものと考えられ、井戸の時期を示す良好な資料には恵まれていない。

〔石器〕 石小刀(1) 現存長2.8cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。中央部のみ残存。断面は薄いレンズ状を呈する。両面とも中央に大剝離面を残し、両側面に剝離調整を施す。



〔鉄器〕 図示できないが、小鉄片が出土している。錆化が著しく、どのような製品であったかは不明である。

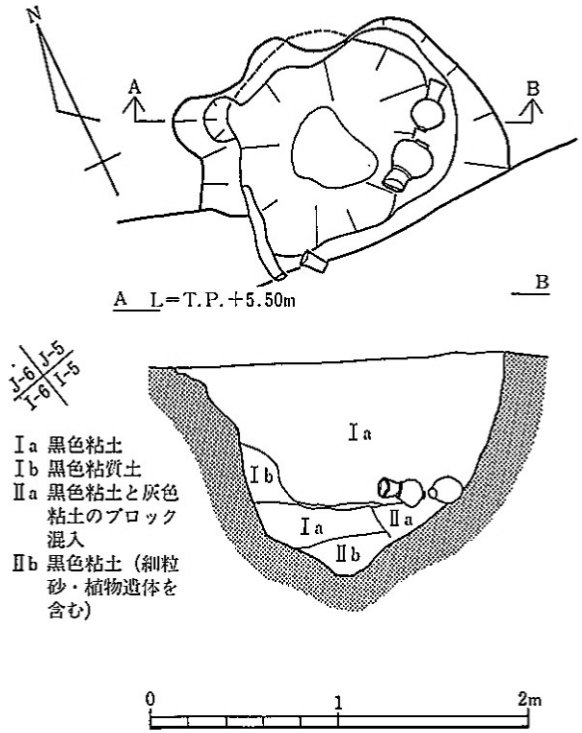
〔骨角製品〕 イノシシの牙製垂飾(2) 上半部を欠失するが、勾玉形であったと推定される。

S E 3011 (第 205 図) I—5 区、地山面で検出した。平面形は不整円形で、掘方径約 1.7m、深さ約 1.3m を測り、下すばまりの断面形をしている。埋土はほぼ 2 層に大別できる。上層は周囲の包含層と同様の黑色粘土、下層は灰黑色粘土と黑色粘土の互層で、帯水の著しい砂層を挟在している。下層が漸次的な堆積状況を示しているのに対し、上層は細分が不可能で、廃棄後、一気に埋め立てられた土層と理解される。以上のことから、S E 3011 の検出面は地山面であるが、本来の掘り込み面はそれより上層であることは確実であると考えられる。

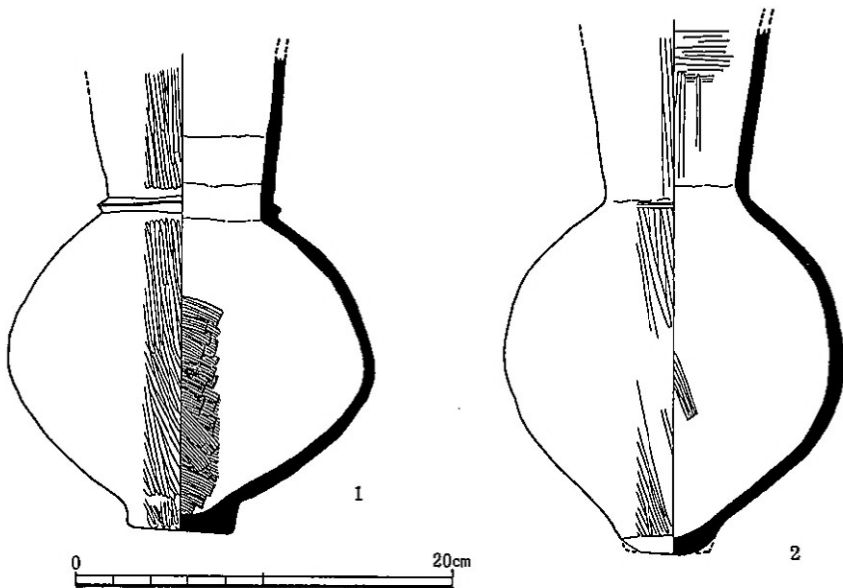
出土遺物（第206・207図）

〔土器〕（1・2） 廃棄時に投棄されたと推定される長頸壺形土器2点が、上層と下層の境界付近で出土した。

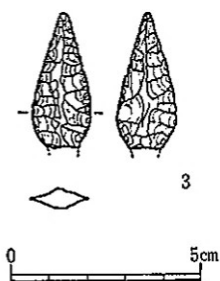
（1）は口縁部を欠くが、頸部以下は完存する。最大腹径19.5cm、底部径 5.8cmを測る。球形の体部にわずかに外反する口縁部が立ち上がる。くびれ部には断面三角形の貼り付け突帯を有する。底部は小さく突出する。色調は淡褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。調整はいねいで、頸部と体部外面には密にヘラミガキを施し、底面までヘラミガキする。頸部内面は指ナデ、体部内面にははいねいなハケメナデを施す。中期末の様相を備えているといえる。（2）も口縁部のみを欠く長頸壺で、最大腹径18.0cm、底部径 4.8cmを測る。中央がふくらむ体部に、やや外反する細目の口頸部が立ち上がる。色調は暗灰色を呈し、生駒西麓の特徴的な胎土で、焼成は良好



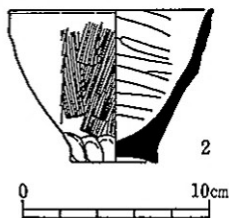
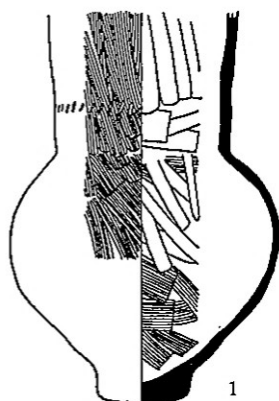
第205図 SE 3011遺構平面図及び土層断面図（1/40）



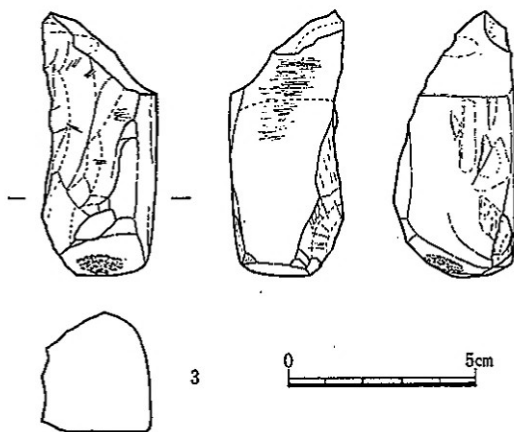
第206図 SE 3011出土遺物実測図



第207図 SE 3011出土遺物実測図



第208図 SE 3012出土遺物実測図



第209図 SE 3012出土遺物実測図

である。頸部と体部外面はていねいにヘラミガキし、体部内面には縦方向のハケメナデを施す。中期末から後期初頭に位置づけられる。外面全体が著しく磨滅しており、釣瓶として使用されていたものと考えられる。

〔石器〕 石鏃（3） 現存長3.6cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重量 2.5gを測る。尖基無茎式。先端と基部欠損。断面は菱形を呈する。鏃身両側辺は直線的にのび、両面とも両側辺から剝離調整を施し、部分的にトリミングを行なう。

SE 3012（第289図） J-5区、第Ⅱ層上面で検出した。ほぼ円形の平面形を呈し、掘方径約1.3m、深さ約1.6mを測り、底に近くなるにつれて極端に径が小さくなる。比較的小規模な井戸である。埋土は、ほぼ3層に大別できる。上層は炭、灰を多く含む黒色粘土で、土器片を少量含む。中層は植物遺体を多く含む黒色有機質土で、少量の土器片と多量の木片が出土した。下層はほとんど炭、灰で形成された軟弱な黒色粘土である。

出土遺物（第208・209図）

〔土器〕（1・2） 下層と中層との境界付近で、口縁部を欠く長頸壺形土器と小型の鉢形土器が出土した。

長頸壺形土器（1） 口縁部を欠くが、頸部以下は完存する。体部最大径14.2cm、底部径 5.0cmを測る。中央がふくらむ球形の体部に、太目のほぼ直立する頸部が立ち上がる。色調は赤褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。頸部

と体部外面はハケ状のナデを施し、くびれ部の少し上にヘラ状工具による列点文を施す。頸部内面は縦方向の指ナデ、体部内面はハケ状のナデの上に指ナデを加える。外面は磨滅が著しく、釣瓶として使用されていたと考えられる。

小型鉢形土器（2） 口径10.7cm、器高8.0cm、底部径4.6cmを測る。口縁部はつまんで、わずかに外反する。底部は周囲に指頭痕が残ってくびれ、底面は中央がやや凹む。色調は暗赤褐色を呈し、胎

土には2～5mm大の細礫を多く含むが、焼成は良好である。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ状のナデ、内面には指ナデを施す。

〔石器〕 柱状片刃石斧(3) 縦に割れ、さらに基部の2分の1以上を欠失している。残存長6.7cm、同幅2.8cm、厚さ3.2cm。刃部及び基部B面は2次的に平滑に磨かれており、また、B面の基端残存端部より1.5cm程は、わずかに窪んでいる。敲石に転用された可能性がある。

小結 後期の井戸で注目されるのは、SE3006の一木くり抜きの井戸枠である。弥生時代の一木くり抜きの井戸枠としては、唐古遺跡出土例(末永 他 1943)がつとに有名であり、近年の調査例では、池上遺跡の例(第2 阪和国道内遺跡調査会編 1970)が知られている。唐古遺跡の報告では腐朽が著しく、自然に空洞になったものか、くり抜き加工が行なわれたものか、不明であるとしているが、後年の小林行雄氏の見解では、くり抜き加工を認めておられる(水野 他 1976)。池上遺跡出土例は、SE3006同様、後期に属する。巨大な一木くり抜き井戸枠と板組みの井戸枠を組み合わせたもので、掘方内に井戸枠支持材を有する立派なものである。SE3006は、上半部の腐蝕が激しく、本来の高さを知ることはできないが、下半部の保存状態は良好で、さきに記述したように、鋭利な工具痕を観察することができた。他の木器、木製品の加工技術から推して、かなり高度なくり抜き技術が存在したことは明らかである。¹¹⁾ 弥生時代には、他に板材その他の井戸枠の存在が確認されている。¹²⁾ こういった井戸枠を有する井戸の調査例は多くはないが、素掘りの井戸と呼ばれているものの中には、SE3005のように井戸枠を抜き取られた後に埋没したと推定されるものも多くあると考えられる。今回の調査は、発掘区内に流入する地下水を完全に遮断することによって、低地遺跡であるにもかかわらず湧水に悩まされることなく井戸の細部まで調査する調査技術が改良されることができた。低湿地立地集落趾の調査の進展に伴い、調なら、今後井戸枠のある、あるいは、かつて井戸枠のあった井戸の検出数の増加が期待される。

次に、後期の井戸の埋没の様子について触れておく。5基の井戸の共通点は、基本的には第Ⅱb層上面掘り込みの下すばまりの掘方を有し、井戸枠が通有であったと考えられる点である。これらの井戸の覆土には、堆積状況に一定の特徴が認められる。結論めいたことを先に述べると、これらの井戸は井戸枠が抜き取られた後、一気に埋め立てられることなく、そのままかなりの期間放置されていたという点である。このことは、共通した土層である植物遺体を多く含む有機質土が漸次的な堆積を示していることから明らかである。覆土最下層は、側壁くずれ込み土とそうでないものがあるが、この側壁くずれ込み土が、井戸枠が抜き取られた時点の堆積であることは、この層の上面に、釣瓶に使用されていたと推定される完形土器などが廃棄されていることで明白である。放置されている間、これらの井戸は、炭や灰、焼土等の投棄坑としても利用されていた。SE3007は、ほとんど埋まりきるまでこのように利用された。SE3005、3011、3012は一定程度埋まったある時期に、人為的に埋め立てられたと推定される。しかし、いずれの場合も埋没しきった後も浅い窪みとして残ったのであろう。この窪みが再度、炭、灰、焼土の投棄坑や焚

火穴として利用されて最終的に埋没した。このパターンは中期・後期の井戸だけでなく、ピットや土坑にもみられ、1つの遺構が埋没する過程での再利用を示すものである。

〔註〕

- (1) たとえば、木製容器に見られるくり抜き技術は非常に精巧なものである。なお、弥生時代の木工技術については、町田章氏の次に掲げる論考がたいへんわかりやすくまとまっている。『木工技術の展開』古代史発掘4（1975、講談社）、『木器の製作と役割』日本考古学を学ぶ2（1979、有斐閣）
- (2) 唐古遺跡では、数本の杭を打ち込んで、ヨシなどを編み上げた井戸枠が検出されている。板組の井戸枠は、静岡県登呂遺跡、同有東第2遺跡、その他が知られている。

〔引用文献〕

- 末永雅雄、小林行雄、藤岡謙二郎 1943 『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊
第2 阪和国道内遺跡調査会 1970 『池上・四ツ池』
水野清一、小林行雄編 1976 『図解考古学辞典』

3 溝

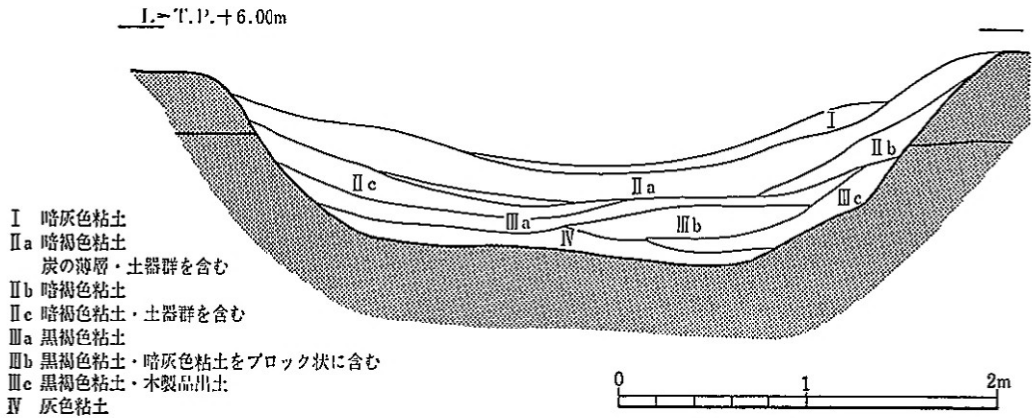
今回の調査によって検出された弥生時代後期の溝は、SD3008、3032、3033、3034、3035、3036、3037、3041の8条であった。

SD3008（第210図） I-6区で検出された。北側をSD3041、南側をNR3001に切られている。検出し得たのは2.5m程度であったが、検出された部分で北東-南西に伸びている。掘り込み面は第Ⅱb層上面で、他の当該時期の溝と同様である。上部幅4.2m、底部幅1.6m、深さ0.6mを測る。断面形は扁平な逆台形状を呈するが、溝底は東から西にわずかに傾斜している。埋土は上から、暗灰色粘土層、暗黒褐色粘土層、黒褐色粘土層、灰色粘土層の4層に大別され、全て粘土である。この点は他の後期の溝と著しく異っている。暗灰色粘土層、暗黒褐色粘土層中には、薄い炭層が数条認められた。

出土遺物（第211・212図）

〔土器〕（1～19） 暗黒褐色土層から壺形土器、高杯形土器、器台形土器等が一括出土した。

壺形土器（1・2・3・4・7・8・11・12） いずれも口縁部は短かく直口する。（1）は復元口径9.8cmを測り、体部外面はハケメ、内面は指押え調整である。（2）は復元口径10.0cm、最大腹径16.6cmを測り、内外面ナデ調整である。頸部に刺突文を施す。（3）は復元口径12.8cm



第210図 SD3008土層断面図(1/40)

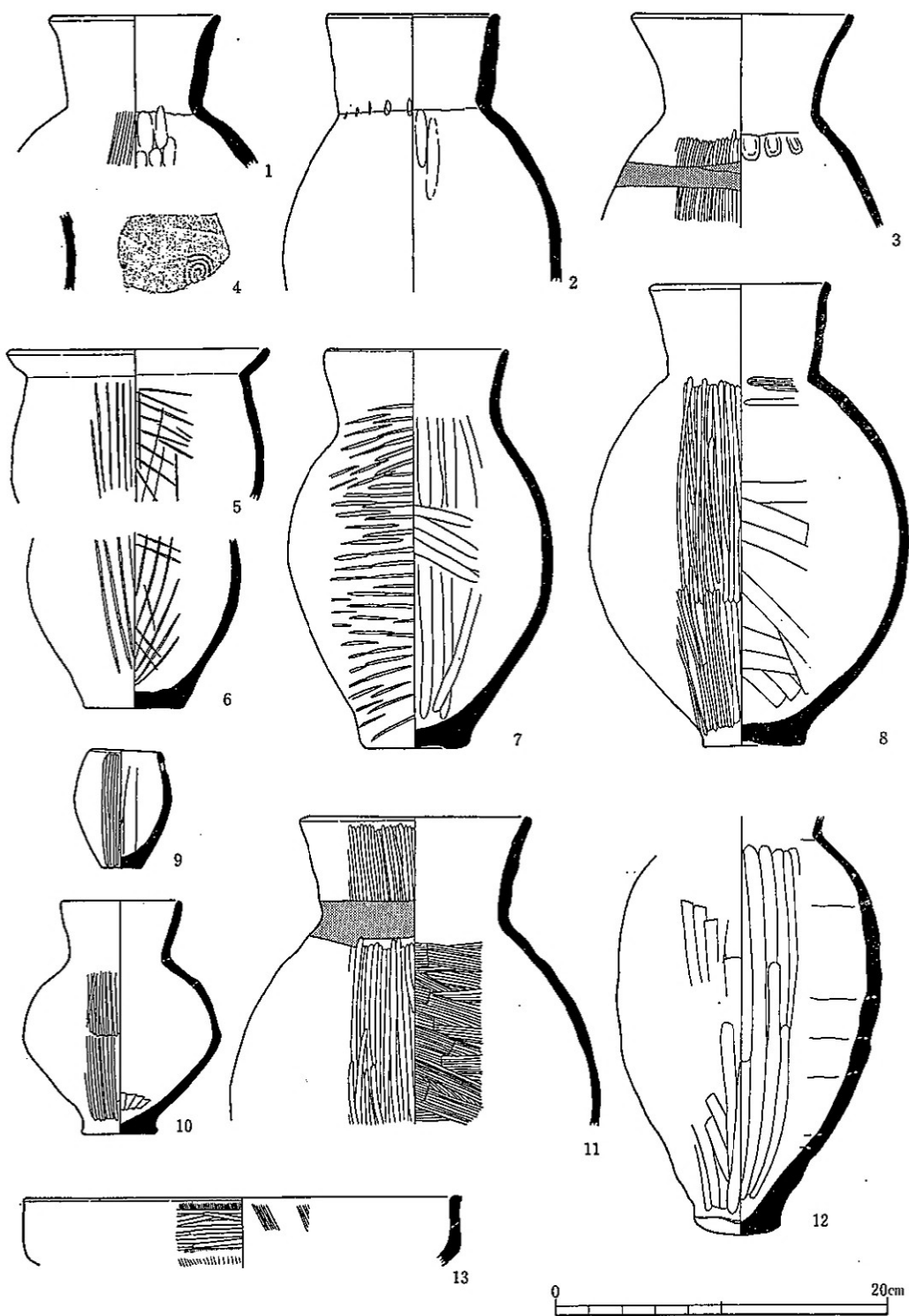
を測り、口縁部はわずかに内彎する。頸部に赤色顔料を塗布する。頸部と肩部の粘土の継ぎ目に指頭圧痕がある。(7)は口径10.6cm、器高24.0cm、最大腹径15.8cmを測る。外面はタタキメ、内面はナデ調整である。体部下半は2次的に火を受けている。内外面に煤が付着する。(8)は復元口径10.3cm、器高27.6cm、最大腹径19.0cmを測る。内面はヘラナデ調整である。(11)は復元口径13.2cm、最大腹径22.2cmを測る。頸部に赤色顔料を塗布する。内面はハケメ調整である。(12)は最大腹径16.0cmを測り、内外面ナデ調整である。2次的に火を受けたと思われる。(4)は体部片で、外面に双頭渦巻文を施す。

小型壺形土器(10) 口径7.0cm、器高14.0cm、最大腹径11.8cmを測り、口縁部は短い直口である。内面底部はヘラナデ調整である。

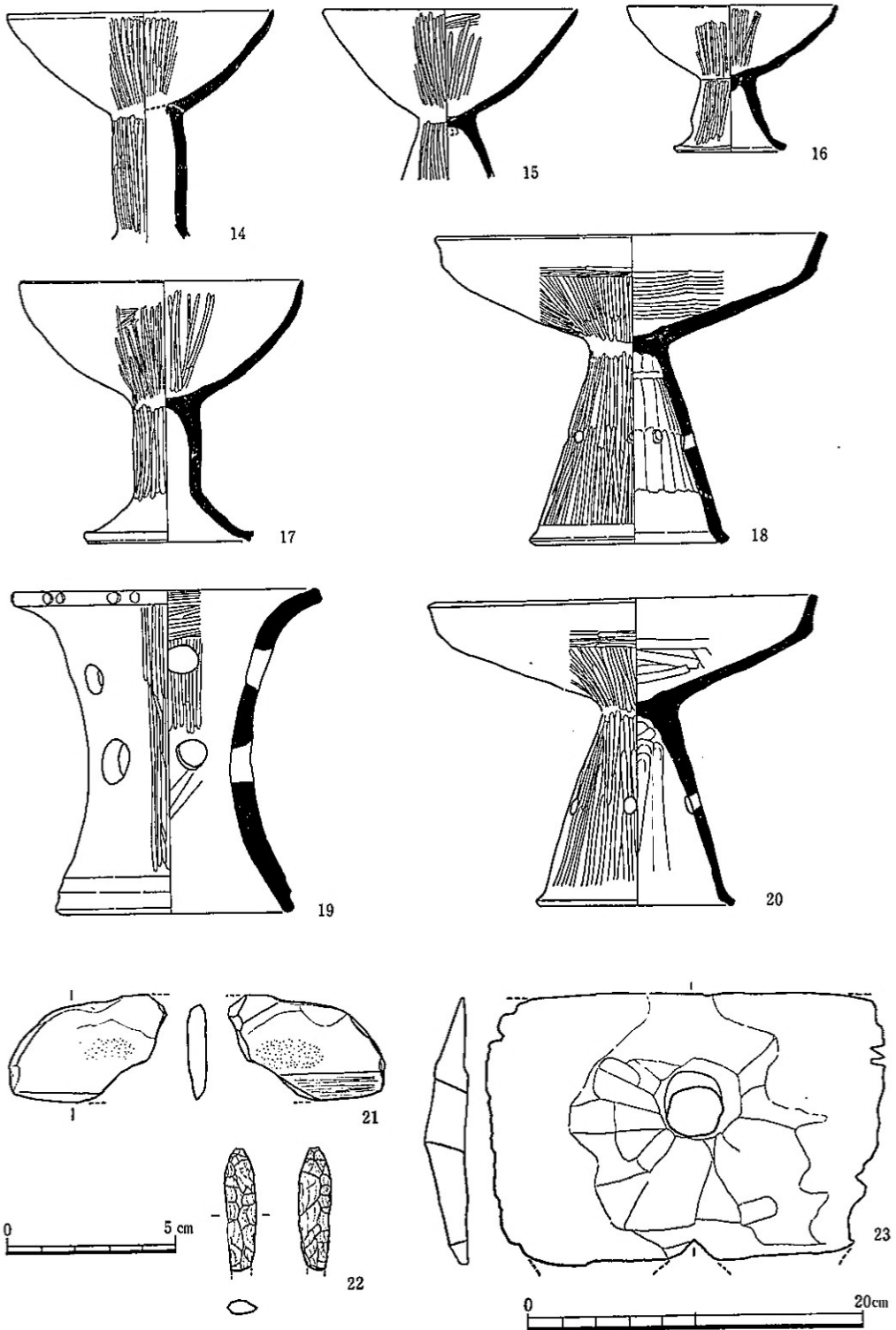
甕形土器(5・6) (5)は復元口径15.4cm、最大腹径15.1cmを測り、口縁部はやや内彎気味に「く」の字型に外反する。外面は縦方向に荒いハケメ、内面は不定方向の荒いハケメ調整である。全体に煤が付着している。(6)は復元口径5.9cm、最大腹径22.7cmを測る。胎土、焼成、色調とも(5)に類似する。全体に煤が付着する。

高杯形土器(13・14・15・16・17・18・20) (13・18・20)は外方に開く体部から屈曲して直口する口縁部をもつ。(13)は復元口径26.0cmを測り、口縁端部は外方へやや肥厚する。外面はハケメの上をヘラミガキ調整、内面はヨコナデの後、部分的にハケメ調整を施す。(18)は口径22.8cm、器高18.6cmを測る。体部内面にハケ状のナデ調整を6回手を止めて施す。脚部内面は指ナデ調整である。透しは2ヶ所1対が、3対と1ヶ所の計7ヶ所である。(20)は口径22.4cm、器高18.5cmを測る。体部内面はヘラナデ、脚部内面は指ナデ調整である。脚部透し穴は2ヶ所1対が3組と1個の計7ヶ所である。(14・15・16・17)は椀状の杯部をもつ。(14)は復元口径15.7cmを測り、脚部は柱状である。(15)は復元口径15.1cmを測り、脚部は裾広がりと思われる。

(14)に胎土、色調が酷似する。(16)は口径12.4cm、器高8.7cmを測る。口縁部は屈曲気味にやや立ち上がる。脚部は裾広がりである。(17)は口径17.0cm、器高15.6cmを測る。脚部は柱状を呈し、裾端部近くに透し穴をもつ。



第211图 SD3008出土物实测图



第212図 SD3008出土遺物実測図

器台形土器 (19) 口径18.0cm、底径13.6cm、器高19.3cmを測り、口径が底径より大きい鼓形である。口縁端部に円形浮文2ヶ所1対で、12対を貼りつける。裾部外面に2条の凹線を施す。透しは上段が5ヶ所、下段が2ヶ所1対で3対ある。

蛸壺形土器 (9) 口径4.1cm、器高7.1cm、最大腹径5.9cmを測り、口縁部はやや内彎し、平底である。穿孔は1個残存する。外面はヘラミガキ、内面はハケメナデ調整である。

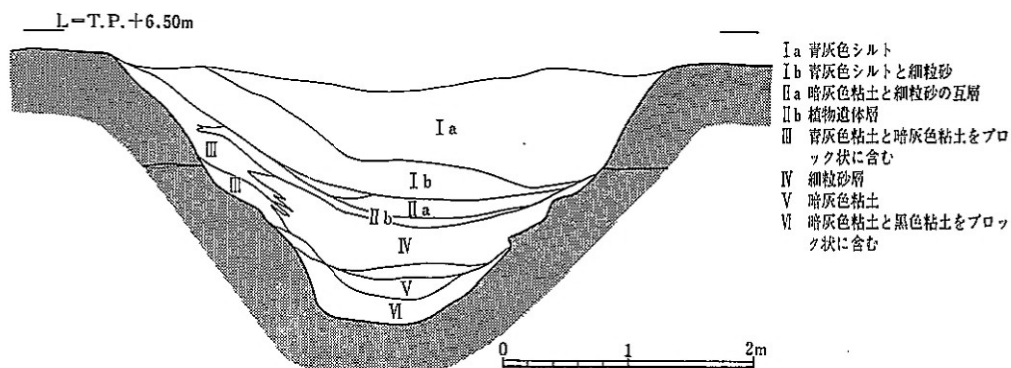
〔石器〕 (21・22)

石庖丁 (21) わずかに外彎する片刃の刃部をもち、背部は彎曲する。刃先は磨滅、背部は剝離している。裏面にも刃稜がみられる。両面に敲打痕が認められる。現存長4.2cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmを測る。

石錐 (22) 現存長3.7cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm、錐長0.7cm、錐径0.6×0.3cmを測る。頭部、錐部とも先端が欠損する。頭部と錐部の区別がなく、棒状を呈する。両面とも両側辺から剝離調整、B面は左半分に大剝離面を残す。

〔木器〕 黒褐色粘土層からえぶり (23) が出土した。身の部分がほぼ完形で残っている。歯はつくられていない。平面形は、横22.8cm、縦15.9cmの横長の長方形である。後面には、低い台形状に削り出された舟形突起がつくられている。断面形は全体に扁平な台形を呈する。最大厚2.6cm、頭部幅22.5cm、頭部厚0.3cm、刃縁部幅18.0cm、刃部厚(復元推定値)約0.5cmを測る。柄孔は、径3.5cm、着柄角度66°を測る。

SD3032 (第213図) G-12区~I-12区にかけて検出された。やや屈曲しながら南北に伸びる。南側はSD3031に、北側はSD3036と切合っている。全長13.0m、上部幅4.5m前後、底部幅0.7~1.2m、深さ2.1mを測る。断面逆台形を呈するが、西側は東側に比べて掘り込み角度がゆるい。一部2段掘り状の形態を呈する。埋土は4層に大別され、上層にシルト層、中層に細粒砂層、下層に暗灰色粘土層、最下層に暗灰色粘土のブロックと黒色粘土のブロックの混合層が堆積している。この上層にシルト、中層に砂層、下層に粘土ブロック層という堆積状況は、SD3033~3077までの各溝と基本的に共通するパターンである。なお、細砂層の上下に薄い植物遺体層が認められた。



第213図 SD3032土層断面図 (1/50)

出土遺物 (第214・215図)

〔土器・土製品〕 (1・2・5)

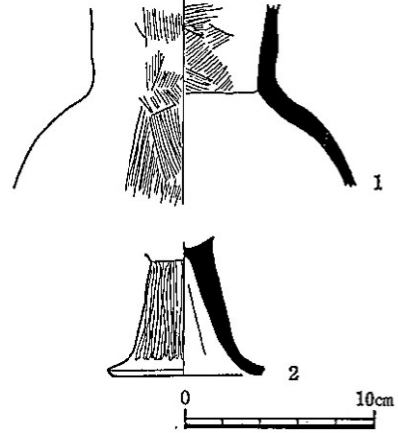
長頸壺形土器 (1) 頸部から肩部にかけての破片で、外面及び頸部内面はハケメ調整である。

高杯形土器 (2) 脚片で、底径 7.9cmを測る。外面はヘラミガキが施されている。

土製円板 (5) 土器片を利用して周縁を打ち欠き、小ぶりな円形に成形する。径 2.5× 2.6cm、厚さ 0.6cm、重量は5.9gである。

〔石器〕 (3・4)

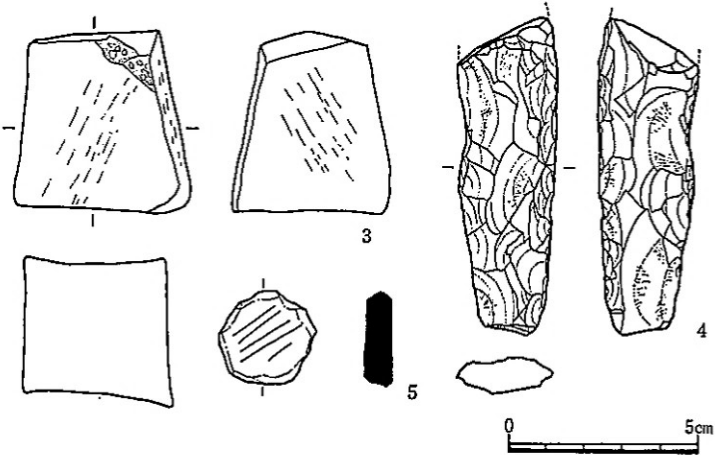
砥石 (3) 小形の台形を呈する。全長 4.9cm、最



第214図 SD3032出土遺物実測図

幅4.0cm、厚さ4.0cmを測り、断面は方形である。全ての面を使用している。石質はきめの細粒の和泉砂岩である。

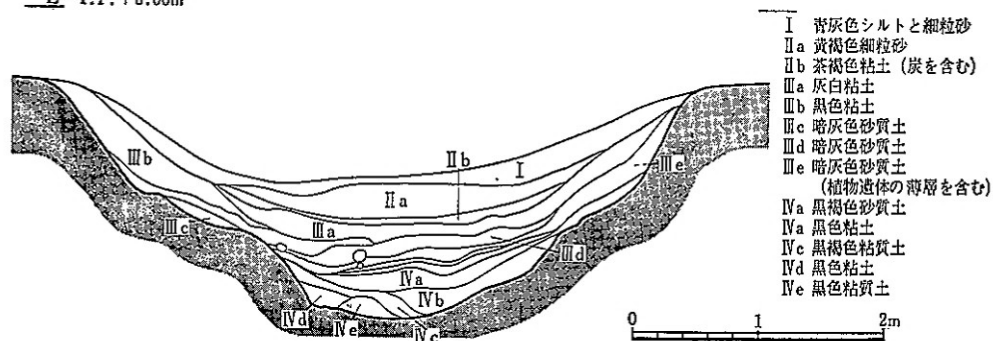
石槍 (4) 上半分欠損し、現存長 8.3cm、幅 2.6cm、厚さ0.9cmを測る。基部に向ってすばまり、自然礫面を残す基端は、中軸に対してやや斜めである。両面とも不揃いな剝離面からなり、両側辺の一部に階段状剝離が混在する。



第215図 SD3032出土遺物実測図

SD3033 (第216図) 8ライン以北のF、G区域を中心に検出された東西に走る溝で、西側は調査区外にのびている。東端はNR3001に切られている。検出部分での全長は直線距離で53mに及ぶ。F-16、17区にてSD3034と、G-15区にてSD3035と、G-12区にてSD3032とそれぞれ切合っている。上部幅3.2~5.4m、底部幅1.0~1.5m、深さ2.1~2.4mを測る。全体的に見れば、西に行くに従って深さを増す傾向が認められる。断面形は、基本的には逆台形状であるが、場所による変異が多い。2段、3段掘り状を呈する部分もあり、特に溝に平行する状態で数本の自然木を出土した15ライン付近では、両側の壁がともに3段掘りされていた。埋土の状況は、SD3032と基本的に同一であるが、15ライン付近では、下層に腐植土層、ブロック土層の堆積が顕著に認められた。埋土中の砂層の検討によれば、水の流れは東から西の方向である。

L=T.P.+6.00m



第216図 SD3033土層断面図(1/60)

出土遺物(第217・218・219・220・221・222・223・224図)

〔土器・土製品〕(1~37)

壺形土器(2・3・8・9・10・23・26) (2・3)は、ともに頸部は短く、やや外開きに直口する。(2)は復元口径12.8cmを測り、外面はヘラケズリ、内面は口頸部はヨコナデ、肩部がヘラケズリ調整である。(3)は復元口径11.8cmを測り、端部に刻目を施す。内外面はナデ調整である。(8)は口径10.4cm、器高19.0cm、最大腹径15.9cmを測り、頸部から腹部外面はハケメの上をヘラミガキ、外面下半部はタタキメの上をヘラミガキ調整である。内面はハケメ調整である。(9)は復元口径14.8cmを測り、外反する口頸部をもつ。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。生駒西麓の胎土である。(10)は口径16.6cm、器高40.0cm、最大腹径32.4cmを測り、体部は胴が大きく張り、筒状の頸部で口縁部は外反する。端部は上下にやや拡張する。端部外面は凹線文を施し、外面下半部はタタキメの上にヘラミガキ調整をする。内面はヘラナデ調整である。(23)は復元口径21.4cmを測り、外反する口縁部で、端部は上下に肥厚し、外面は凹線文で飾る。内外面はヨコナデ調整であるが、内面は剝離が著しい。(26)は腹、底部片で、復元底径7.8cm、最大腹径17.7cmを測り、外面はナデ調整と一部ヘラ状のもので押えた跡があり、内面は指押えとハケメ調整、底部外面はヘラケズリ調整である。

長頸壺形土器(6・29) (6)は復元口径11.0cmを測り、口縁部の接合部内面はハケメ調整である。頸部はナデ調整である。(29)は最大腹径18.8cm、底径5.4cmを測り、体部は算盤玉状を呈し、底部に焼成後、内外から穿孔している。体部下半部にも外から打ち欠いて穿孔している。内面上半部はヨコナデ、下半部はハケメ調整である。

無頸壺形土器(21・22) (21)は復元口径9.4cm、最大腹径13.8cmを測り、体部は胴に稜をもち、口縁部は短く外反する。口縁部直下に2ヶ所1対の紐孔が2対ある。外面体部上半部は剝離が著しく調整不明で、下半部はヘラケズリ調整である。内面上半部はハケメ、又はナデ調整、下半部はハケメ調整である。(22)は口径7.4cm、器高7.2cm、最大腹径11.5cmを測り、内傾した口縁部で、端部は内傾して面をなす。口縁部に2ヶ所1対で2ヶ所紐孔がある。体部上半部内面はヨコナデ調整で、下半部はヘラミガキ調整である。

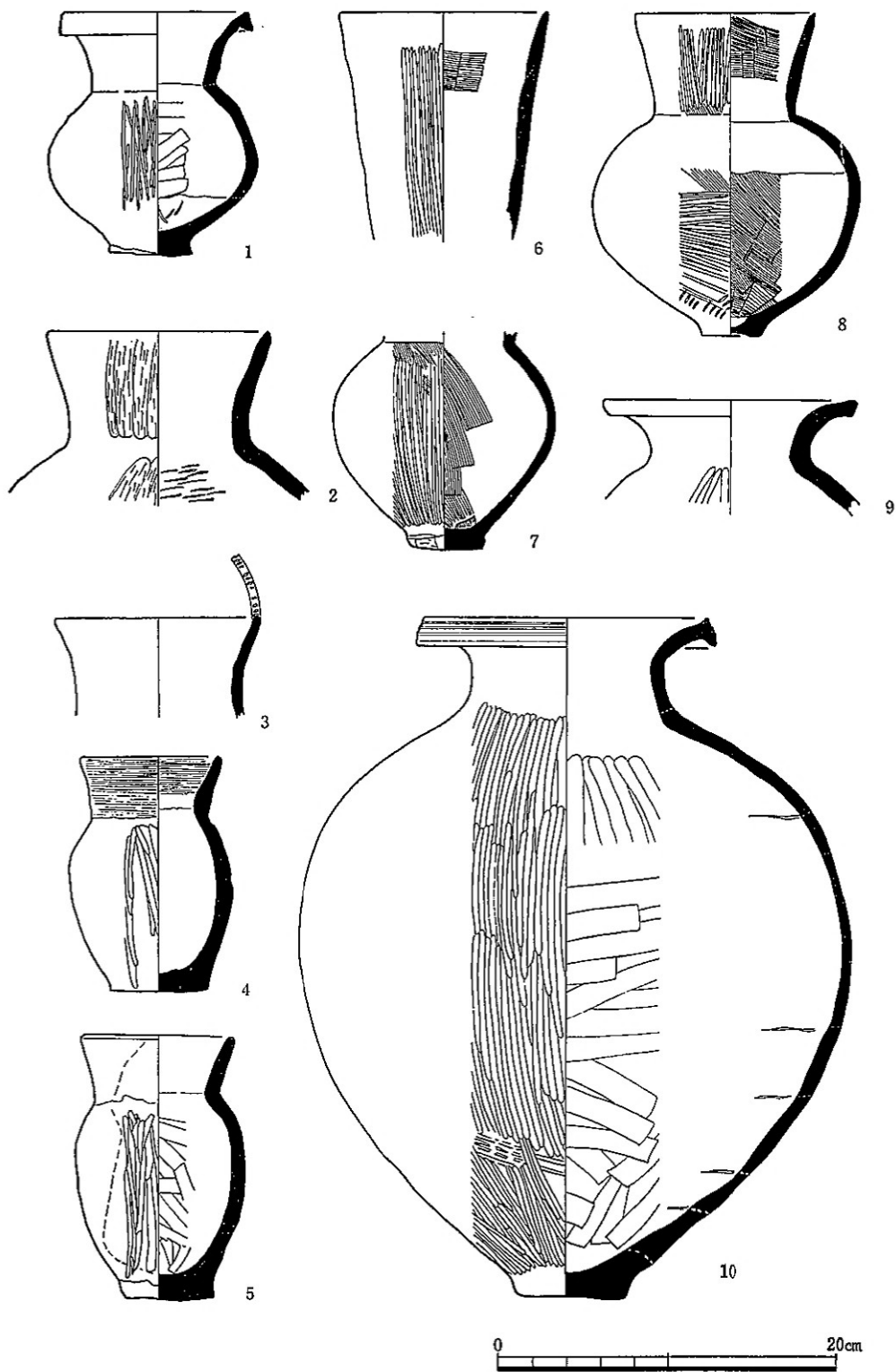
小型壺形土器（1・4・5・7）（1）は口径10.7cm、器高14.4cm、最大腹径12.2cmを測り、体部は丸く、口縁部は短い筒状の頸部から外反する。端部は下に拡張する。体部下半部外面はナデ、体部内面はヘラナデ調整である。（4・5）は体部が胴長で、口縁部は短かく直口する。（4）は口径8.0cm、器高13.8cm、最大腹径9.5cmを測り、口縁部外面と内面全体はヨコナデ調整である。（5）は口径8.5cm、器高15.5cm、最大腹径10.0cmを測り、体部内面はヘラナデ調整、底部外面は叩き締めている。（7）は口縁部を欠損し、最大腹径13.0cm、底径4.3cmを測り、丸い体部である。外面はハケメの上をヘラミガキ調整、底部外面は粘土を貼りつけ、削っている。内面はハケメ調整である。

甕形土器（11・12・13・14・15・18・19・20）（11）は復元口径16.1cmを測り、二重口縁部をもつ。外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整である。（12・15・20）は生駒西麓型胎土である。（12）は復元口径13.9cm、最大腹径16.4cmを測り、体部は胴が張り、口縁部は外反する。内外面はハケメ調整である。（15）は復元口径18.0cmを測り、2重口縁部をもつ。外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整である。（20）は復元口径19.5cmを測り、口縁部は「く」の字に外反し、肩部にヘラで刻目を施す。外面はナデ、内面はハケメ調整である。口縁部外面に煤が付着する。（13）は復元口径14.8cmを測り、体部は胴が張り、口縁部は「く」の字に外反する。外面はハケメで、下半部はナデ調整、内面はヘラケズリ調整である。（14）は復元口径12.2cm、最大腹径13.8cmを測り、外面はナデ、内面は口縁部がヘラミガキ、肩部はハケメ、体部はナデ調整である。（18）は口径11.2cm、器高15.7cm、最大腹径11.4cmを測り、体部は胴長で、口縁部は短かく外反する。外面はタタキメ調整で、下半部はその上にヘラケズリ調整を施す。内面は上半部がナデ、下半部はハケメ調整である。（19）は口径13.4cm、器高14.5cm、最大腹径12.7cmを測り、口径が腹径より大きい。外面はタタキメ、内面はナデ調整である。

小型甕形土器（16・17）（16）は口径8.6cm、器高8.7cm、最大腹径7.1cmを測り、体部は下すぼまりで、口縁部は外反する。外面はナデ、内面はハケメ調整である。（17）は復元口径10.2cm、最大腹径10.5cmを測り、体部は肩部がやや張り、口縁部は丸く短かく外反する。外面はハケメ、内面はナデ調整である。外面の口縁部と体部に煤が付着する。

高杯形土器（24・25）（24）は復元口径24.2cmを測り、体部は外に開き、口縁部は稜をもって直立する。端部は外にやや突出し面をなす。（25）は脚部片で、裾部径8.8cmを測り、脚部と杯部の接合痕が明瞭に認められる。体部外面はハケメ、裾部外面はナデ、内面はハケメ調整である。

鉢形土器（27・28・30）（27）は復元口径25.2cmを測り、口縁部は内彎気味である。口縁部外面に3条の凹線文を施す。体部外面はナデ、内面はハケメ調整かと思われる。（28）は復元口径27.6cmを測り、体部は屈曲して直立し、口縁部は段状である。端部外面は凹線を施し、外面はハケメ、内面はヨコナデ調整である。生駒西麓型胎土である。（30）は復元口径13.1cmを測り、体部はなだらかに立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部外面は指圧痕が明確に残る。内外面は

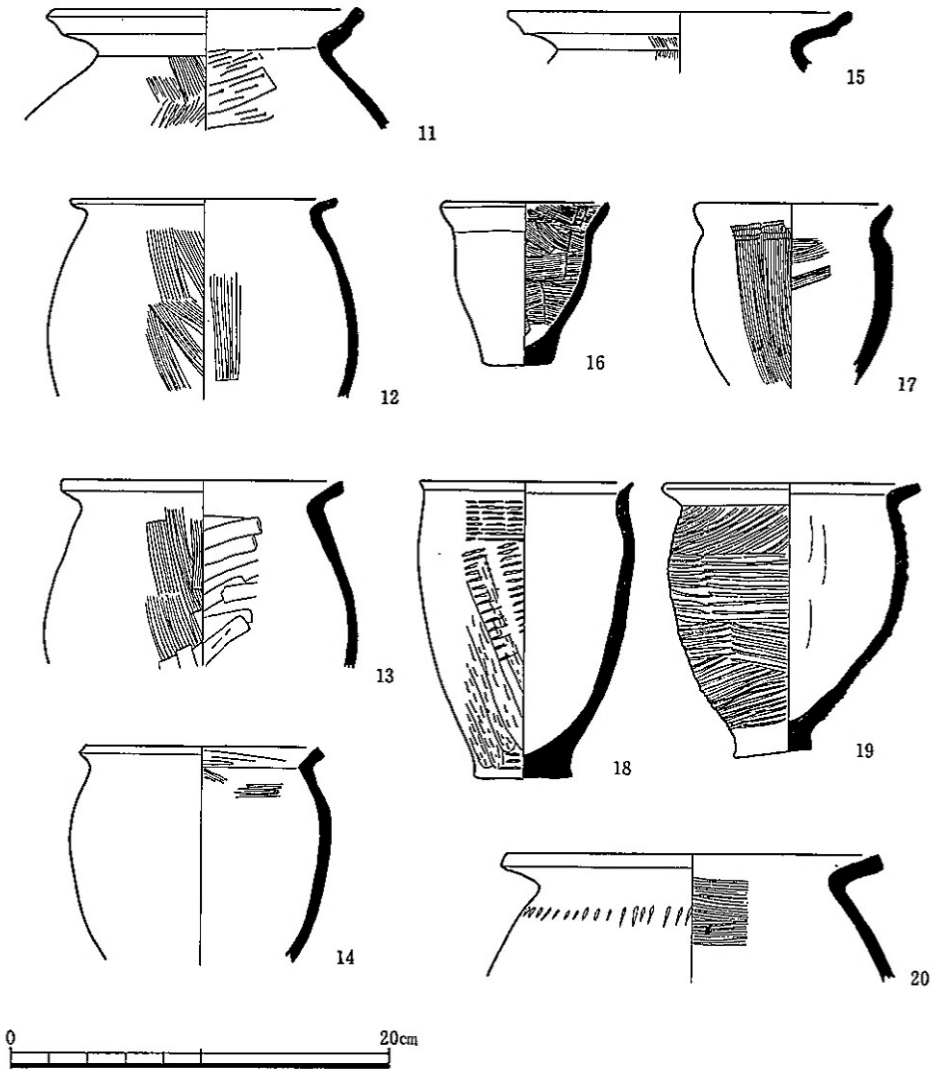


第217图 SD3033出土物实测图

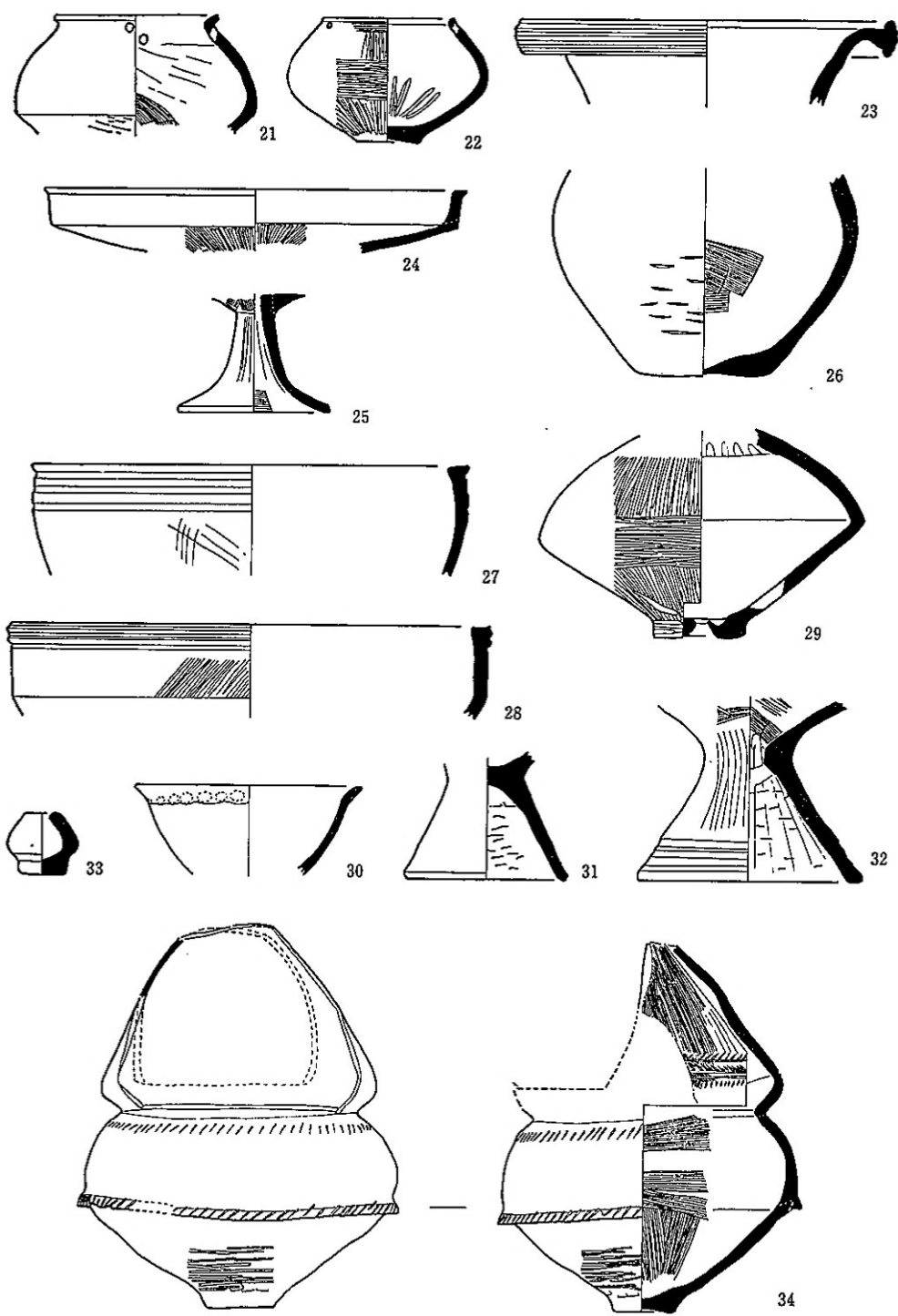
ナデ調整である。

台付鉢形土器 (31・32) (31・32) ともに生駒西壺型の胎土。(31)は裾部径9.2cmを測り、脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整であるが、内外面とも剝離が著しい。(32)は裾部径13.0cmを測り、円盤充填部が欠落している。端部外面に凹線を3条施し、体部内面はハケメ、脚部内面はヘラケズリ調整であるが、内外面とも剝離が著しい。

手焙形土器 (34) 最大腹径18.0cm、底径 4.8cmを測り、腹部に凸帯を施し、その上にヘラで刻目を施す。肩部にもヘラで刻目を施す。蓋部の屈曲する部分にヘラで綾杉文状の文様を施す。胴下半部はヘラナデの上を細かいヘラミガキ調整、蓋部外面は細かいヘラナデ調整である。内面はヘラナデ調整である。



第218図 SD3039出土遺物実測図



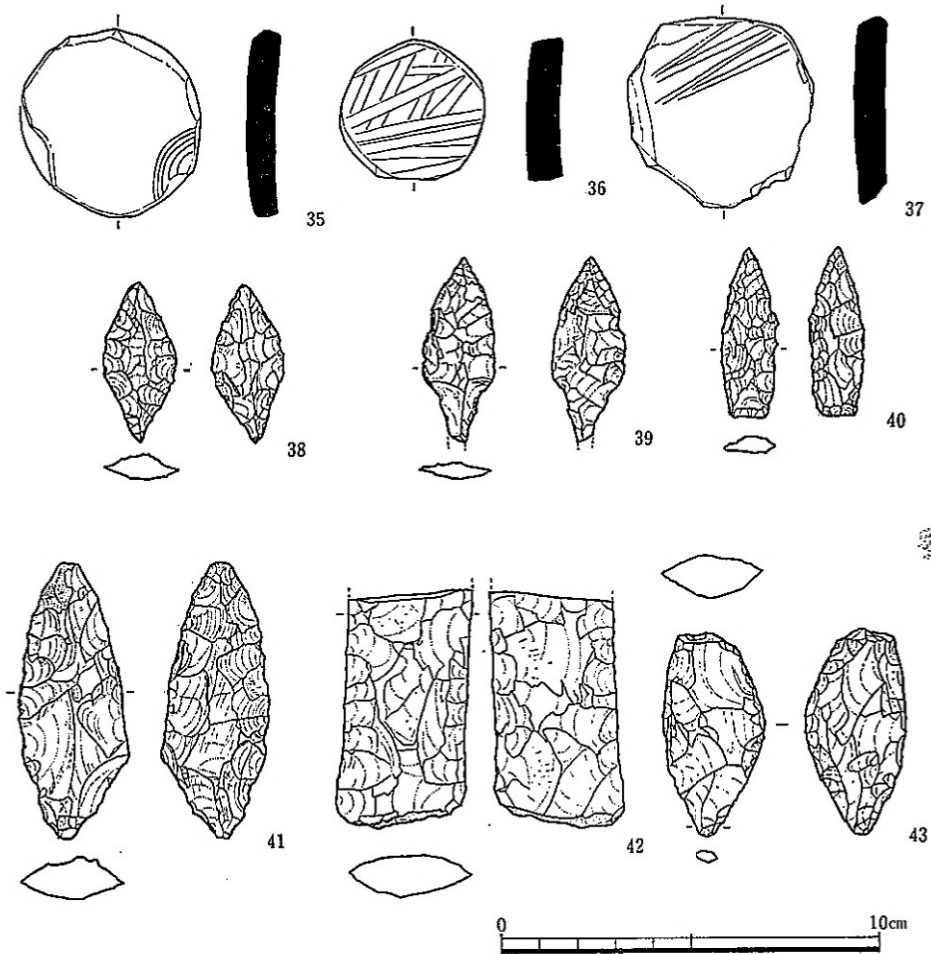
第219图 SD3093出土器物实测图

ミニチュア土器 (33) 口径1.9cm、器高3.6cmを測り、無頸壺のような形をもつ。手づくねである。

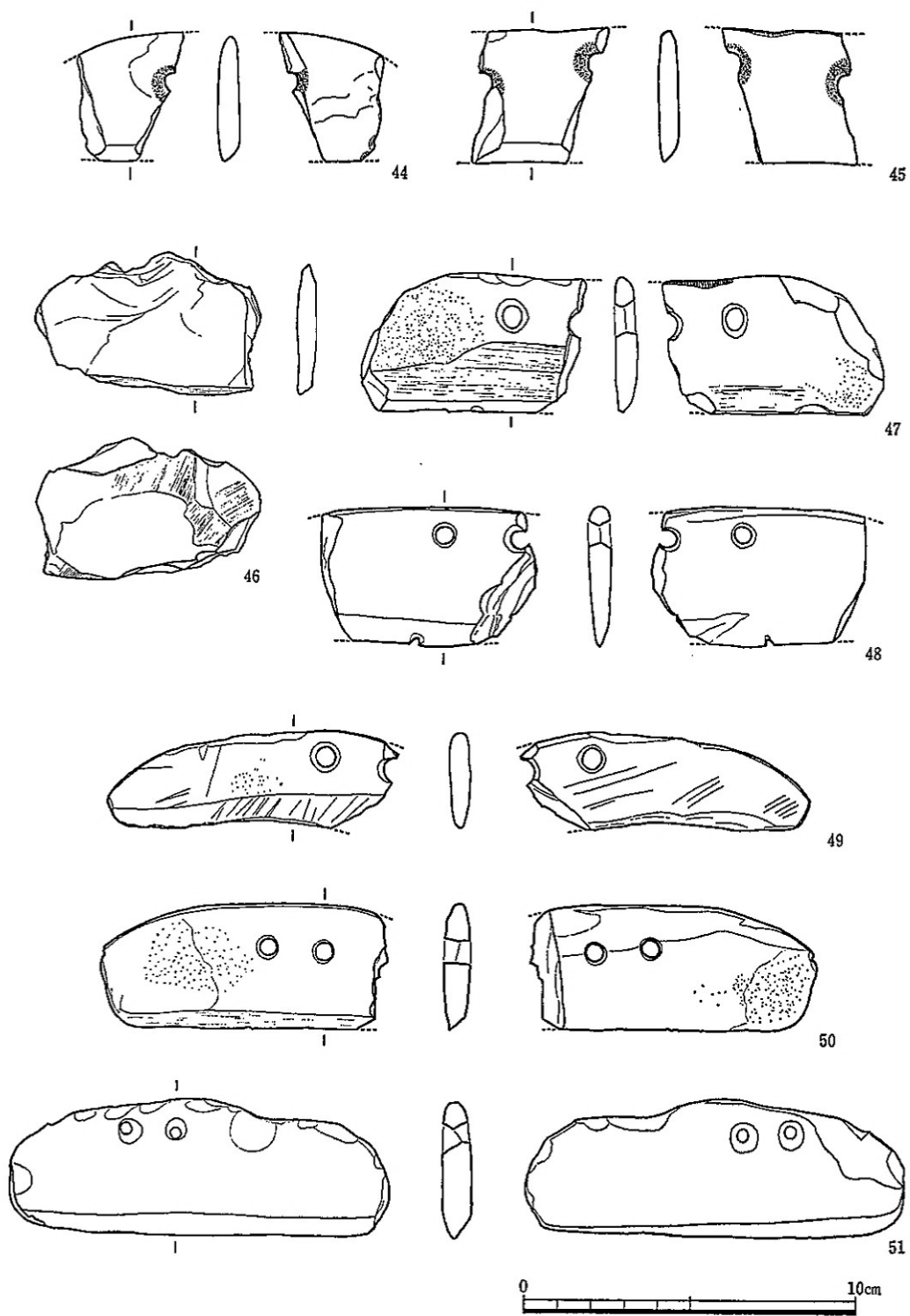
土製円板 (35・36・37) いずれも土器片を再利用したものである。(35・36)は生駒西麓型胎土である。(35)は径4.7cmを測り、周縁を打ち欠き、大雑把な研磨を加えている。磨滅が著しく、一部に櫛描文が残る。重量は19.6gを測る。(36)は径3.9cmを測り、周縁を研磨している。内外面にヘラミガキ調整が残る。重量は17.6gを測る。(37)は径4.9cmを測り、周縁を打ち欠いただけである。内面にはハケメ調整が残る。重量は28.2gを測る。

〔石器〕 (38~52)

石庖丁 (44・45・46・47・48・49・50・51) (44)は直線の片刃の刃部をもち、背部は彎曲する。刃先は磨滅し、背部は研磨されていて、紐孔両面周りには穿孔時と思われる敲打痕が認められる。現存長3.0cm、幅3.8cm、厚さ0.7cmを測る。石質は緑泥片岩。(45)は直線の片刃の刃部をもち、背部も直線的である。刃先は磨滅し、背部には背潰れがみられる。2つの紐孔の周りに



第220図 SD3033出土遺物実測図



第221图 SD3033出土遺物実測図

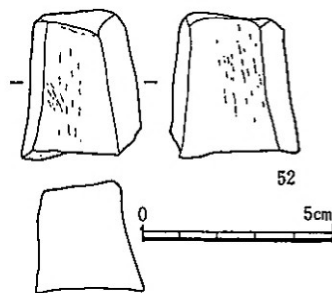
は穿孔時のものと思われる敲打痕が認められる。現存長3.5cm、幅4.0cm、厚さ0.6cmを測る。石質は緑簾片岩。(46)は、刃部、背部ともに欠損し、詳細は明らかではないが、片刃であると確認できる。刃先に平行して研磨痕がみられ、裏面にも研磨痕が認められる。現存長6.7cm、幅4.1cm、厚さ0.55cmを測る。石質は緑泥緑簾片岩。(47)は直線の片刃の刃部をもち、背部は彎曲する。刃部には幅の2分の1あたりまで刃先に平行して研磨痕がみられ、両面に敲打痕があり、背部は中央部で背潰れがみられ、刃先は擦痕がみられる。裏刃先に平行した研磨痕が認められる。現存長6.2cm、幅4.1cm、厚さ0.65cmを測る。石質は緑泥片岩。(48)は直線の片刃の刃部をもち、背部はわずかに彎曲する。刃先に平行して研磨痕がみられ、背部は研磨されている。現存長6.4cm、幅4.2cm、厚さ0.7cmを測る。石質は石墨片岩。(49)は内彎する片刃の刃部をもち、背部は彎曲する。刃部に斜右上りに使用痕がみられ、裏面には斜の研磨痕がある。刃先、背部ともに剝離している。現存長8.5cm、幅3.0cm、厚さ0.65cmを測る。石質は緑簾片岩。(50)は直線の片刃の刃部をもち、背部は彎曲し、端部は直になる。刃先に平行して研磨痕があり、両面ともに敲打痕が認められる。刃先は磨滅し、背部は研磨されている。現存長8.5cm、幅3.8cm、厚さ0.8cmを測る。石質は緑泥片岩。(51)は直線の片刃ぎみの刃部をもち、背部はゆるく彎曲する。刃先は1部剝離し、背部は背潰れ剝離がみられる。B面には刃稜がある。長さ11.4cm、幅4.15cm、厚さ0.9cmを測る。ほぼ完形品である。石質は緑泥片岩。

石鏃(38・39・40) (38)は基部が鋭く突出する菱形を呈し、長さ4.1cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重量4.2gを測り、全体に両側面から剝離調整を施す。(39)は凸基有茎式のもので、菱形の扁平な断面をもつ幅広いものであり、逆刺はなだらかで、抉りは浅い。長さ4.3cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重量3.4gを測り、両面とも両側面から剝離調整を施す。(40)は平基無茎式で、基辺がやや内彎する縦長で、両側面はふくらみをもち、片方側面はジグザグを呈する。両面とも両側面から剝離調整し、基辺と側面一部にトリミングを加える。長さ4.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量3.2gを測る。

石槍(41・42) (41)は全体が柳葉形を呈する尖基式で、長さ7.3cm、幅2.7cm、厚さ1.2cmを測る。A面は先端部と基部にわずかな自然礫面を残し、全体を粗く剝離調整する。B面は、ほぼ中央に大剝離面を残し、両側面から剝離調整を施す。(42)は上半部が欠損する平基式で、現存長6.0cm、幅3.2cm、厚さ1.1cmを測り、断面はレンズ状を呈する。基端に自然礫面を残し、両面全体を剝離調整する。

石錐(43) 楕円形の頭部下端が錐部になる。長さ5.3cm、幅2.7cm、厚さ1.2cm、錐長0.7cm、錐幅0.5×0.4cmを測る。頭部上端に自然礫面を留め、全体が剝離面から成る。頭部と錐部の境に浅い抉りがみられる。

砥石(52) 小型の方形を呈し、全長4.0cm、幅3.3cm、厚さ2.8cmを測る。使用面は4面で、石質はきめの細かな和泉



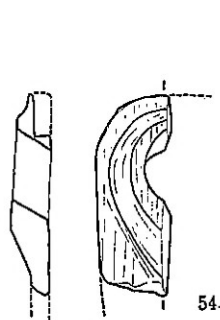
第222図 SD3033出土遺物実測図

砂岩である。

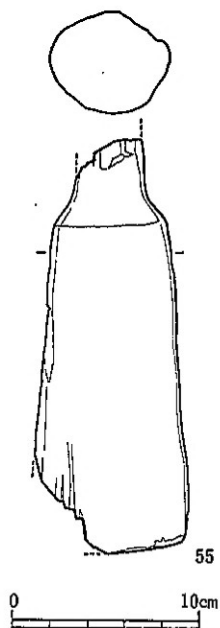
〔木器〕 (53~55)

鋤 (53) 下層から出土し、ほぼ完形である。身、柄、把手は1本作りである。全長1.05mを測り、把手は幅11.6cm、長さ12.9cmを測る半円形で、その断面形は幅3.5cm、厚さ2.3cmの面取りした長方形を呈する。柄と把手の境は明瞭である。柄は長さ52.3cmを測り、その断面形は把手の境で径2.3~2.7cmの楕円形を呈し、身の境では最も大きく、径3.1cmの円形を呈する。身との境には、幅0.4cmの樹皮が巻かれていて2.6cmの幅が残っている。肩は柄軸に対してほぼ直角に張る。身は幅15.5cm、長さ39.4cmと細長い。肩部で最大厚2.2cmを測り、上下両面から調整を行ないながら刃先方向へ薄く仕上げている。刃先では0.6cmを測る。刃縁部は厚さ0.5~0.7cmで平坦である。平面形は刃先を若干尖らせた半円形を呈する。肩部付近の上面は、柄軸に沿って中央を残し、両側を削り込んで深みをもたせている。全体にしっかりした、ていねいな作りである。

鍬 (54) 舟形突起部分のみが約2分の1残っている。残存する部分では、長さ10.8cm、幅3.8cmを測る。柄孔は、径3.2cm、着柄角度58°を測る。

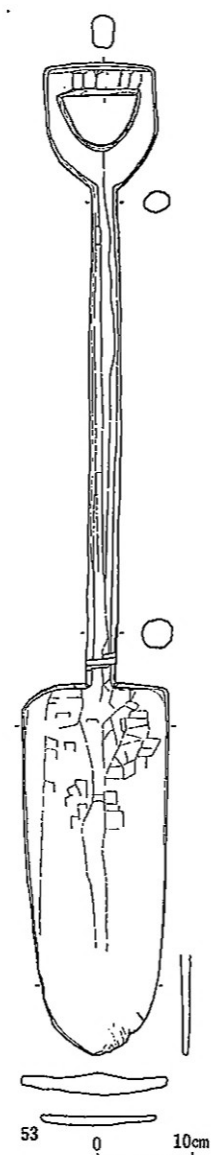


54.



55

第224図 SD3033出土
遺物実測図

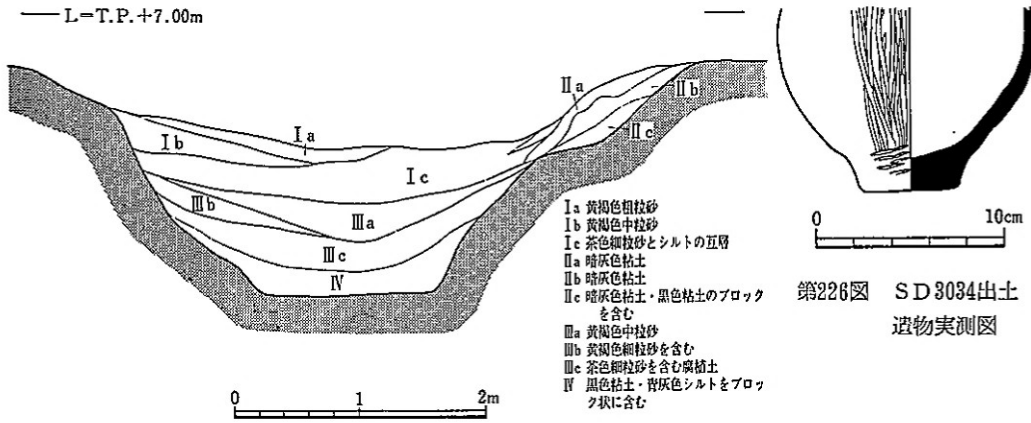


53

第223図 SD3033出土
遺物実測図

砧 (55) F-18区の堆積土中より出土した。現存長23.0cmを測る。握りの大部分を欠失するが、握の直径3.7cm、くびれ部に近い部分の直径6.5cm、先端に近づくにつれて太さを増し、先端部では直径8.0cmを測る。腐蝕が著しく、工具痕や使用痕は不明である。先端部が比較的短いことから砧と考えたが、杵である可能性もある。

SD3034 (第225図) E・F-16・17区にて検出された南北溝である。南側は調査区外にのび、北側はSD3033と切合っている。検出部分の長さ7.5mである。上部幅3.8~4.1m、底部幅1.2~1.6m、深さ1.8mを測る。断面形は逆台形状を呈するが、2段掘状の部分も存在する。埋土の下層に粘土層の堆積が認められず、周辺の他の当該時期の溝との間に差異がある。本来はSD3035、3037と一連の溝と考えられる。水流の方向は南から北である。



第225図 SD 3034土層断面図 (1/20)

出土遺物 (第226図)

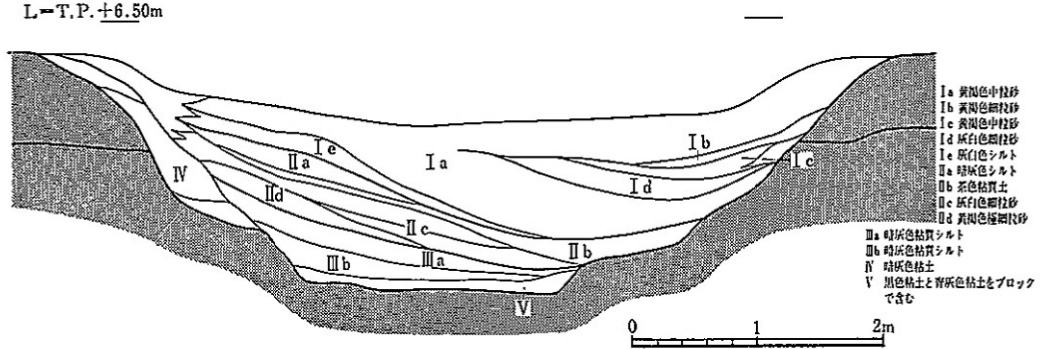
〔土器〕 壺形土器の胴下半部から底部にかけての部分が発出された。底径 5.0cm、最大腹径 13.7cmを測る。胴部にヘラミガキ、底部外面にはタタキメを施す。内面は剝離が著しく不明である。

SD 3035 (第227図) G・H-14~16にかけて検出された南北溝である。前述の如く、本来SD 3034、3037と一連の溝であったと考えられる。北側ではSD 3036と、南側ではSD 3033と切合っている。全長 9.0cm、上部幅6.5~7.5m、底部幅1.5~3.0m、深さ1.9~2.0mを測る。断面形は逆台形状を呈するが、全体的に西側より東側の掘り込み角度の方がゆるい。部分的に2段掘り状を呈する。埋土は基本的にSD 3032等と同様である。Hライン付近では暗茶褐色粗粒砂とシルトの渦巻状の葉層が認められ、複雑な水の流れが存在したことを示しているが、水流の方向は基本的には南から北である。

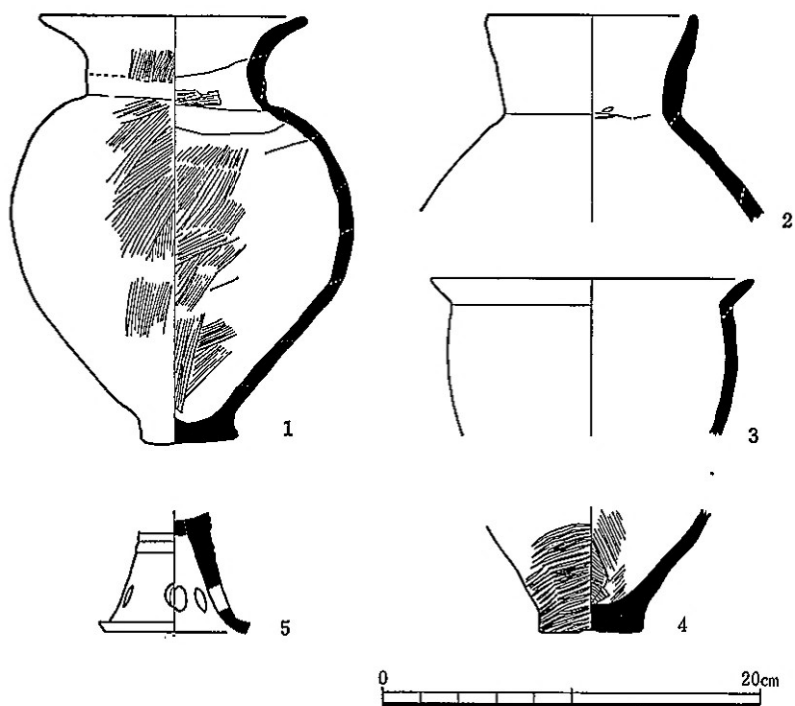
出土遺物 (第228・229図)

〔土器・土製品〕 壺形土器、甕形土器、高杯形土器等や土製円盤が発出した。

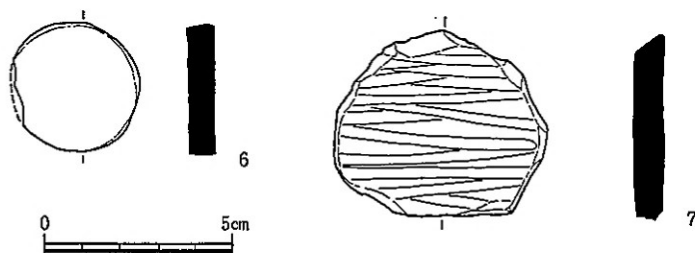
壺形土器 (1・2) (1) は口径14.0cm、器高23.1cm、最大腹径18.1cmを測り、最大径は腹



第227図 SD 3035土層断面図 (1/20)



第228図 SD3035出土遺物実測図



第229図 SD3035出土遺物実測図

部上半部分にあり、頸部は短い筒状で、口縁部は外反する。内外面はハケメ調整である。(2)は復元口径11.0cmを測り、口縁部は短く直立する。剝離が著しく、調整は不明である。

甕形土器(3・4) (3)は復元口径17.0cm、最大腹径15.4cmを測り、体部はあまり胴が張らず、口縁部は外反する。外面は指押え、内面はヨコナデ調整である。(4)は底部片で、底径5.5cmを測り、底部はドーナツ状に粘土を付加する。外面はタタキメ、内面はハケメ調整で、外面に煤が付着する。

高杯形土器(5) 脚部片で、裾部径7.6cmを測り、体部との接合直下に沈線を施し、透し穴は8ヶ所である。外面はヘラミガキ調整である。

土製円盤(6・7) (6)は径3.4cmを測り、土器片を利用しており、周縁は磨いている。重量は10.05gを測る。(7)は下層の堆積土から出土した。土器片を利用して、周縁を打ち欠

いた状態のもので、径4.9×5.6cm、厚さ0.9cm、重量31.6gを測る。

SD3036 (第230図) 12ライン以西のH・I・J区にかけて位置する東西に走る溝である。東側はNR9001により失なわれて消失し、西側は調査区域外にのびている。検出部分での全長は直線距離にして40m近くに及んでいる。15ライン付近にてSD3035、3037と切合い、西端部付近ではSD3023を切っている。北側肩部がNR9001により削平されているため、本来の幅、深さは明らかにし得ないが、現状では上部幅4.5～5.3m、底部幅1.0m前後、深さ南側で2.1mを測る。断面形は逆台形状を呈するが、SD3035、3037と切合っている部分より西側では、2段ないし3段掘りとなっている。埋土の状況は基本的にSD3032等と同様であるが、中層と下層の間に自然木、植物遺体等を多量に含む層が介在している。水流の方向は東から西である。

出土遺物 (第231・232図)

〔土器・土製品〕 (1～11)

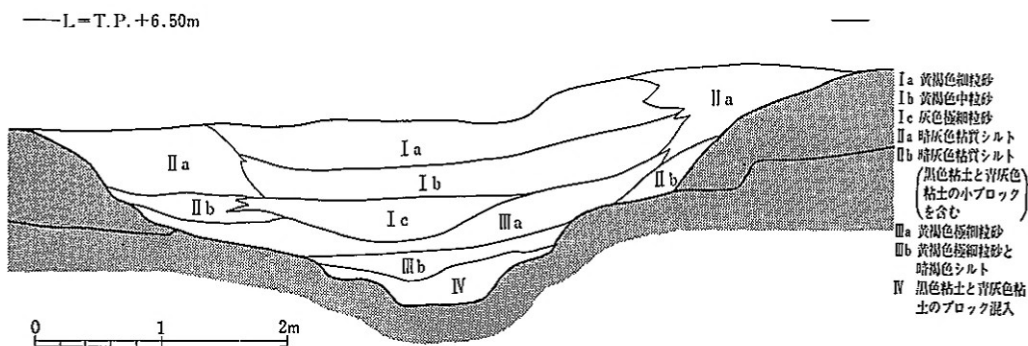
壺形土器 (1・2) (1)は復元口径11.6cmを測り、口縁部は短く直立する。内外面はナデ調整である。(2)は口径15.6cm、器高27.0cm、最大腹径21.0cmを測り、体部は腹が張り、口頸部は短く外反する。底部外面はタタキメが残り、内面はハケメ調整である。

甕形土器 (3・4・7) (3・4)の口縁部は外反する。外面はタタキ、内面はハケメ調整である。(3)は復元口径16.6cm、(4)は18.6cmを測る。(7)は復元口径33.6cmを測り、口縁部は外反し、端部は上下に拡張し、外面に刻目と凹線文を施す。内外面はハケメ調整である。これだけが第Ⅳ様式の特徴をもつ。

高杯形土器 (5) 復元口径19.6cmを測り、体部は外に開き、口縁部は稜をもって直立する。端部は内外にやや肥厚し、面をなす。生駒西麓型の胎土である。

蛸壺形土器 (6) 復元口径4.8cm、最大腹径6.2cmを測り、口縁部は内傾する。内外面はナデ調整である。

土製円盤 (8・9・10) (8)は下層の堆積土から出土した。土器片を利用して、周縁を打ち欠いた状態のものである。径5.2×5.6cm、厚さ0.7cm、重量26.7gを測る。(9)は径4.9cmを測り、土器片を再利用したものである。周縁を打ち欠き、一部を研磨している。生駒西麓型胎土



第230図 SD3036土層断面図(1/10)

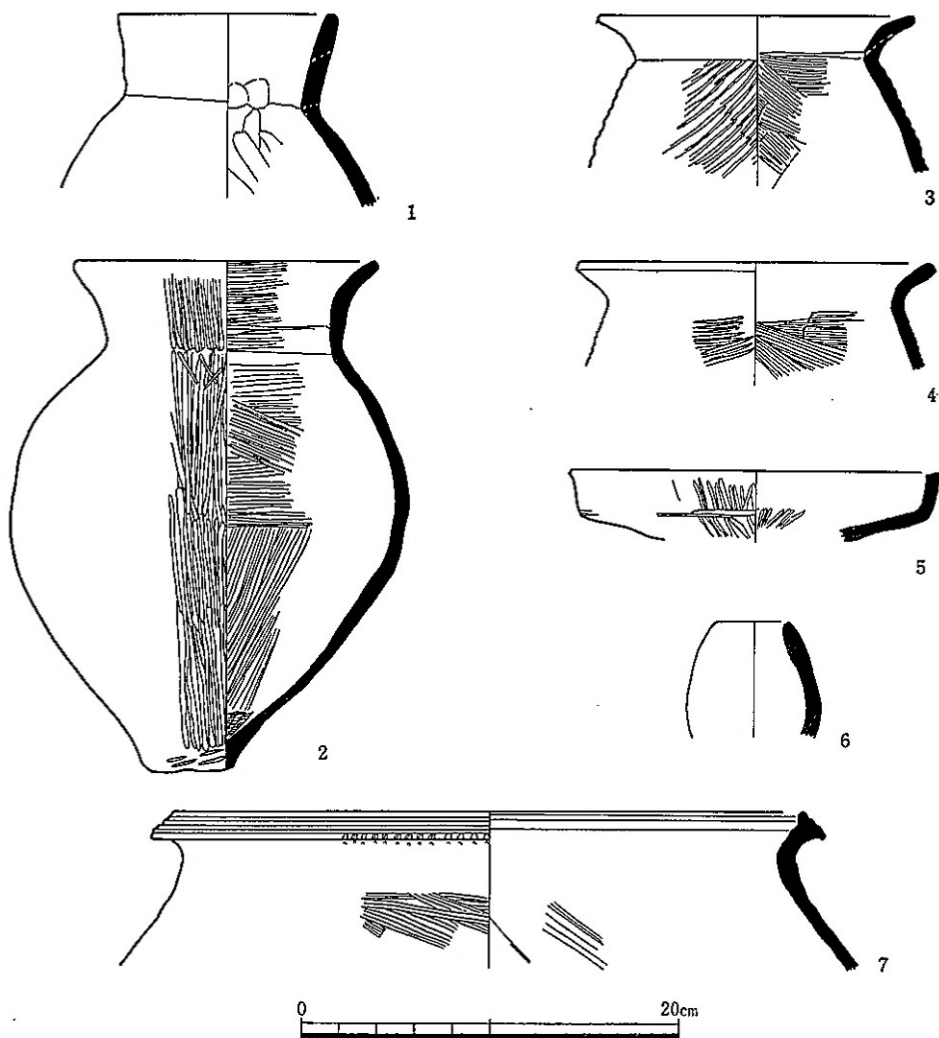
である。重量は22.8gを測る。(10)は土器片の周縁を研磨して円形に成形したもので、直径は4.8cm、厚さ0.8cmである。

紡錘車未製品(11) 周縁を打ち欠き、両面から穿孔しはじめた状態で、孔は貫通していない。不整円形で径4.5×5.0cm、厚さ0.8cm、重量は20.3gである。穿孔しかけた中心孔は表裏でわずかにずれている。

〔石器〕

石庖丁(14) 直線の刃部をもち、背部は彎曲する直線刃半月形の片刃である。紐孔周りには敲打痕がみられ、表面には研磨痕がみられる。現存長7.6cm、幅5.5cm、厚さ0.8cmを測る。石質は緑泥片岩である。

石鏃(13) 尖基無茎式、柳葉形を呈し、断面はレンズ状である。長さ5.3cm、幅1.4cm、厚さ



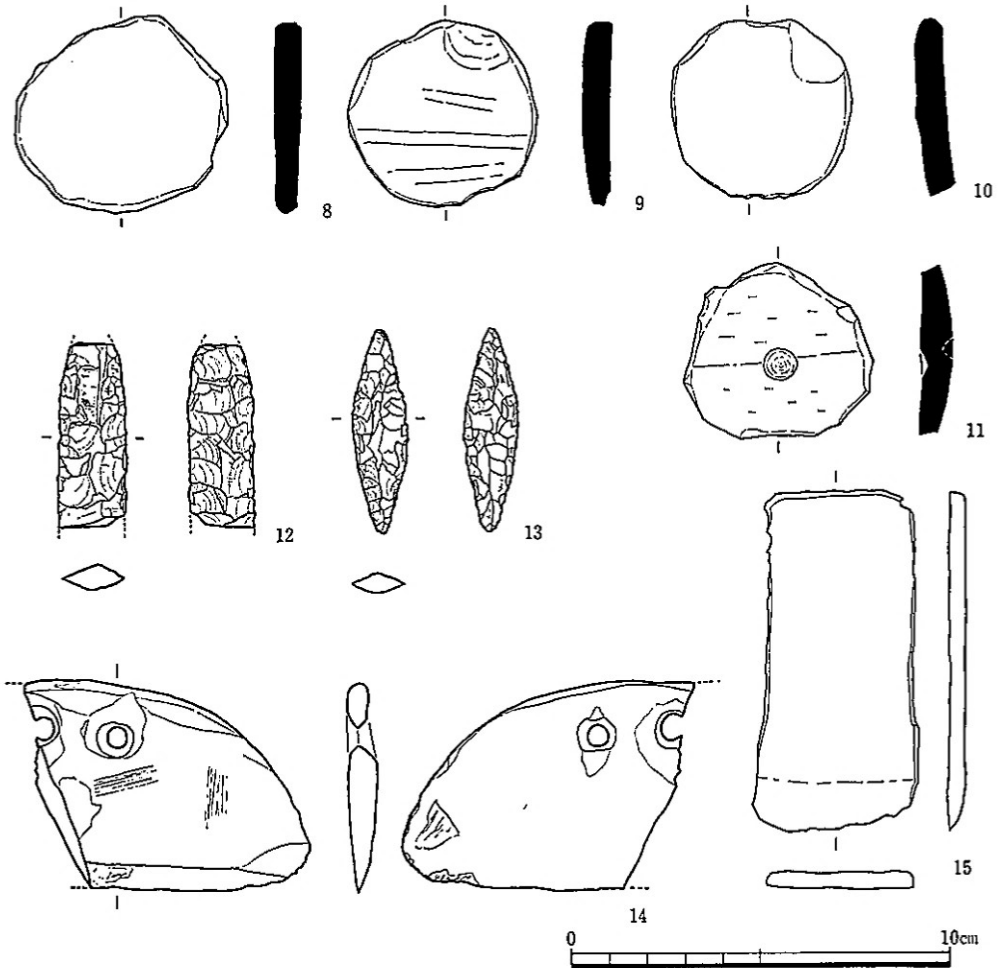
第231図 SD3036出土遺物実測図

0.6cm、両面とも全体を細かく剝離調整する。

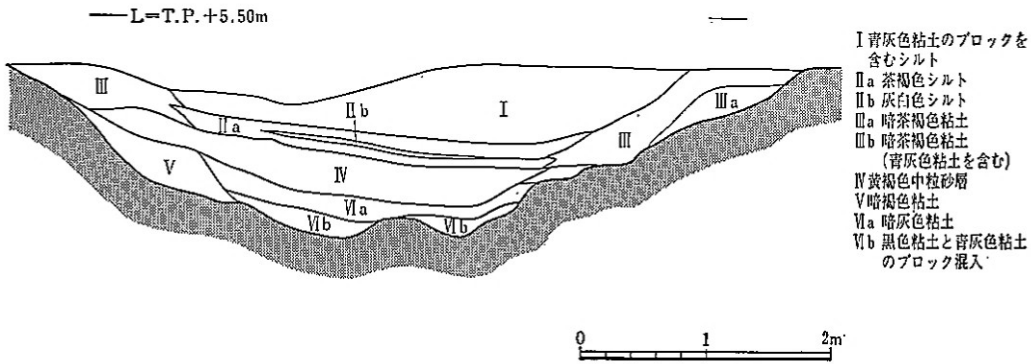
石槍 (12) 先端と下半部は欠損する。現存長4.8cm、幅1.8cm、厚さ0.6cmを測り、菱形の断面をもつ。両面とも両側辺から剝離調整する。A面の中程から上端にかけて研磨面があり、下方の中央稜線まで及ぶ。B面も上端右側に研磨面があり、左上りの研磨痕が残る。

〔鉄器〕 板状鉄斧 (15) 全長9.0cm、基部幅3.9cm、刃部幅4.2cm、厚さ0.4cm、重量77.5gを測る。形態は長方形を呈する。刃部は片刃を呈し、磨滅している。全体にやや腐蝕が進んでいる。

SD3037 (第233図) J・K-15・16区に位置する。前述の如く、本来SD3034、3035と一連のものと考えられ、SD3036と切合う付近から大きく西に彎曲して調査区外にのびる。中央部でSD3023を切っている。検出部分での長さは直線距離で14.5mである。旧平野川の川床に存在しているため、上部が削平を受けている。このため本来の幅、深さは明らかにし得ないが、現状では、上部幅5.5~6.2m、底部幅1.0~2.3m、深さ1.4mを測る。断面形は逆台形状を呈し、埋



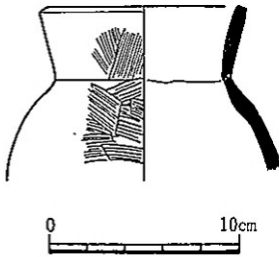
第232図 SD3036出土遺物実測図



第233図 SD3037土層断面図 (1/60)

土の状況は、SD3032等と大差はない。水流の方向は、南から北ないし北西である。

出土遺物 (第234図)



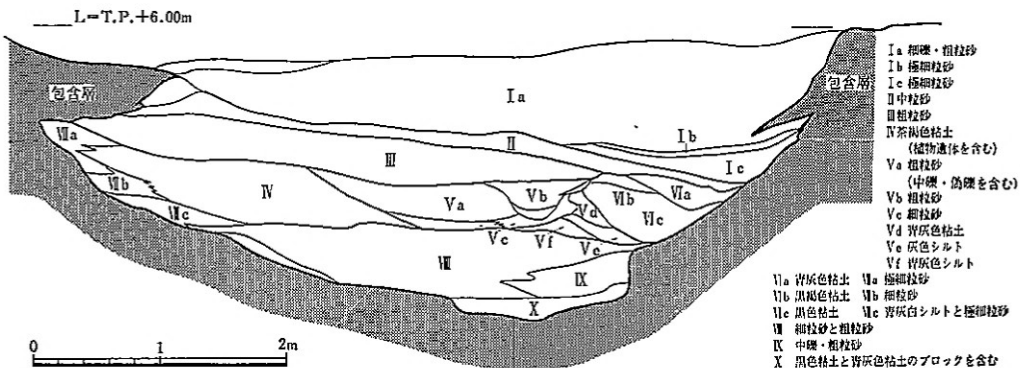
〔土器〕 壺形土器は復元口径10.0cmを測り、口縁部は短く直立する。外面はハケメ、内面はナデ調整である。生駒西麓の胎土である。

SD3041 (第235図) J・K-1区付近から南西にの

びた後、H・I-4・5区付近で大きく北西方向に屈曲し、7・8ライン付近で調査外に去る大溝である。上部幅は東側部分で5.3~5.8m、西側部分で6.3~6.5m、底部幅4.0~5.0m、深さは平均2m前後、最も深い部分で2.4mを測る。溝底はわずかに丸味をおびるために、断面形は扁平半円形状を呈する。肩部直下には大きく抉られている部分がところどころにあり、水流の激しかったことを物語っている。埋土は、最下層に粘土ブロック層が存在する以外は、上層から下層まで細礫を含む粗粒砂から細粒砂までの砂層が複雑な堆積状態を示していた。水流の方向は東から北西である。

出土遺物 (第236・237・238・239・240・241・242・243・244図)

〔土器・土製品〕 (1~54・81~83) 壺形、長頸壺形、無頸壺形、小型壺形、水差形、甕形、



第235図 SD3041土層断面図 (1/60)

小型甕形、鉢形、小型鉢形、高杯形、器台形土器、ミニチュア土器、分銅形土製品、銅鐸形土製品、土錘等、多数の土器・土製品が出土した。土器には、中期、後期の両者が認められるが、第Ⅴ様式のものが多いので、ここでは主に第Ⅴ様式の土器を取り上げた。

壺形土器（1・2・3・5・6・7・8・42・43）（1）は口径12.4cm、器高17.1cm、最大腹径15.8cmを測り、体部は腹が張り、頸部は短い筒状で、口縁部は外反する。端部は下にやや肥厚する。頸部に1カ所穿孔されている。内面は頸部がハケメ、体部上半部はナデ、下半部はハケ状のナデの上をヘラミガキ調整である。外面に煤が付着する。（2）は復元口径10.4cm、最大腹径14.3cmを測り、体部は上半部に最大径があり、口縁部はやや外反する直口の口頸部をもつ。外面は頸部から肩部はハケメ、内面は体部上半部が指ナデ、下半部はハケメ調整である。（3）は口径9.0cm、器高15.5cm、最大腹径13.4cmを測り、体部は丸みがあり、口縁部はやや外開きで短く直立する。口縁部外面に1条の凹線を施す。内面は頸部がハケメ、体部が指ナデ調整である。（5）は最大腹径16.6cm、底径5.2cmを測り、外面はハケ状のナデの上をヘラミガキ調整である。内面は肩部が指ナデ、その他がハケメ、又はヘラナデの上をヘラミガキ調整である。（6）は復元口径10.8cm、最大腹径14.3cmを測り、体部は胴長で、口頸部は外に開き、短い直口である。肩部外面に5条の波状文を施す。内外面はナデ調整である。（7）は口径17.0cm、器高26.5cm、最大腹径18.6cmを測り、体部は球形で、口縁部は筒状の頸部に外反し、端部は下に拡張する。端部外面は竹管文を4個1対で5対施す。頸部内面はハケメの上をヘラミガキ調整、体部内面はハケメ調整である。生駒西麓型胎土である。（8）は最大腹径11.6cm、底径4.3cmを測り、体部は丸みを持ち、頸部は直立する。外面はハケメ調整で、肩部に直線のヘラ記号を印す。内面は上半部がヨコナデ、下半部はハケメ調整である。（42）は体部片で、外面に双頭渦巻文のタタキメを残す。（43）は頸部から肩部片で、肩部に双頭渦巻文を施す。

長頸壺形土器（4） 復元口径13.6cmを測る。内面は指ナデ調整である。

無頸壺形土器（44） 口径11.1cm、器高13.3cm、最大腹径18.8cmを測り、体部下半部に稜があり、体部は内彎し、口縁部は極く短く直立する。口縁部直下に2ヶ所1対の紐孔がある。孔の上端に紐ずれの跡がある。体部上半部は表面剝離が著しく、調整不明である。内面はヘラケズリ調整である。

小型壺形土器（9・10・11・32・33・34）（9）は口径5.2cm、器高12.2cm、最大腹径7.3cmを測り、体部はやや長めで、口頸部は外開きである。頸部から肩部にかけてハケメ調整である。腹部下半部、内面は調整不明である。（10）は口径9.1cm、器高11.0cm、最大腹径7.9cmを測り、腹径より口径が大きき、口頸部は外開きで直立する。口頸部上端に凹線がある。肩部外面はハケメ、その他はヨコナデ、又はナデ調整である。（11）は口径7.2cm、器高12.9cm、最大腹径8.4cmを測り、体部は長めで、口頸部は短く外開きである。内面はナデ調整である。（32）は復元口径8.6cm、最大腹径9.1cmを測り、口縁部は短く直立する。頸部外面はハケメ、内面はナデ調整である。体部外面は調整不明である。（33）は口径7.3cm、器高9.7cm、最大腹径7.9cmを測り、体部

は丸みがあり、口頸部はやや外反する。体部内面はナデ調整である。(34)は最大腹径9.2cm、底径4.4cmを測り、口頸部は欠損する。頸部外面はハケメ、肩部外面はナデ、内面はナデ調整である。

甕形土器(12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・46・47・48) (12・18)の体部は丸みがあり、口縁部は外反する。(12)は口径13.0cm、器高17.8cm、最大腹径15.7cmを測り、外面はタタキ、内面上半部はハケメ調整である。体部外面に煤が厚く付着し、内底面にも炭化物が付着する。(18)は復元口径15.3cm、最大腹径17.6cmを測り、外面はタタキメの上の一部ハケメ調整、内面はハケメ調整である。体部外面に煤が付着する。(13)は口径16.0cm、器高17.3cm、最大腹径15.6cmを測り、口径が腹径よりやや大きい。口縁部は丸く外反する。外面はタタキ、内面はヘラナデ調整である。外面に煤が付着する。(14)は復元口径16.0cm、最大腹径14.0cmを測り、口径が腹径より大きく、口縁部は外反し、上端部は内彎気味になる。上端部外面は凹線1条を施す。外面は頸部をハケメ、体部はタタキ、内面はハケメ調整である。外面に煤が付着する。

(15・46)の口縁部は外反するが、端部がやや内彎する。端部は面を成す。外面はタタキ、内面はハケメ調整である。(15)は復元口径16.6cmを測り、外面に煤が付着する。(46)は復元口径16.5cmを測る。(16)は復元口径15.6cm、最大腹径16.0cmを測り、体部はやや丸みがあり、口縁部は外反し、屈曲して内彎する。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。外面に煤が付着する。(17)は復元口径12.2cm、最大腹径18.0cmを測り、体部は胴長で、口縁部は直立気味に外反する。外面は頸部がハケメ、体部がタタキ、内面は頸部をハケメ、体部をヘラナデ調整する。外面に煤が付着する。(19)は復元口径21.3cm、最大腹径16.3cmを測り、体部は腹が張らず、口縁部は水平に屈曲し、上端部は外上方に屈曲する。外面はタタキメの上をハケメ調整、内面はハケメ調整である。外面に煤が付着する。(20)は復元口径20.4cm、最大腹径23.0cmを測り、体部は腹が張り、口縁部は「く」の字に外反し、上端部は屈曲して直立する。外面はタタキ、内面はナデ調整である。外面と内面底部近くに煤が付着する。(21)は復元口径15.3cm、最大腹径14.3cmを測り、口径が腹径よりやや大きく、体部は丸く短く、口縁部は「く」の字に外反する。外面はタタキで、腹はナデ調整、内面はヘラナデ調整である。(47)は復元口径16.3cm、最大腹径15.6cmを測り、肩部に最大腹径があり、口縁部は外反する。外面はタタキの後をナデ、内面はナデの上を下半部にヘラミガキ調整を施す。口縁部内面は2次的に火を受けて赤褐色に変色する。(48)は復元口径19.5cmを測り、口縁部は「く」の字に外反する。調整は不明である。胎土は生駒西麓型である。

小型甕形土器(36・37・39・40) (36)は口径6.2cm、器高8.2cm、最大腹径6.4cmを測り、口縁部は「く」の字に外反する。頸部と底部外面は指頭圧痕が明瞭に残る。内面はナデ調整を施し、外面は2次的に火を受けて変色している。(37)は口径4.5cm、器高7.6cm、最大腹径6.0cmを測り、口縁部は極く短く外反する。内外面はナデ調整である。

高杯形土器(22・23・24・25・27・28・29) (22)は脚部片で、裾部径10.5cmを測り、透し

穴は4ヶ所ある。脚部上半部内面はヘラケズリ、下半部はヨコナデ調整である。(23)は口径14.0cm、器高8.3cmを測り、杯部はなだらかなカーブをもって立ち上がり、脚部は短い裾広がりである。(24・27・28)の体部は外に開き、口縁部は稜をもって外反する。(24)は復元口径21.8cmを測り、脚部は上半部中央で内面にシボリ目が見られる。(27)は復元口径28.4cmを測り、口縁部内面はヨコナデ調整で、一部分はヘラミガキ調整である。(28)は復元口径29.4cmを測る。

(25)は口径14.2cm、器高10.4cmを測り、体部は外に開き、口縁部は水平気味に屈曲する。脚部は裾広がりである。脚部外面、杯部内面はヘラナデ、脚部内面は指押えとヘラナデ調整である。

(29)は復元口径26.0cmを測り、体部はカーブをもって立ち上がり、口縁部は外反する。端部は上方にほんの少し肥厚する。内外面はハケメの上をヘラミガキ調整を施す。

鉢形土器(30・31) (30)は口径25.7cm、器高14.7cmを測り、体部はカーブをもって立ち上がり、口縁部は外反する。口縁上端部は屈曲し、直立する。口縁部外面はハケメの上をヘラミガキ、底部外面はハケメの上をナデ調整である。(31)は口径30.6cm、器高23.0cmを測り、体部はカーブをもって立ち上がり、口縁部は内彎気味に外傾し、片口である。頸部と体部下端外面にヘラナデ調整の跡が残る。外面に煤が付着する。

小型鉢形土器(38・49・50・51) (38)は復元口径6.0cm、器高6.7cmを測り、体部は内彎気味に立ち上がる。端部はやや肥厚する。(49)は口径11.4cm、器高5.8cmを測り、体部は外にまっすぐ開く。内面はハケメ調整、外面は調整不明である。(50)は口径11.3cm、器高7.3cmを測り、体部は碗状である。内面はヘラナデ調整である。(51)は口径12.4cm、器高6.4cmを測り、体部は外開きである。内外面はハケメ調整である。

器台形土器(26) 口径18.2cm、器高12.2cm、裾部径15.0cmを測り、口径が脚部径より大きい鼓形を呈す。透し穴は上下交互に4ヶ所ずつつけられる。内外面はヘラナデ調整である。

水差形土器(45) 復元口径13.0cmを測り、口縁部は短い外開きで、一方の口縁端部が凹み、その下に水平半環状の把手がつく。把手が体部に密着しているのが特徴である。

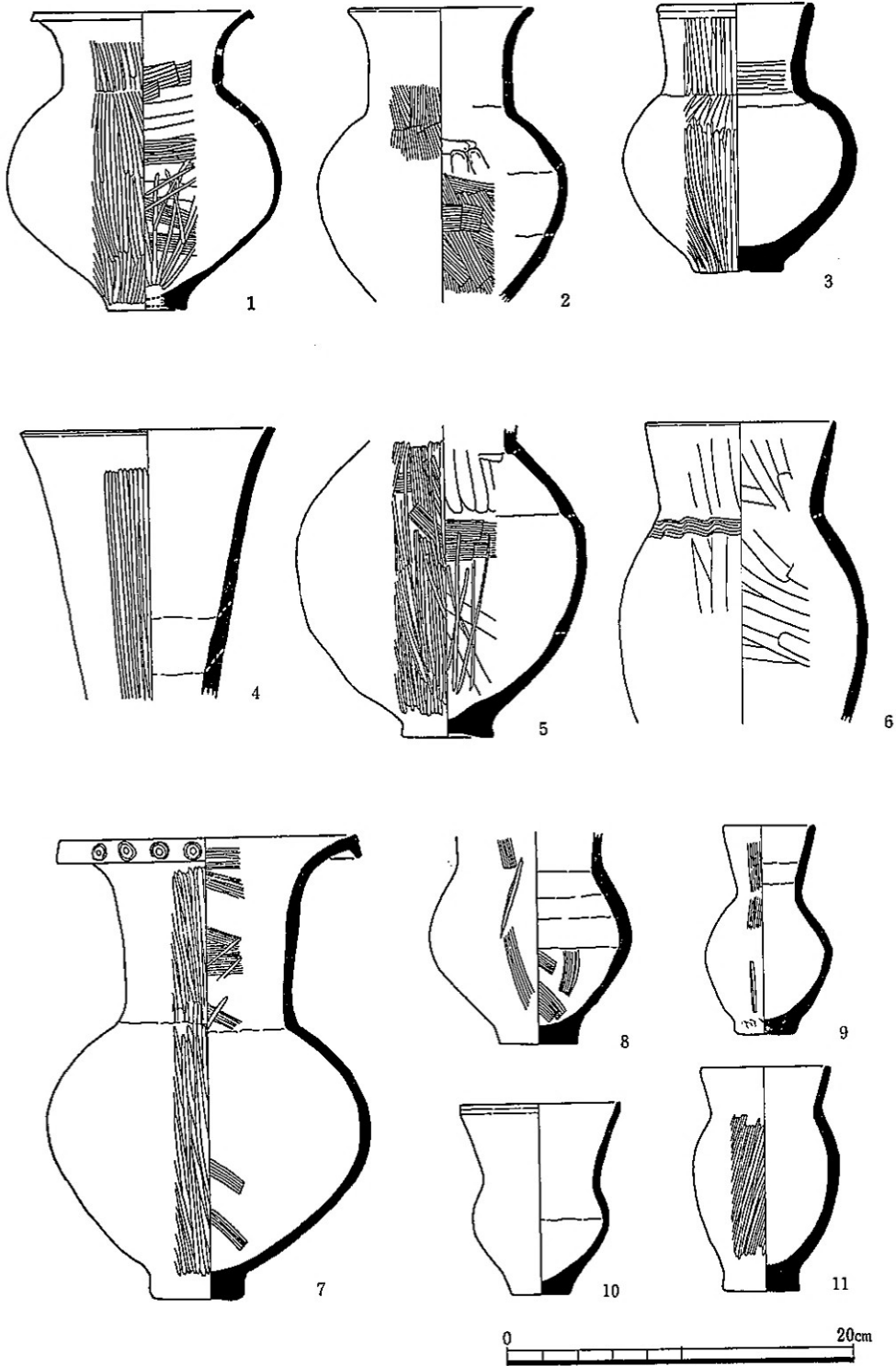
ミニチュア土器(35) 口径4.2cm、器高5.1cm、最大腹径4.2cmを測る壺形である。体部は丸く、口頸部は外に開く。手づくねの土器である。

分銅形土製品(53) 現存幅9.4cm、現存長6.3cmを測り、上半部が残存する。表面に顔を描き、朱を塗っている。眉と鼻は粘土を貼りつけ、目と口は掘り込んで表現している。現在、片方の眉と鼻の粘土は欠損している。周辺とくびれ部分に小さな竹管文を3段に飾る。周縁の左端に焼成前に1ヶ所表から裏へ穿孔している。

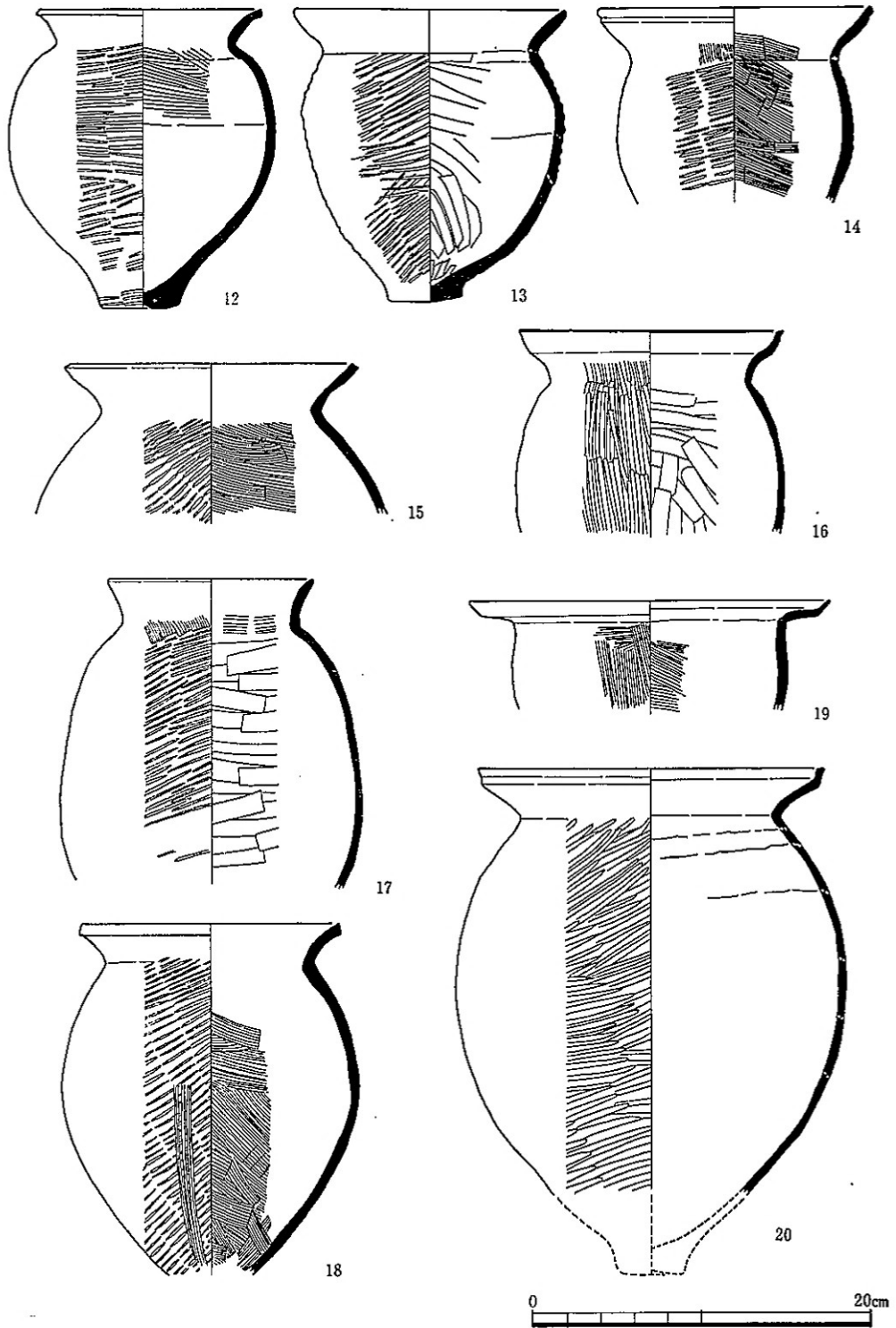
銅鐸形土製品(54) 現存長8.1cm、現存最大幅7.4cmを測る。下端部と紐の部分が欠損する。舞はなく、空洞である。両側端を少しつまんで鱗に見せている。表裏両面に雑な簾状文を2段飾る。外面はナデ、内面は指押えとナデ調整である。

土錘(52) 長さ6.9cm、最大幅4.5cmを測り、投弾形である。長軸に孔が貫通する。

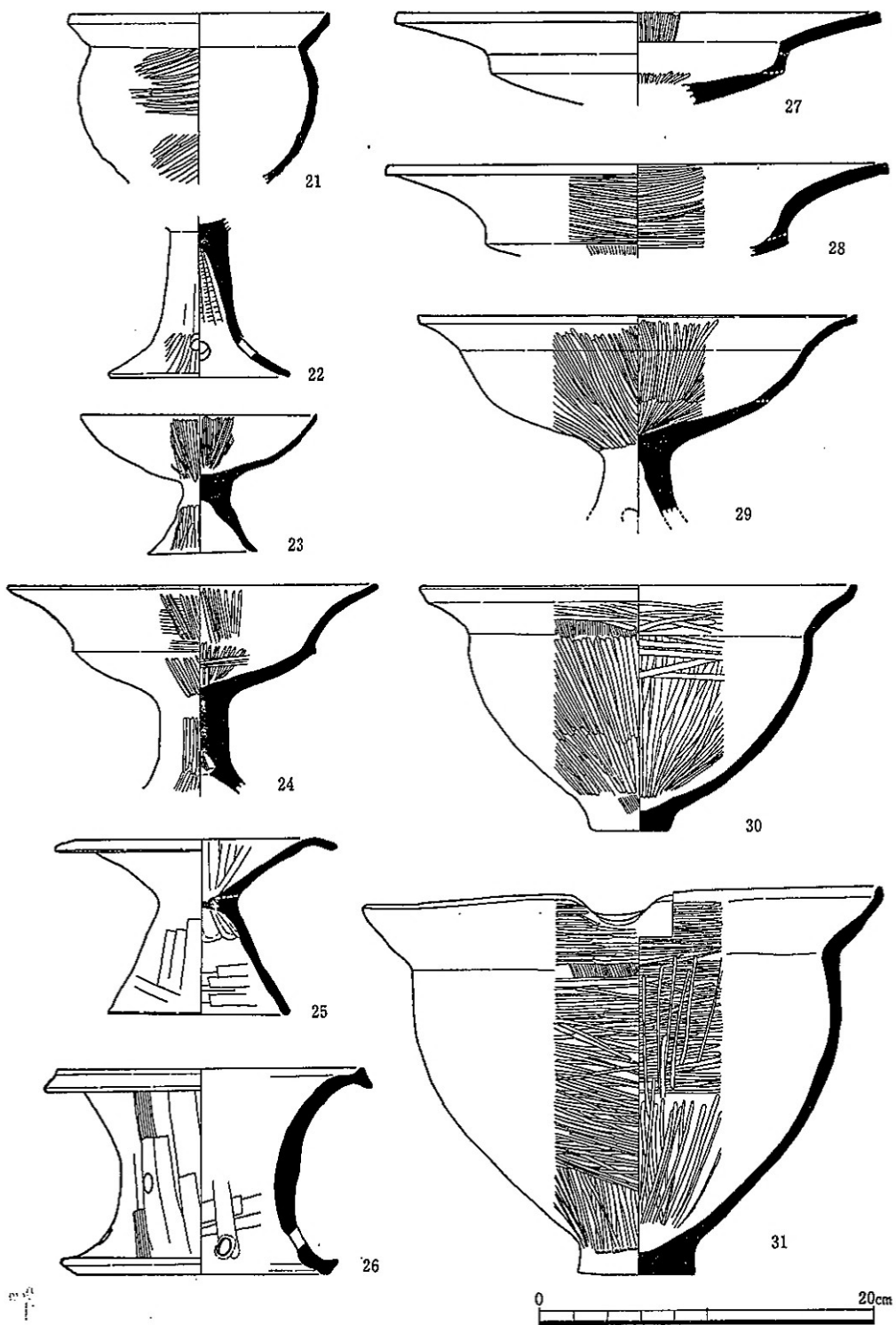
土器片(41) 鹿の絵が描かれた土器片である。器種は不明で、透かし穴のあるものである。土



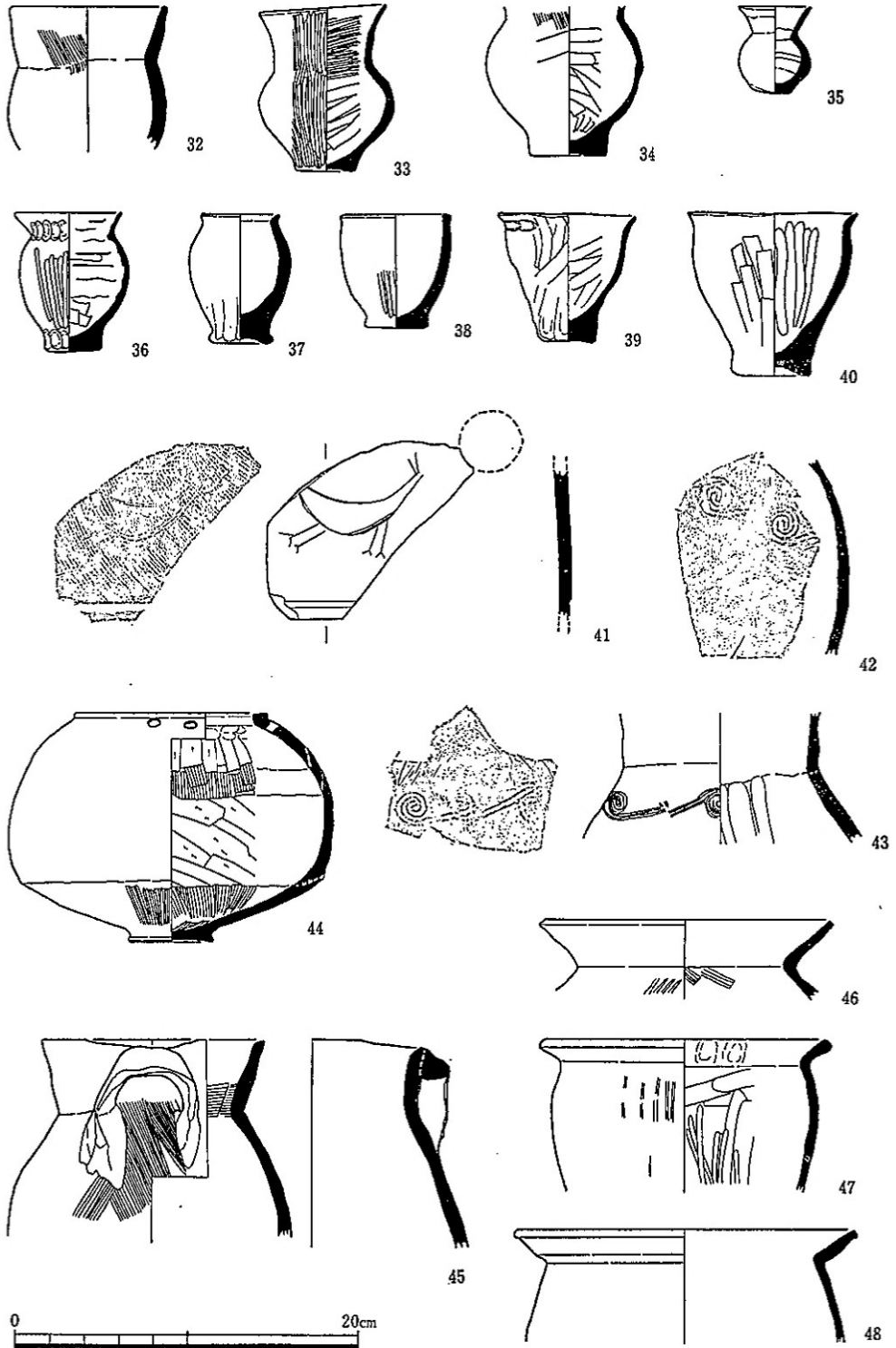
第236图 SD3041出土器物实测图



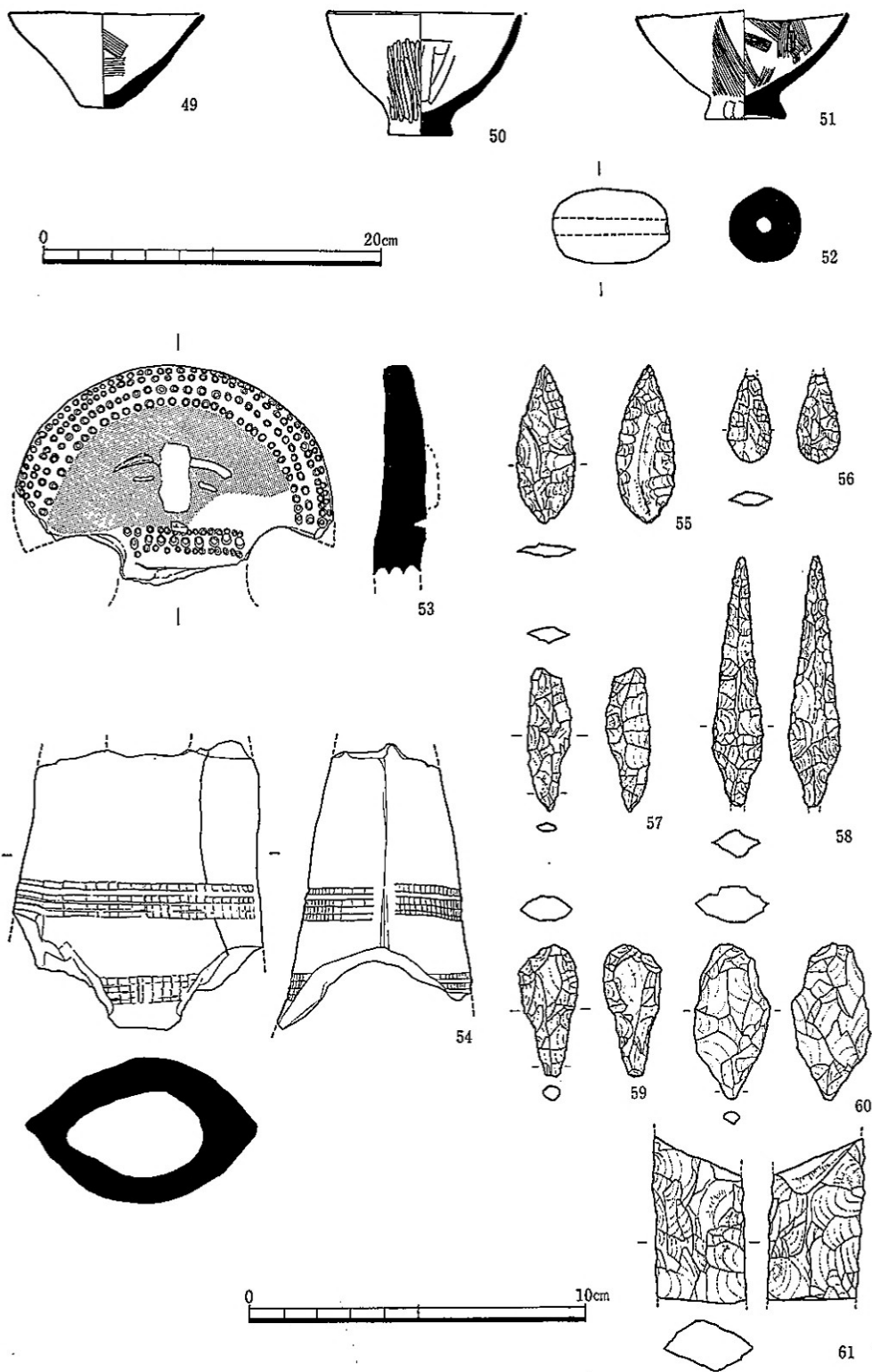
第237図 SD3041出土遺物実測図



第238图 SD3041出土遗物实测图



第239图 SD3041出土遺物実測図



第240图 SD3041出土遺物実測図

器片としては上下が鹿の絵と逆になる。ここでは鹿の絵を優先し上下を決めた。鹿は頭が描かれず、足は走っている状態を示している。足の爪は2本線で描かれるが、後の1本だけが3本線である。土器片は外面がタタキメ調整で凹線を施す。内面はヨコナデとハケナデ調整である。

土製円板 (81・82・83) 3点出土した。いずれも土器片を利用して周縁を打ち欠き、ほぼ円形に整形したものである。(81)は径4.8×4.4cm、厚さ0.8cm、重量21.6g。(82)は径5.1×6.0cm、厚さ0.3cm、重量19.8g。(83)は径5.7×5.6cm、厚さ0.4cm、重量18.5gである。(81・82)は全体に彎曲している。

〔石器〕 (55～80・84～87)

太型始刃石斧 (69) 基端の一部を含む基部の小破片である。残存長3.5cm、同幅5.5cm、同厚さ2.4cm。基端は中央部が凹んでいる。石質は和泉砂岩である。

柱状片刃石斧 (70) 片理面で剝離し、また、基端と刃先を欠失している。側面の剝離が著しい。残存長12.6cm、同幅2.0cm、厚さ3.8cm、平面は平坦に研磨されている。側面は、中央部が平坦であるが、縁辺は丸みをもつ。石質は石墨片岩である。

扁平片刃石斧 (66・67・68) (66)は刃部を欠失している。残存長5.5cm、幅4.0cm、厚さ1.1cm。基端は右下りの平坦面をなす。側面は平坦であるが、平面は、A面では中央部付近が高くなるように研磨しており、B面では、平坦に研磨したのち、左右の縁辺を再度磨いている。A面の基端付近及びB面右側の刃部付近には、製作時の剝離痕が残る。A面には横方向の、B面には右下り斜方向の擦痕がそれぞれ認められる。(67)はA面の大半が剝離している。長さ5.6cm、幅3.4cm、残存厚さ1.7cm。刃先は右上りで、基端は、刃部側に下がる平坦な斜面となる。B面は全体に丸みもち、側面は、左側が平坦であるのに対し、右側は製作時の剝離のためか凹面をなす。B面には製作時の剝離痕を残す。B面基部には横ないし右下り斜め方向の擦痕があり、A面刃部右側では縦方向の擦痕がわずかに認められる。石質は(66)は泉南酸性岩、(67)はホルンフェルス、(68)は泥岩である。

石庖丁 (71・72・73・74・75・76・77・78・79・80) (71)は直線の刃部をもつ片刃で、背部は彎曲する直線刃半月形である。背部、刃部ともに磨滅している。表面に研磨痕が認められる。長さ4.1cm、幅3.7cm、厚さ0.7cmを測る。(72)は直線の刃部をもち、背部はわずかに彎曲する形で片刃である。背、刃部ともに磨滅している。長さ3.0cm、幅3.7cm、厚さ0.7cmを測る。

(73)は直線の刃部をもち、背部は彎曲する直線刃半月形である。片刃。刃先は刃潰れ、背部は背潰れがあり、表裏とも刃部には刃先に平行する研磨痕が認められる。裏面紐孔に紐擦れが、左上には穿孔の際の敲打痕が認められる。長さ7.0cm、幅4.0cm、厚さ0.75cmを測る。(74)はわずかに外彎する刃部をもち、背部は彎曲する片刃である。背部は肩部が磨滅し、中央は剝離している。刃先は磨滅し、一部剝離している。長さ7.6cm、幅4.05cm、厚さ0.55cmを測る。(75)は直線の刃部をもち、背部は彎曲する直線刃半月形である。片刃、背刃部とも磨滅する一部を除いて剝離している。長さ7.6cm、幅3.4cm、厚さ0.7cmを測る。(76)は直線の刃部をもち、背部は彎

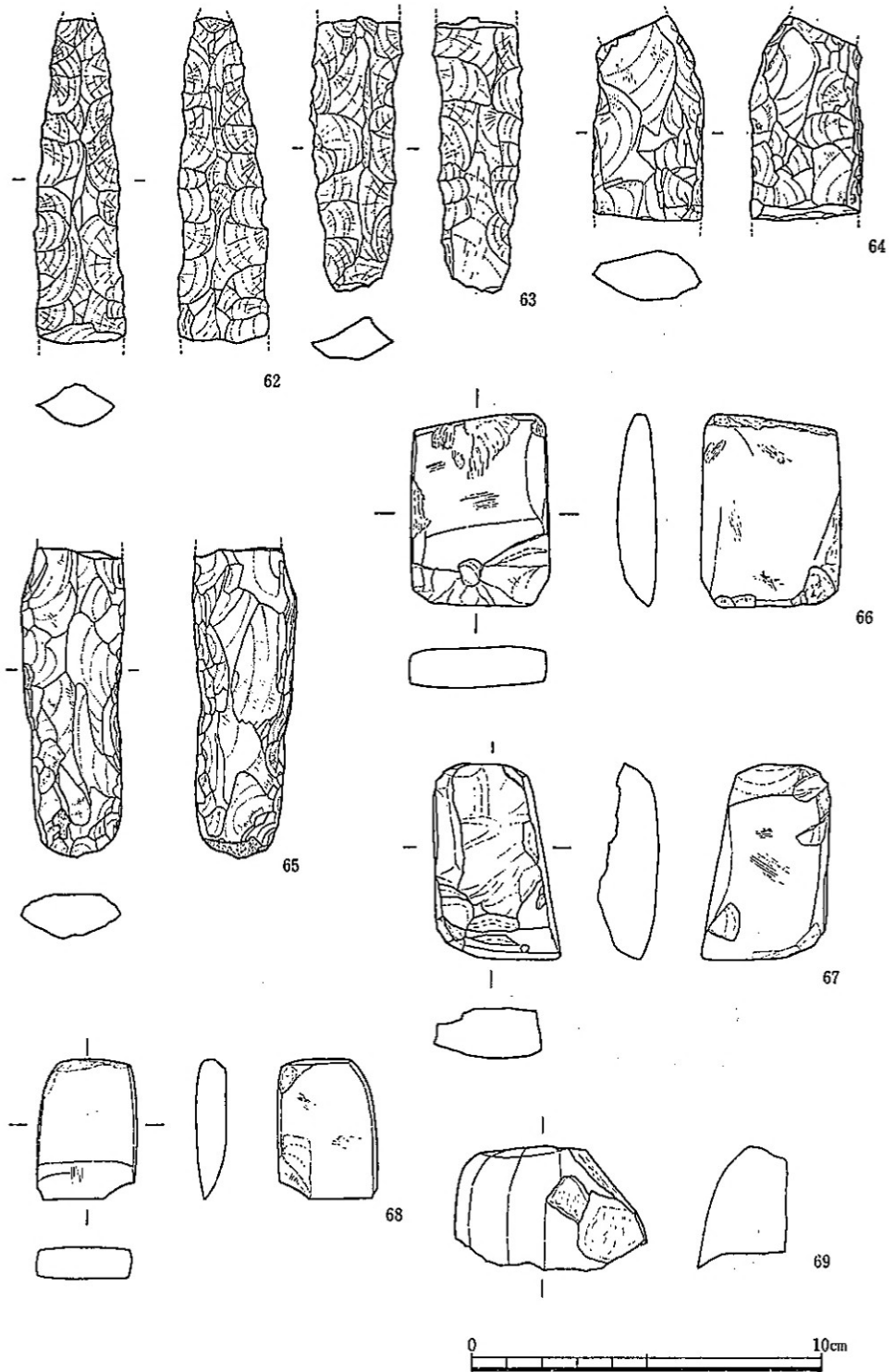
曲する片刃である。背部は丸く磨滅し、一部に背潰れが認められ、刃先は磨滅している。裏面紐孔間に未貫通穿孔痕が認められる。長さ6.3cm、幅4.0cm、厚さ0.65cmを測る。(77)は直線の刃部をもち、背部は彎曲する直線刃半月形である片刃、刃先は一部剝離し、あとは磨滅、背部も磨滅している。長さ5.3cm、幅0.75cmを測る。(78)は直線の刃部をもち、刃部は彎曲する片刃である。背、刃部ともに磨滅している。裏面紐孔間に敲打痕が認められる。長さ3.8cm、幅4.5cm、厚さ0.7cmを測る。(79)は外彎する刃部をもつ片刃で、背部は彎曲する楕円形である。背、刃部ともに磨滅し、刃先は欠損している。長さ5.6cm、幅4.4cm、厚さ0.7cmを測る。(80)は直線の刃部をもつ片刃で、背部は彎曲する直線刃半月形である。刃先より右上りの使用痕、体部には研磨痕、裏面刃先より右上りの使用痕が認められる。紐孔間に未貫通穿孔痕が、孔上部に紐擦れが認められる。背刃部ともに磨滅している。長さ5.2cm、幅3.9cm、厚さ0.8cmを測る。石質は、(71)は緑簾片岩、(74)は緑簾石緑泥石片岩、(75)は緑泥石絹雲母片岩、(76)は石墨片岩、他は緑色の片岩であるが、詳細はわからない。

石鏃(55・56・58) 円基無茎式のものには柳葉形を呈し、先端がわずかに丸みをものもの(55)と丸い基部から先端に向かってすばまるもの(56)がある。(55)は長さ4.7cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量3.0gであり、A面中央に大剝離面を残して、両面とも両側辺から細かい剝離調整を施す。(56)はA面基部に大剝離面を残して、縁辺から剝離調整を加える。(58)凸基有茎式のものには厚みのある大型細身の石鏃である。基部で最大厚を測り、先端に向かって薄くなる。現存長7.4cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm、重量6.9gを測る。全体をていねいに剝離調整し、両面とも中軸線に稜をもつ。逆刺はなだらかであり、鏃身部両側辺はジグザグを呈する。

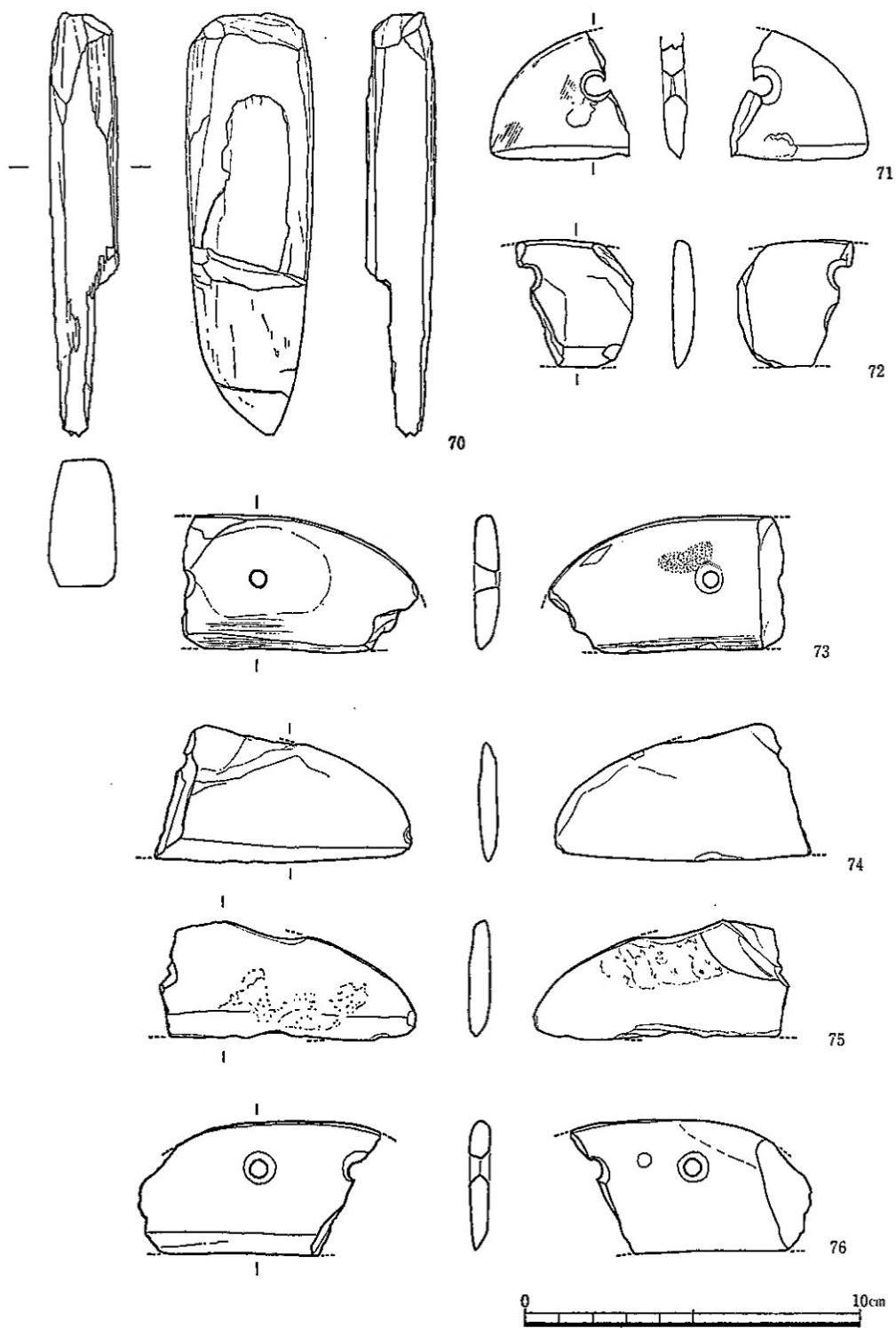
石槍(61・62・63・64・65) (61・62)は先端部と基部が欠損する。両面とも両側辺から剝離調整を施し、両側辺は大きくジグザグをなす。(61)は現存長9.3cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmを測り、(62)は現存長4.8cm、幅2.7cm、厚さ1.4cmを測る。(63)は現存長7.8cm、幅2.5cm、厚さ1.2cmを測り、B面基部に大剝離面を残して両側辺から剝離調整を加える。(64)は現存長5.9cm、幅3.1cm、厚さ1.4cmを測り、彎曲する。両面とも全体を剝離調整し、側辺にさらに細かい剝離を加える。(65)は基辺に自然面を残す円基式のものである。上半部が欠損し、現存長8.8cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmを測る。両面全体を剝離調整し、両側辺とも刃をつぶしている。

石錐(57・59・60) 両側辺をわずかに抉って錐部をつくり出したものが3点ある。(57)は薄い素材を使用し、両面全体を剝離調整したもので、長さ4.3cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、錐長1.5cm、錐径0.8×0.4cmを測る。(59)は楕円形の頭部をもち、長さ3.9cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm、錐長1.8cm、錐径0.8×0.5cmを測り、両側辺から剝離調整を施して錐部両面に稜が通る。折れた部分から0.4cmにわたり、使用のため磨滅している。(60)は楕円形の頭部の先端が短い錐部をなす。長さ4.7cm、幅2.3cm、厚さ1.1cm、錐長0.5cm、錐径0.6×0.4cmを測る。両面全体を剝離調整する。錐部に回転痕をとどめ、先端は磨滅のため丸みをもつ。

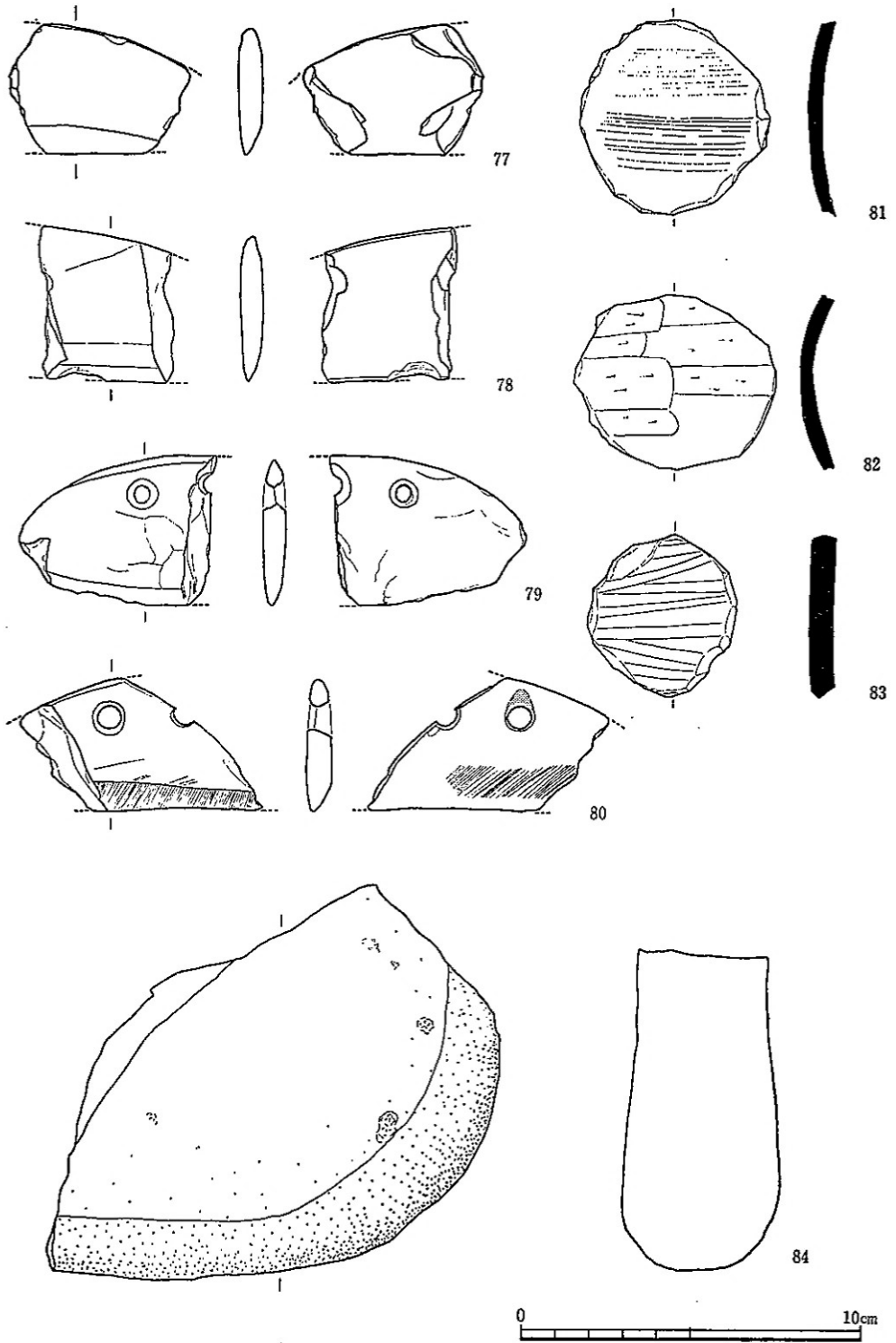
砥石(84) 長楕円形を呈する砥石の一部と考えられ、端部は丸く自然面を残す。使用面は表



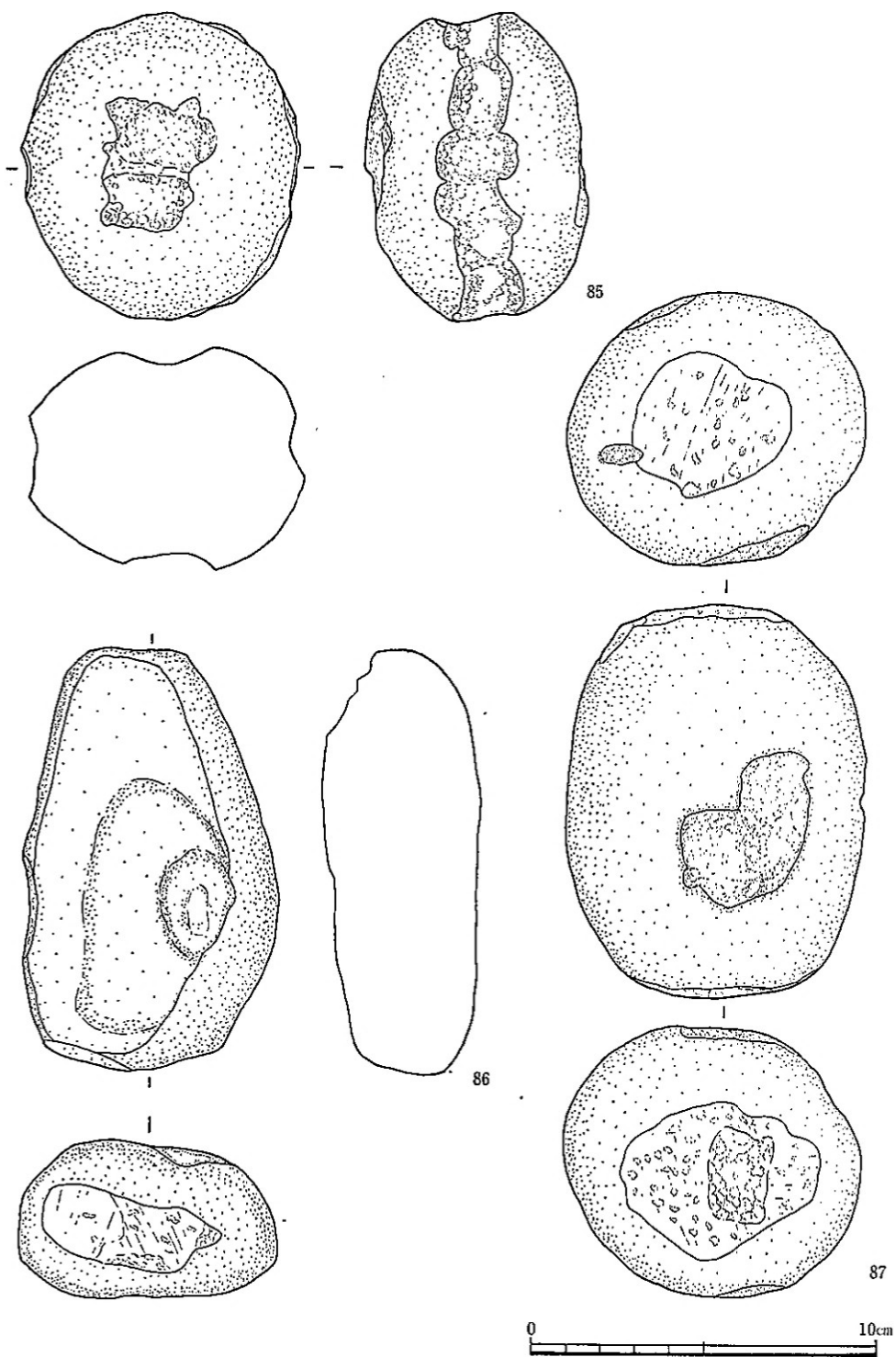
第241図 SD3041出土遺物実測図



第242图 SD3041出土遺物実測図



第243図 SD3041出土遺物実測図



第244图 SD3041出土遗物实测图

裏2面を利用し、中央がやや窪んでいる。残存長13.3×11.6cm、厚さ3.8~4.8cmを各々測る。石質は和泉砂岩である。

有溝石製品(85) 丸い自然礫を用いた有溝石である。糸掛け状の溝は周囲に打撃を加えて作られている。また、中央部両面にも敲打痕を有している。径8.7cm、厚さ6.2cm、重さ645gを測る。なお、石錘と思われるが定かでない。石質は和泉砂岩である。

石槌(87) やや細長い楕円形の自然礫の長軸両端を利用している。断面は円形を呈し、両端には敲打痕と擦痕が見られる。全長11.5cm、径8.7cmを測る。石質は和泉砂岩である。

敲石(86) 河原石の一端を利用している。使用痕は2ヶ所あるが、長軸の一端に敲打痕と擦痕とが見られる。全長12.2cm、幅7.5cm、厚さ4.5cmを測る。石質は和泉砂岩である。

小 結 今回検出された弥生時代後期の溝のうち、SD3032、3033、3034、3035、3036、3037の6条の溝には、前述のごとく互いに切合い関係が認められた。これら6条の溝は、その規模においては、上部幅4.5~5.5m、下部幅1.0~1.5m、深さ2.1m前後という一定のまとまりが認められる⁽¹⁾。また、埋土の状況も各溝ごとに若干の違いが認められるものの、既に記したように、基本的には同一のパターンの堆積をしているといえる。さらに、形態の点でも、断面逆台形を呈し、ところどころに、2段掘り、3段掘り状の形態がみられる。以上のように、この6条の溝には多くの点で共通性が認められる。このことは、この6条の溝が、本来、同一の目的と役割りをもって掘削され、同一の機能をもっていたことを示しているものと考えられる。しかも、6条の溝に互いに切合い関係が認められたことは、それらが1時期に存在したのではなく、開削と埋没という変遷を繰り返したことを示している。その変遷過程は以下のように考えられる⁽²⁾。

第1段階……SD3034、3035、3037が連続した一条の溝として機能していた時期

↓

第1段階の溝の埋没

↓

第2段階……SD3033、3036が開削され、機能していた時期

↓

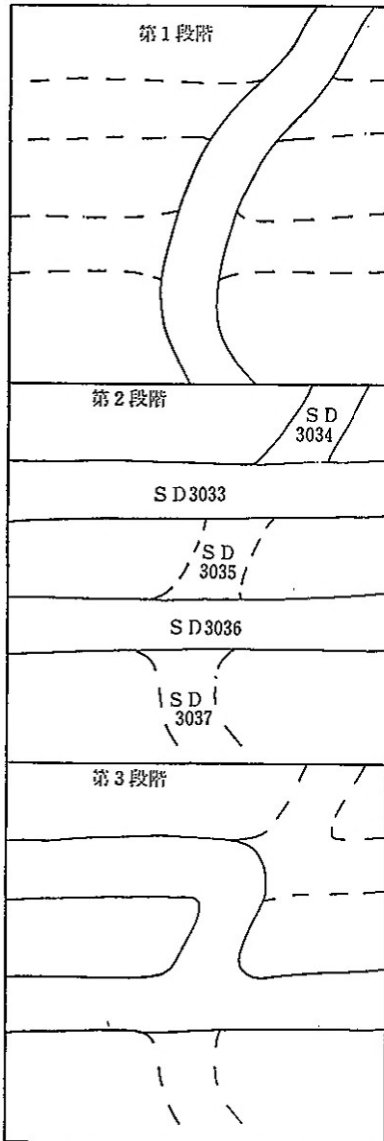
第2段階の溝の埋没

↓

第3段階……SD3033の東半部、3035、3036が再度開削され、機能していた時期

この6条の溝が人為的な掘削によるものであることは、最下層に粘土ブロック土層が認められること、肩部の周辺にもブロック土が存在すること等によって明らかである⁽³⁾。このような大規模な溝が、開削、埋没を繰り返したということは、当遺跡において治水がいかに困難であり、また、重要であったかを物語っているといえよう。

SD3041については、埋土の状況がNR3001に類似していること、NR3001同様に弥生時代



第245図 後期溝変遷模式図

4 自然流路

NR 3001 (第 246 図) 調査区東端の F・G・H・I ライン付近から南西方向に向かい、6～8 ライン付近で大きく北に向きを変え、そのまま 9～11 ライン付近で調査区外に去る自然流路である。埋土の砂層の検討の結果によれば、水流は東から入り北に抜けている。屈曲部分の西岸は大きくえぐられており、川の攻撃面であったことを示している。上部幅は平均 9.5～11.5m 程度であるが、屈曲部では最大 16.5m を測る。底部幅は、2.5～6.0m と一定していない。水流の影響によるものと思われる。深さは平均すれば 3.2～3.5m 程度であるが、水流による底のえぐりの著しい箇所では 4.0m に達する。埋土は激しい水の流れを物語るように、細礫を混えた粗粒砂～細粒砂までの砂層が複雑な堆積状況のみせていた。検出面は包含層第Ⅱ a 層上面である。この川は調

中・後期の集落を切る形で掘られていること、NR3001とほぼ平行する位置に掘られていること等々のことから、NR3001の流れていた時期に、NR3001と密接な機能をもつ溝として開削されたものと考えられる。SD3008、調査区西半部の6条の溝よりは、1段階新しい時期の溝であることは、SD3008とSD3041との切合い関係、NR3001とSD3033の切合い関係から、明らかである。

〔註〕

- (1) SD3035の幅が他に比べて広いのは、この溝がSD3033とSD3036を結ぶ位置にあり、実際にその役割りを果たしたためと考えられる。また、SD3037のそれは、屈曲部にあたるためであろう。
- (2) SD3032については、第2段階の時期にSD3033とSD3036を結ぶ役割を果していたと考えられるが、SD3032とSD3036の接する付近が、旧平野川により削平されていたため、明らかにし得なかった。
- (3) SD3041を人工の溝と判断した根拠も同様である。ブロック土の形成の原因については、那須孝梯氏より御教示を受けた。

査区東半部の弥生時代中・後期集落の一部を押し流しており、このことと、出土土器からすれば、SD3041と同様、弥生時代後期終末ごろの流路と考えられる。なお、この川はその後もわずかつづ形を変えながら、古墳時代中期まで継続する。

出土遺物（第247・248・249・250・251・252・253・254・256・257・258・259・260・261）

〔土器・土製品〕（1～49） 弥生時代中期～後期の土器・土製品が出土した。土器には中期も混じるが圧倒的に後期が多く、それも完形のものが多いため、ここではほとんど後期の遺物を取り上げた。壺形、小形壺形、長頸壺形、無頸壺形、甕形、小形甕形、鉢形、高杯形、手焙形、壺用蓋形土器等が出土した。

壺形土器（1・2・3・4・5・6・7・11・12・13・33）（1）は口径15.0cm、器高24.5cm、最大腹径21.7cmを測り、腹の張る体部に短く外反する口縁部をもち、端部は上下に肥厚する。口縁部外面はハケメ、体部はヘラミガキ、内面はハケメ調整である。（2）は口径12.5cm、器高23.3cm、最大腹径23.3cmを測り、胴の張る体部をもち、外反する口縁部をもつ。外面はハケメ、内面は底部がハケメ、体部はナデ調整である。（3）は復元口径15.0cmを測り、口縁端部は上下に拡張する。端面に連続渦巻文のスタンプを施す。（4）は復元口径14.8cmを測り、胴の張る体部をもち、短く外反する口頸部をもつ。肩部に粘土紐を逆U字形に貼りつけている。外面はハケメ調整である。生駒西麓型胎土である。（5）は口径14.3cm、器高18.0cm、最大腹径18.8cmを測り、胴の張る体部に2重口縁部をもつ。体部内面はハケメの上をナデ調整する。（6）は口径14.9cm、器高20.9cm、最大腹径21.6cmを測り、胴の張る体部に外に開く口縁部をもつ。内外面ハケメ調整であるが、内面の体部のハケメは荒く、底部は細かいハケメ調整である。外面胴・底部に煤が付着する。（7）は口径11.7cm、器高20.5cm、最大腹径15.0cmを測り、体部からなだらかに外反する口縁部をもつ。口縁部に対称に2ヶ所穿孔する。（14・15・16）は胴長の体部に短い直口の口頸部がつく。（14）は口径11.4cm、器高25.3cm、最大腹径15.1cmを測る。頸部に粘土を加え、ナデ調整をする。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。（15）は（14・16）に比べて器高に対する口頸部の長さが長い。口径11.4cm、器高25.9cm、最大腹径15.3cmを測り、体部から口頸部はなだらかに移行する。口頸部外面はハケメ、体部外面と内面はナデ調整である。（16）は口径11.4cm、器高25.3cm、最大腹径17.6cmを測り、内外面はナデ調整で、底部外面はヘラケズリの後、ナデ調整している。（33）は底径8.0cmを測り、底部に木葉痕がある。内外面は荒いハケメ調整で、内面に煤が付着する。

長頸壺形土器（12・13）（12）は口径9.8cm、器高18.9cm、最大腹径14.0cmを測る。内面はナデ調整である。（13）は口径8.7cm、器高20.5cm、最大腹径14.6cmを測る。外面は頸部と体部の接合部がナデ、他の外面はハケメ調整である。底部はドーナツ形に突出する。

短頸壺形土器（11）口径6.0cm、器高13.8cmを測り、胴の張る体部をもつ。外面下半部はヘラミガキ調整で、内面の調整は明らかでない。

小形壺形土器（8・9）（8）は口径7.4cm、器高11.6cm、最大腹径11.1cmを測り、直口の口縁部をもち、端部に凹線文を施す。生駒西麓型胎土である。（9）は口径8.3cm、器高12.4cm、最大腹径11.8cmを測り、胴の張る体部に外反する口頸部をもつ。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

甕形土器（17・18・19・20・21・22・23・32）（17）は口径15.5cm、器高18.3cm、最大腹径12.6cmを測り、腹径より口径の方が大きく、脚がつく。外面は肩部がハケメ、体部がタタキ調整、内面はハケメ調整である。外面に煤が付着する。（18）は口径16.4cm、器高14.5cm、最大腹径16.1cmを測り、丸みのある体部に外反する口縁部をもつ。外面はタタキ、内面はハケメ調整である。外面に煤、内面に炭化物が付着する。（19）は復元口径20.4cmを測り、胴の張る体部に、外反し端部を上方にややなで上げる口縁部をもつ。外面はタタキ、内面はナデ調整である。（20）は口径14.0cm、器高24.5cm、最大腹径20.0cmを測り、胴の張る体部に外開き味の直口の口縁部をもつ。口縁部内外面はハケメ調整、体部外面はタタキ、中央に粘土の継ぎ目があり、その上をナデつけている。体部内面はナデ調整である。（21）は口径14.8cm、器高18.5cm、最大腹径14.6cmを測り、腹径より口径がやや大きい。口縁部は外反し、端部は上方に少しつまむ。外面頸部はハケメ、体部外面はタタキ、内面上半部はナデ、下半部はハケメ調整である。外面に煤、内面底部に炭化物が付着する。（22）は口径15.9cm、器高22.7cm、最大腹径17.4cmを測り、胴長の体部に「く」の字に外反する口縁部をもつ。外面はタタキ調整で体部下半の一部に粘土を貼って補強した後、ナデつけ押さえている。内面はナデ調整である。体部外面の上半部に煤が付着し、土器内面に炭化物が付着している。（23）は口径16.9cm、器高25.8cm、最大腹径19.8cmを測り、やや胴の張る体部に「く」の字に外反する口縁部をもつ。外面はタタキ、底部はナデ、内面上半部はハケメ、下半部はナデ調整である。外面は煤が付着する。（32）は木葉痕の残る底部である。

小形甕形土器（24・25）（24）は口径10.9cm、器高10.8cm、最大腹径11.2cmを測り、外面は上半部がハケメの上をナデ、下半部はタタキ調整、内面はナデ調整である。（25）は口径10.8cm、器高9.1cm、最大腹径9.3cmを測り、口径が腹径よりも大きい。内底面はハケメ調整である。外面は調整不明である。

高杯形土器（26・27・28）（26）は口径12.3cm、器高10.8cmを測り、椀状の杯部をもち、柱状の脚をもつ。脚部内面はヘラケズリ調整である。（27）は復元口径14.3cm、器高11.4cmを測り、椀状の杯部で裾広がりの脚部をもつ。透し穴は4ヶ所と推定する。杯部直下の脚部外面に刻目状の痕跡がある。杯部の内外面はヨコナデの上をヘラミガキ調整する。（28）は復元口径22.2cmを測り、外に開く体部から稜をもち、外反する口縁部をもつ。

鉢形土器（29・30）（29）は復元口径12.2cm、器高6.5cmを測る椀状のものである。外面はタタキ、内面はハケメ調整である。（30）は復元口径20.0cmを測り、なだらかに丸く立ち上がる体部に内面に稜をもち、外反する口縁部をもつ。外面はハケメ、内面はハケメの上をヘラミガキ調整である。

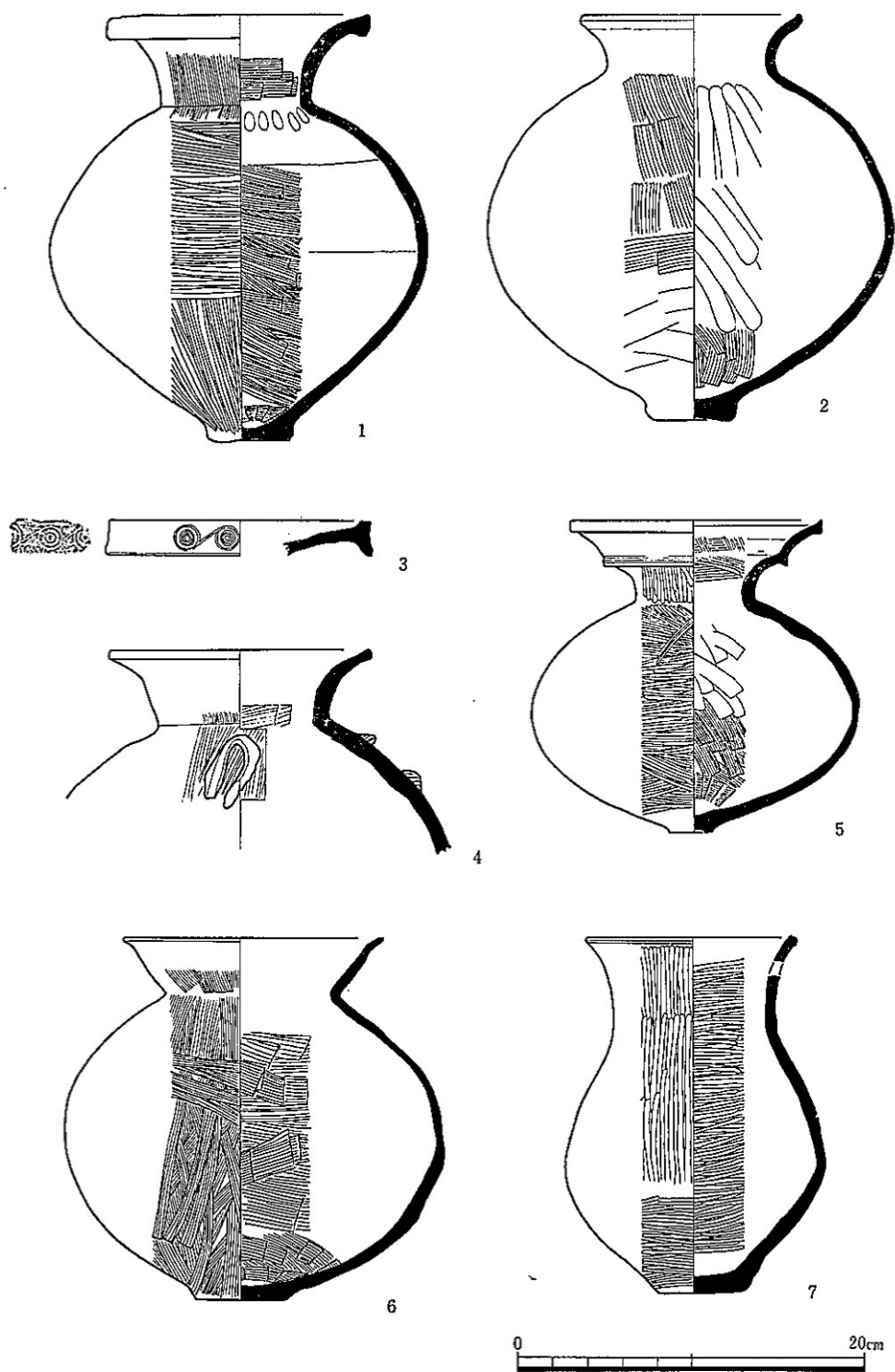
手焙形土器 (31) 最大腹径13.6cmを測り、体部に刻目凸帯を施す。内外面ハケメ調整である。

蓋形土器 (10) 復元口径12.5cm、器高 2.6cmを測り、小さなつまみをもつ。外面はハケメ、内面はナデ調整である。

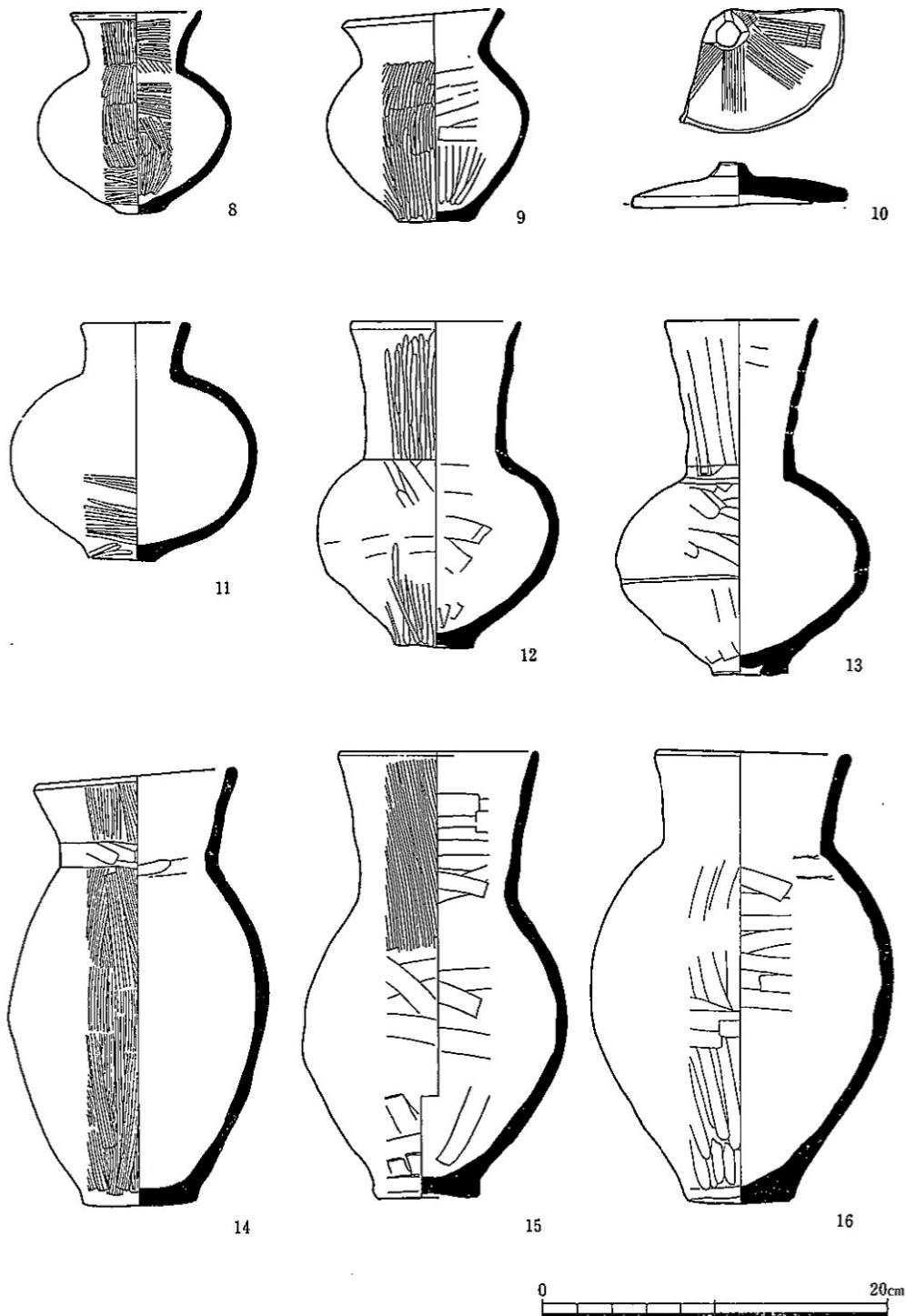
紡錘車 (35・36・37・38・39・40) 計6点出土した。(35)は土製で、直径4.7cm、厚さ1.2cm、重量は33.6gある。中心の孔の内径は 0.7cmで、2次的に火を受けているらしく、孔の内面に糸巻棒の一部が炭化して付着している。中心より周辺がやや薄く、周縁は溝状にくぼんでいる。(36)は土器片製で、直径約2.5cm、厚さ0.5cm、重量3.3gと小型のものである。丸みをおびた多角形を呈し、中心孔の径も 0.3cmしかないため、紡錘車としてよいかどうか疑問が残る。

(37)は土器片製で、全体の2分の1を欠く。直径4.8cm、厚さ0.4cm、現存重量14.8gである。周縁は打ち欠いて成形した後、大まかな研磨を加えただけで、凹凸がある。中心の孔は打ち欠きによって穿孔されており、径は0.8cmある。(38)も土器片製で全体の2分の1を欠く。直径4.8cm、厚さ 0.5cm、現存重量16.4gである。周縁はていねいに研磨する。中心の孔は錐で、両面から穿孔しており内径は0.5cmである。(40)は土器片製で、直径6.8cm、厚さ0.7cm、重量40.5gである。周縁は打ち欠いただけで、ややいびつな形をしている。中心の孔は錐によって両面から穿孔されており、内径は 0.5cmである。(39)は土器片製で、直径4.5cm、厚さ1.0cm、重量24.0gである。中心の孔の内径は 0.5cmで、やや斜めに穿孔されている。著しく磨滅していて打ち欠きや研磨は不明である。

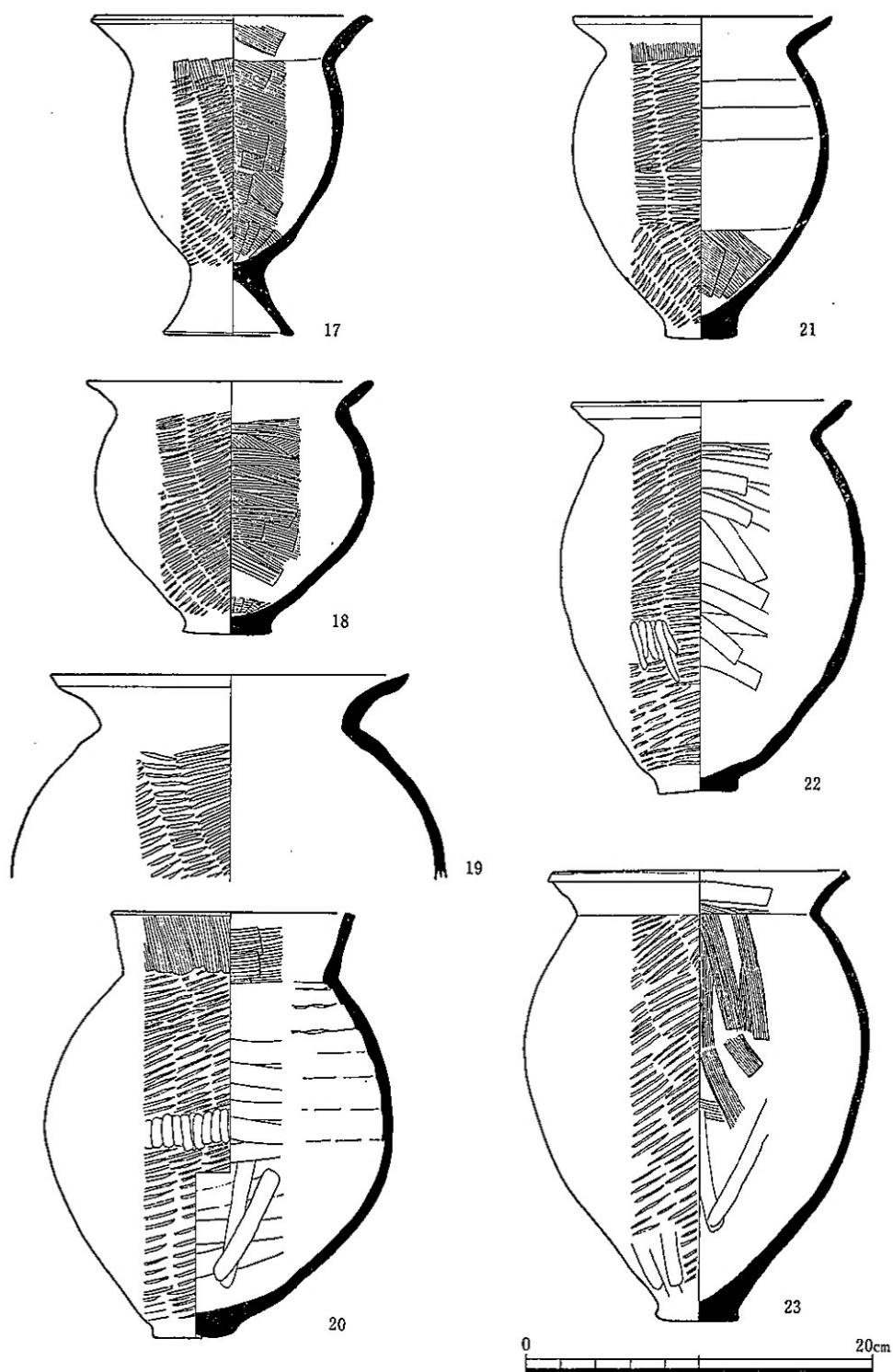
円板 (41・42・43・44・45・46・47・48・49) 紡錘車の未製品と考えられる円板は、すべて土器片を利用したもので、(42)・(44)・(45)・(46)・(48)・(49)は周縁を打ち欠いただけ、(41)・(43)・(47)は打ち欠きに研磨を加えてほぼ円形に整形している。(42)は径4.1×4.8cmの楕円形で、厚さ 0.4cm、重量12.6gである。周縁の打ち欠きは細かい。(44)は径4.0×4.2cm、厚さ0.9cm、重量は20.4gあり、径に比して厚手である。(45)は径4.6×4.7cm、厚さ 0.7cm、重量21.3gである。著しく磨滅しているものの、細かい打ち欠きによってほぼ円形に整形していることがわかる。(46)は径5.0×4.8cm、厚さ 0.8cm、重量22.7gである。打ち欠きは大きめで、平面形は不整な円形を呈する。著しく磨滅している。(48)は径5.6×6.2cm、厚さ0.6cm、重量24.7gである。周縁は細かい打ち欠きを加えて、ほぼ円形に整形している。(49)は径6.1×6.0cm、厚さ 1.0cm、重量46.2gの大形なものである。著しく磨滅しているが、大まかな打ち欠きを加えただけであることがわかる。(41)は径4.0×4.2cm、厚さ 0.5cm、重量15.9gである。周縁は一部に打ち欠きを残して研磨を加え、ほぼ円形に整形する。(43)は径4.9×4.6cm、厚さ 0.6cm、重量22.2gである。著しく磨滅しているが、打ち欠きの後研磨を加えている。(47)は径5.6×5.0cm、厚さ 0.7cm、重量31.2gである。周縁は打ち欠きの後ほぼ全体に研磨を加えている。



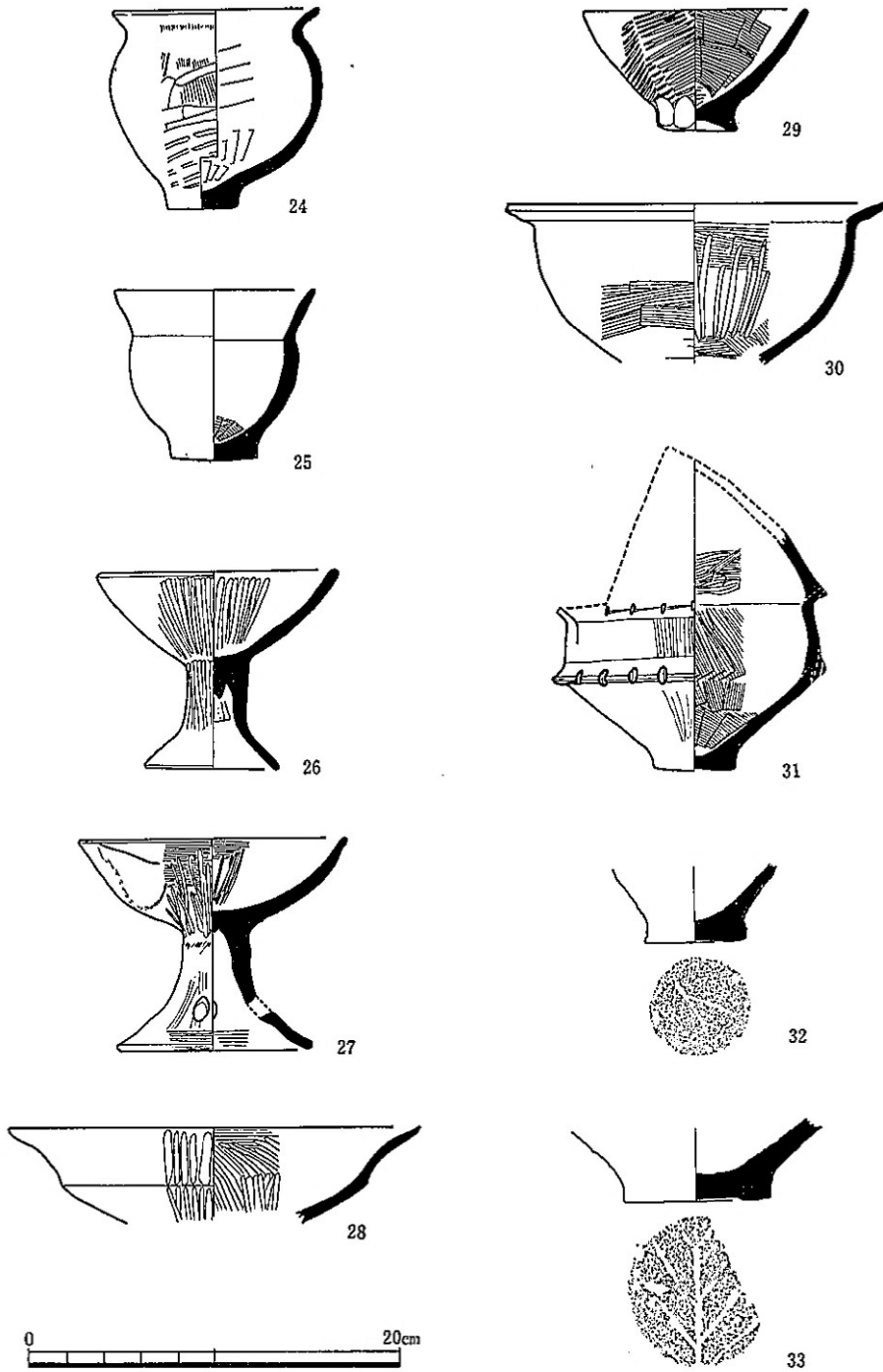
第247图 NR3001出土遗物实测图



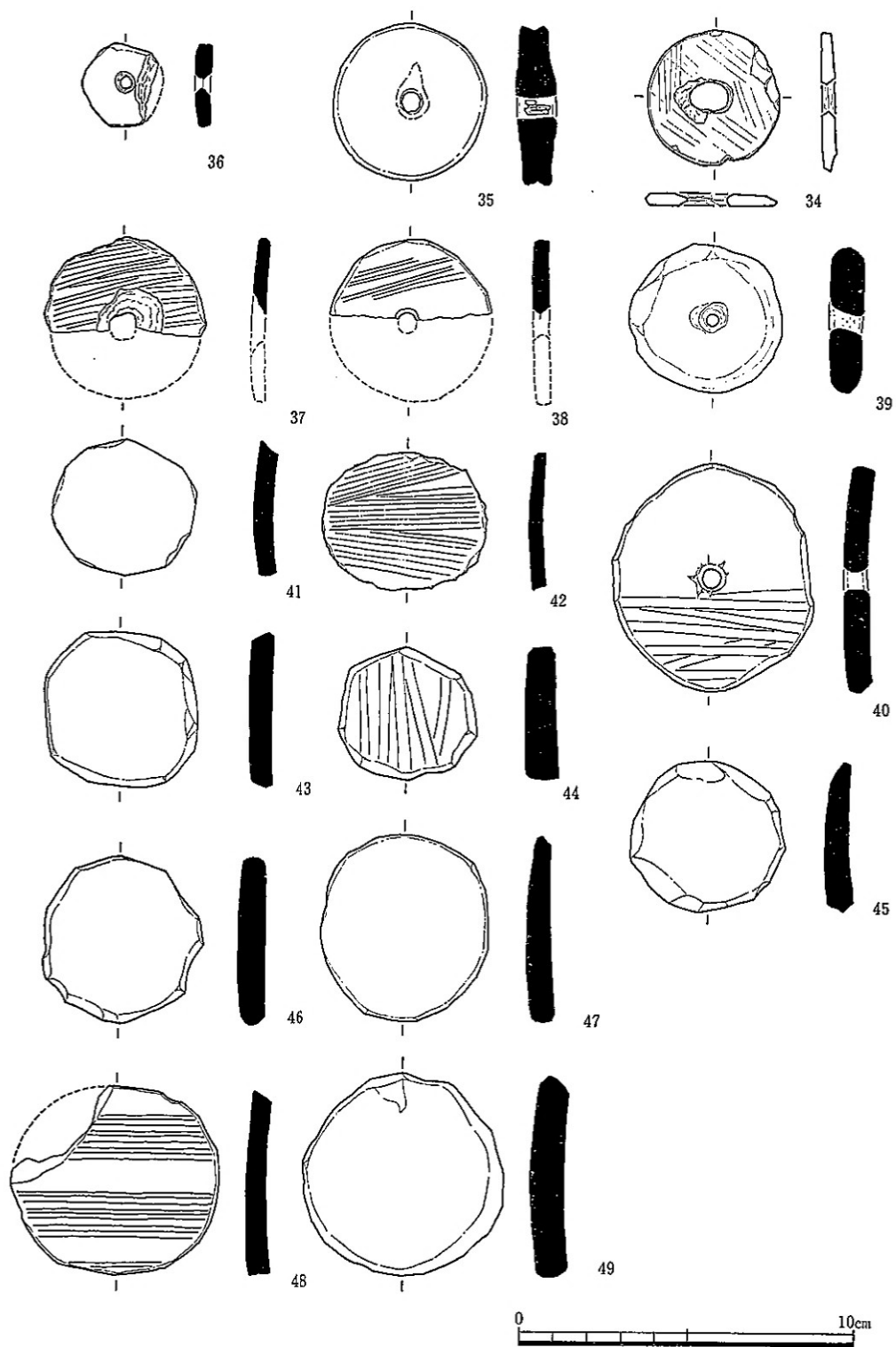
第248図 NR3001出土遺物実測図



第249图 NR 3001出土遗物表测图



第250図 NR3001出土遺物実測図



第251图 NR3001出土遗物实测图

〔石器〕 (34・50~124)

石斧 (68・69・70・71・72・73・74) 大型蛤刃石斧は4点を数える。(68)は基端を含む基部の約3分の1が残存している。残存長6.6cm、幅5.6cm、厚さ3.0cmを測る。基端は敲打のみによって作られており、若干の凹凸がある。A面左側基端付近には製作時の剝離痕が残る。A面側の折損端部に2次的な敲打痕があり、敲石に転用されたものと考えられる。石質は玢岩。(69)は長さ16.7cm、幅6.0cm、厚さ4.6cmを測る。基端は平坦である。基部の左右両側にはA・B両面ともに製作時の剝離痕が残る、特にA面は大形の剝離痕である。このため、中央部の断面形は洋梨状を呈する。B面の基部から刃部に移る付近は、右下り斜め方向の擦痕がわずかに認められる。基部中央部の幅6.0cmの範囲は、着柄によると思われる光沢がみられる。石質は輝緑岩。(72)も完形である。長さ7.4cm、幅5.7cm、厚さ2.9cmを測る。基部は平坦である。基部から刃部にかけて製作時の剝離痕を残す。B面基部には横方向の、刃部には右下り斜め方向の擦痕がそれぞれ認められる。刃先は1mm前後の幅で、刃潰れを起こしている。石質は安山岩。(71)は刃部及び基部の約4分の1程の破片である。現存長7.1cm、同幅3.3cm、厚さ3.1cmを測る。右側面の刃部から基部にかけて製作時の剝離痕を残している。A・B両面の基部には横方向、刃部には縦方向の短かい擦痕が、認められる。刃先は刃潰れを起こしている。片麻岩。(70)は柱状片刃石斧である。片理面で剝離し、また基部を欠失した小破片である。現存長6.0cm、同幅1.0cm、厚さ3.3cm。側面のB面近くは、B面の研磨後、再度研磨されている。B面基部には粗い縦方向の擦痕がある。黒雲母片岩。(73・74)は扁平片刃石斧で石質はともにホルンフェルスである。(73)は片理面で剝離し、約2分の1が残存している。長さ3.4cm、残存幅1.4cm、厚さ0.7cm。基端は、残存部では右下りで製作時の剝離痕を残す。B面基部に横方向の擦痕がある。(74)は基端を含む基部の右側の一部を欠失している。長さ4.2cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm。基端は幅1mm程度の平坦面であるが、B面の基端近くは平坦な傾斜面となっている。縦断面形は平行四辺形に近い形状である。刃部右側は、剝離後再研磨しているが、剝離痕が顕著である。基部A面に右下り斜め方向の擦痕がある。

石庖丁 (50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・60・61・62・63・64・65・66・67)

(50)は直線の刃部をもつ片刃で、背部は彎曲する。刃先は磨滅している。現存長4.6cm、幅3.85cm、厚さ0.8cmを測る。(51)は直線の刃部をもつ片刃で、背部は彎曲する直線刃半月形で刃先は磨滅し、背部には背潰れが認められる。現存長6.5cm、幅3.1cm、厚さ0.75cmを測る。(50)(51)ともに石質は石墨片岩。(52)は直線の刃部をもち、背部は彎曲する。刃先は刃潰れ、背部は欠損している。裏面には敲打痕が認められる。現存長5.3cm、幅2.35cm、厚さ0.65cm。緑泥石緑簾片岩。(53)は直線の刃部をもつ片刃で刃先は磨滅し背部は彎曲する直線刃半月形で研かれている。現存長4.9cm、幅3.1cm、厚さ0.6cmを測る。石墨片岩。(54)はゆるく外彎する刃部をもつ片刃で、背部もわずかに彎曲し、刃先は磨滅している。裏面紐孔には紐擦れが認められる。現存長4.5cm、幅3.5cm、厚さ0.55cm。絹雲母緑泥石片岩。(55)は内彎する刃部をもつ片刃で、

刃部は刃潰れと剝離が認められ、背部は紐孔あたりまで割れている。現存長 5.7cm、幅 2.7cm、厚さ 0.6cm。点紋緑簾石石墨片岩。(56) は片刃で紐孔は 1 つが確認できる。現存長 2.9cm、幅 3.2cm、厚さ 0.4cm。石墨片岩。(57) はわずかに内彎する刃部をもつ片刃で、背部は彎曲する。刃部には刃稜にはほぼ平行して研磨痕が認められ、背部は研かれている。現存長 7.3cm、幅 4.6cm、厚さ 0.65cm。緑レン緑泥片岩。(58) は直線刃をもつ片刃で、刃潰れ、背潰れがある。裏面上半部に研磨痕が、刃先より右上りの使用痕がそれぞれ認められる。裏面刃先に直交して鋭利なものを研いだような痕跡がある。両面紐孔横には敲打痕がある。現存長 9.1cm、幅 3.45cm、厚さ 0.7cm。緑泥石石墨片岩。(59) はわずかに内彎する刃部をもつ片刃である。背潰れ、刃潰れが認められる。紐孔両面に紐擦れが認められる。現存長 10.4cm、幅 3.3cm、厚さ 0.7cm。(60) はわずかに内彎する刃部をもつ片刃で、刃部は 2 段に研かれている。刃先は磨滅し、背部はきれいに研かれている。長さ 11.8cm、幅 4.2cm、厚さ 0.6cm。(61) は直線の刃部をもつ片刃で、背部は彎曲し、端部は刃部とほぼ直交する。刃部先端ともに磨滅している。裏面紐孔に紐擦れ痕が、紐孔横には未貫通の穿孔痕が認められる。現存長 5.6cm、幅 5.0cm、厚さ 0.65cm。緑レン石緑泥片岩。(62) は外彎する刃部をもつ杏仁形の片刃で、刃先は磨滅し、背部は研かれている。現存長 7.4cm、幅 5.2cm、厚さ 0.65cm。緑泥石石墨片岩。(63) は外彎刃をもつ楕円形で、両刃ぎみの片刃である。両面ともに研磨痕が顕著にみられる。紐孔間には未貫通の穿孔痕がある。背部は研かれている。長さ 12.5cm、幅 5.6cm、厚さ 1.0cm。緑泥片岩。(64) は浅く外彎する刃部をもつ両刃で、背部中央で彎曲し、刃端部へ向い逆に彎曲する大型である。刃部は幅の 3分の2 にまで及び、両面に研磨痕が、刃先には平行する研磨痕が認められる。刃先は中央部が剝離しているが鋭い。背部は研かれている。長さ 18.1cm、幅 5.5cm、厚さ 0.9cm。緑泥石緑レン片岩。(65) はゆるく外彎する刃部をもつ片刃である。刃、背部ともに刃潰れ、背潰れが認められる。表面刃先に直交して 1.0cm 前後の研磨痕が 2 条認められ、2 次的な使用と思われる。現存長 7.1cm、幅 3.35cm、厚さ 0.65cm。石墨片岩。(66) は内彎する刃部をもつ片刃で、刃部には刃潰れ、背部には背潰れが認められる。両面に敲打痕が認められ、紐孔間にも穿孔痕があるが、未貫通である。現存長 7.1cm、幅 3.4cm、厚さ 0.75cm。緑泥石石墨片岩。(67) は外彎する刃部をもつ片刃で、背部は直線の外彎刃半月形である。背潰れが認められる。現存長 3.5cm、幅 3.55cm、厚さ 0.8cm。石墨片岩。

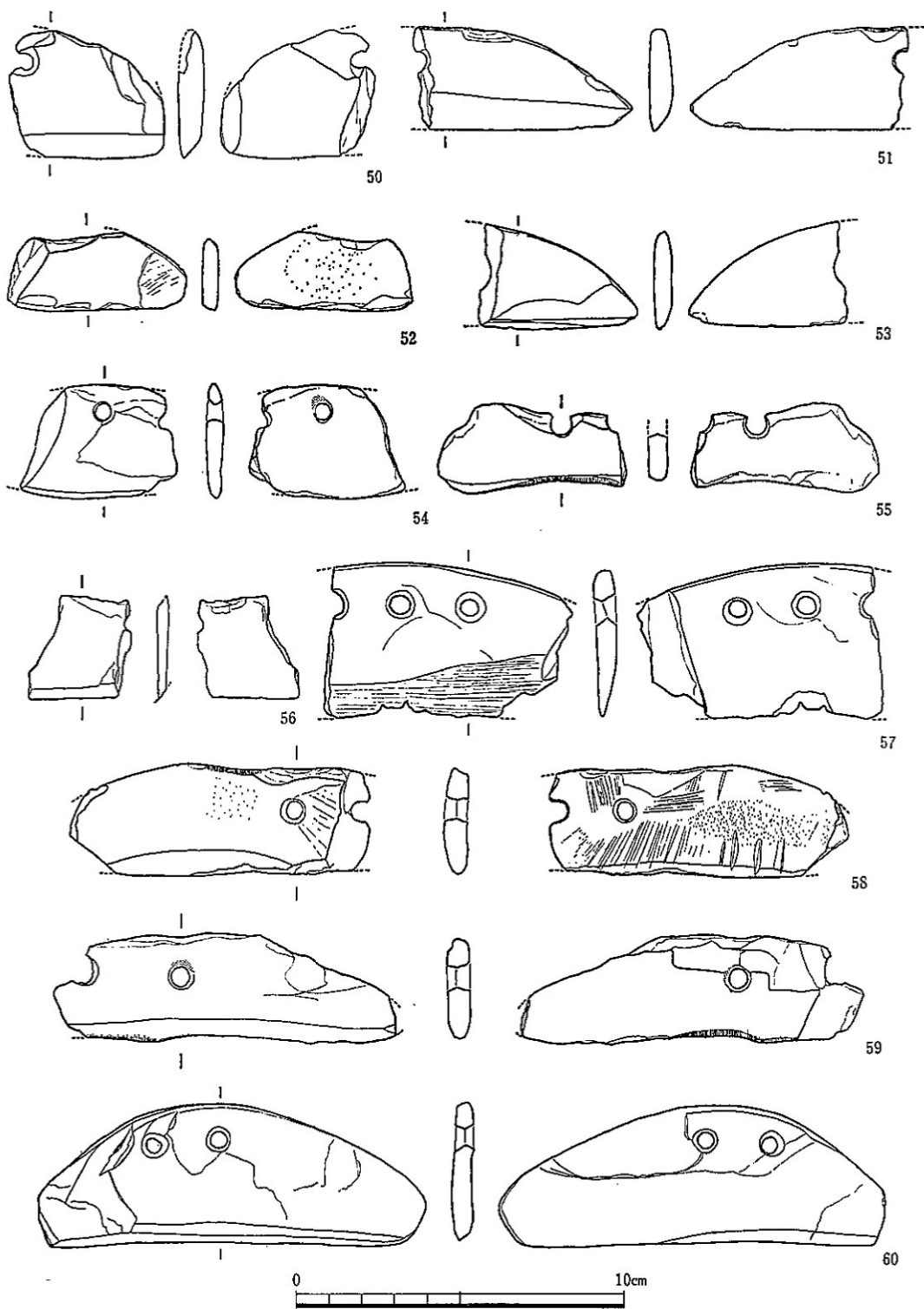
石剣 (75・76) (76) は鉄剣形石剣の一部分で、茎から 3.0cm の所に擦痕があり、身が意識的に折られている。身の断面は鎬を有しているところから菱形を呈する。茎は身から鎬がのびているが、丸みをもった長方形を呈する。残存長 6.1cm、身の幅 4.8cm、厚さ 1.2cm を測る。茎は 2.6cm、幅 1.7cm、厚さ 1.1cm。石質は頁岩。(75) は鉄剣形石剣の剣先で、鎬も先端なので明瞭さを欠く。断面は菱形を呈し、全長 3.9cm、幅 2.7cm、厚さ 0.9cm を測る。石質は頁岩である。

石鏃 (77・78・79・80・81・83・86・87・88・89・90・91・92・93・94・95・96・97・98) 尖基無茎式は、扁平で幅広いもの (78・81・83)、柳葉形を呈するもの (79・80・85・88)、大型で縦長のもの (89) がある。(78) は長さ 3.8cm、幅 1.8cm、厚さ 0.6cm、重量 3.3g を測る。

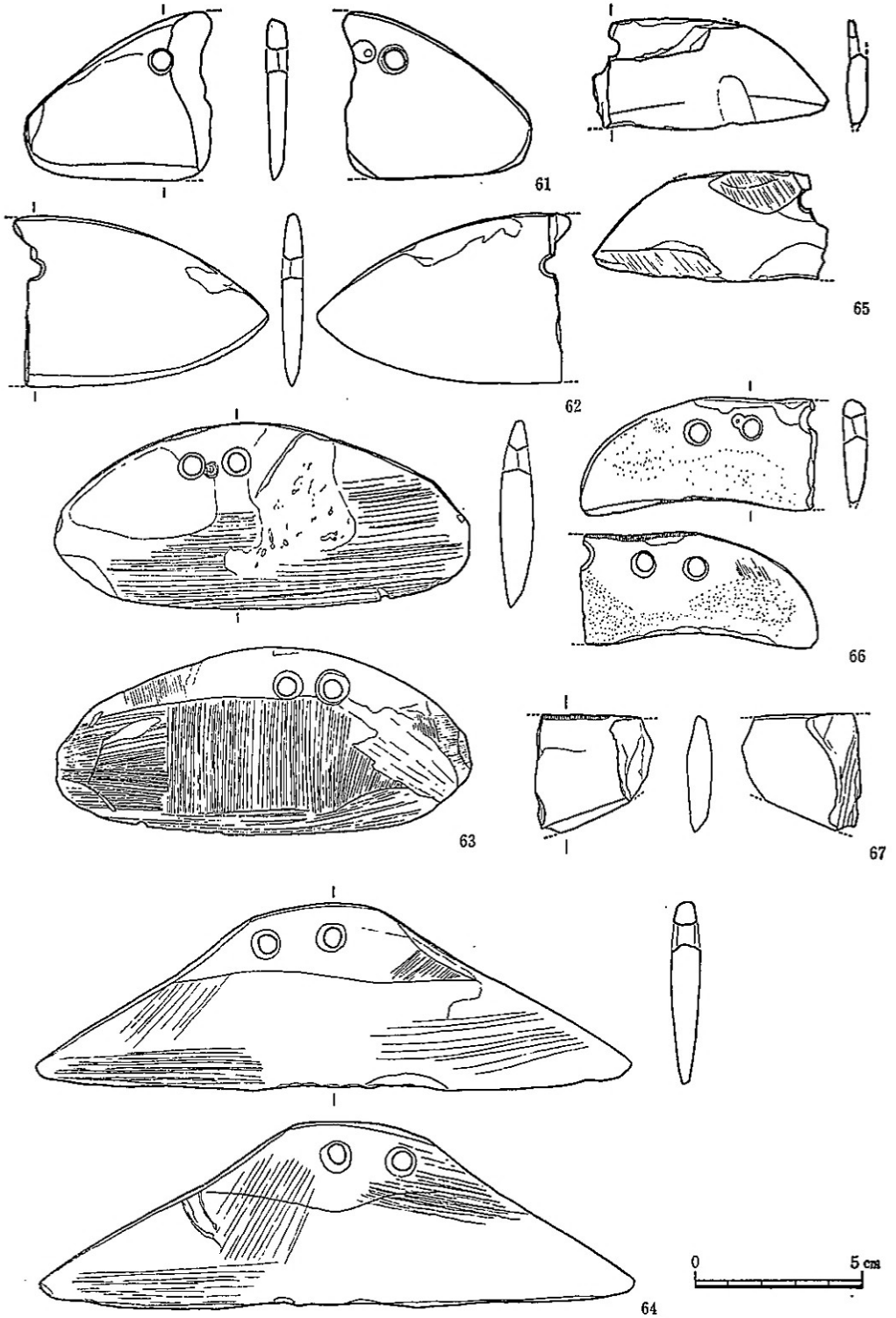
(83) は基部欠損するが、現存長4.8cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量4.7gを測る。(78・83)ともB面中央に大剝離面を残し、全体を両側辺から剝離調整する。(79・80・88)は断面菱形を呈し、両面とも両側辺から細かい剝離を加えたていねいなつくりで、(88)は中軸線に鑿が通る。(79・80)は両面とも中央に狭い大剝離面を残す。(89)は基部欠損するが、現存長6.3cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重量5.9gの大形の石鏃である。基部で最大厚を測り、先端に向って薄くなる。両面とも全体を両側辺から剝離調整する。一部に段階状剝離が混在する。(77・82)は円基無茎式で、(77)は長さ4.3cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重量3.3gを測り、(82)は長さ5.6cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm、重量8.3gの大形のものである。基部側辺に自然面がある。両者ともA面は両側辺から剝離調整し、中軸線上に鑿をもつ。B面は中央に大剝離面を残し、側辺を剝離調整する。(90・93・95・96・97)は凸基有茎式で逆刺に角をもつものである。(93)は長さ5.8cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm、重量0.6gを測る。(95)は現存長5.5cm、幅2.8cm、厚さ0.6cm、重量8.2gを測る。(96)は現存長5.3cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重量5.4gを測り、B面に大剝離面を残す。3個とも両側辺から剝離調整を施し、中軸線上に鑿をもつ。(91・92・94・98)は凸基有茎式で丸くなだらかなものである。(91)は逆刺がなだらかで挟りが浅い。(92)は基部の挟りが明瞭なもので、現存長4.4cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重量3.2gを測る。両面全体を両側辺から剝離調整し、鑿をつくる。(94)は長さ9.0cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm、重量8.5gを測る大形の石鏃で、両面とも両側辺からていねいに剝離調整を施す。

石槍(105・109・110・111・112・113・114・115・116・117・118) 欠損のため全体形が不明のものがほとんどである。(105・110・111・112・113・114・115・118)は細身のものである。(105)は基部片方側辺に挟りがあり、挟りの直上1.0cmに渡って刃をつぶしている。(115)は両面とも両側辺から剝離調整を施し、基辺に自然礫面を残すものである。(114)は長さ10.4cm、幅2.4cm、厚さ1.3cmを測り、断面はレンズ状を呈する。先端は欠損し、基部は欠損なのか打ち落としているのかは不明である。基部で最大厚を測り、先端に向って薄くなる。両面全体を両側辺から剝離調整する。剝離面は揃わず、下半部両側辺とも刃をつぶしている。(109・116・117)は幅広で大型のものであり、(116)は長さ15.3cm、幅4.1cm、厚さ1.1cmを測る平基式の石槍で基辺に自然礫面を残し、両面全体を粗く剝離調整している。

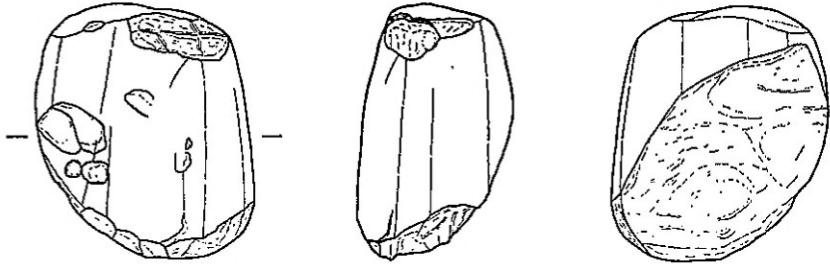
石錐(101・102・103・104・106・107・108) (101・104・105・106)は頭部と錐部の区別がはっきりしたものである。(101)は丸い頭部に杵状の錐部をもつ。現存長3.2cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm、錐径0.7×0.6cmを測る。(107)は現存長5.7cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm、錐長1.7cm、錐径0.9×0.5cmを測り、縦長の大型の頭部に先細りの錐部がつく。両者とも頭部中央に大剝離面を残し、周辺から剝離調整を加え、錐部には稜を形成する。(108)は現存長6.0cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm、錐長0.9cm、錐径1.1×0.6cmを測る。錐部下半部は欠損し、縦長の大型の頭部は両面とも剝離調整する。錐部は両側からわずかに挟りを入れてつくり出し、その断面は台形を呈する。(102・103・104・106)は頭部と錐部の区別が明確でないものである。(102)は長さ5.0cm、幅



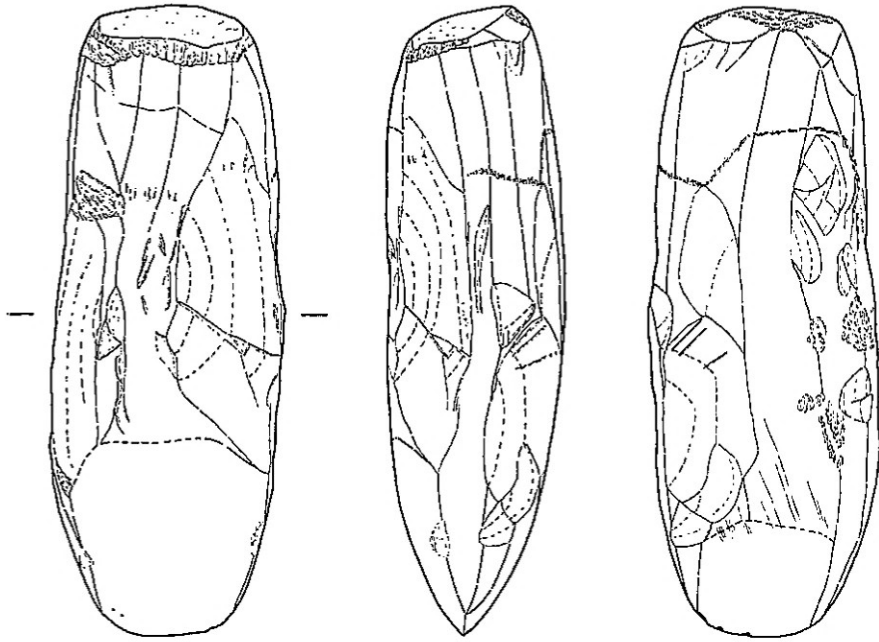
第252图 NR3001出土遗物实测图



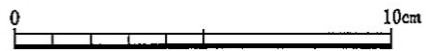
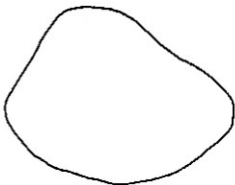
第253図 NR 3001出土遺物実測図



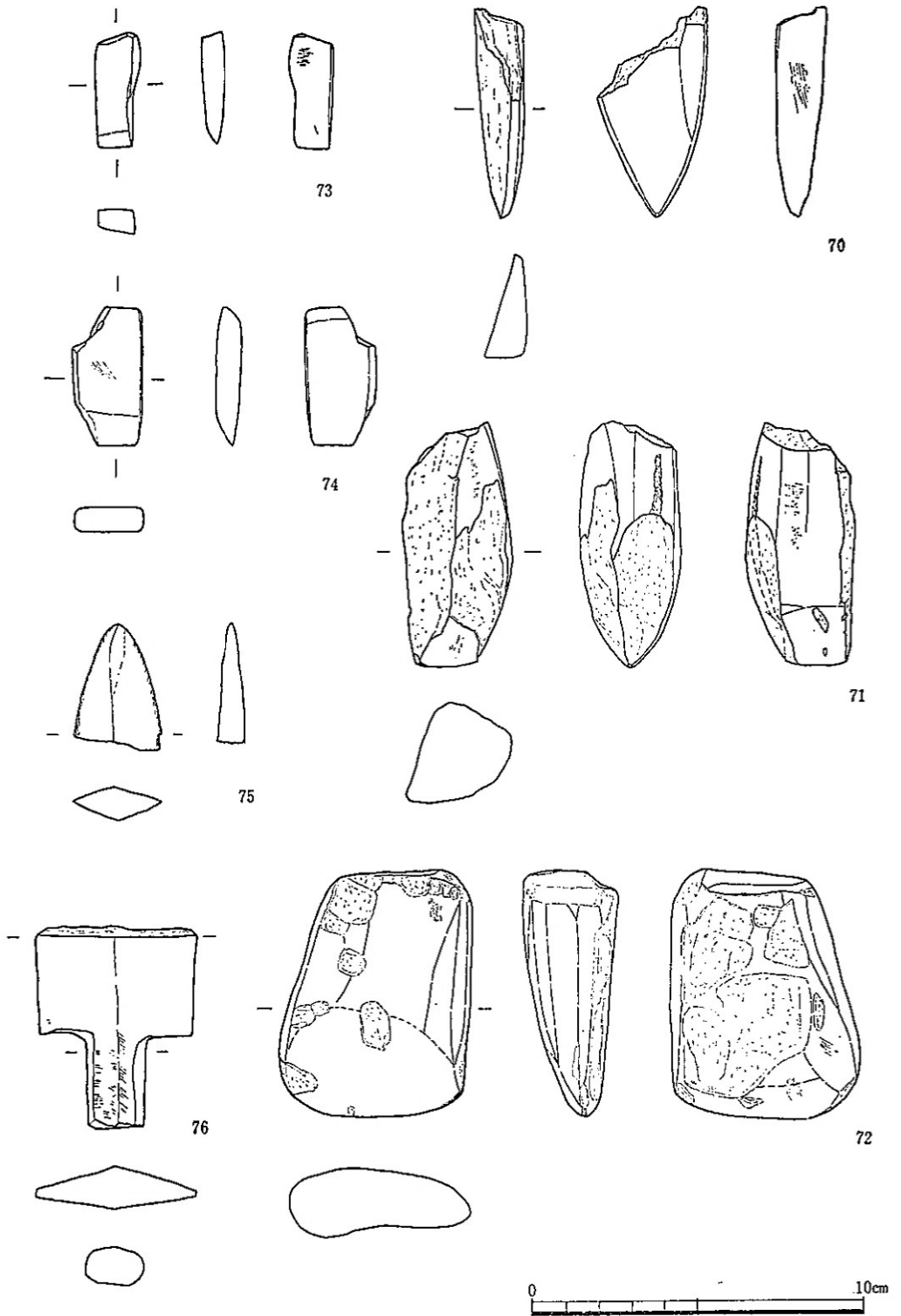
68



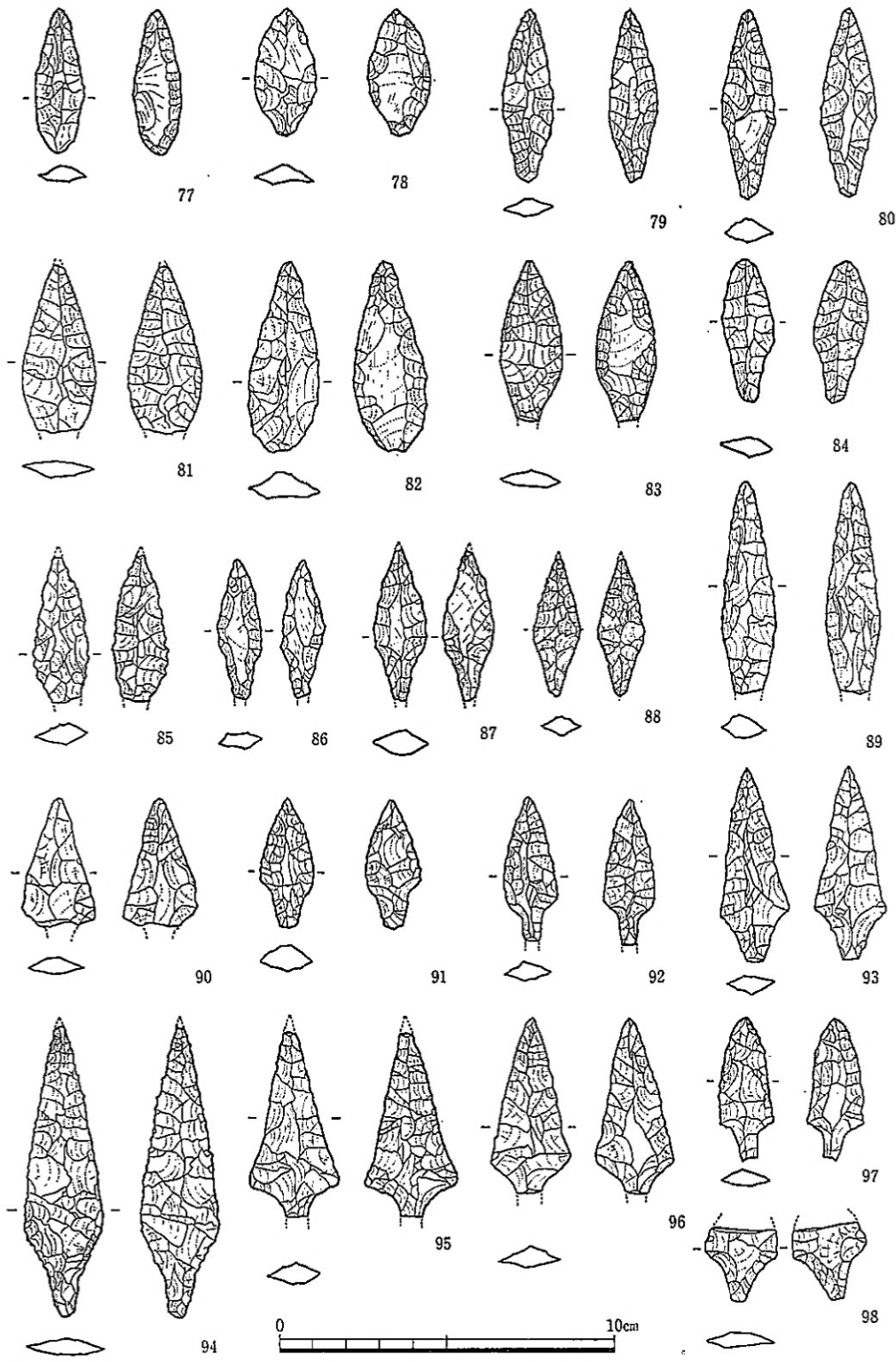
69



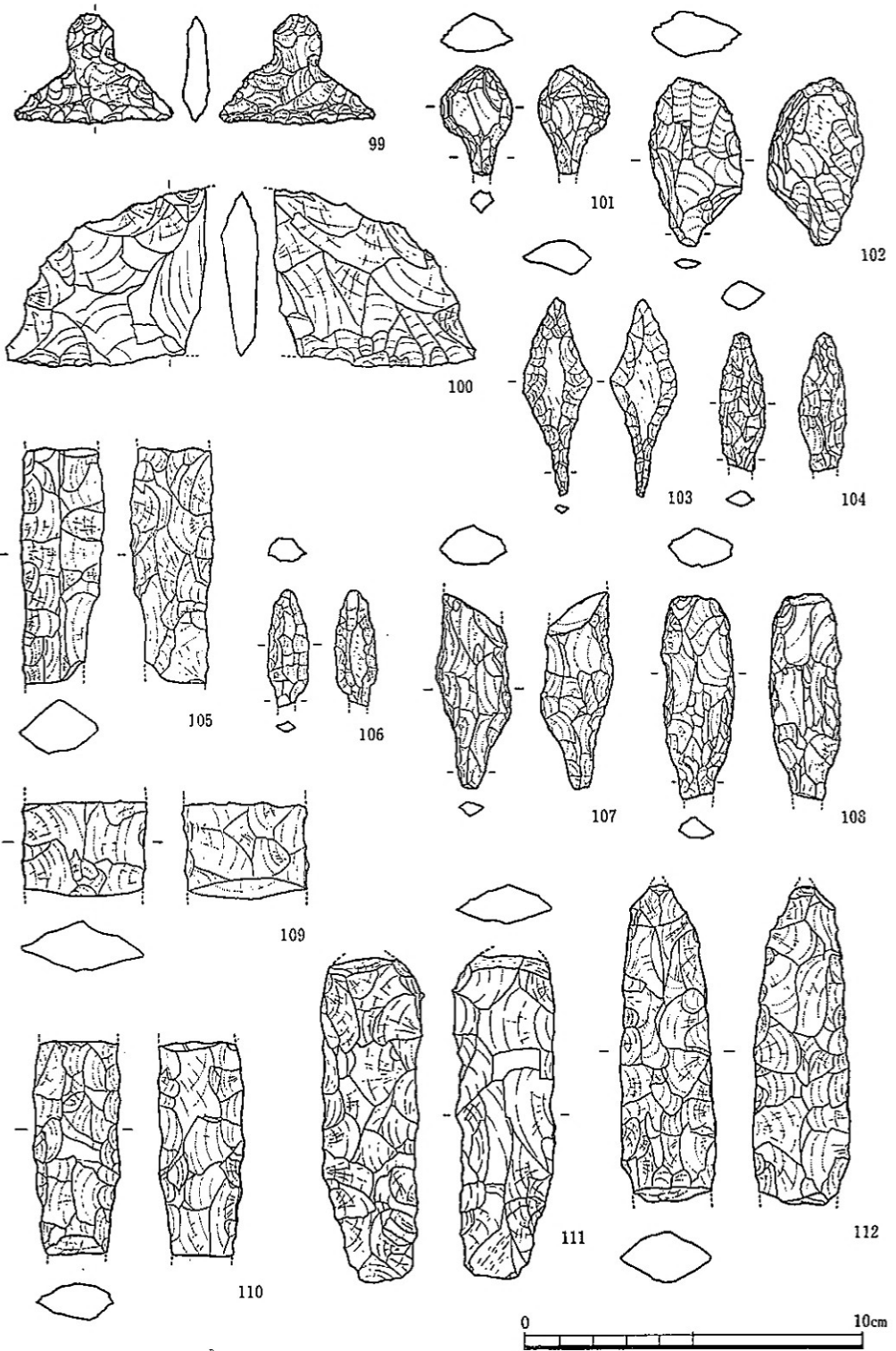
第254图 NR 3001出土遗物实测图



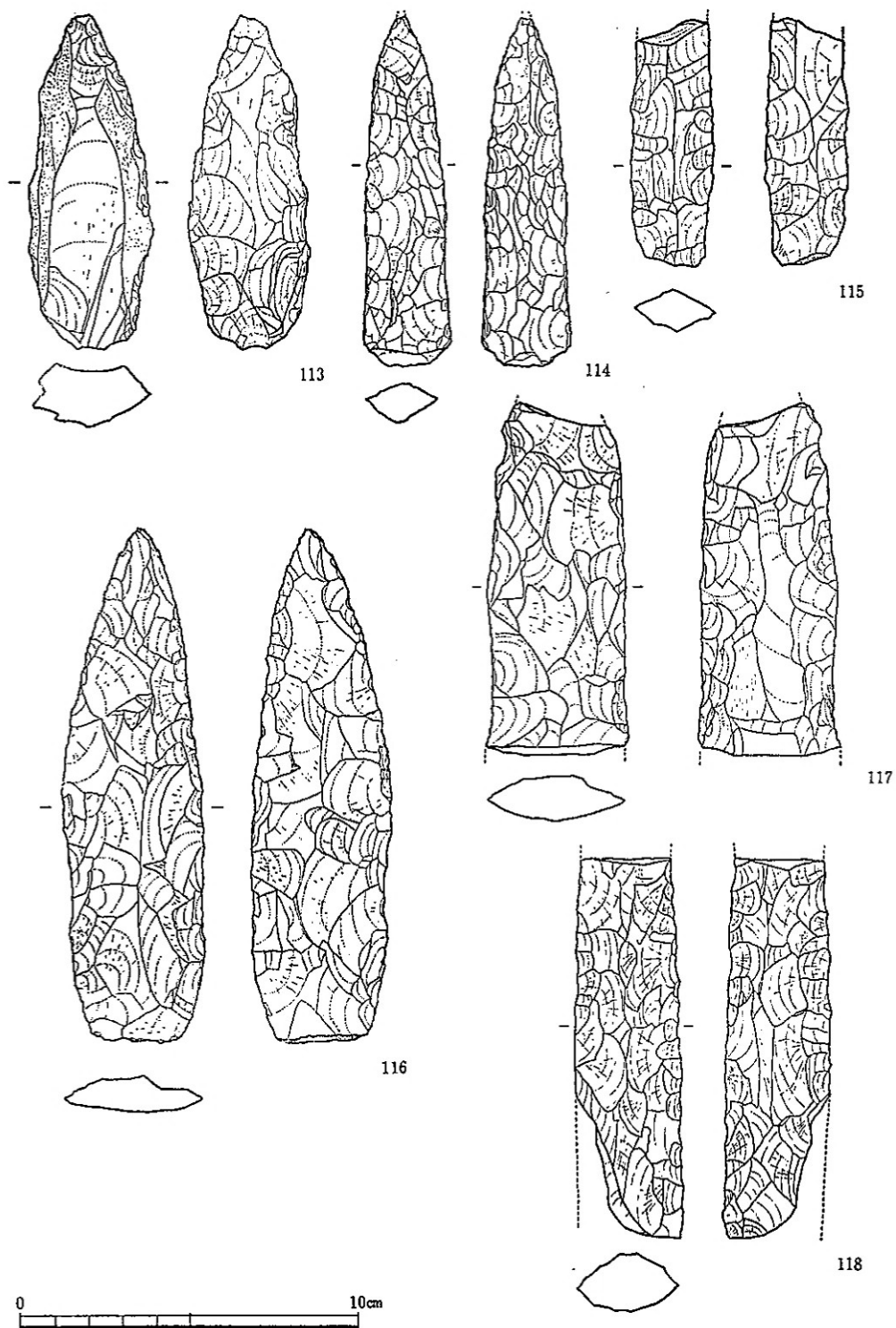
第255図 NR3001出土遺物実測図



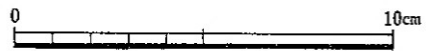
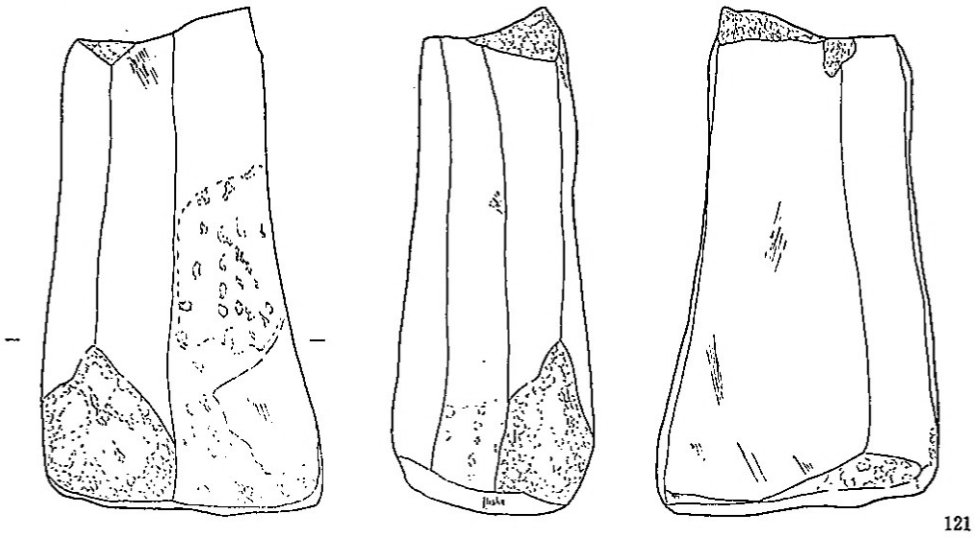
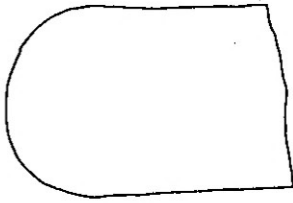
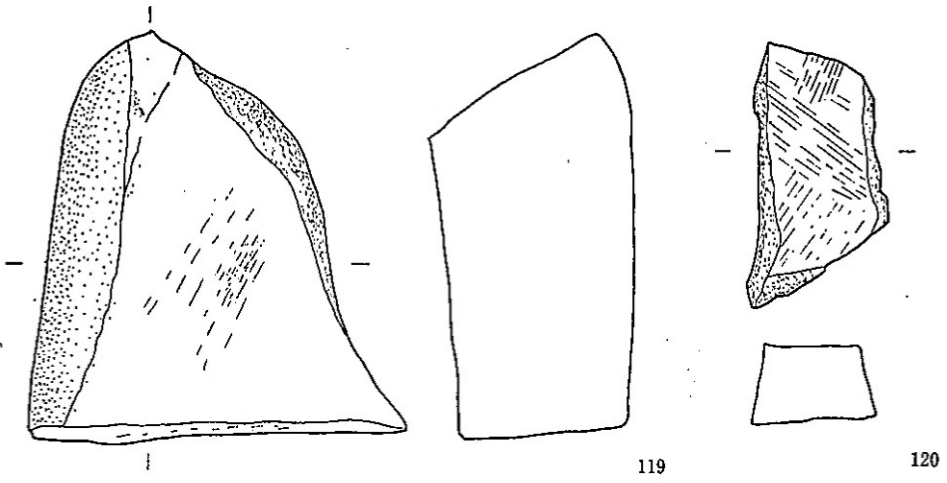
第256图 NR3001出土遺物実測図



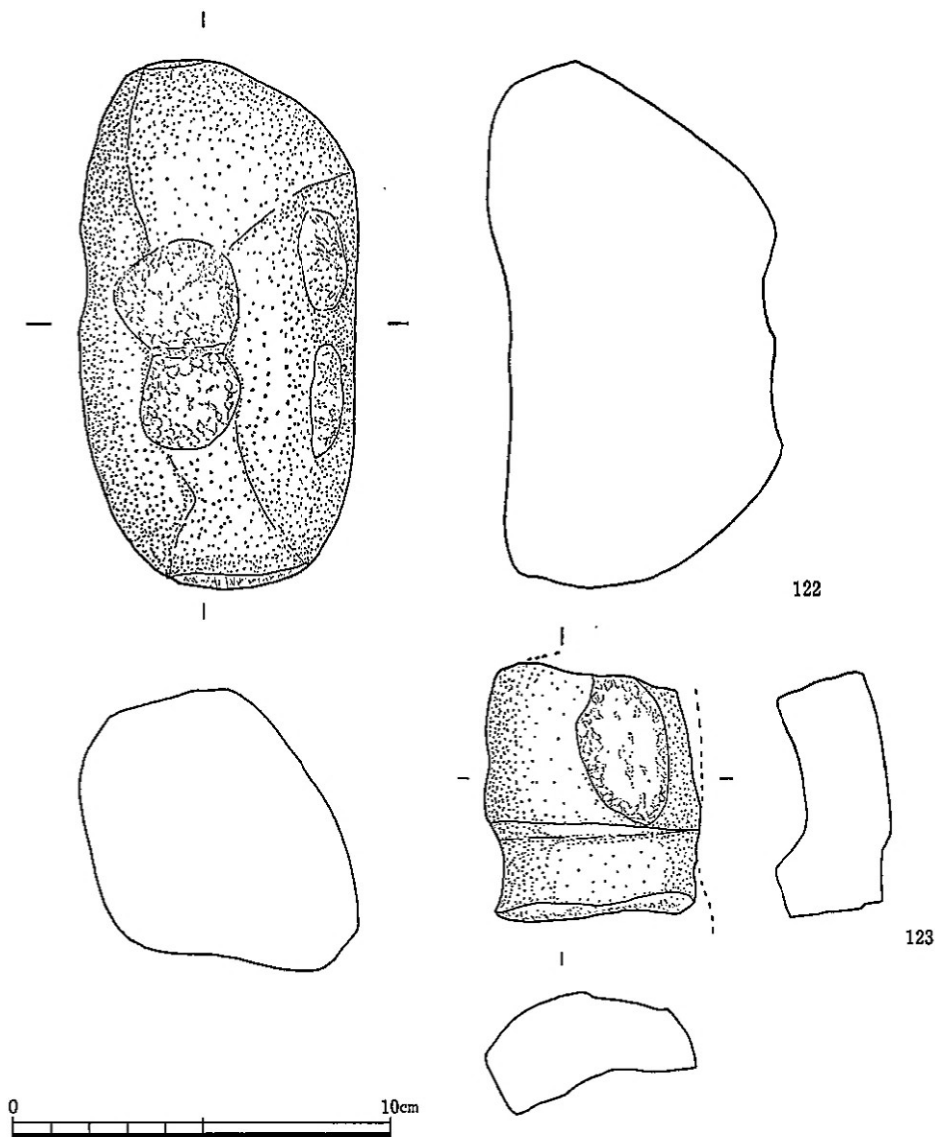
第257図 NR3001出土遺物実測図



第258图 NR3001出土遗物实测图



第259図 NR3001出土遺物実測図



第260図 NR3001出土遺物実測図

2.7cm、厚さ1.4cm、錐長0.7cm、錐径0.9×0.3cmを測る。楕円形の頭部下端に断面菱形の扁平な短い錐部がつく。A面は周辺から粗く剥離調整する。B面も全体を剥離調整し、左側辺は階段状を呈する。(104)は不整形な柳葉形の下端がそのまま錐部になるタイプである。現存長4.1cm、幅1.3cm、厚さ0.9cm、錐長0.7cm、錐径0.8×0.4cmを測る。頭部と錐部の区別が明確でない。両面とも剥離調整し、ほぼ中央にゆるやかな稜をなす。

石匙(99) 長さ4.7cm、幅3.2cm、厚さ0.7cmを測る。三角形の体部の上方に丸いつまみが付くタイプである。刃稜部はわずかに外彎する。全体を剥離調整し、体部とつまみの境に挟りを入れる。刃部に細かい剥離調整を施し、体部との境に稜をなす。

スクレイパー(100) 現存長5.6cm、幅5.0cm、厚さ1.1cmを測る。半分欠損する。刃部はほぼ

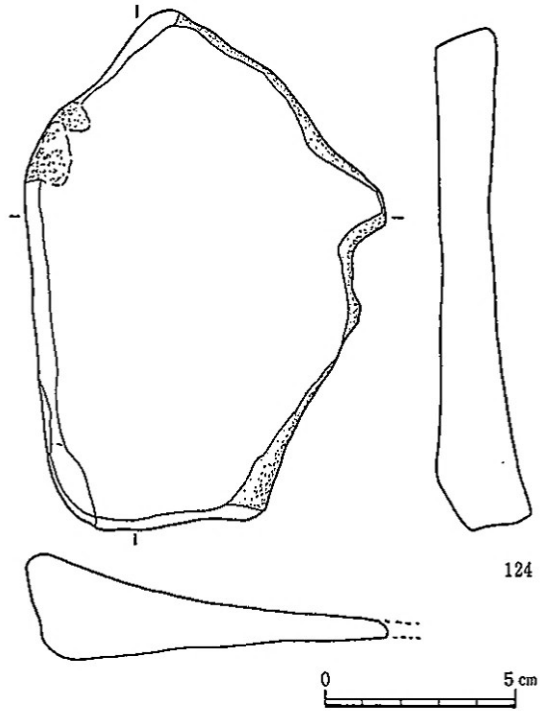
直線であるが、中央部でやや内彎する。背部は外彎する。断面は刃部に向かって薄くなる。全体を粗く整形した後、刃部の片面に剝離調整を施す。

砥石 (119・120・121・124) (119) は火を受けた砂岩を転用した砥石である。砂岩のもとの形態、使用目的は不明である。使用面は3面で、1面は少し利用しただけである。また、未使用面は丸みをもつ。残存長11.0cm、幅10.0cm、厚さ5.4cmを測る。(120)の元来の形態は不明である。1面だけ利用されており、2方向の擦痕がある。残存長7.0cm、幅3.6cm、厚さ2.1cmを各々測る。石質は和泉砂岩である。(121)も火を受けた砂岩を転用した砥石である。もとの使用目的、形態は不明である。一部欠損しているが、使用面は6面である。残存長13.4cm、幅7.4cm、最小幅4.5cmを測る。石質は細粒の和泉砂岩である。(124)は不整な四辺形を呈し、使用面は7面となっている。中央部が著しく窪み、その部分から欠損している。残存長9.5cm、最大厚3.8cm、最小厚0.5cmを測る。石質は細粒の和泉砂岩である。

敲石 (122) 河原石の長軸両端を利用している。両端に敲打痕がみられる。全長14.0cm、幅7.3cm、厚さ7.3cmを測る。石質は和泉砂岩である。

石槌 (123) 現存長7.0cm、幅5.0cmを測る。溝が巡る中央部の一部分しか残存していない。表面は粗い研磨が施してある。石質は和泉砂岩である。

紡錘車 (34) (34) は石製で、直径4.0cm、厚さ0.4cm、重量は10.7gである。周縁はていねいに研磨する。中心の穴は当初錐で両面から穿孔しているが、後にわずかにずらして打ち欠きによる穿孔を加えている。そのため穴は0.8×1.2cmの長円形を呈している。石質は緑色片岩。石庖丁転用と考えられる。

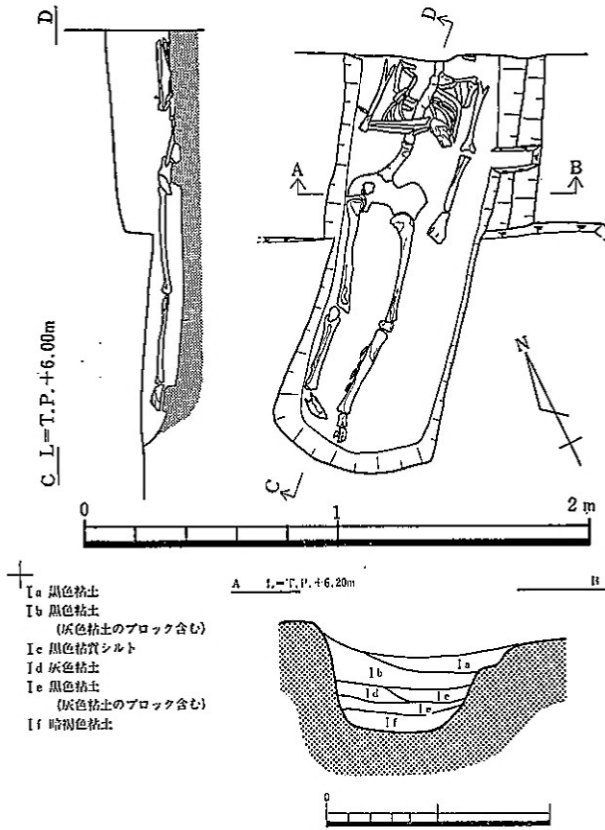


第261図 NR3001出土遺物実測図

4 土墳墓

SX3005 (第262図) K-2区で検出された土墳墓である。第Ⅴa層上面で検出され、掘方は平面形が長方形を呈し、幅0.8m、長さは調査区外へ続き明確にはし得ないが、現存長1.7m、深さ0.4m、主軸方向N-45°-Eである。頭蓋骨は調査区外で欠いているが、他の骨はよく遺存しており伸展葬と考えられるが、右前腕骨が肋骨の上にある状態で出土しており、他の骨があまり動いていないところから、おそらく埋葬された時点で曲がっていたと考えられる。

副葬品らしきものは検出されず、わずかに土器細片の出土をみたにとどまる。



第262図 SX3005遺構平面図及び土層断面図

第5節 弥生時代遺物包含層

第Ⅴ層弥生時代遺物包含層(以下Ⅴ層と記す。)はNR3001・NR9001によって流失した範囲を除いては層厚0.5~0.8mで調査区全域に普遍的に存在している。基本的には4層に分層する事ができ、また各層上面及び層中から遺構が検出された事によって、これまでの試掘調査において「2次堆積層」とされていたⅤ層中にも、少なくとも4期の遺構面が存在する事が明らかになった。各層については既に第Ⅳ章第2節で述べており、これと若干重複するが、ここでは更に各層の堆積状況や遺構・遺物の出土状況の検討を行ない、各層の年代について考えてみたい。

層中からは、前期から後期までの遺物が混在して出土している事から、任意に地区を選出し、各層において時期の異なる遺物がどのような割合で出土するかを調べてみた。資料としては、土器を採用したが破片の為、細かな時期の検討は行なわなかった。また完形品・ほぼ完形に復元できる同一個体の破片は除外した。総数723点である(第2表)。選出した地区は、J-4区・K-6区、H-13・14区、H-15・16区である。

1 各層出土土器

a K a層出土土器(第263図1～第265図31)

壺形土器(1～10) (2・9・10)はK a層上面より出土した。(1～5)は、大きく外反する口頸部片で、端部は粘土帯を貼りつけ下方へ拡張している。(1・2)は、更に粘土を充填して肥厚した口縁部に成形している。(3・4)は、口縁部・頸部に簾状文を施し、(4)は、更に口縁端部に刻み目文を施している。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整である。(1)の内面は更に横方向のナデ調整を行なっている。(6)は、外反気味に立ち上がる頸部片である。体部との境には断面三角形の突帯をめぐらす。内外面ともナデ調整である。(7)は、直立する短い頸部にはほぼ直角に屈曲する口縁部を有する破片である。口唇部は上方へつまみだし、口縁部外面に凹線文を2条施している。(8)は、外傾して立ち上がる短い頸部片である。口唇部は断面四角形に成形している。(9・10)は、ほぼ球形な体部から外傾気味に直立する短い頸部に外反する口縁部を有する。端部は、粘土帯を貼りつけて下方へ拡張した後更に粘土を充填して肥厚させている。(9)の口縁部外面には5条の線刻が見られる。(10)の口縁部内面には、動物のものと思われる爪跡が見られる。(9)は外面ヘラミガキ調整、内面ハケメ調整、(10)は外面ヘラミガキ調整、内面ハケメ調整の後ナデ調整である。(9)は、口縁部径16.0cm・器高33.6cm、(10)は、口縁部径16.5cm・器高35.3cm。

長頸壺形土器(11・12) (11)は扁平な体部で、口唇部は断面四角形に成形している。口縁部はヨコナデ調整・頸部・体部はヘラミガキ調整、内面はナデ調整である。体部下半には、部分的にタタキメが残る。口縁部径12.2cm・頸部高13.5cm・器高28.0cmを測る。(12)は球形の体部で、口縁部はわずかに外反しており器壁も薄い。口唇部は丸くおさめ断面円頭状を呈する。底部はドーナツ状上げ底である。頸部・体部は内外面ともハケメ調整で、口縁部・体部との境・底部はヨコナデ調整である。口縁部径12.2cm・頸部高13.5cm・器高28.0cm。

無頸壺形土器(22) 腰部より内彎して立ち上がる体部の端部を上方へわずかにつまみだしている。内外面ナデ調整である。

甕形土器(13～21) (20・21)はK a層上面より出土した。(13)は、ゆるやかに外反する口縁部片、口唇部は断面四角形を呈する。内面はナデ調整である。(14)は、ゆるやかに外反する口縁部の破片である。口唇部は外方へつまみだしている。内外面ナデ調整である。(15～19)は、「く」の字に外傾する口縁部の破片である。(15～17)は口唇部を上下方向につまみだし断面四角形を呈する。(15～20)は、内面体部との境に明瞭な稜を持つ。(15・17)は内外面ナデ調整、(16・18)は外面ナデ調整・内面ハケメ調整、(19)は内外面ハケメ調整である。(20)は、ゆるやかに外反する口縁部を有するものである。内外面ナデ調整である。口縁部径10.8cm・器高11.5cmを測る。(21)は、体部上半に最大径を持つ胴長の体部に、ほぼ直角に屈曲する口縁部を有するものである。口唇部は断面四角形を呈する。外面はハケメ調整の後、体部下半をナデ調整、内面はハケメ調整の後、体部上半をナデ調整している。外面には体部上半より頸部にか

て煤が付着している。口縁部径15.2cm・器高20.4cmを測る。

鉢形土器 (23・24) (23) は、内彎気味に立ち上がる体部から直立する口縁部の破片である。体部外面は横方向のヘラミガキ調整、体部内面ナデ調整である。(24) は、内彎気味に立ち上がる体部からゆるやかに外傾する口縁部の破片である。内面には体部との境に明瞭な稜を持つ、口唇部は断面四角形を呈する。内外面ともヘラミガキ調整である。

高杯形土器 (25~31) (25) は、受部から直立する口縁部を持つ杯部の破片である。口唇部は外方向へ若干つまみだされ、断面四角形を呈する。口縁部はヨコナデ調整、受部は外面ヘラミガキ調整、内面ハケメ調整である。(26・27) は、杯底部より円錐状に広く脚部の破片である。

(26) は中空、(27) も中空で裾部に透し孔が穿孔されている。外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。(28・31) は、中空の円筒状の脚部の破片である。(28) の裾部は外反し、端部は上方へつまみだしている。(31) は、裾部に透し孔が穿孔されている。(31) は外面ヘラミガキ調整、内面は脚部ナデ調整、裾部ハケメ調整である。(29) は、外反気味に広がる脚部の破片である。裾端部は外方へつまみだして拡張している。外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。

(30) は、内彎気味に外方に広がる脚部の破片である。裾端部には凹線文を2条施している。外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。

b Ⅱb層出土土器 (第265図32~第266図49)

壺形土器 (32~38) (32・33・35) は、大きく外反する口頸部の破片である。端部に粘土を貼りつけ下方へ拡張し、断面三角形を呈する。(33) は更に粘土を充填している。(32) は、口縁部外面に波状文、口縁端部内面に櫛状工具による刺突文を施す。(33) の口縁部外面には刺突文を、(35) の口縁端部には刻目文を施している。(36) は、体部上半に最大径を持つ胴長の体部に、直立する短い口頸部を有する器形である。口縁端部には浅い凹線文を3条施している。外面ハケメ調整の後、部分的にナデ調整、内面ナデ調整である。(38) は若干胴長の球形の体部から直立する短い口頸部を有する器形である。底部から体部下半にかけては2次的に火を受けており、体部中央には煤が付着している。外面ハケメ調整、内面ナデ調整である。調整は全体に粗雑である。口縁部径8.7cm・器高18.5cmを測る。(34・37) は、直立する短い頸部から外反する口縁部の破片である。(34) は、口唇部を上下方向につまみだしている。頸部は、外面ハケメ調整・内面ナデ調整である。(37) は、頸部に、波状文・直線文を施している。外面はナデ調整、内面はハケメ調整の後ナデ調整である。

甕形土器 (42~44) (42) は、頸部からほぼ直角に屈曲する口縁部の破片である。口唇部は丸くおさめられ断面円頭状を呈する。口縁部に最大径を持つ。器壁の摩滅が著しく調整等は不明である。(43) は、「く」の字に外反する口縁部の破片である。口唇部は、上下方向につまみだしている。体部は、外面ハケメ調整、内面ナデ調整である。(44) は、やや胴長の球形の体部から「く」の字に外反する口縁部の破片である。口唇部は断面四角形を呈する。内面には体部との境に明瞭な稜を持つ。外面は、体部上半が横方向、体部下半が右上がりのタタキメが見られる。

内面はハケメ調整である。

ミニチュア土器 (39~41) (39~41) は、手捏ね土器である。(39) は、厚く突出した底部から内彎気味に立ち上がる体部に「く」の字につまみだした口縁部を有する。口縁部径4.80cm、器高7.0cmを測る。(40) は、やや内傾する口縁部を有する。平底の底部から体部にかけては器壁は0.8cmで一定しているが、口縁部は0.4cmと薄い。口縁部径5.0cm、器高6.0cmを測る。(41) は、器高に比して幅の広い外傾する口縁部を有する。体部との境には段がつく。口縁部径8.0cm、器高10.2cmを測る。(39・40) は、内外面ナデ調整、(41) は内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。

鉢形土器 (45・46) (45) は、内彎気味に立ち上がる体部から肥厚した口縁部の破片である。口唇部は、内方へつまみだしている。外面には断面三角形の突帯をめぐらす。外面には波状文を施しているが、器壁の摩滅が著しく全容は不明である。(46) は、腰部より直立する肥厚した口縁部の破片である。口唇部は、内外方向へわずかにつまみだしている。腰部は丸みを持ち不明瞭である。口縁部外面には波状文を施している。内外面ともヘラミガキ調整である。

高杯形土器 (48・49) (48) は、円錐状に開く脚部の破片である。裾部は外方へわずかに開き、端部は断面尖頭形を呈する。裾部はヨコナデ調整、外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。(49) は、内彎気味に開く脚部の破片である。端部には深い凹線文を5条施している。凹線文様帯の上には、2段に透し孔を穿孔している。外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。

無頸壺形土器 (46) 腰部より内彎して立ち上がる体部の端部を上方へわずかにつまみ上げた口縁部を有する。体部との境には、2個一対の紐孔が穿孔されている。器壁の摩滅が著しく調整等は不明である。

c Ⅱc層出土遺物 (第266図50~第271図94)

壺形土器 (50~54・56・58~62・87・88) (50~52・88) は、大きく外反する口頸部の破片である。端部は粘土帯を貼りつけ下方へ拡張し、粘土を充填し肥厚している。口縁部外面・頸部には簾状文を施し、(51)・(52)の口縁部外面には更に刺突文を施している。(88) は、内面口縁端部に円形浮文を施している。(54) は、ゆるやかに外反する口縁部の破片である。体部との境は不明瞭である。外面は、ヘラケズリの後ナデ調整、内面ヘラミガキ調整である。(56) は、外反する頸部からほぼ直角に屈曲する口縁部の破片である。口唇部は上下方向につまみだして拡張し、断面「T」字形を呈する。口縁部外面に波状文、内面口縁端部には、櫛状工具による刺突文を施す。(58~62) は、胴長の体部に、短い頸部を有するものである。(58) は、体部との境が不明瞭で、頸部は直立する。肩部に、篋状工具による3条の線刻が見られる。内外面ナデ調整である。口縁部径11.5cm、器高25.3cmを測る。(59) は体部との境に篋状工具による刻目文を施している。口縁部は内外面ヘラミガキ調整、体部は外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。

(60)の頸部にも篋状工具による平行する4条の線刻が見られる。口縁部径13.0cm、器高36.5cmを測る。(61) は、外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。口縁部径16.0cm、器高29.4cmを測る。(62) は、頸部に竹管文、体部との境に、篋状工具による刺突文を施している。内外面と

外面は、口縁部～頸部に櫛状工具による列点文、体部上半は簾状文を施す。体部下半ヘラミガキ調整、脚部ハケメ調整である。内面は、口頸部～体部上半ナデ調整、体部下半ハケメ調整である。裾部は内外面ヨコナデ調整である。

d Ⅱ d層出土土器（第271図95～第272図107）

壺形土器（95～97）（95）は、扁平な球形の体部より直立する太い筒状の頸部から大きく外反する口縁部を有する器形である。口唇部は断面四角形に成形されている。頸部外面には、ハケメ調整の後、直線文を施している。外面は、口縁部、体部上半ヘラミガキ調整、内面は、口縁部ヘラミガキ調整、頸部ヘラケズリ調整である。内面体部との境には指頭圧痕が見られる。口縁部径18.8cm、器高27.4cmを測る。（96）は、体部より内彎して立ち上がる口頸部の破片である。口唇部は面取りされ断面四角形を呈する。体部との境いには浅い凹線文、口頸部には簾状文、直線文、波状文を施している。内面は口縁部ヨコナデ調整、外面ハケメ調整である。（97）は、外傾して立ち上がる短い頸部から外反する口縁部の破片である。口唇部は、上下方向へつまみだしている。頸部に凹線文を施す。体部上半は内外面ハケメ調整である。

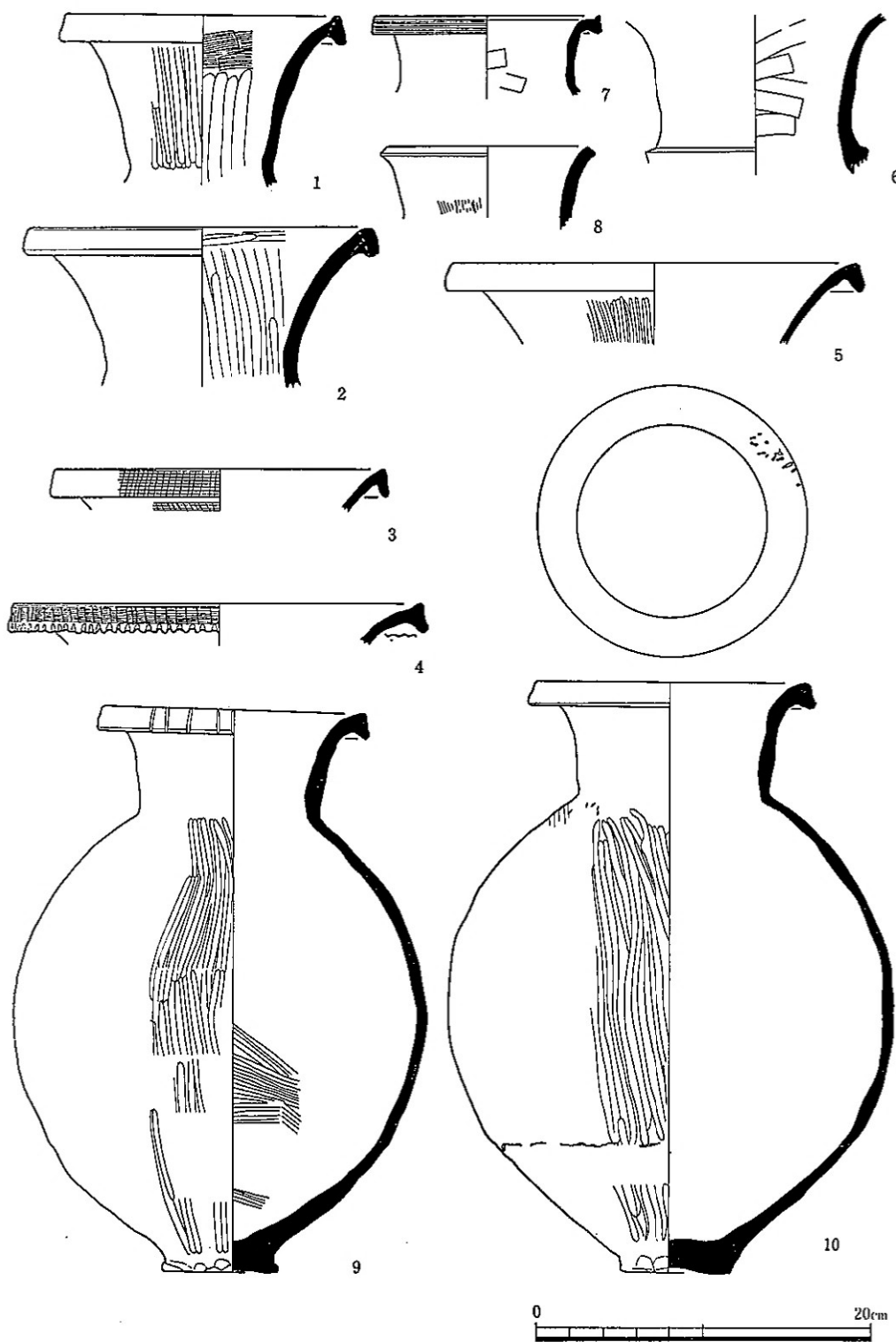
小型壺形土器（98） 腰部より内湾しながら立ち上がる体部から外反する口縁部の破片である。口唇部は粘土帯を貼りつけ外方へつまみだしている。頸部には相対する2個の孔が穿たれている。口頸部は内外面ナデ調整、体部は、外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。

甕形土器（99・100・102～105）（99・103）は、「く」の字に外反する短くつまみだして成形する口縁部の破片である。口唇部は断面尖頭状を呈する。外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。（100）は、ほぼ直角に外反する口縁部の破片で、最大径を口縁部に持つ。口頸部は、器壁が厚い。器壁の摩滅が著しく調整等は明らかでない。（102）は、「く」の字に外傾する口縁部の破片で、口唇部は上方へわずかにつまみだしている。外面ヘラミガキ調整、内面ナデ調整である。（104）は、「く」の字に外反する口縁部の破片で、最大径を口縁部に持つ。口唇部は上下方向へわずかにつまみだし断面四角形を呈する。内外面ハケメ調整である。（105）は、ゆるやかに外反する口縁部の破片である。口唇部は上下方向へつまみだし断面「T」字形を呈する、内外面とも荒いハケメ調整である。

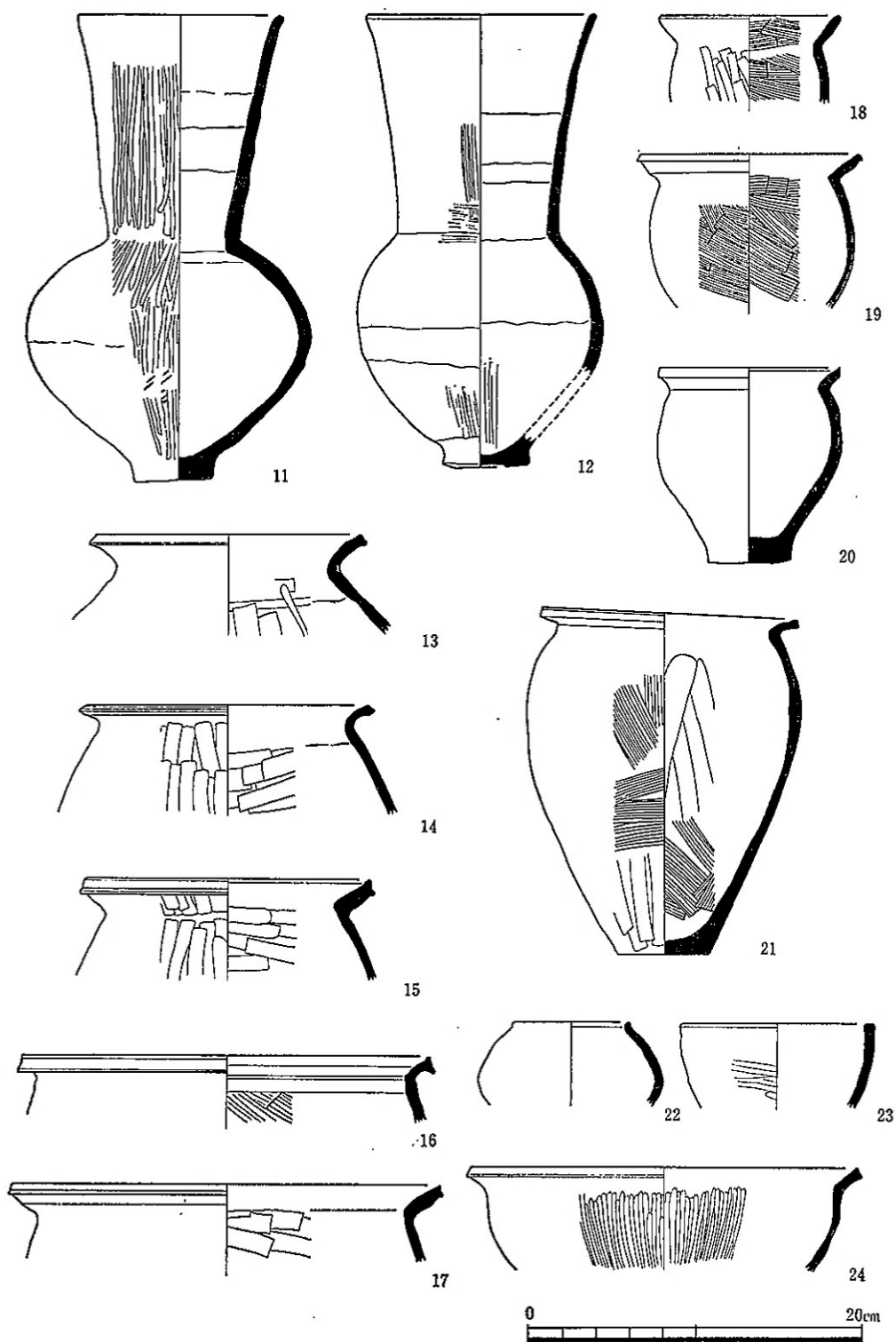
小型鉢形土器（101） 手捏ねである。端部が外方へ突出した厚い底部から、外傾する体部を持つ器形である。口縁部径7.2cm・器高5.2cmを測る。

鉢形土器（106） 内彎気味に立ち上がる体部から、口唇部を内外方向へつまみだした断面「T」字形を呈する破片である。外面は、体部上半ハケメ調整、体部下半ヘラミガキ調整、内面は、ナデ調整である。

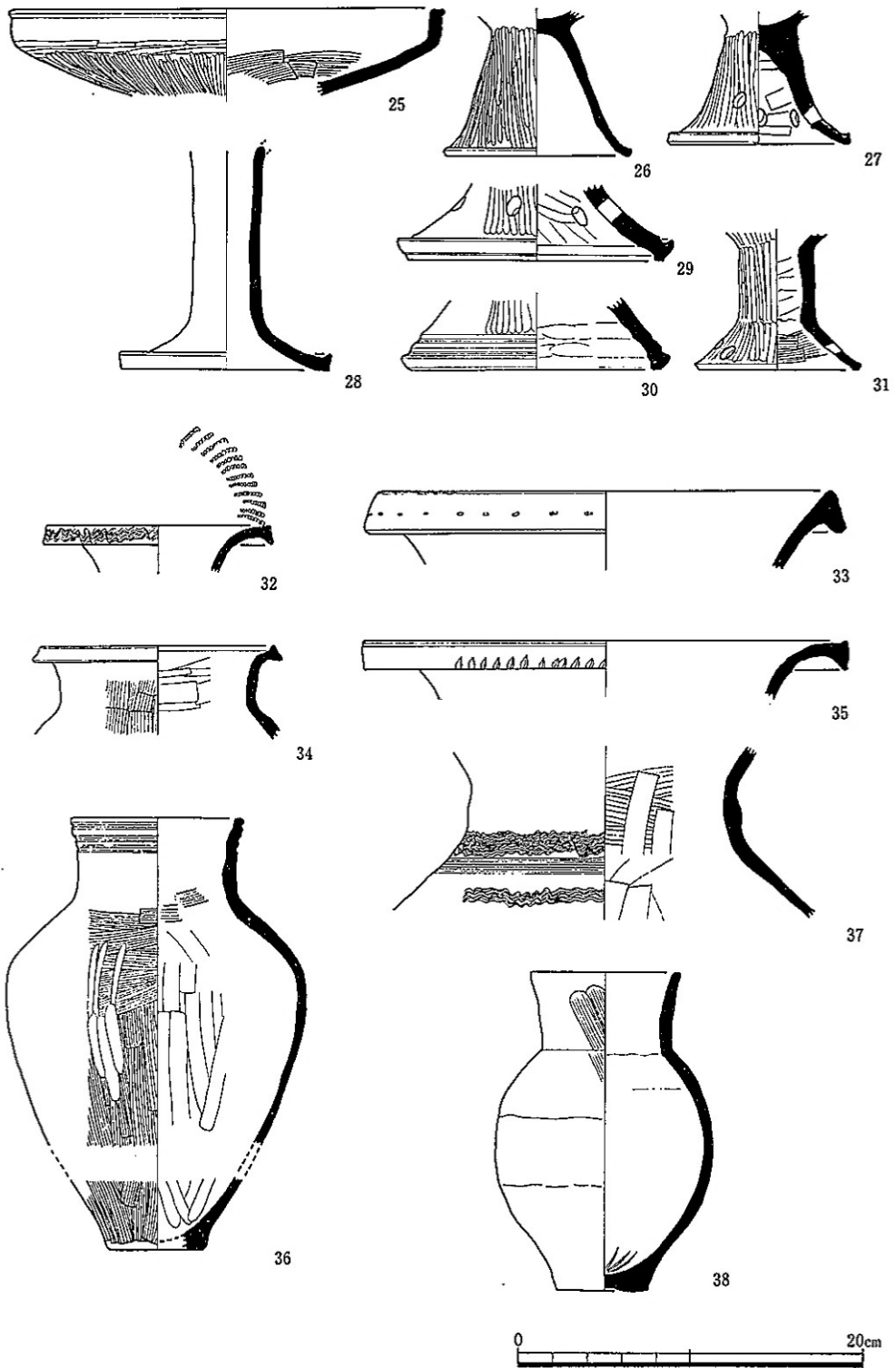
高杯形土器（107） 杯部のみの破片である。水平口縁の端部に粘土帯を貼りつけ下方へ拡張した口縁部をつくる。内面には、断面三角形の突帯を付加する。水平口縁外面には斜格子文を施す。杯部は、外面ヘラミガキ調整、内面暗文状のヘラミガキ調整である。



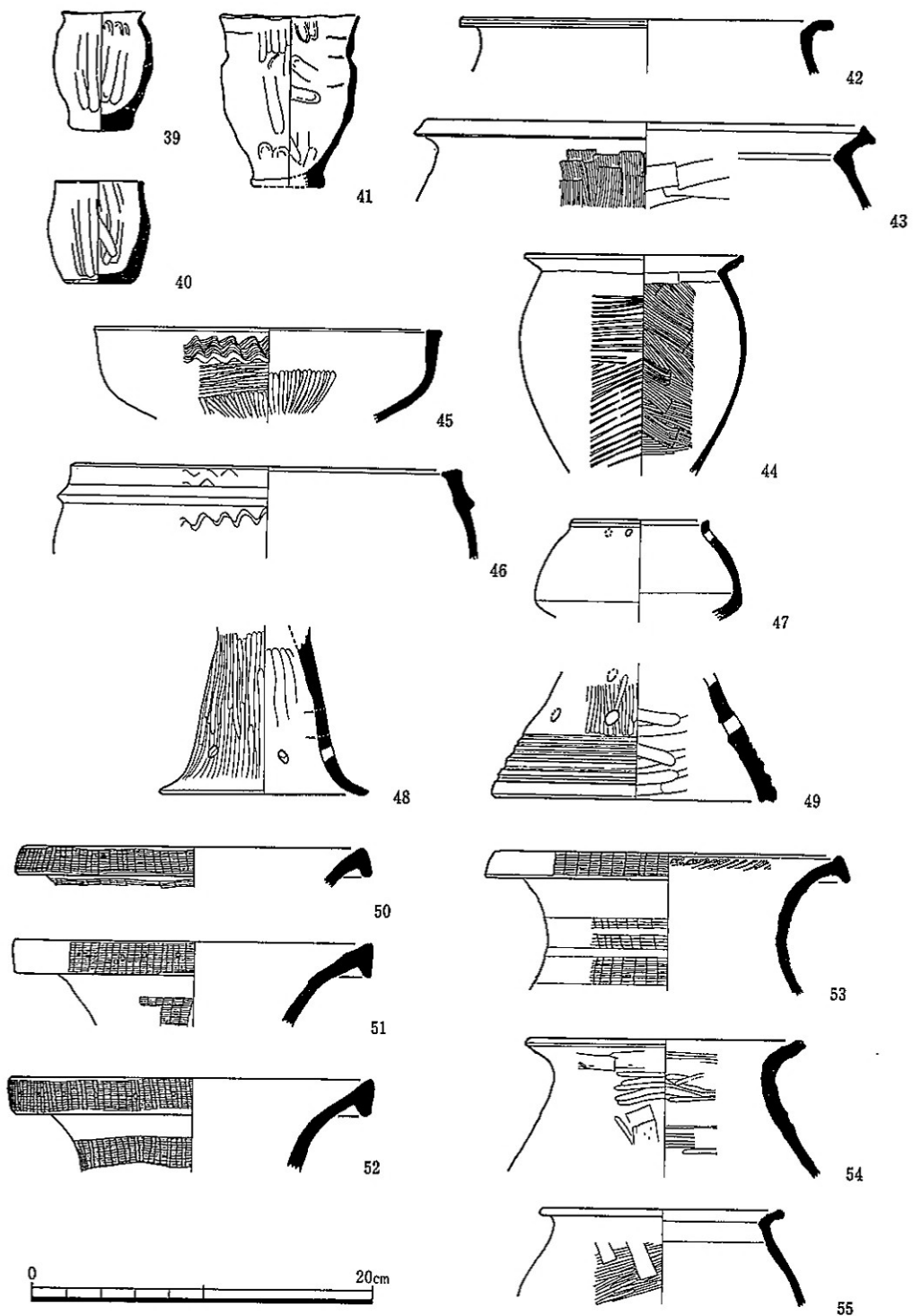
第263図 第IX層出土遺物実測図



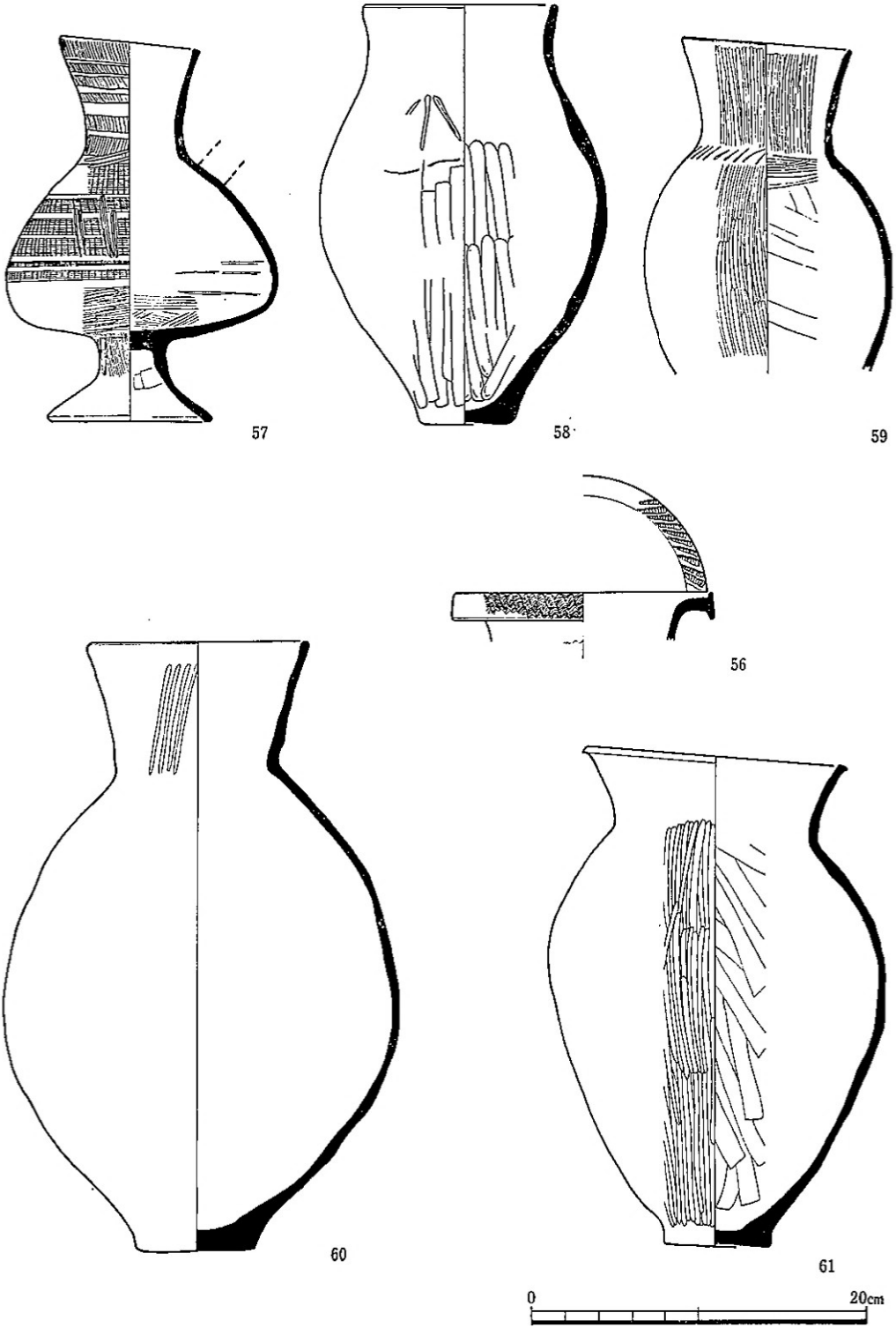
第264图 第Ⅸ层出土遗物实测图



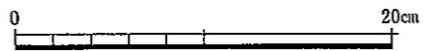
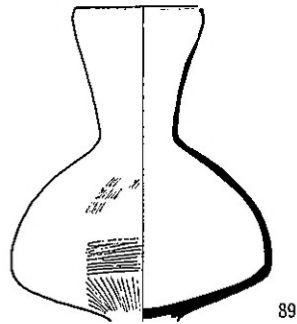
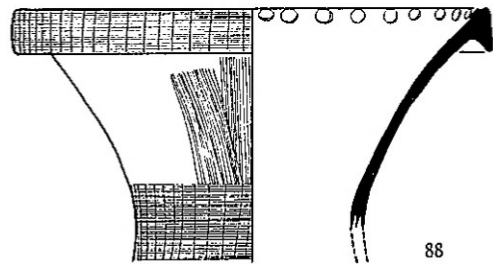
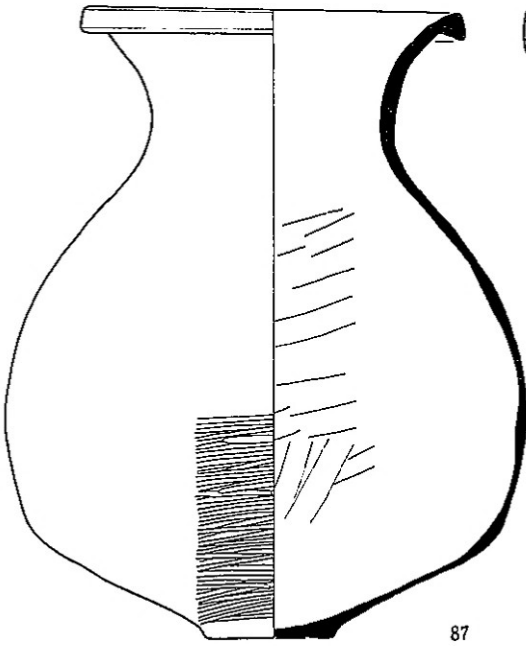
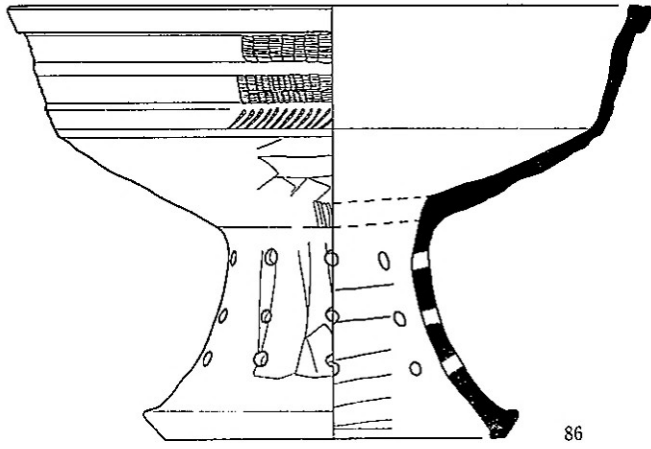
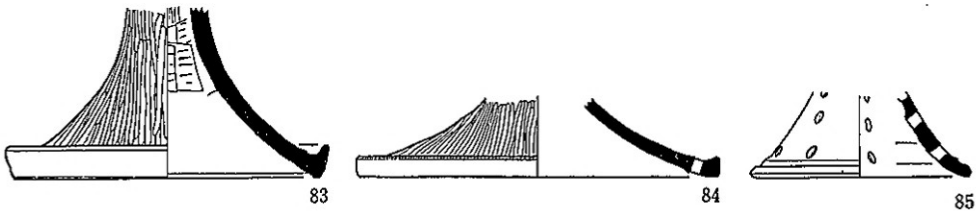
第285図 第IX層出土遺物実測図



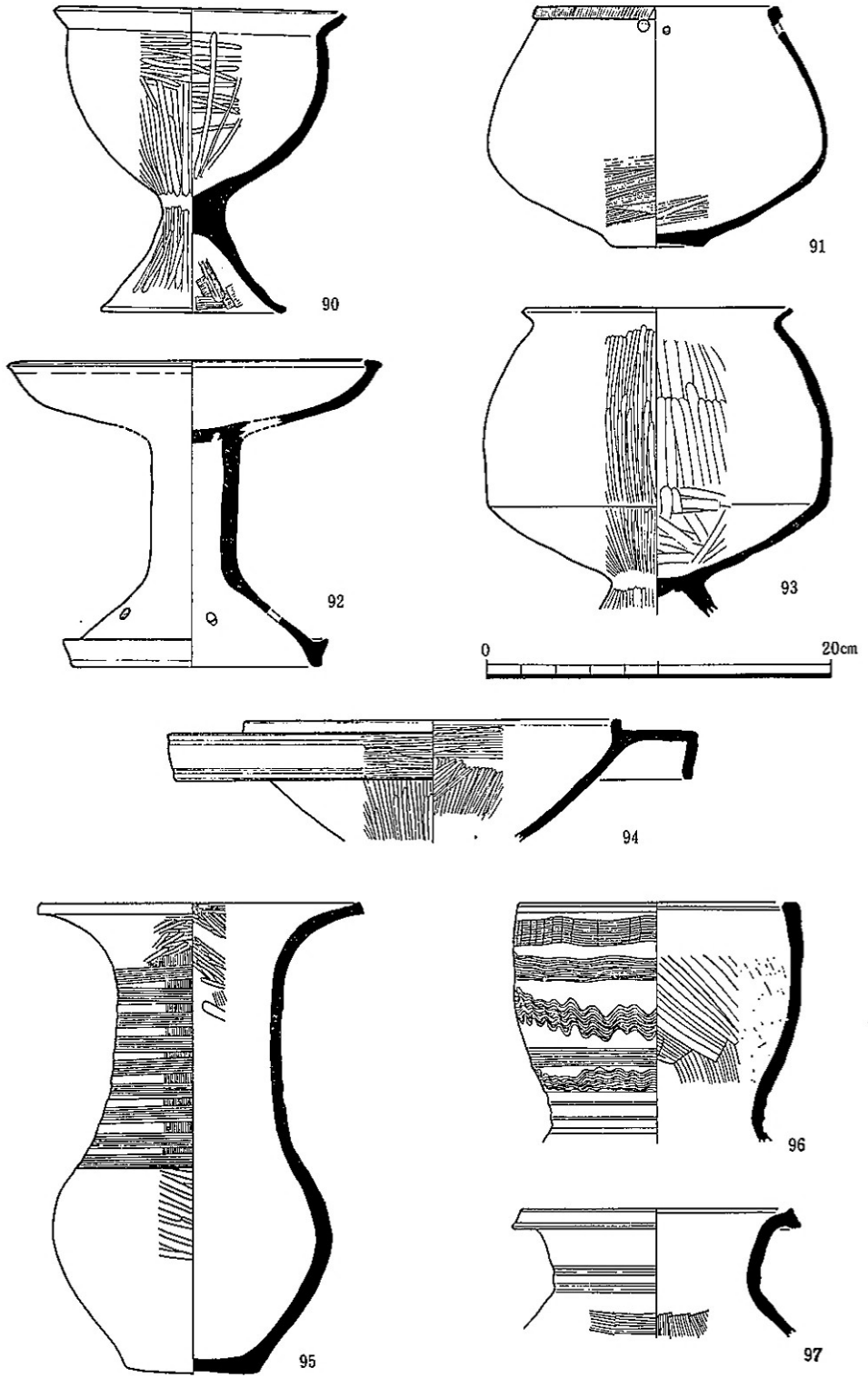
第266图 第IX层出土遗物实测图



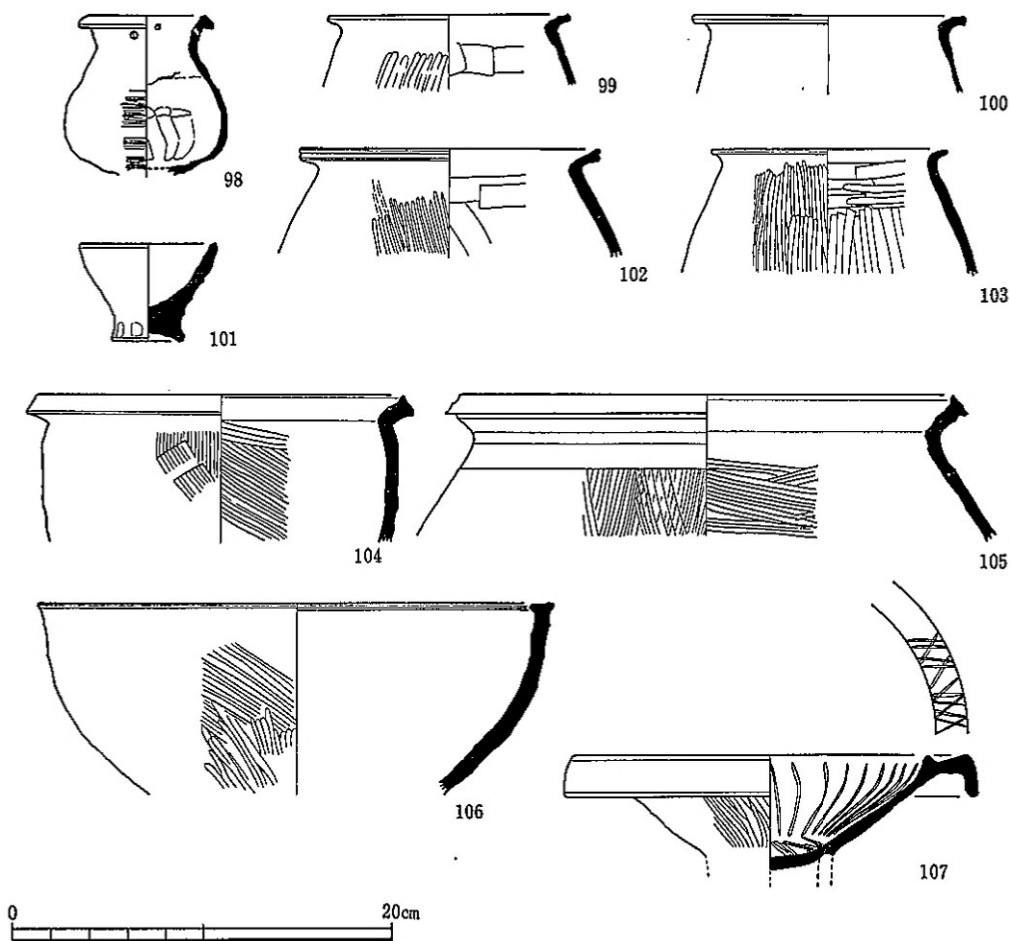
第267図 第Ⅱ層出土遺物実測図



第270图 第IX层出土遗物实测图



第271図 第Ⅸ層出土遺物実測図



第272図 第Ⅸ層出土遺物実測図

2 層の堆積状況と遺構・遺物の出土状況

13ライン以東の後期溝（S D3008・3032・3033の13ライン以東・3041）の周辺にのみ堆積しているⅡa層は、層中にⅠ層の青灰色シルトやⅡb層の暗褐色灰色粘土を細礫程度の大きさで、多量に含み、溝の肩部で最大層厚を測り、その周辺では薄くなるという、他の層とは異なった層相・堆積状況を示している。またⅡa層は、下層のⅡb層上面から掘り込まれた井戸（S E3007など）等の遺構の埋土最上位にもレンズ状に堆積しており、層下面では若干の起伏が見られる。こうした状況は、以下Ⅱb・Ⅱc・Ⅱd層においても同様に認められた。Ⅱa層からは、Ⅱc層に次いで多量の遺物が出土している。層中からは、異なる様式の遺物が全く混在して出土しており、土層断面の観察においても、同一方向に土器が並んでいる様な状態は認められなかった。これに対して、層上面及び層上部からは数ヶ所に、土器がまとまって出土しており、中には焼土・灰を伴なうものも見られた（図版39）。これらの土器群に伴なうと思われる遺構は、検出されなかった

が、I-1区では、SD3040の影響による窪地に数枚にわたって土器の堆積が見られた(図版38)。層上面から掘り込まれた遺構は、SX3005(土壙墓)の他に径10cm前後のピットが数個のみで、住居跡・井戸などの明確遺構は検出されなかった。

Ⅱb層とⅡc層は、層相に大差がなく、炭、灰層の狭在や、ほぼ同一方向に土器が並んで出土する事によって分層された。炭・灰層の薄層は、連続性に乏しく、西部暗灰色粘土層堆積域(以下調査区西側と記す)においては認められなかった。また、東部黒色粘土層堆積域(以下調査区東側と記す)では、遺構埋土の上位にレンズ状に堆積していた。Ⅱc層上面に堆積する炭・灰層の下部では、J-4区を中心として炭化材が集中して出土している(図版39)。この炭化材は径10cm前後、残存長30~60cmの丸太状のもので、大半は細片となって散乱していた。Ⅱc層中からは、ピット・土壙・井戸などの多くの遺構が検出され、これらの中には柱痕が残るもの、サスカイト片がつまったピットや、SK3043のように、焼土・灰とともに多量の土器を出土するものも見られた。またJ-4区・K-6区では、層中から人骨が出土しており、K-6区ではほぼ一体化が散乱した状態で出土している(図版40)。K-4区では、SX3004(木棺墓)、H-5区では、SX3003(甕棺墓)が検出された。遺物は、Ⅱc層からもっとも多量に出土した。H-13・14区、E・H-16・17区では、Ⅱc層上部から、数ヶ所で土器がまとまって出土しており、これらはほぼ完形に復元できるものが多かった。これらの土器群に伴うと考えられる遺構の検出に努めたが、平面及び土層断面の観察においても、これを認める事ができなかった。第267図57~61、第268図62・65~69、第270図87~89、第271図90~94である。

Ⅱd層は、Ⅱ層の青灰色シルトを細礫程度の大きさで含む層で、Ⅱa層と類似しているが、遺物の出土量も少なく、調査区全域にほぼ水平に堆積している。層上部では、青灰色シルトの混入は少なく、更に2層に分層される。層上面で検出された遺構としては、SD3010・3021のみで、大半が層下部から検出された。

Ⅱ層は、後期溝によって層下部が浸蝕され、層全体が溝内へたれ込んでいる。層中には、砂・礫がブロック状に混入したり、シルト・砂層の狭在は認められなかった。調査区東側では、層中より多数の遺構が検出され、各層はかなり人為的な攪乱を受けている。遺物の出土もこの地区から多数出土している。層中からの自然遺物の採集は少なかったが、層中で検出された遺構の中には、多くの自然遺物が検出されたものもあり、この中には食料残滓物と思われるものも多く含まれる。

3 各層の時期について

Ⅱ層は、4層に分層されたが、遺構が集中している調査区東側では、かなり人為的な攪乱を受けており、層中で検出された遺構の中には掘り込み面を明らかにできなかったものもあり、またピットの様に小規模な遺構の中には、上層での遺構を掘り残している場合もあり、各層には異なった様式のものかなり混入していると考えられる。これに対して調査区西側は、遺構も少なく

比較的混入の程度も少ないと考えられる。また層出土の土器片の集計からも、各層での混入の状況を窺えるが、層全体の逆転を示すような傾向は見られなかった。

後期溝は、Ⅱb層上面から掘り込まれた事が確認されており、井戸についても、埋没の状況等の検討によって、掘り込み面の確認できたSE3007と同様、Ⅱb層上面からの掘り込みと考えられる。後期溝から出土する遺物は、後期後半のものも含まれている。SE3007等の井戸から出土する遺物は、後期前半にふくまれるものである。また地山面（Ⅰ層青灰色シルト層上面）で検出された遺構から出土する遺物は、第Ⅰ様式中段階から第Ⅲ様式のもので、層中の遺構から出土する遺物にも第Ⅴ様式のものは見られない。したがって、Ⅱb・Ⅱc・Ⅱd層は、第Ⅰ様式から第Ⅴ様式前半の時期までに堆積した層と考えられる。以下、各層については、掘り込み面の明らかにできた遺構出土の遺物を中心に検討してみたい。

Ⅱd層上面から掘り込まれた遺構では、SD3010・3021がある。これらの出土遺物は第Ⅲ様式新

第3表 包含層出土土器破片統計表

層 序	時 期 地 区	第Ⅰ 様式 古段階	第Ⅰ 様式 中段階	第Ⅰ 様式 新段階	第Ⅱ 様式	第Ⅲ 様式 古段階	第Ⅲ 様式 新段階	第Ⅳ 様式	第Ⅴ 様式 前半	第Ⅴ 様式 後半	計
Ⅱ a 層	J—4区	0	0	0	1	4	32	11	16	64	200
	K—6区	0	0	0	0	4	44	24	9	81	
	H—13・14区	0	1	2	2	26	19	5	0	55	
	H—15・16区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
Ⅱ b 層	J—4区	0	0	0	0	1	36	1	1	39	132
	K—6区	0	0	0	0	0	11	1	2	14	
	H—13・14区	0	0	1	0	0	0	2	1	4	
	H—15・16区	0	0	7	11	6	51	0	0	75	
Ⅱ c 層	J—4区	0	0	0	9	14	120	3	1	147	291
	K—6区	0	0	0	0	3	80	1	0	84	
	H—13・14区	0	0	3	17	15	4	0	0	39	
	H—15・16区	0	1	1	3	2	14	0	0	21	
Ⅱ d 層	J—4区	0	0	0	0	2	31	0	0	33	113
	K—6区	0	0	0	9	1	20	1	0	31	
	H—13・14区	0	0	2	8	24	13	0	0	47	
	H—15・16区	0	0	2	0	0	0	0	0	2	
計		0	2	18	60	102	475	49	30	736	
		20			637			79			

段階～第Ⅳ様式に含まれるものである。また層中で検出された遺構出土の遺物も同様であった。このことから、Ⅱd層は第Ⅰ様式から第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式の時期までに堆積したと考えられる。

Ⅱc層からは多数の遺構・遺物が出土している。J-4区の炭・灰層下部で検出されたSE3009からは、埋土上層より第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式の遺物が一括して出土している。また調査区西側で、層上部から出土した土器群のうち(62)の壺は、口縁端部に浅い凹線文が施されており、第Ⅴ様式前半でも古い段階のものであり、他の土器も、この壺とほぼ同じ時期にふくまれる。またⅡb層中からはほとんど遺構が検出されなかったが、上面からは第Ⅴ様式前半の井戸が掘り込まれている。これらのことから、Ⅱc層・Ⅱb層は、第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式から第Ⅴ様式前半の時期までに堆積したと思われるが、遺構のあり方から、層は更に分層され、数期の遺構面が存在したと考えられる。

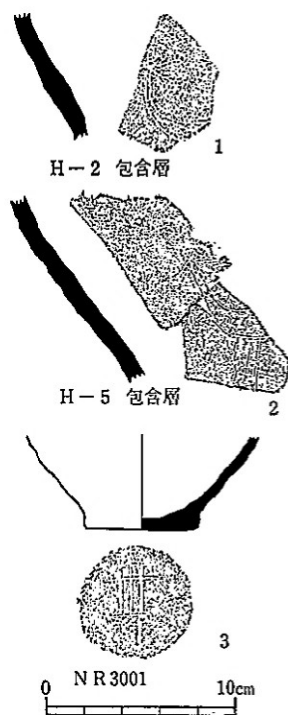
Ⅱa層は、堆積の状況・層相の検討より、人為的な堆積層と考えられる。今回の調査区内では具体的には、SD3032・3033の13ライン以東・3041の掘削に伴う排土を、溝肩部を中心にその周辺へ積み上げた事によるものと考えられる。前述したようにこれらの溝中より出土した遺物は第Ⅴ様式後半のものも含まれており、層中からもわずかながら第Ⅴ様式後半のものが出土している。また、層上面及び上部で出土した土器(9～12・21)等は、第Ⅴ様式前半にふくまれる。このことから、Ⅱa層は第Ⅴ様式前半の時期に堆積した層と考えられる。

4 その他の遺物

a 線刻土器及び赤色顔料塗布土器

Ⅱ層中より、線刻土器・赤色顔料を塗布した土器が出土しており、遺構別の記載にもれたものも含めて、補足説明を行なう。〔線刻土器〕(第273図) 線刻土器は、12点確認し、記号文と絵画文がある。

記号文は、SD3031(第170図12)、SD3036(第231図2)、Ⅱ層(第267図58、60)出土のもの(3)の7点である。(3)以外は説明済みなのでここでの説明を省略する。(3)はNR3001から出土し、底径5.9cmを測る壺の底部片である。中期後半と思われる、調整は外面がヘラナデ、内面はナデ及びハケメ調整である。底部に記号をかく。他が壺の肩や口縁部に施すのに対して、底部というのは特異な感じがする。出土の線刻土器は、第Ⅲ様式古段階～第Ⅴ様式前半に存在する。記号文ということでいえば、粘土を貼りつけたSK3022(第39図2)、NR3001(第247図4)の壺形土器がある。前者は第Ⅱ様式なので、記号文は第Ⅱ様式から存在する。

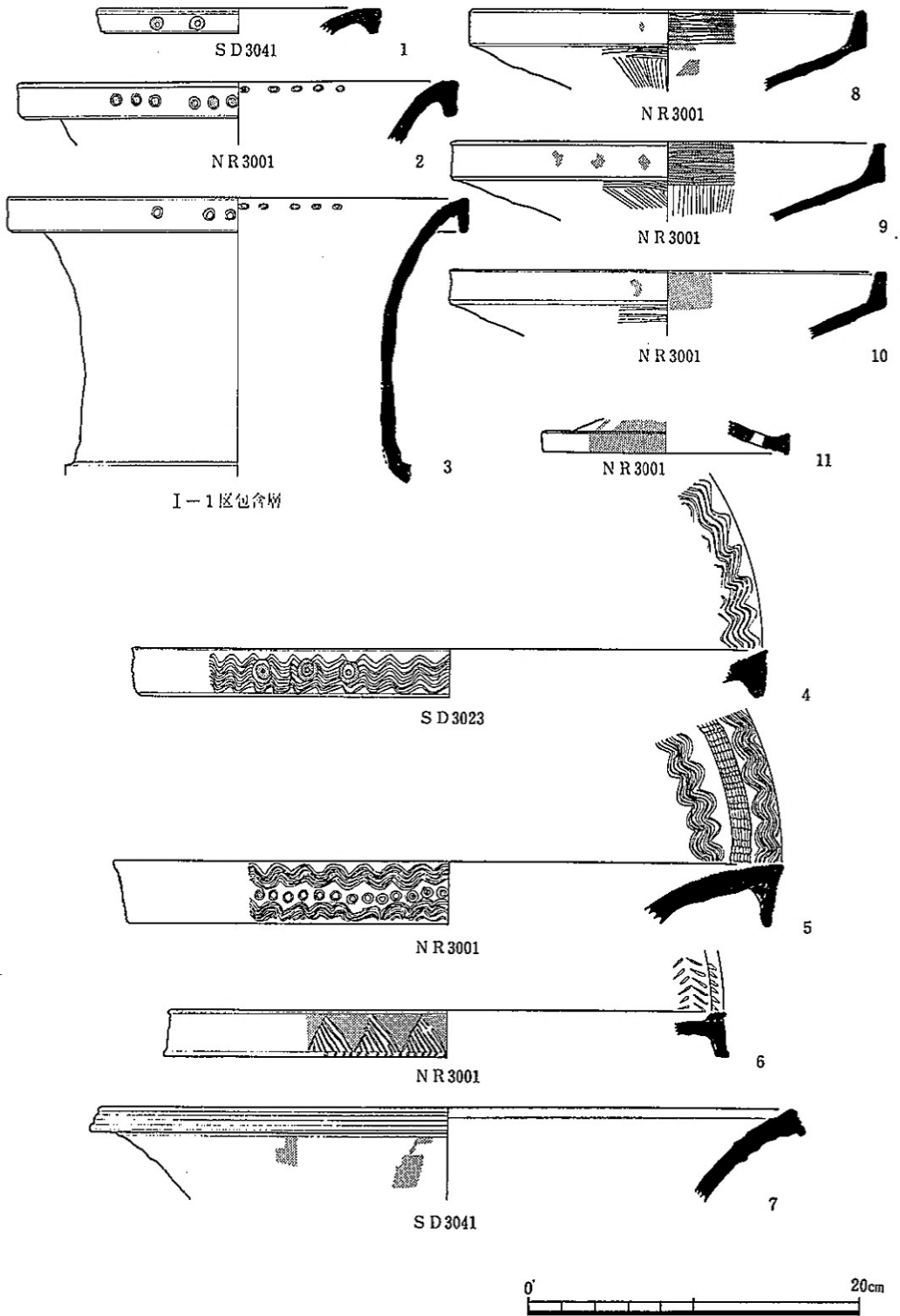


第273図 線刻土器拓本

絵画文は、SD3041（第239図4）と（1・2）の3点である。前者は説明済なので省略する。いずれも鹿の絵を描いている。（1・2）は、Ⅱ層から出土した。（1）は、壺の肩部の破片と思われる、鹿の角・頭・首・上半身が残存している。角は幹2本にそれぞれ2枝を描く。（2）も壺の肩部の破片で、頸部に列点文を施し、鹿の頭と首、胴部上半が残っている。角は幹2本で、1本の幹から2本の枝を描く。鹿の頭の下に弧状の線刻が残存するが、これはもう一頭描いている可能性を示唆する。（1・2）が角幹と角枝があるのに対し、SD3041（第239図41）は頭を描いておらず、角も幹だけしか描いていないのが興味をひく。いずれも時期が確定しないのが残念である。

〔赤色顔料塗布土器〕（第274図）

32点を確認し、うちSK3004（第192図5）とSD3004（第108図35）とSD3008（第211図3・11）と（1～11）の14点を提示する。第Ⅴ様式が多い。（1～5）は壺の口縁部である。（1）は復元口径17.0cmを測り、外反する口縁部で端部は下方に拡張する。端面と口縁部内面に竹管文を施し、赤色顔料を塗布する。（3）は復元口径27.6cmを測り、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は下方へ拡張する。頸部に断面三角形の突帯を貼りつける。端面と口縁部内面に竹管文を施し、赤色顔料を塗布する。内外面はナデ調整である。生駒西麓型胎土である。（4）は復元口径38.2cmを測り、下に拡張する口縁部をもつ。端面に荒い6条の波状文を施し、その上に3個1組の竹管円形浮文を貼りつけ、赤色顔料を塗布する。口縁部内面に6条の荒い波状文を施す。生駒西麓型胎土である。（5）は復元口径40.4cmを測り、外反する口縁部で端面は下に拡張する。端面に5条の波状文2帯と竹管文を施し、竹管文に赤色顔料を塗布する。口縁部内面に7条の波状文2帯と8条の簾状文を施す。（6）は器台の口縁部かと思われる、復元口径33.4cmを測り、口縁部を上下に拡張する。端面にヘラで鋸歯文を描き、空白部に赤色顔料を塗布する。下端部に刻目・口縁部内面に綾杉状に刺突文を施す。（7）は壺の口縁部かと思われる、復元口径41.8cmを測り、外反する口縁部をもつ。端面に2条の凹線文を施す。頸部外面に帯状に間隔をあけて赤色顔料を塗布する。生駒西麓型胎土である。（8～10）は高杯の口縁部である。現存する赤色顔料は口縁部内外面の一部であるが、本来は口縁部内外面の全面に塗布してあったと思われる。（8）は体部内面にも塗布されている。口縁外面がヨコナデ以外は、内外面ヘラミガキ調整である。復元口径は、（8）が23.6cm、（9）が26.2cm、（10）が26.2cmを測る。（11）は壺用蓋で、復元口径14.8cmを測り、紐孔1個が現存する。体部から口縁部外面まで帯状に間隔をあけて赤色顔料を塗布する。（1・7）はSD3041、（2・5・6・8～10）はNR3001、（3）はⅡ層、（4）はSD3036出土である。亀井遺跡では、赤色顔料塗布土器は第Ⅴ様式に多く、しかも壺・高杯に施す率が高い。壺は主に口縁端面に施した竹管文や竹管円形浮文にだけ塗布することが多く、高杯は口縁部内外面（上端部も含む）に塗布することが特徴である。



第274図 赤色顔料塗布土器実測図

b その他の土製品

〔紡錘車〕（第275図1～3）

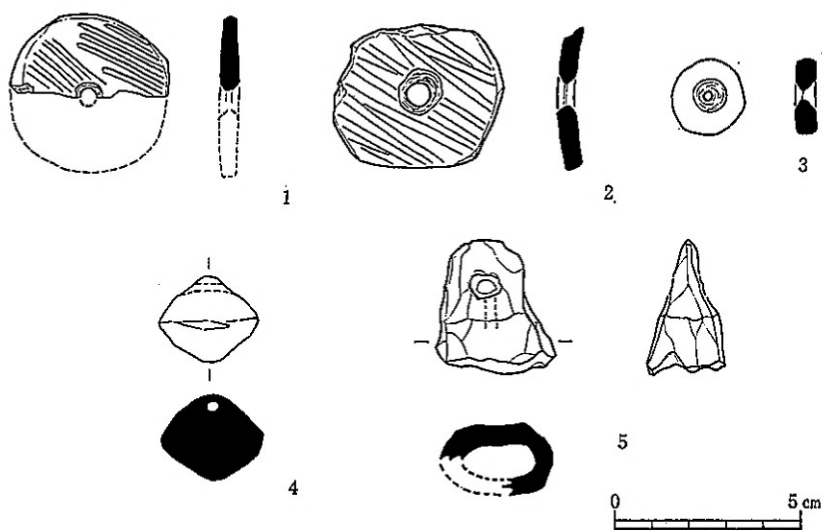
(1)は、約2分の1を欠損する。土器片を利用して、周縁を研磨して円形に成形し、中心孔は両面から錐によって穿孔している。直径は4.1cm・厚さ0.5cm、中心の円径0.4cm、現存の重量は12.8gある。(2)は、Ⅱb層から出土した。土器片を利用して周縁を研磨するが、一部に打ち欠いた部分も残っていて不整形を呈する。中心孔は錐によって両面から穿孔する。径は3.8×4.5cm・厚さ0.5cm・中心孔の内径0.6cm・重量は14.4gある。(3)は、Ⅱ層から出土した。形態から見て一応紡錘車に含めたが、あまりに小さいため実用の紡錘車とは考えられず、小型有孔円盤形土製品とも呼ぶべきものである。土器片を利用して周縁を研磨して円形に整え、両面から錐によって穿孔したもので、直径は2cm・厚さ0.5cm・中心孔の円形は0.2cm・重量は2.6gである。

〔土玉〕（第275図4）

径2.65cm・長さ2.2cmを測り、算盤玉状を呈す。上方に径0.2cmの穿孔を施す。やや雑な作りである。生駒西麓型の胎土である。

〔銅鐸形土製品〕（第275図5）

現存長3.6cm・現存幅3.2cmを測る鈕の部分と若干の上半部が残存する。一見、鈕部の形状は蜻蛉壺状を呈しているが、舞の部分に焼成前に下から上へ貫かれた孔があることから銅鐸形土製品と考えた。上半部には鱗がなく、断面は楕円形を呈する。鈕部の穿孔は、焼成前に2方向から施す。



第275図 紡錘車・銅鐸形土製品・土玉実測図

c 石器

〔石斧〕（第276図・第277図）

大型蛤刃石斧（1・2・3）（1）は、Ⅱc層より出土した。完形である。長さ11.6cm・幅5.4cm・厚さ2.3cm。基端は平坦に近い。製作時に、左右両側面の刃部と基部の境付近を打ち欠いて抉を入れている。A面刃部に、わずかに左下りの擦痕が認められる。刃先は、0.5cm前後の幅で、刃潰れを起こしている。石質は輝緑岩。（2）は基端を含む基部の約2分の1が残存している。基端は研磨を入れてはいるが敲打による凹凸を残している。右側面の折損端部にも2次的な剝離痕があるほか、基部には、2次的な敲打痕が散在している。また、右側面の折損端部にも2次的な敲打痕があり、敲石に転用されたものと考えられる。（3）は完形である。長さ10.4cm・幅5.9cm・厚さ3.5cm。基端は丸い。基端付近には製作時の剝離痕が、基部には製作時の敲打痕が残る。A・B両面ともに、基部ではヨコ方向の、刃部では右下りナナメ方向の顕著な擦痕が、それぞれ認められる。石質は、頁岩である。

扁平片刃石斧（4）完形である。長さ5.1cm・幅2.9cm・厚さ0.8cm。刃部はわずかに右上りである。基端は平坦であるが、B面の基端近くは、基端側にナナメに研磨され、A面の基端近くはやや丸味をもつ。左右両側面の研磨は、平面及び基端にくらべると極端に弱い。石質は極細粒砂岩である。

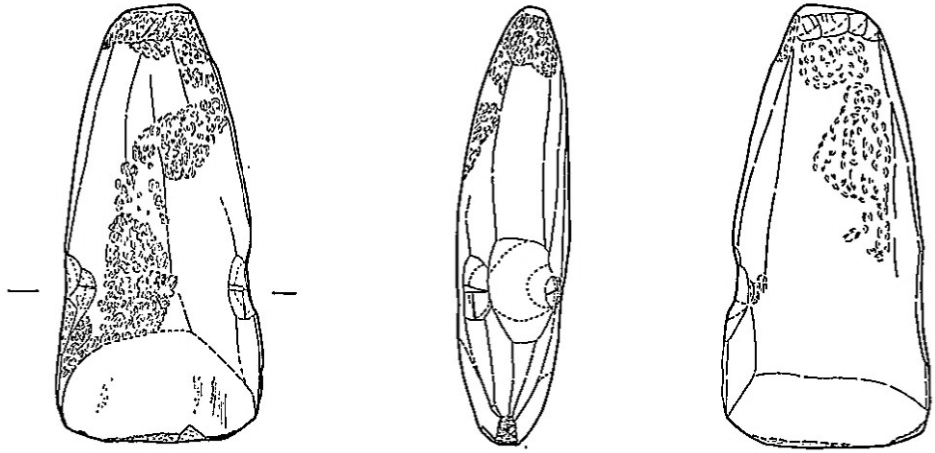
環状石斧（5）刃部は全て剝離欠失している。残存長径9.6cm・同短径7.6cm、厚さ2cm。内孔は、長径2.3cm・短径2.1cmとややいびつである。A面の内孔外周には幅1cm前後の平坦面があり、ここには擦痕が認められる。石質は溶結凝灰岩。

〔石庖丁〕（第278図～第280図）

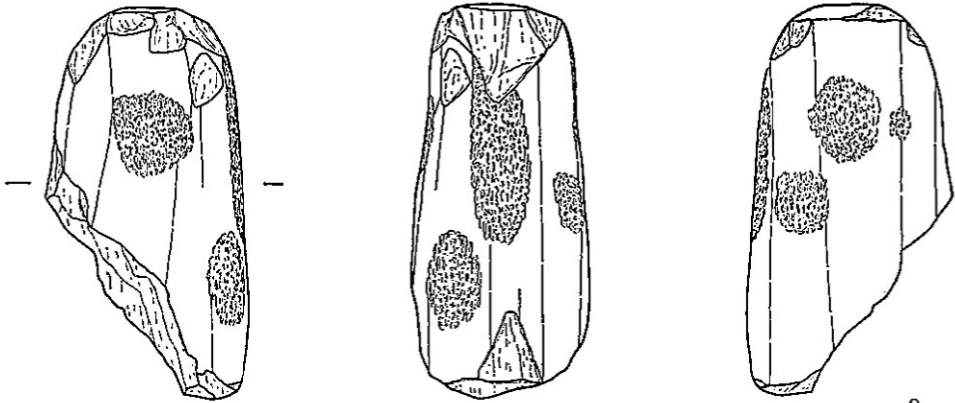
（8～10）はⅡa層より、（18）はⅡb層より、（7）はⅡc層より出土した。

（6）は、彎曲する背肩部をもち、両刃で刃部は欠損する。大型である。両面に研磨痕が全面にみられる。肩部には、幅0.3cm・長さ0.4cmの範囲で火を受けた跡がみられる。現存長9cm・幅7cm・厚さ0.9cm。（7）は、直線の片刃をもち背部は彎曲する直線刃半月形である。刃部には、右上りの使用痕がみられ、両面に端部寄りに敲打痕がみられる。背部中央に背潰れが認められる。B面の紐孔には、紐擦れが認められる。現存長6.6cm・幅3.4cm・厚さ0.5cm。（6）（7）ともに石質は、石墨片岩。（8）は、わずかに外彎する片刃の刃部をもち、背部は彎曲する。刃部には、右上りの使用痕がみられる。両面に敲打痕が認められる。現存長4.1cm・幅3cm・厚み0.6cmを測る。石質は緑泥石緑レン石片岩である。（9）は直線の片刃の刃部で、背部は彎曲する直線刃半月形である。刃先に平行して研磨痕が認められる。現存長6.2cm・幅3.6cm・厚さ0.75cmを測る。石質は、緑泥石緑レン石片岩である。（10）は、直線の刃部をもち背部は彎曲する。刃部は、2段に稜がみられる。A面紐孔横に未貫通の穿孔痕があり、両面とも端部寄りには敲打痕が認められる。現存長5.7cm・幅3.15cm・厚み0.6cmを測る。石質は、緑泥石石墨片岩である。（11）は、背肩部のみで彎曲する。両面とも研磨痕が認められる。現存長2.9cm・幅2.6cm・厚さ0.7cm

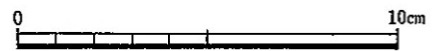
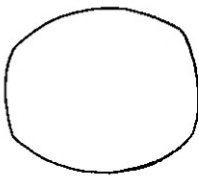
を測る。石質は、緑レン片岩である。(12)は、外彎する片刃で、背部は彎曲する楕円形である。刃先から右上りの使用痕がみられ、B面紐孔両方に紐擦れが認められる。背部は研磨されている。現存長4.8cm・幅3.9cm・厚さ0.6cmを測る。石質は緑レン石緑泥石石墨片岩である。(13)は、わずかに外彎し、刃部は彎曲する。刃先に平行した研磨痕が、体部にも右上りの研磨痕がみられる。A面には敲打痕が認められる。背部は紐孔あたりまで欠損している。現存長8.3cm・幅2.6cm・厚さ0.7cmを測る。石質は、緑レン石緑レン石片岩である。(18)はゆるく外彎する片刃で、背部は彎曲する。端部は、刃部とほぼ直になる。両面ともに紐孔周辺には穿孔時と思われる敲打痕がみられる。A面には、未貫通の穿孔痕が認められる。現存長10.1cm・幅5cm・厚さ0.7cmを測る。石質は緑レン緑泥片岩。(20)は、ほぼ直線の刃部をもち、背部はわずかに彎曲し、肩部に逆に彎曲する大型の、完形品である。刃部には右上りの研磨痕が、体部には、横方向の研磨痕がみられる。両面ともに、製作時の剝離痕を残す。両刃である。B面左端紐孔下には、未貫通の穿孔痕が認められる。長さ20.6cm・幅11.8cm・厚さ0.9cmを測る。石質は頁岩である。(14)は、わずかに外彎する片刃で、背部は彎曲する。刃先に平行して研磨痕がみられる。両面に敲打痕がそれぞれみられる。背部は、紐孔あたりまで欠損し、背潰れが認められる。現存長8cm、幅2.8cm、厚さ0.7cmを測る。緑泥緑簾片岩。(15)は、内彎する刃部をもち、背部も彎曲する。刃部・刃先・刃稜付近には右上りの使用痕がみられ、B面紐孔上部には、2つともに紐擦れ痕が認められる。現存長9.3cm・幅3.6cm・厚さ0.7cmを測る。(16)は、外彎する刃部を持ち、背部も彎曲する楕円形の未製品である。A面は、全体の3分の2に研磨がなされ、紐孔は1つ貫通しているが、2個とも穿孔にともなう敲打痕がみられる。B面は、右上りの研磨痕がみられ、貫通する紐孔の方のみ敲打痕がみられ、その下にも敲打痕がみられる。もう一方は、回転穿孔痕がみられ厚みの3分の2まで穿たれている。現存長12.4cm・幅6cm・厚さ0.85cm。緑レン片岩。(17)は、刃部は明確でないが、片刃で、背部はわずかに彎曲する。A面には、右上りの研磨痕がみられ、紐孔付近には、敲打痕が認められる。現存長4.3cm・幅5.2cm・厚さ0.45cmを測る。石質は緑レン石石墨片岩である。(19)は、やや内彎する片刃の刃部をもち、背部は彎曲する完形品である。刃面には、刃先に平行する擦痕があり、A面刃先から右上りの使用痕があり、両端部近くには敲打痕がみられる。B面は刃先に平行してわずかに擦痕があり、左端部近くには敲打痕がみられ紐孔間には未貫通の穿孔痕がある。背部、刃先ともに摩滅している。長さ12.4cm、幅4.3cm、厚さ0.7cmを測る。石質は緑レン片岩。



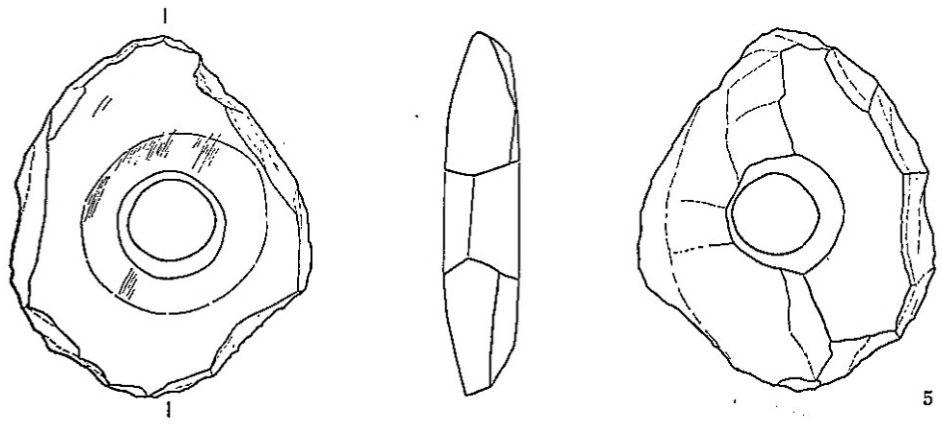
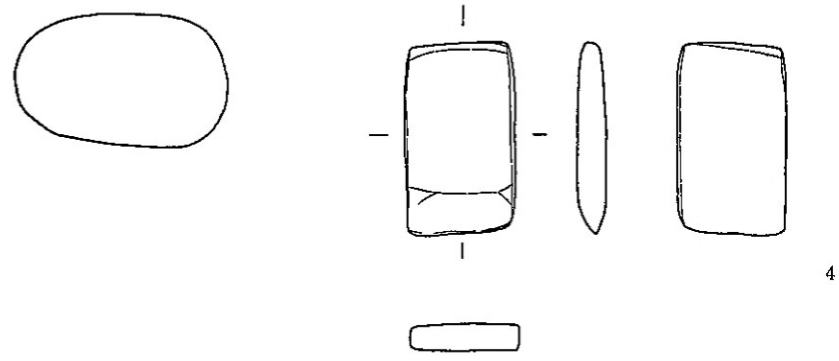
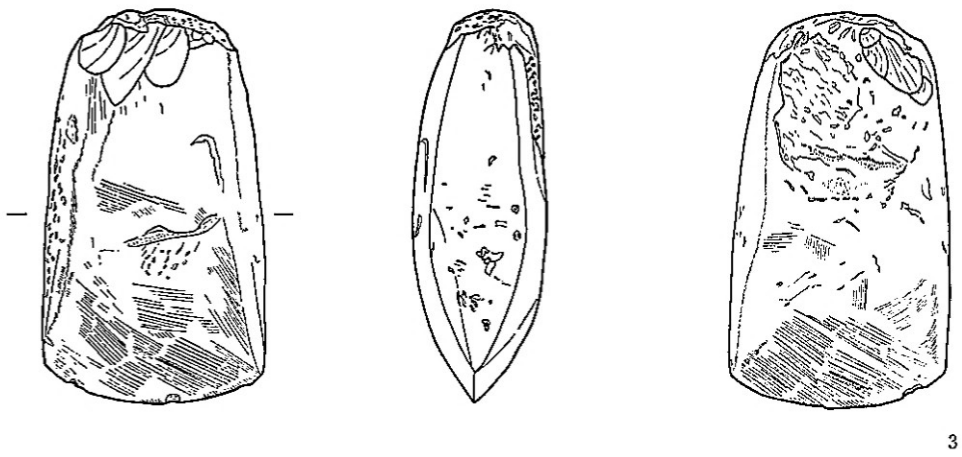
1



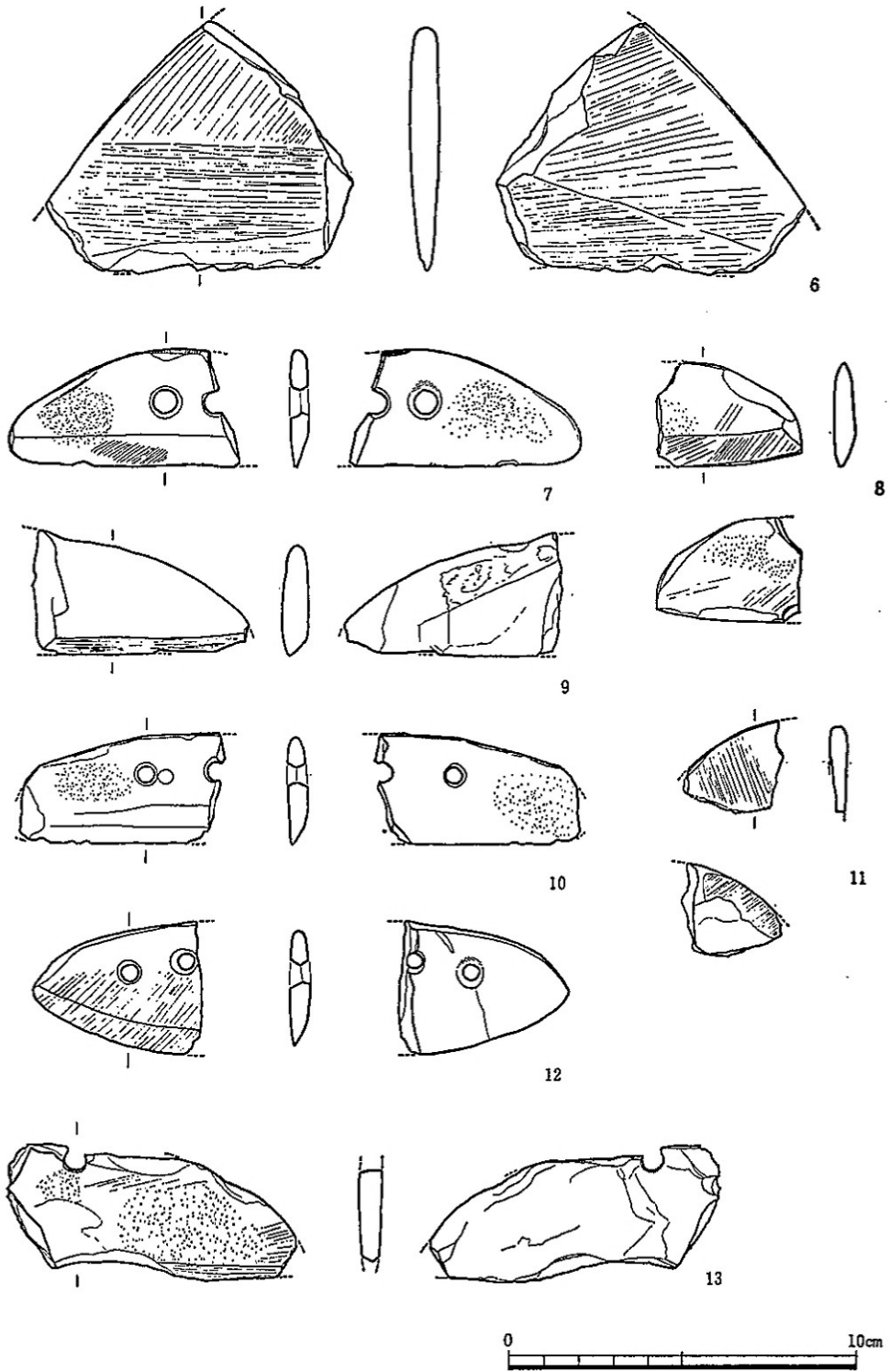
2



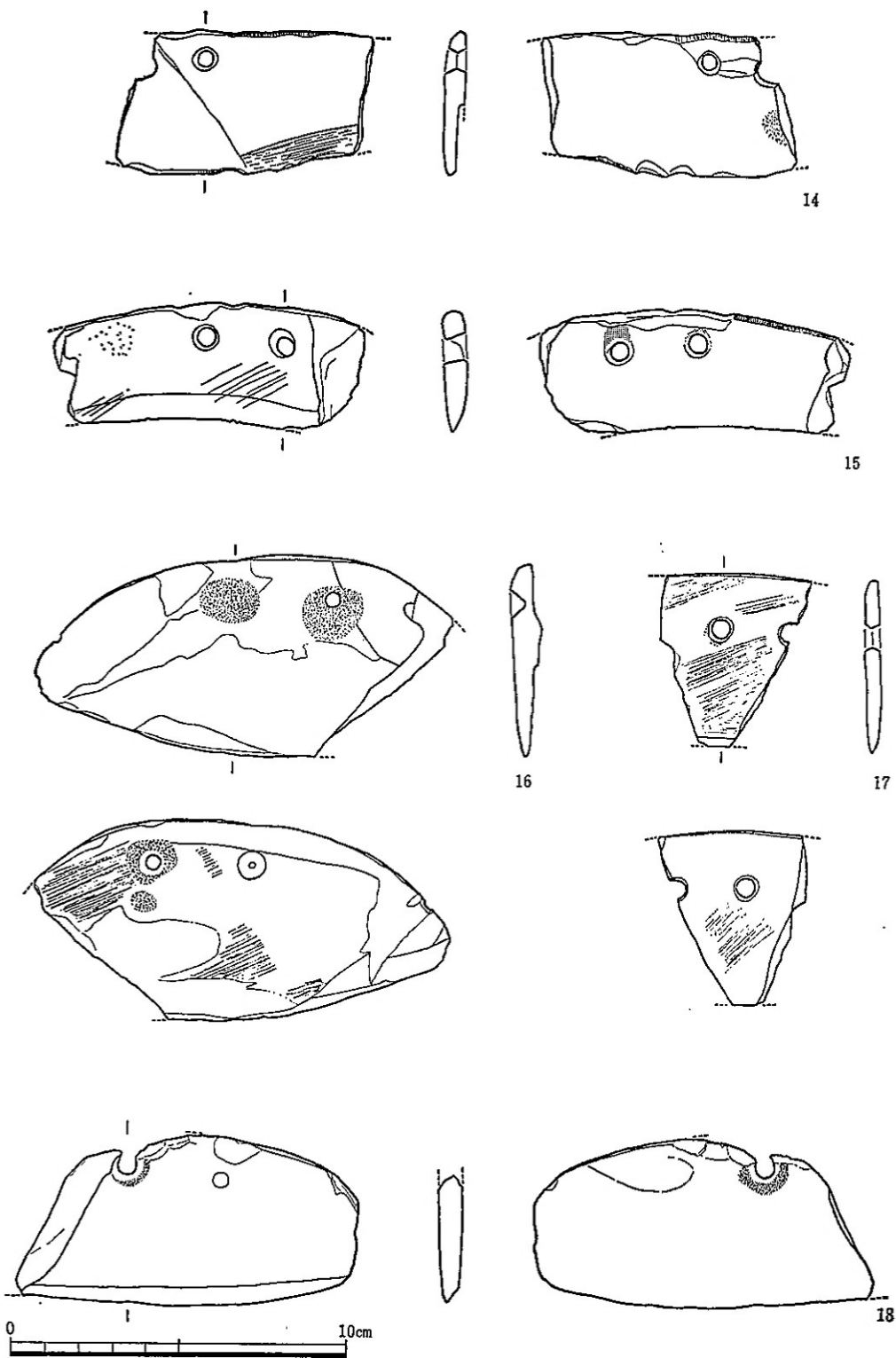
第276図 第IX層出土遺物実測図（磨製石斧）



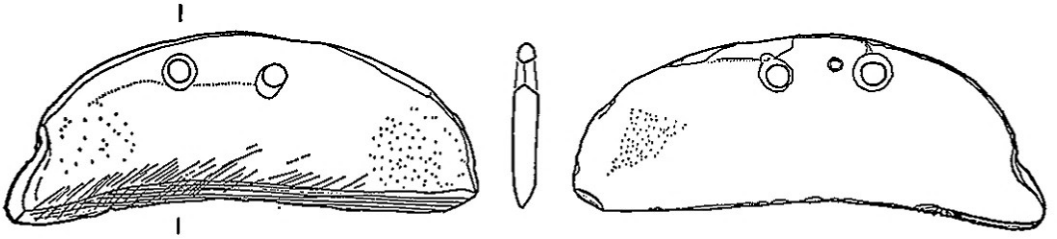
第277图 第Ⅸ層出土遺物実測図（磨製石斧）



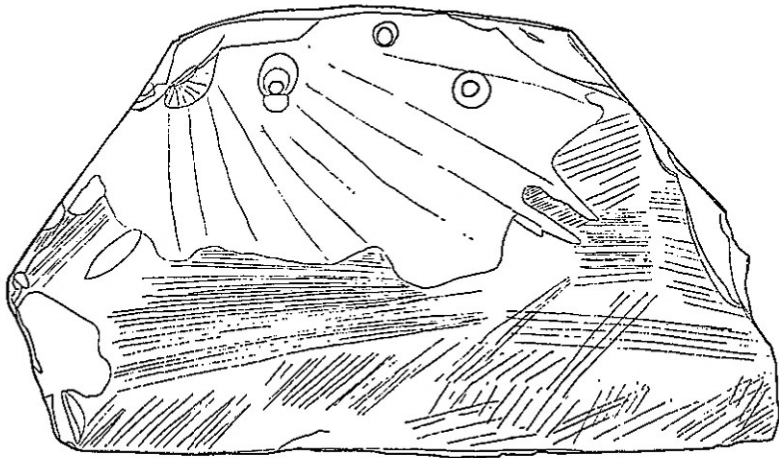
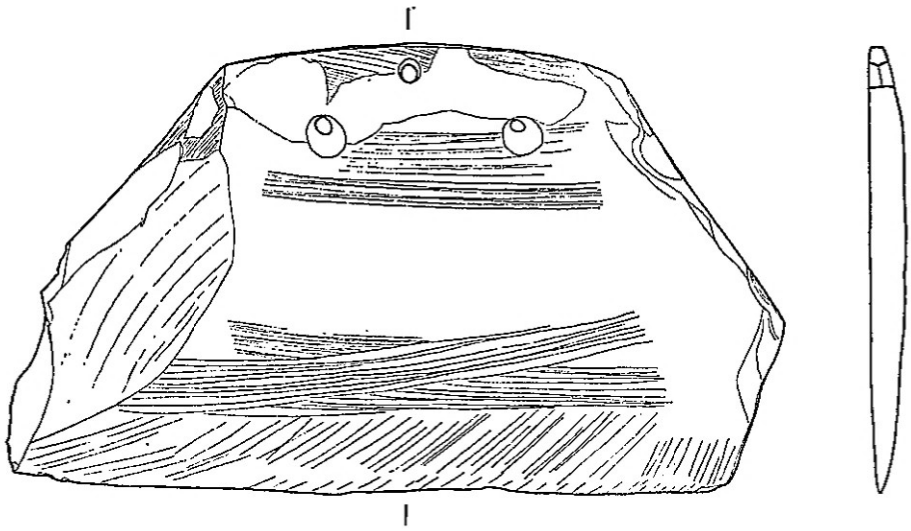
第278図 第IX層出土遺物実測図(石庖丁)



第279图 第IX层出土遗物实测图(石庖丁)



19



20



第280図 第IX層出土遺物実測図(石庖丁)

〔石鏃〕（第 281 図）

平基無茎式 (22) 長さ3.3cm・幅1.2cm・厚さ0.3cm・重量2gをはかる。A面中央に大剝離面を残し、両側辺、基辺に剝離調整を施す。B面は右下方に打点をもつ大剝離面で、右側辺に剝離調整を施す。

円基無茎式 (21・26) (21)は長さ2.3cm・幅1.2cm・厚さ0.3cm・重量0.8gの小型の石鏃である。A面は調整面からなり、B面は下方に打点をもつ大剝離面の両側辺に小さな剝離を施す。

(26)は長さ4.2cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm・重量3.9gをはかる。A面は基部中央に細長く自然礫面を留め、両側辺から剝離調整を施す。B面は全体を剝離調整する。

尖基無茎式 (20・23・24・25・28) 長さ2.3cm・幅1cm・厚さ0.4cm・重量1gの小型のもの(20)から、長さ5.2cm・幅1.6cm・厚さ0.5cm・重量4.5gのもの(28)までである。(20)は両面とも中央に大剝離面を残し両側辺から剝離調整を施す。(23)は長さ3.4cm・幅1.2cm・厚さ0.3cm・重量1.6g。A面は右寄りに大剝離面をわずかに残して縁辺を剝離調整、B面は大剝離面の周辺に小さい剝離を加える。(24)は先端・基端欠損し現存長3cm・幅1.2cm・厚さ0.3cm・重量1.4gをはかり、断面はレンズ状を呈する。両面とも中央に大剝離面を残し、両側辺から剝離調整を施す。(25)は柳葉形を呈し長さ3.9cm・幅1.3cm、厚さ0.4cm・重量2gをはかる。両面とも両側辺から細かい剝離調整を施す。基部は中軸線上に鑄をなす。B面はほぼ中央に狭い大剝離面を残す。(28)は両面とも全体を剝離調整し、先端部の中軸線上に鑄を形成する。

凸基有茎式 (27・29・31・32) 逆刺が角をなし、茎の挟りが明瞭なタイプ(29・30)と、逆刺がなだらかで茎の挟りが浅いタイプ(27・31・33)がある。(29)は先端欠損し、現存長3.9cm・幅1.9cm・厚さ0.6cm・重量3.3gをはかる。両面とも全体を剝離調整し、茎部は中軸線上に鑄をなす。(30)は長さ4.9cm・幅2.7cm・厚さ0.9cm・重量7.7gをはかる。両面とも全体に剝離面は揃わない。(27・31・32)は縦長で厚みのある鏃身をもつ。(27)は長さ4.5cm・幅1.3cm・厚さ0.6cm・重量3g。(31)は長さ5.8cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm、重量5.4g。(32)は長さ5.7cm・幅1.5cm・厚さ0.7cm・重量4.6g。3者とも両面全体に両側辺から剝離調整を施し、中軸線上に鑄を形成するものもある。

〔石錐〕（第 281 図）

棒状の頭部下端がすぼまって錐部になるタイプ(33)、不整形の大きな頭部の下端を整形して錐部をつくり出すタイプ(35・37)、逆三角形の扁平な頭部に棒状の錐部がつくタイプ(34)「Y」字状を呈するもの(36)がある。(33)は、長さ3.7cm・幅0.9cm・厚さ0.6cm・錐部長0.7cm・錐部幅0.4×0.3cmをはかる。両面全体を両側辺から剝離調整する。錐部断面は菱形を呈する。(35)は、長さ4cm・幅2.7cm・厚さ1.1cm・錐長0.8cm・錐幅0.6×0.3cm。大きな剝離によって概形をつくり、錐部周囲をトリミングする。A面頭部上半に自然礫面を残す。錐部断面形は菱形を呈する。(37)は、長さ6cm・幅3cm・厚さ1.2cm・錐長1cm・錐幅0.8×0.5cm。楕円形の大きな頭部に短い錐部がつく。頭部左側辺に自然礫面を残し、全体に不揃いの剝離を施す。

(34) は錐部下端欠損。現存長2.1cm・幅2.1cm・錐長1cm・錐幅0.7×0.4cmをはかる。A面は頭部上辺と両側辺から剝離調整、B面は大剝離面を残し両側辺から剝離調整を施す。(36) は、錐部下半欠損。現存長3.7cm・幅3.4cm・厚さ0.6cmをはかる。大きな剝離を施して整形した後、周辺から細かい剝離を加えて調整する。頭部の両先端は薄く鋭い。

〔石槍〕 (第281図38～第282図)

(38) は、先端部のみ残存する。現存長7.1cm・幅4cm・厚さ0.8cmをはかる。扁平な石槍である。両面とも調整面からなり、さらに両側面に細かい剝離を加えるため鋸歯状を呈する。(39) は、基部欠損。現存長10.2cm・幅3cm・厚さ1.4cmの厚みのある石槍である。先端部は丸みをもつ。両面とも階段状剝離を一部に混えた剝離調整を施した後、中央部に左上りの研磨を施す。中軸線上にゆるやかな稜をなす。(40) は、先端部を欠損。現存長17.5cm・幅2.8cm・厚さ1.2cmをはかる。基底部左側辺に自然礫面を留め、両面全体を剝離調整する。B面基部に大剝離面を残す。剝離面は揃わず、右側辺はジグザグ状になる。一部に階段状剝離が混在する。(41) は、基部のみ残存。基軸線に対して斜めの、自然礫面を留めた基辺をもつ。現存長6.6cm・幅4.3cm・厚さ1.5cmをはかる。両面とも粗い剝離を施した後、部分的に側辺から細かな剝離を加える。一部に階段状剝離が混在する。(42) は長さ24.6cm・幅3.5cm・厚さ1.7cmの完形品である。基部から腹部にかけて直線的にのび、先端に向ってすぼまる。基部から腹部まではほぼ同じ厚さもち、先端に向って薄くなる。両面とも全体を剝離調整した後、部分的に側辺から細かい剝離を加える。

〔砥石〕 (第283図)

(43) 長方形を呈し、断面が四辺形を呈する小型の砥石である。現存長6.5cm、1辺の最長が約2cmを各々測る。使用面は長辺側4面を利用しており、やや擦り減っている。石質は泥岩で表面はきめがこまかい。

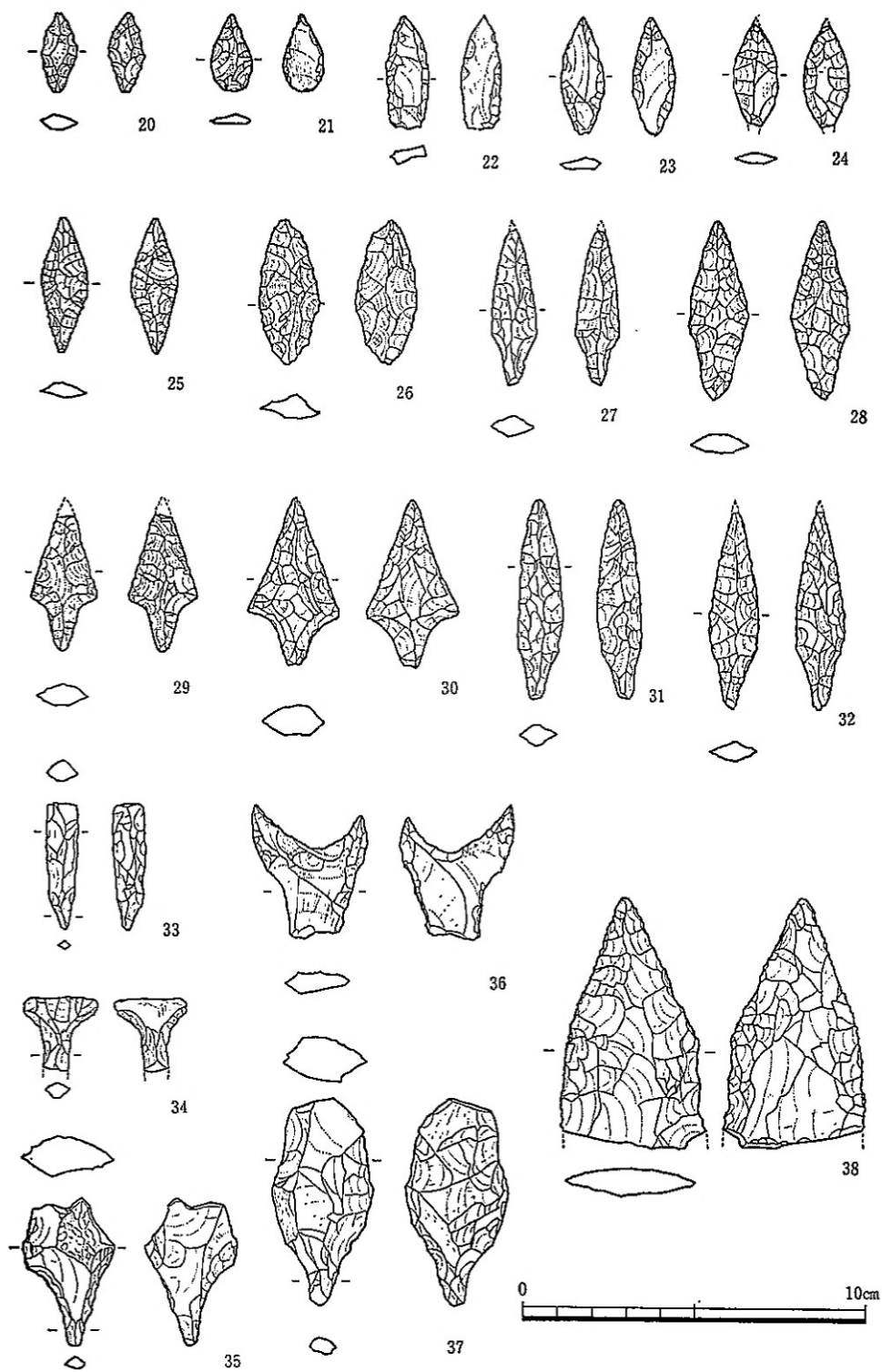
(44) 平面形は半円形を呈し、端部が欠損している。現存長9.0cm、幅5.1cm、最大厚が下端部で4.1cm、最小厚が1.2cmを各々測る。使用面は4面とも利用され、各面とも使用頻度は高く、特に中央部から上端にかけてはよく擦りへっている。石質は和泉砂岩である。

(45) 平面形は方形を呈し、断面も四辺形を呈する。現存長8.5cm、幅6.1cm、最大厚4.3～1.7cmを各々測る。使用面は長辺側の4面と短辺側の1面の一部が利用されている。石質は細粒和泉砂岩。

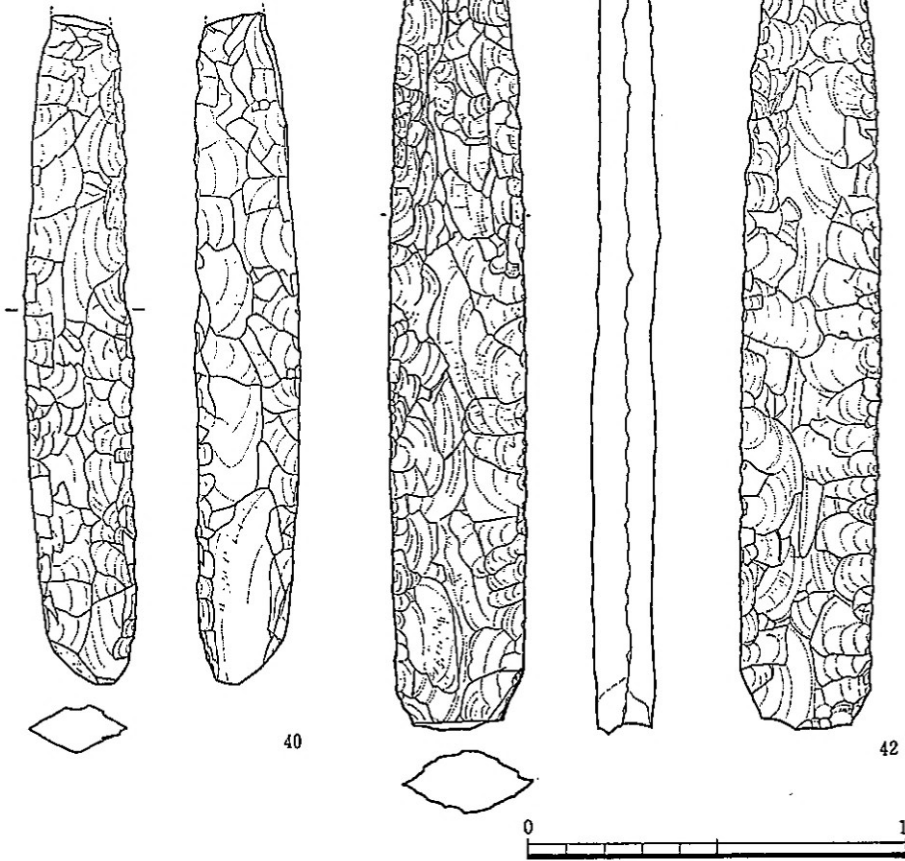
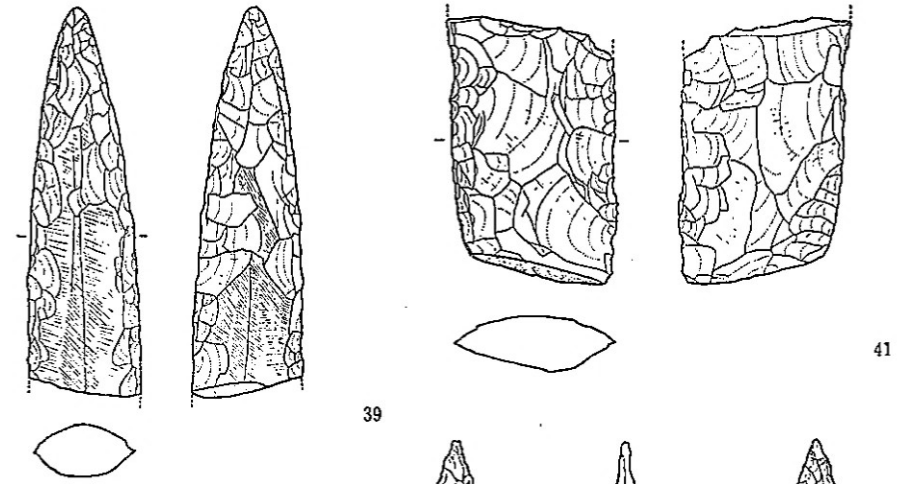
(46) 一部欠損及び擦り減っているが平面形は方形を呈すると思われる。使用面は5面利用されている。現存長6.8cm、現存幅5.5cm、厚さ2cmを測る。また、長辺に凹みを有している。おそらく3回の穿孔が行われている。石質は和泉砂岩。

(47) 平面・四辺形を呈し、断面も四辺形を呈する。現存長7.5cm、幅4.2～3.4cm、厚さ3.5～1.8cmを各々測る。使用面は長辺側4面を利用している。石質は含ザクロ石石英粗面岩である。

(48) 方形を呈していたと思われる破片である。現存長4.4cm、現存幅3.3cm、残存厚2.7cmを各々測る。使用面の枚数は不明であるが、残存している1面の中央に幅0.6cm、深さ0.5cmの溝



第281图 第IX层出土遗物实测图(石鏃·石錐·石槍)



第282図 第Ⅸ層出土遺物実測図(石槍)



第283图 第IX层出土遗物实测图(砥石)

がみられ、おそらく工具の刃部先端を研いだものと考えられる。石材は泥岩である。

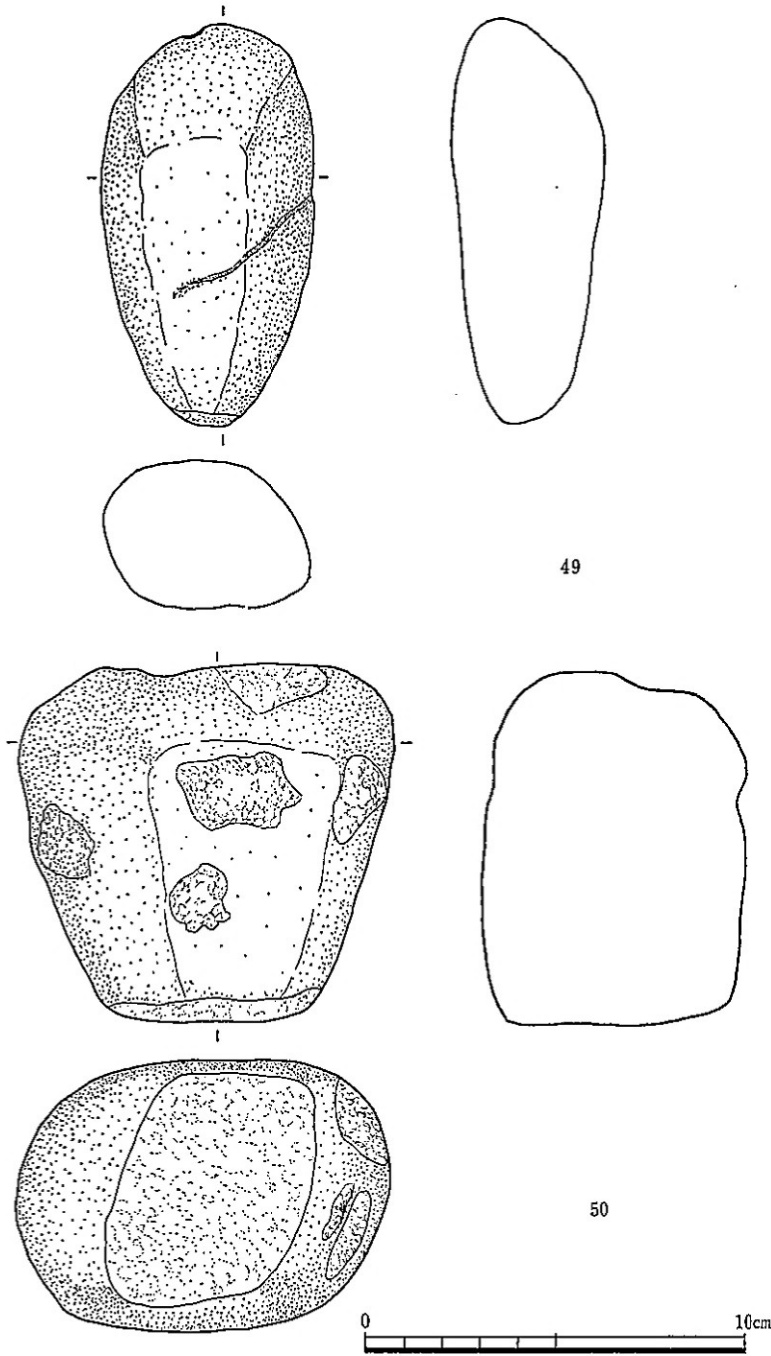
〔敲石〕（第284図）

(50) は平面形が台形を呈する和泉砂岩の自然礫を利用した敲石である。上縁の平らな部分に敲打痕がみられる。他の敲石に比べ重い。全長 9.5cm、下縁幅 9.2cm、敲打痕を有する上縁幅 5 cm、厚さ 7 cmを各々測る。

(49) は和泉砂岩の自然礫を利用している。長さ10.6cm・最大幅 5.5cmを測り、長軸の一端に使用痕が見られる。

〔勾玉状石製品〕（第285図51）

約2分の1を欠失する。直径 4.6cm・厚さ 0.5cm。中心孔は両面から錐によって穿孔されており内径は0.5cm。現存の重量は 8.6gある。石質から見て、石



第284図 第IX層出土遺物実測図（敲石）

庖丁の転用である可能性が高い。

〔管玉〕（第285図52・53）

(53) は、径0.6cm・長さ1.2cm・孔径0.4cmを測る。非常によく研磨している。穿孔は下の片面からであり、非常に器壁を薄くしている。ただ上端は最後まで穿孔しなかったのか、やや幅広

く壁が残っている。碧玉製である。(52)は、径1.05cm・長さ2.4cm・孔径0.5cmを測り、面取り気味の管玉である。一部表面を欠損している。穿孔は、両面から施し、両端面の孔径が最大で、中央で最小になっている。碧玉製である。

d 鉄器・青銅器

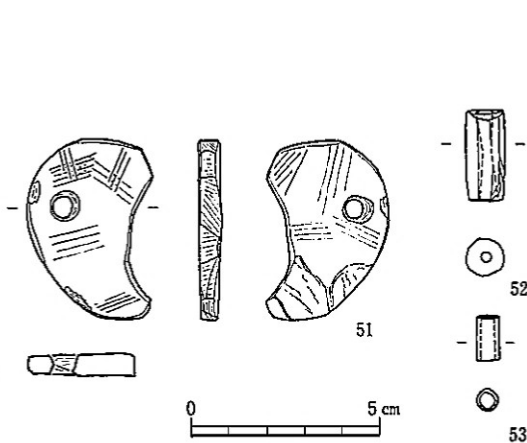
〔不明鉄器〕(第286図3)

細長い「タガネ」状の鉄器で、断面は方形を呈する。長さ8.9cm、厚さ0.5cm、刃部は約0.8cm。両刃状を呈し、やや彎曲している。一部に赤色顔料の塗布された痕跡がある。

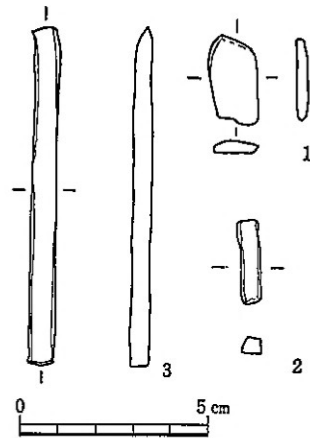
〔銅鍬〕(第286図1・2)

(1)は鍬身の一部と考えられる。現存長2.5cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmを各々測る。

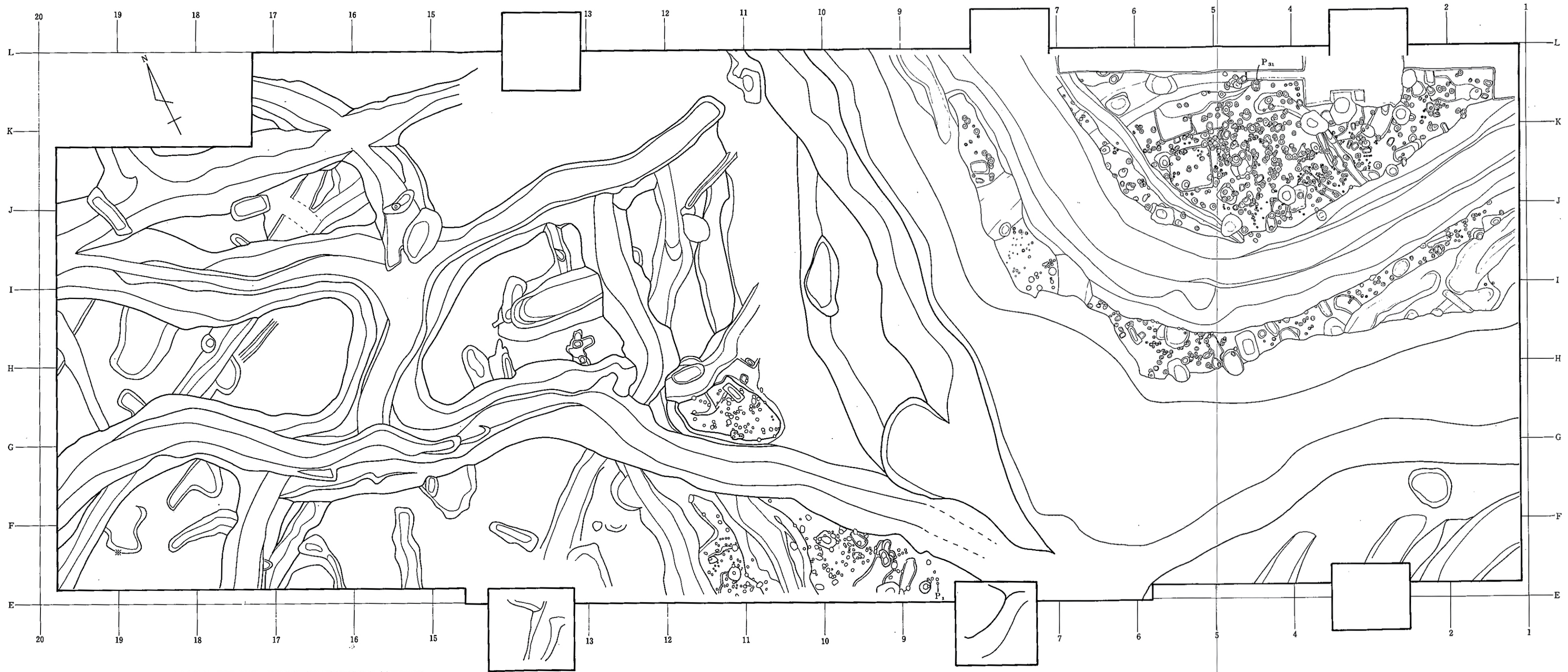
(2)は茎の部分と考えられ、断面方形を呈し、現存長2.2cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmを各々測る。



第285図 第IX層出土遺物実測図(勾玉・管玉)

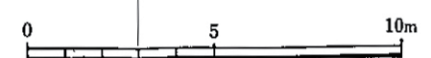


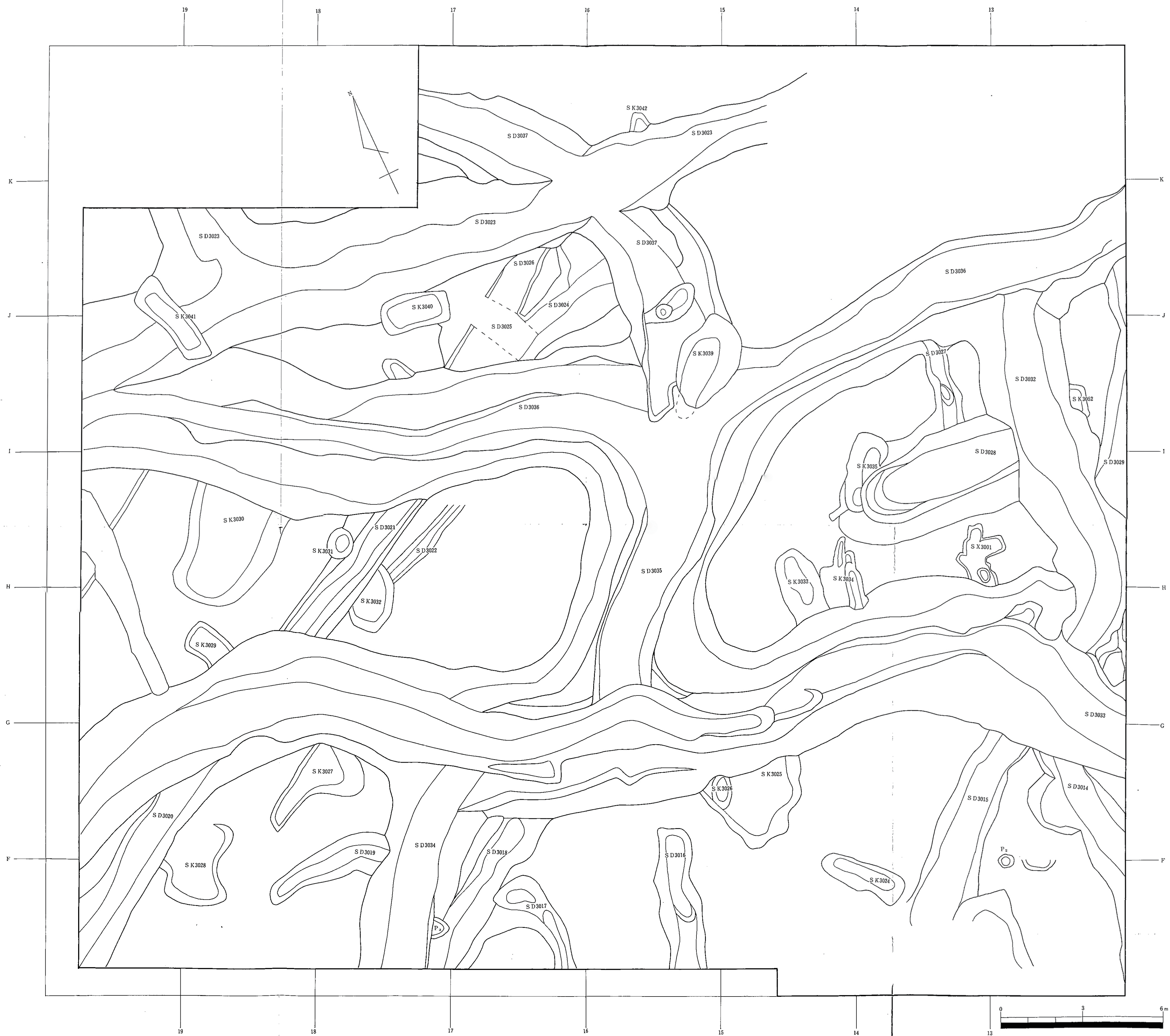
第286図 第IX層出土遺物実測図
(不明鉄器・銅鍬)



※発進竪坑部、第Ⅹ層以下の土層断面観察及び資料採集地点 (略記号HT)

第287図 弥生時代遺構全体図 (1/200)





第288图 弥生时代遺構全体图 (‰)



第289圖 弥生時代遺構全体図 (1/60)

第6節 古墳時代

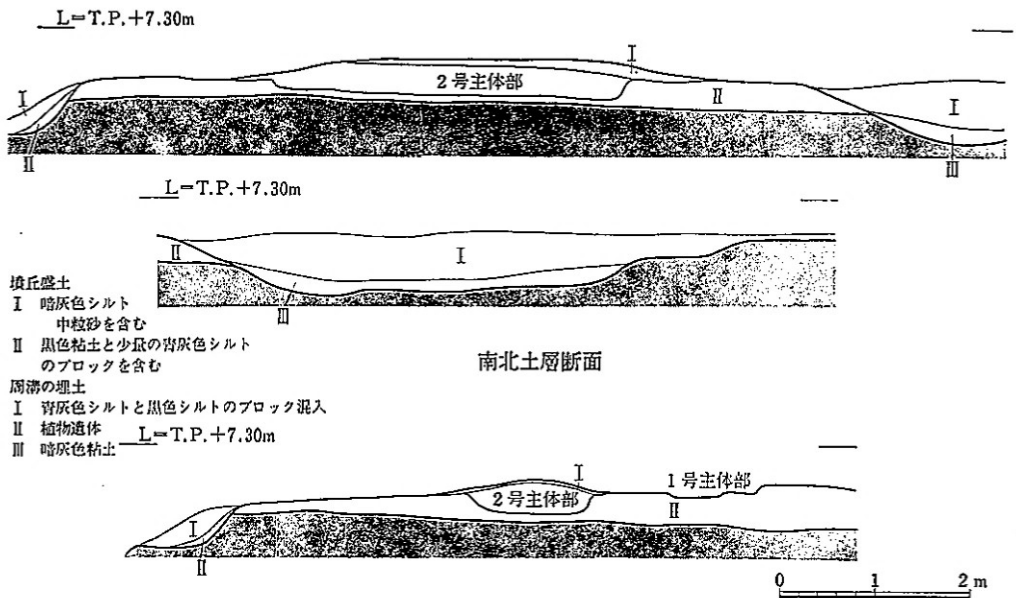
1 古墳

J、K-1・2地区 調査区の北東隅で一部の墳丘を消失した状態で検出された（第312図）。

a 墳丘

墳丘の東側部分が調査区外に広がっている為に全容は判明しない。しかし、調査区内での形状から、平面プランは方形を呈すると考えられる。全ての規模は判明しないが、西北側の1辺が完全に検出されており、約7mを測る。また、残存高は周溝底から約0.6mを測る。墳丘の一部を消失した時期は、NR3001の機能が停止し、沼沢地と成る頃である。

墳丘の築造は、青灰色シルト層（第Ⅶ層）の上面（T.P.+6.4~6.5m）に青灰色シルト（第Ⅷ層）・弥生時代の遺物包含層（第Ⅱ層）を盛土して行なわれている。調査時での状況は、この盛土が約0.4m残存し、その上に黄褐色シルトと細粒砂が堆積していた（第290図）。



第290図 古墳墳丘断面図（1/50）

b 主体部

墳丘の中央に並列して2基検出されている。

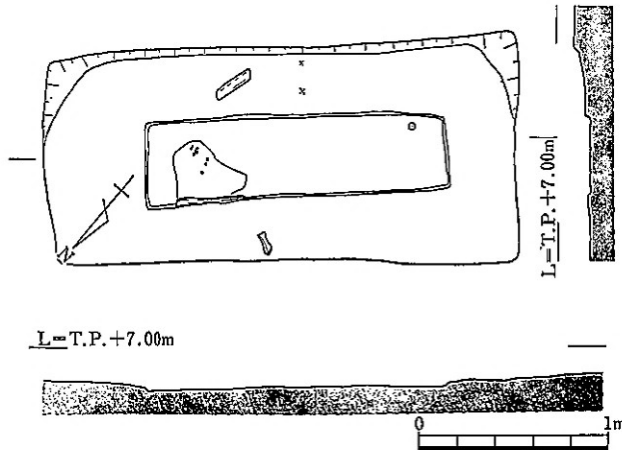
〔1号主体〕（第291図）

主体部は攪乱を受けており、土壙、木棺の一部の痕跡、残存から辛うじて木棺直葬の形態をとっているのが判明した。土壙の平面形は長方形を呈し、長辺2.5m、短辺1.15m、深さ0.03mを測る。木棺は殆んど消失していたが左側側板の一部が残存していたことから、側板長1.53m、小口幅0.45mと推定された。主軸方向はN-58°-Eを示す。

遺物の出土状況

棺外遺物としては、2号主体との間に砥石が1点、南東側に格子叩きをもつ須恵器甕の細片と鉄製品の細片が散らばっていた。

棺内に当たる部分からは、北東側に歯と頭蓋骨の一部と推測される人骨が検出された。また足元と推定される位置から竪櫛と鉄製の小型素文鏡が出土した。竪櫛は頭部に向かって左側側板、鏡は右側側板に近い所に位置している。



第291図 1号主体部実測図(1/40)

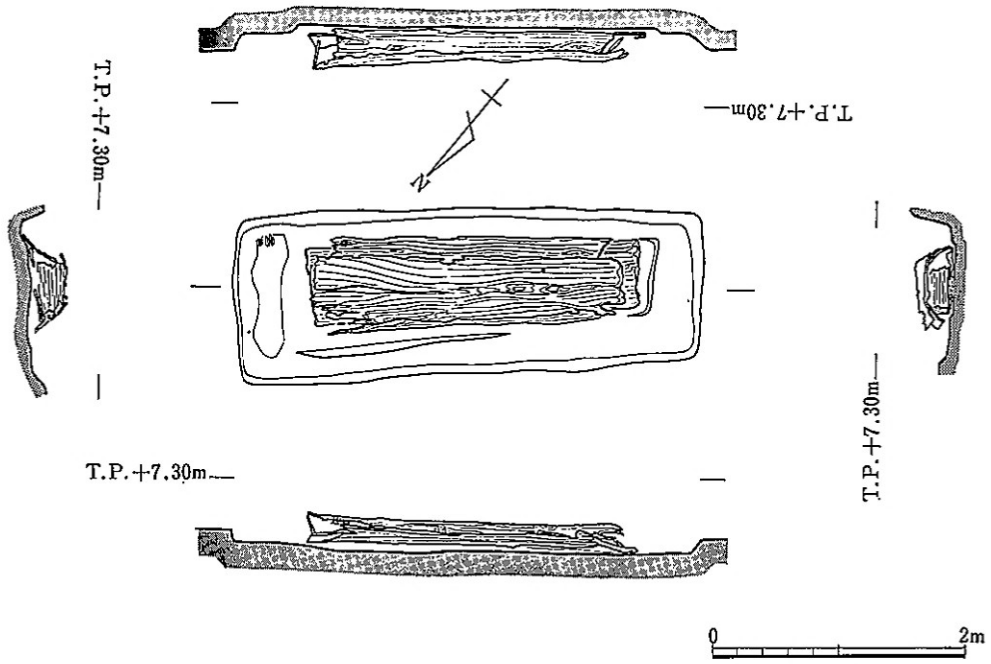
〔2号主体〕(第292図)

1号主体の北西側約1mに平行して位置している。1号主体と同様、木棺直葬であった。検出時の状況は、墓壙なり周辺の盛土が流出し、墓壙内の埋土の上半分が木棺を包み込むように土饅頭状を呈していた。この土饅頭の高さは、残存の盛土上面から約20cmを測った。

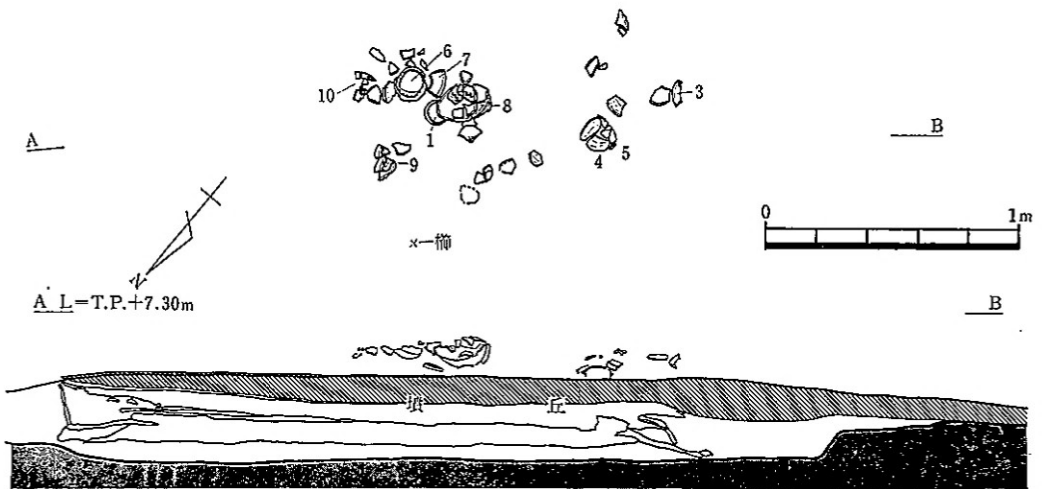
この土饅頭部分を除去すると、棺身が半分以上露呈した状態であった。また、墓壙の平面プランは長方形を呈している。この為、墓壙の深さは判明しなかったが、残存の長辺3.73m、短辺1.36m、深さ0.2mを各々測った。

検出された木棺は、各端部が腐蝕したりして確定できないが、組合せ式の木棺であったと推測される。蓋板は亀裂が入っていたが、蒲鉾形を呈していた。側板は2枚とも底板から外れ、「ハの字」型となっていた。また、小口は南西側は辛うじて残存し、北東側は上端部が薄くなっている。底板も蒲鉾形を呈するが、小口、側板端部が凹んでおり、はめ込み用の溝の痕跡の可能性もある。

各々の計測値は、蓋板が現存長約2.5m、最大幅約0.5m、厚さ0.02m、側板は右側現存長2.2m、最大幅0.35m、厚さ0.02m、左側は2枚に折れていたが現存長2.1m、最大幅0.6m、厚さ0.02m、小口板は南西側現存長0.2m、幅0.32m、厚さ0.02m、北東部側現存長0.17m、幅0.42m、厚さ0.01m、底板は現存長2.65m、幅0.6m、厚さ0.05mを各々測った。



第292図 2号主体部実測図(1/50)

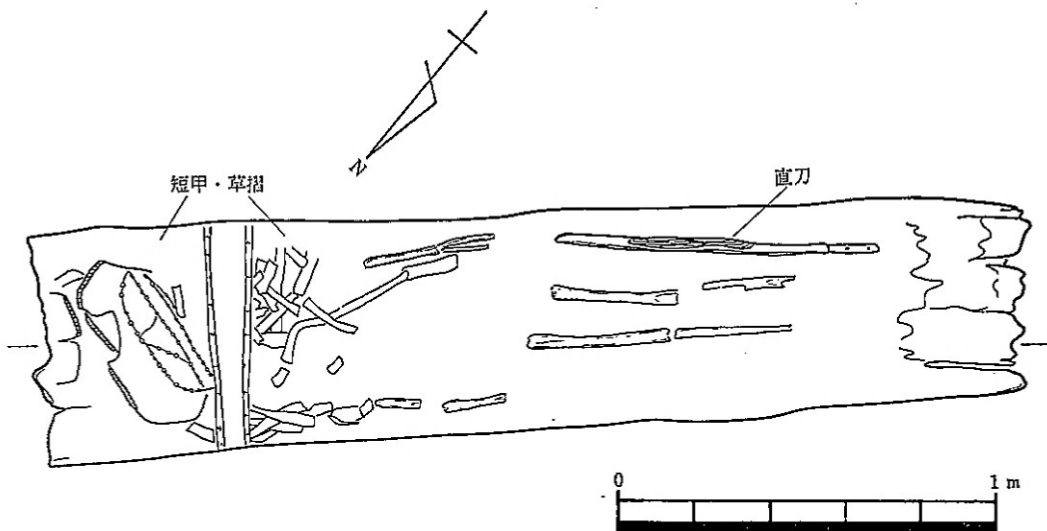


第293図 2号主体部棺上遺物出土状況実測図(1/50)

遺物の出土状況(第293、294図)

棺外遺物 蓋板より約5cm上に須恵器の杯蓋7点、壺1点、樽形甕1点、土師器高杯が1点、すべて破損した状態で出土した。また、北西側から木棺の横に位置する所に、辛うじて袋状を呈すると判明する鉄斧と竹製の堅櫛が出土している。更に墓壙の北東側、木棺から約0.2m離れて靱が検出された。鉄鏃が南東へ向いて9本と、靱本体に塗ってあった漆膜とが残存していた。

棺内遺物 蓋板を除去した棺内からは人骨と武具類が出土した。



第294図 2号主体部棺内遺物出土状況実測図(1/20)

人骨は北東に頭を向けた状態で検出された。人骨の保存状態は悪く、下顎の歯列の一部と腕、脚の骨が辛うじて判明する程度である。

武器類は刀、短甲、草摺、肩甲、頸甲が各々出土した。刀は左大腿骨の右側、刀先を頭位方向に向けて置かれてあった。把頭は消失していたが、表面に塗布してあった漆膜が残存し、表面に直弧文が施されていた。甲冑類は頭部上方から一括して出土した。蓋板を除去した時点では、三角板革綴短甲の押付け板が折れ曲がり、草摺はその構成している草帯が散乱した状態であった。頸甲、肩甲は短甲の内部より検出された。いずれも全て漆が塗られ、短甲などは漆膜だけが残存していた状態である。

c 周溝

周溝は北東、北西側とも後世の攪乱を受け、南西側の周溝だけが規模を知る事ができた。周溝の最大幅約4mを測った。周溝は墳丘のベースとなる青灰色シルト層上面から更に約0.2m掘り込んで造られていた。溝の埋土は南側の堤の盛土の一部であった。遺物は出土しなかった。

d 主体部の保存処理

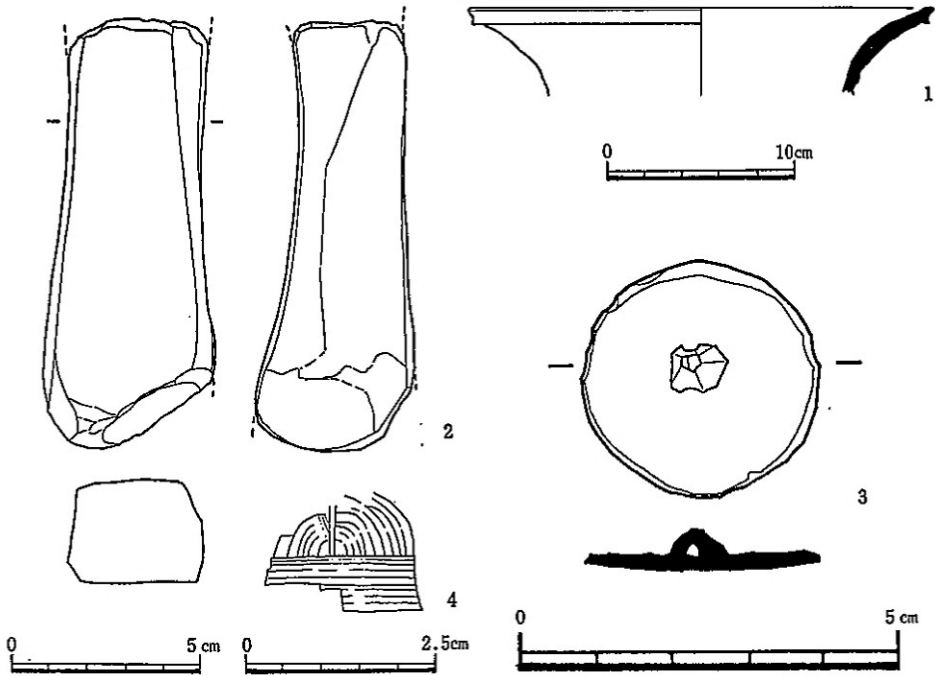
2号主体が検出されて内部から漆を塗られた短甲類が出土したことにより、木棺全体をそのまま発泡ウレタンで取り上げ、保存処理をする事が調査関係者一同によって決められた。この為に短甲、草摺等の確認、検出作業は室内作業と成り、現在も保存の為に化学処理が継続されている。

e 出土遺物

〔1号主体部出土遺物〕(第295図)

棺外遺物

須恵器 甕(1) 1/4程度の口縁部の細片である。残存の頸部は外反して外上方に伸び、端部はやや丸味をもつ。また、端部外面の一端を外下方につまみ出し、稜を成す。復元口径24.4cm、



第295図 1号主体部出土遺物実測図

残存高 4.5cmを測る。内面の頸部下位を不定方向ヘナデ調整している以外は回転ナデ調整を行ない、焼成は良好で灰緑色の自然釉をかぶっている。

砥石（2） 石質が細粒の和泉砂岩である。平面形はいびつな長方形を呈している。使用面は4面で中央部が窪んでいる。現存長は11.2cm、現存幅4.5cm、厚さ3.5cmを測る。長軸両端は欠損している。

棺内遺物

鉄鏡（3） 径3.06cm×3.16cmのややいびつな円形を呈する。厚さ1.5cm、反りは1mmである。中央部よりやや片寄った位置に鈕がある。鈕は5.2×7.0mmの楕円形である。素縁、素文である。

櫛（4） 竹ヒゴを束ね中央部を糸でくくった後U字型に折り曲げ、歯部と頭部の間を糸で巻きかため漆を塗るという古墳時代に通有の堅櫛であるが、漆膜が残っているだけである。歯部のすべてと、頭部の一部を欠失している。残存長約1.6cm、頸部幅約2.4cmを測る。ヒゴは厚さ1mm前後のもので10本以上を束ねている。

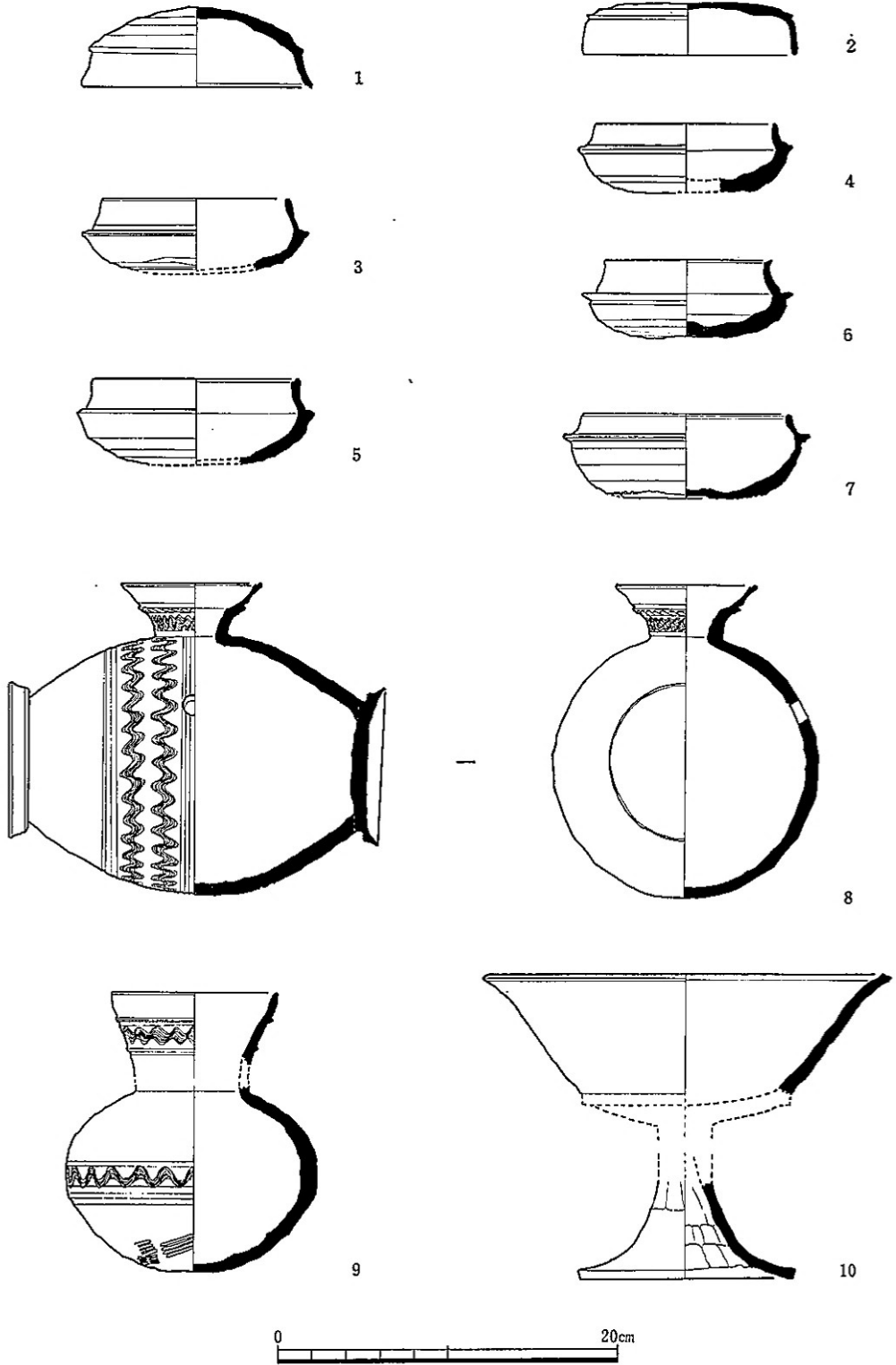
〔2号主体部出土遺物〕

棺上遺物（第296図）

須恵器 杯蓋（1、2） （1）は口径13.6cm、器高 4.5cm。口縁部の6分の1程度を欠損している。天井部は丸く高い。天井部と口縁部の境をなす稜は外方に突出している。口縁部はゆるく外反しており、口縁端部内面は明瞭な段をなす。天井部外面に自然釉が溶着している。外面は灰青色、内面は青灰色、断面は暗灰色を呈する。（2）は復元口径13.0cm、器高 3.7cm、天井部6分の1、口縁部10分の1程度が残存している。天井部は低く扁平で、口縁部との境をなす稜は外方に鋭く突出している。口縁部は垂直に近いが、外面がわずかに内彎気味である。口縁端部は丸い。天井部内面の不定方向のナデは荒い仕上げである。天井部外面に自然釉の溶着が見られる。外面及び断面は暗灰色、内面は青灰色を呈する。

杯身（3・4・5・6・7） （3）は復元口径11cm、残存高 4.2cm、底部中央部と口縁部2分の1弱が欠損しているが、底部はやや扁平な丸底と考えられる。受部は水平方向に伸びる。口縁部は内傾しており、中程から上部では口縁部全体がわずかに膨み気味である。口縁端部は丸い。天井部外面のみ暗灰色ないし青灰色、他は青灰色を呈する。底部外面に黒色粒が認められる。（5）は復元口径12.0cm、残存高 4.9cm。口縁部及び底部の8分の1程が残存しているだけであるが、底部は丸いと考えられる。受部は水平方向に伸びるが、底部との境がやや不明瞭である。口縁部と受部の境には凹線状をなす凹みが認められる。口縁部は内傾して立ち上った後、垂直に近く立ち上がる。口縁端部内面は明瞭な稜をなす。外面、内面、断面ともに青灰色を呈する。底部にヘラ記号がある。（4）は口径10.7cm、器高 4.1cm。底部は約2分の1と口縁部若干を欠損している。底部中央は平坦に近く、受部への立ち上がりは急である。受部は短かく、水平方向に伸びる。口縁部は内傾外彎気味に立ち上がり、そのまま口縁端部に至る。口縁端部は丸い。底部外面中央部には回転ヘラケズリの後、ナデ調整を施す。底部外面中央部のみ灰色、他は暗灰色を呈する。（6）は口径10.0cm、器高 4.5cm。底部の形状は（4）に近い。受部は強く水平方向に突出している。口縁部と受部との境には明瞭な1条の凹線状の凹みが存在する。口縁部は内傾した後、口縁端部直下で短かく外反する。口縁端部は平坦で内斜している。底部外面中央部の1.5×2cm程の範囲に回転ヘラケズリ後のユビオサエ痕が認められる。底部外面のみ青灰色ないし暗灰色、他は青灰色を呈する。受部3分の1程度を欠損している。（7）は復元口径12.2cm、器高 5.0cm、口縁部3分の1程度を欠損している。底部中央は平底に作られており、受部への立ち上りは急である。受部は短かく水平方向に伸びており、受部先端はやや鋭い。口縁部は短かく内傾しており、内面が膨みをもっている。口縁端部は丸い。底部内面中央部は1段高く突出している。底部外面中央部は回転ヘラケズリの後、強くナデ、ユビオサエを施している。内、外面は暗灰色を呈するが、外面底部には一部黄褐色の部分もある。断面は黄褐色を呈する。

壺（9） 口頸部と体部に2分されている。口径 9.8cm、胴部最大径14.8cmで、器高は約15.5cm程と推定される。胴部は球形に近い。口頸部は外反気味に立ち上った後、外傾内彎して口縁端



第296図 2号主体部棺上出土遺物実測図

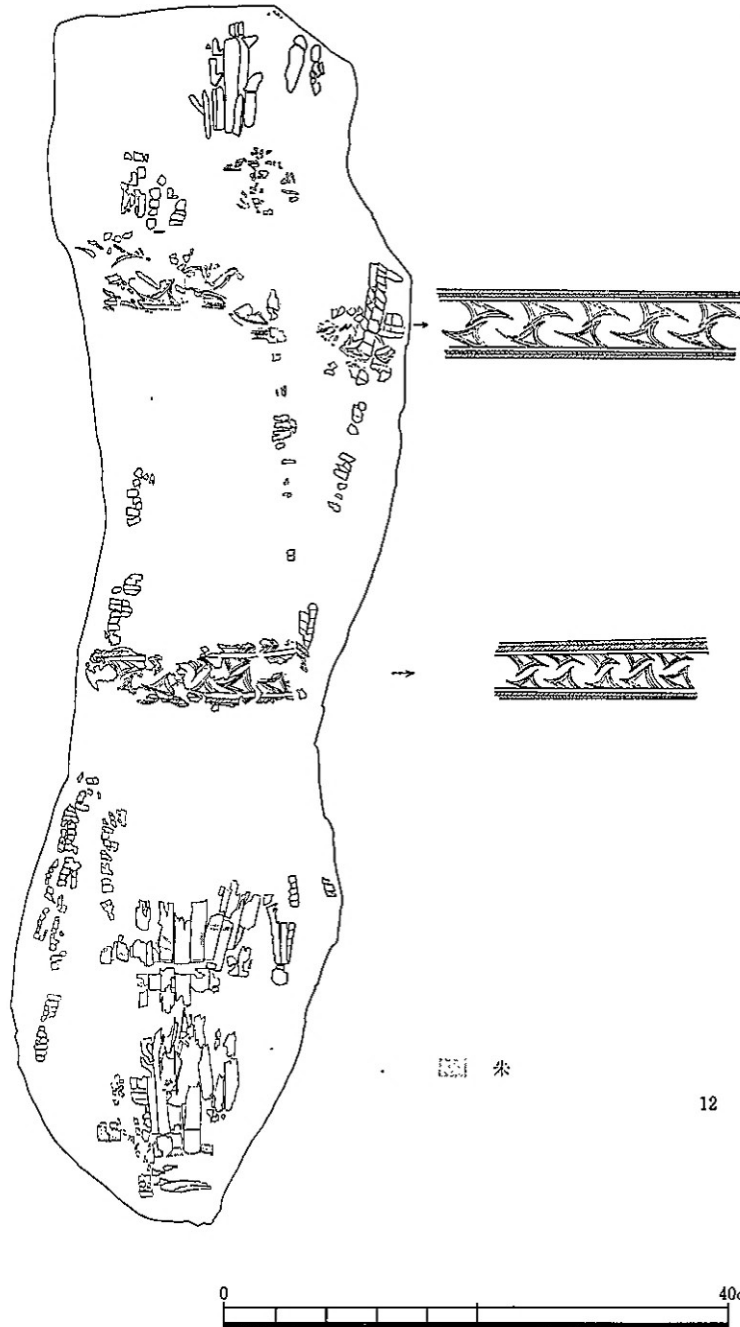
部に至る。口縁端部は丸い。口頸部残存高は 4.8cmである。口頸部には 2 条の断面三角形の凸帯がまわり、その凸帯の間と胴部中位には波状文が施されている。底部の外面には平行タタキ痕が、内面には青海波文が残されているが、内面には青海波文の上から荒いナデ調整が行なわれている。肩部には自然釉が溶着している。内、外、断面ともに灰白色を呈し、胎土に黒色粒が認められる。

樽形甕 (8) ビヤ樽形を呈する体部の中央部に細い口頸部を付す。器高18.4cm、体部の幅21.9cm、体部最大径15.2cm、体部の左右両端に付された被蓋の径 9.3cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり、中位で屈曲し、さらに外反する。屈曲部には 1 条の断面三角形の凸帯がめぐり、口縁端部は内面に明瞭な段をつくる。被蓋の外縁は屈曲して外反し、端部は突出している。口頸部下半には波状文が施されている。また、体部中央部には 2 条の、その左右には各々 1 条の低い突帯が縦方向に施され、中央と左右の突帯の間には各々 2 条の波状文が描かれている。口頸部中位の突帯の下面には断続したヘラ押えの痕が見られる。青灰色を呈し、肩部に自然釉が溶着している。

土師器 高杯 (10) 杯部と脚部に 2 分されている。杯部の復元口径23.2cm、残存高 5.1cm。底部を欠損しているが、平坦な底部から大きく外傾外反して口縁部に至る器形と思われる。脚部は裾広がりの形態で、径12.6cm、残存高5.8cmを測る。脚柱部下半の内面はヘラ削りされている。棺外遺物 (第297・298図)

鞆 (11) 革製漆塗りであったと考えられるが、鞆本体の文様帯、覆輪及び矢柄の一部等に塗布されたと考えられる漆膜が残るのみである。漆膜の残存状況から、鞆本体では文様帯、覆輪だけに漆が塗られていたと考えられる。覆輪に塗布されたと考えられる漆膜は、左右の側縁付近及び底部付近に認められる。左右のそれは、幅 0.5cm前後に細かく割れた帯状のものであり、覆輪の状況を詳細に明らかにすることはできないが、革紐によるものと考えられる。また、底部のものでは、撚るか綴じたような痕跡がみられる。底部の覆輪から38.5cm上には、1 条の文様帯があり、幅約 4.5cmを測る。上下に各 1 条の綾杉文を配し、その間に三重の直弧文状の文様を上下各 1 対ずつ 5 対描いている。この文様帯の約31.5cm上方にも同様の文様帯で 1 条存在するが、この部分は漆膜の乱れがひどく、中央部のそれに比べ残りは悪い。但し、文様・幅ともに中央部の文様帯に比べ、一回り大きく描かれていることは明らかである。全体の規模、形態は、必ずしも明確ではないが、中央部の文様帯の左右幅が約19cm、上部の文様帯のそれが約25cmを測ることを根拠にすれば、中央部が細く、上下に広がる形態と考えられる。また、高さは埴輪鞆を参考にし、上部の文様帯が口縁部を成すとすれば76cm前後となる。

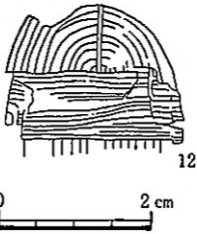
矢は上方に残る鉄鏃、鞆底部の中央にある矢柄の痕跡と考えられる漆膜から、最高 9 本を数える。鉄鏃はすべて有茎柳葉形と考えられ、最も残りのよいもので、茎を含めた長さ 8.7cm、最大幅 1.5cmを測る。漆膜の状況から、矢柄のうちの鏃茎付近と末端付近には漆が塗布されていたものと考えられ、特に末端部と末端部から12cm前後の部分には、糸状のものを巻いていた痕跡が顕



第297図 2号主体部出土縄実測図

著である。これは矢羽の装着に関係するものであろう。

なお埴輪靴を参考にすると、靴の上には鱗状の突起をもつものが多く、福島県会津大塚山古墳例でも鱗の存在が想定されているが、本例では、出土位置から鱗の存在は考え難く、三重県石山古墳例と同様、鱗をもたない形態であったと考えられる。



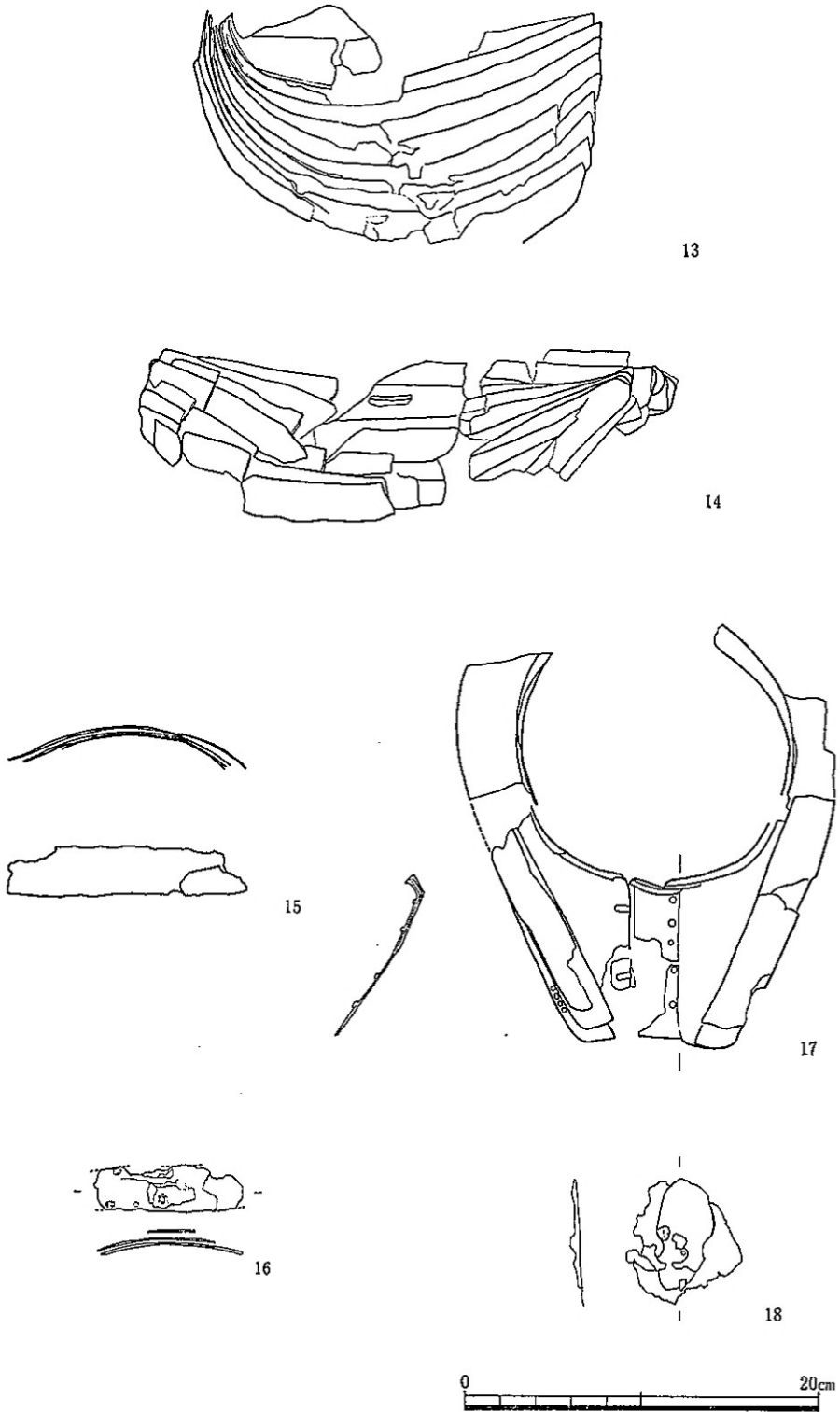
第298図 2号主体部棺上
出土遺物実測図

櫛（第12図） 1号木棺出土のものと同様の竖櫛で、漆膜のみ残存している。歯部のすべてと頭部の一部を欠失している。頭部幅 2.3cm弱、残存長約 1.9cm、ヒゴは厚さ 1mm弱で12本を束ねている。

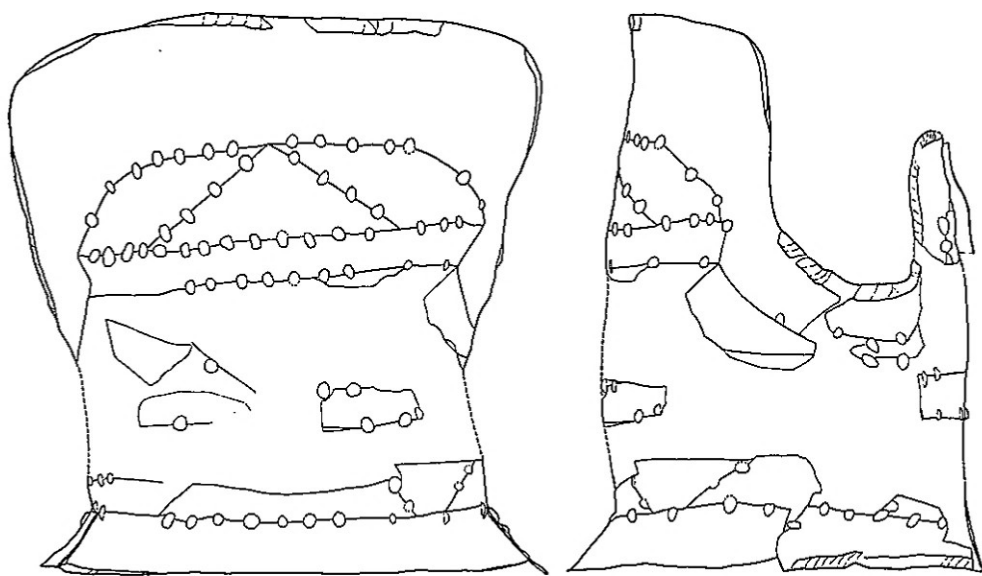
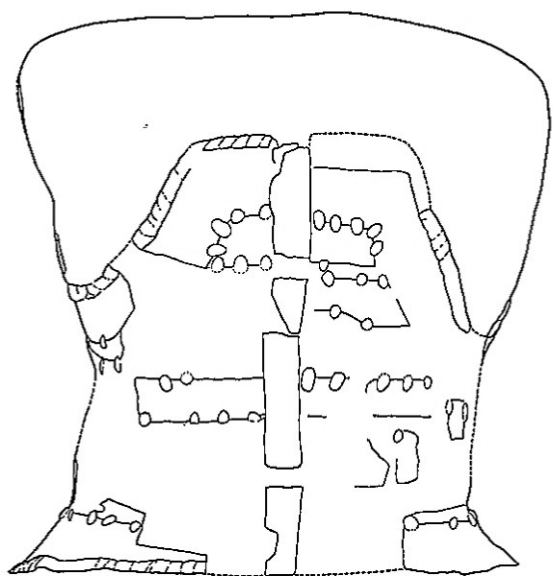
棺内遺物（第299・300・301図）

冑（第299図） 本体は、黒漆の漆膜の細片を残すのみで形式等は明らかではない。但し、径 0.3cm前後の鋳留痕と考えられる孔が漆膜の間に多数認められ、鋳留の冑であると思われる。また、冑の一部と考えられる小鉄片が2つ出土している。(16)は、現存長 8.5cm、幅 2.7cmを測る。上下の縁辺付近には、径 0.3cm前後の鋳が計4個存在し、また表面に冑本体の鋳留痕と同様の孔を残す小鉄片が付着している。全体にゆるく内彎しており、冑の腰巻板の一部と考えられる。黒漆が塗布されている。(18)は、黒漆の漆膜の上に付着した現存長7.0cm、最大幅3.1cmの鉄片である。出土状態から冑の上につけられる三尾鉄の一部と考えられる。

短甲（第300図） 遺存状態が極めて悪く、多くの部分では短甲の表面に塗布された黒漆の漆膜だけが残っているだけであった。しかし、奈良国立文化財研究所において復元・保存処理を実施していただいた結果、残存状態の比較的良好であった堅上・裾板を中心に全体の概要を推定することが可能となった。堅上3段、長側4段の通有の三角板革綴短甲である。復原高左右の脇部に堅板の痕跡が全く認められず胴一連の形式と考えられる。引合板は幅3cm前後で、左前胴式である。前胴堅上第1段は、中央部での幅 4.7cmを測る1枚板である。後胴堅上第1段の押付板も1枚板で、中央部では最大幅 9.3cm、左右の幅 5.1cmを測る。押付板と前胴堅上第1段の1枚板は、左右脇部で綴じ合せたものと考えられるが、詳細は明らかにし得なかった。前・後胴ともに、上端には革を編んだと思われる覆輪の痕跡が良く残っている。前胴第2段は、幅 4.3cmで台形の1枚板を使用している。後胴第2段は中央部での最大幅 8.1cm、中央部に頂点を上にして底辺20cmの三角板を置き、その左右に各1枚の台形板を使用している。綴じ合せの上下関係は明らかにし得ない。堅上第3段は、前・後胴ともに帯金を使用しているが、その幅は前胴が3cm、後胴が3.2cmと前・後胴と異なっている。長側第1段及び第3段の地板の配列については、第1段では後胴の右脇部近くに1枚、中央部の左側に1枚の地板の破片が残り、第3段では、後胴の裾板に鏽着した状態で3枚の地板が残っているが、詳細を明らかにすることは出来なかった。但し、第1段、第3段共に右脇部近くに残る地板は、前胴側が垂直に近い辺となっており、脇部には、第1段、第3段共に三角形以外の地板を使用していた可能性が強い。長側第2段は帯金を使用しており幅 3.2cmを測る。帯金が1枚板であるか否かは明らかではない。長側第4段の裾板で



第299図 2号主体部棺内出土遺物実測図



19



第300图 2号主体部棺内出土遗物实测图

最大幅 5.5cmを測る。前胴の左右各 1 枚の裾板を両脇部で後胴の裾板に綴じ合せており、全体で 3 枚の裾板を使っている。綴じ合せは、後胴の裾板の上に前胴のそれを重ねたものと思われる。下端には、堅上第 1 段上端と同様の覆輪の痕跡が残っている。

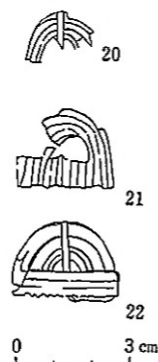
頸甲（第 299 図）（17） 前部から背部に至る 2 枚の板の各 1 部と、前部の当板の一部が残るだけであるが、前後各 2 枚、左右各 2 枚の 4 枚板を使用した通有の形式のものと考えられる。前部から背部に至る 2 枚の板のうち、右側の板は残存前後幅 15.7cm、同左右幅 3.5cm、左側のそれは各々 23cm、4.3cmを測る。左右共に、内側には頸の曲線に合せた半円形の割り込みがある。割り込みの周縁は 0.8cmの幅で上方に折り返し、更に 0.3cmの幅で水平方向に外側に折り曲げ襟状につくっている。当板は、残存左右幅 2.7cm、同上下幅 10.7cmを測る。当板は右側の板と鋳留されている。左側の板の当板と接する縁辺には、上下 3.5cmの幅で、長さ 0.7cm、幅 0.3cm、高さ 0.4cmの長方形の突起がある。この突起の左側面には、鏝着し埋まっているが抉りの入っていた可能性が強い。当板の左側縁が残っていないため確定は出来ないが、着用時に当板と左側の板を固定させるための紐掛けのようなものと考えられる。全体に黒漆が塗布されている。

肩甲（13・14・15） 左右両肩分が出土している。U字形に彎曲させた薄い鉄板を外重ねに緘したものである。鉄板は、完形のものでは長さ 37cm、幅 2.5cmを測り、前後の端部は下方が丸くつくられている。頸甲の左右の板にも一部付着しており、これと頸甲から分離したものを加えると、緘されている板は現状では最高 14 枚である。頸甲の左側の板に付着している 3 枚の板の前端部近くの下辺に、径 0.3~0.4cmの緘孔が横一列に 3 つあいている。鉄板の上辺には緘孔の認められるところはなく、鉄板の下辺相互を綴ることにより緘紐にゆとりをもたせて、可動性をもたせたものと思われる。しかし、各鉄板を何か所で綴ったかは明らかにできなかった。全体に黒漆が塗布されている。

草摺 短甲の下部から遺骸の頭部付近にかけて、幅 2.5cm前後の黒漆塗りの紐状のものが多数散乱した状態で出土した。紐の片面には細かな二重の鋸歯文状のものが、一方の面には櫛歯文状のものが多数認められた。綴じ痕と考えられる。黒漆塗りの革製草摺りと考えられるもので、岡山県月の輪古墳の出土例や、草摺り形埴輪等によれば、鋸歯文状のものが認められる面が表であろう。全体の詳細な形態等は明らかにできなかった。

櫛（第 301 図）（20・21・22） 3 個出土した。1 号木棺、2 号木棺外出土のものと同様の堅櫛で、3 個とも漆膜のみ残存している。2 個は頭部のみ残存しており、（20）は頭部の小破片である。3 個ともにほぼ同様の大きさで、頭部がほぼ完存している（21・22）は頭部幅 1.3cm前後、残存長 1cm前後を測る。ヒゴは厚さ約 0.8cmで 8 本を束ねている。1 号木棺内・2 号木棺外出土のもの比べ、2 分の 1 近くの大きさである点が注意される。

小結 亀井古墳出土遺物のなかで、当古墳の時期をもっともよく示すものに、2 号木棺上方から出土した須恵器がある。蓋杯・樽形甕・壺からなるこ



第301図 2号主体部
棺内出土遺物実測図

これらの須恵器は、蓋杯の一部に、口縁端部内面が内傾する平面をなしたり（6）、明瞭な段をなす（1・5）、口縁部が垂直に近く、天井部が低く扁平である（2）などの、中村氏により第Ⅰ型式第3段階の特徴とされる形態（中村 1978）が見受けられるが、他の蓋杯や壺の形態、第Ⅰ型式第3段階の特徴を、その一部に有する蓋杯の他の部位の形態などには、中村氏によって第Ⅰ型式第2段階の特徴とされる形態（中村 1978）が、より多く認められる。このように、本古墳出土の須恵器には、第Ⅰ型式第2段階の特徴とされる形態と、第Ⅰ型式第3段階の特徴とされる形態が混在しているものようである。しかし、陶器窯における須恵器は、第Ⅰ型式第3段階に形状が統一されるといわれており（中村 1978）、本古墳出土須恵器にみられるような新旧両時期の特徴が混在しているという現象が、形状の不統一ということの意味するものであるならば、その点において、これらの須恵器は第Ⅰ型式第2段階の時期に比定できるものであろう。なお、これらの須恵器が第Ⅰ型式第2段階に比定されることについては、伴出した樽形甕が、第Ⅰ型式第2段階に最も多くみられる器種であるとされている（中村 1978）ことによっても傍証されるものと考えられる。

次に、これらの須恵器の年代観については、中村氏の一連の論考のなかでは、必ずしも明確にされていない（中村 1976・1977・1978）。このため、田辺氏によって5世紀中葉に近い後半とされるTK 216型式（田辺 1966）が、中村氏の第Ⅰ型式第2段階とほぼ同時期と考えられる（中村 1976）ことを根拠として、本古墳の須恵器についても5世紀中葉に近い後半と考えることができる。なお、5世紀中葉に近い後半という年代は、古墳時代を3時期に区分する立場からすれば、中期後半に位置づけられるものと考えられる。

次に、須恵器の年代観を、副葬品の年代観と比較し、須恵器の示す年代観によって古墳の時期を推察するのが適当であるか否かを検討することとする。副葬品中で、もっとも後出の遺物と考えられるものには、1号木棺内出土の鉄製小形素文鏡、2号木棺内出土の甲冑類のなかの鋳留技法による頸甲がある。小形素文鏡が古墳から出土している例には、大阪府カトンボ山古墳（森・宮川 1953）、和歌山県大谷古墳（樋口・西谷・小野山 1959）などいくつかの例がある。また、福岡県沖の島16・20号遺跡（岡崎編 1979）、奈良県山の神遺跡等の祭祀遺跡からの出土例も多い。滑石製玉類、模造品類と伴出することが多く、古墳時代中期中葉前後に多く見られる遺物であると考えられる。一方、鋳留手法による頸甲も、甲冑の鋳留技法そのものが中期前半から中葉以降に出現する技術であり、また、大阪府野中古墳（北野 1976）・黒姫山古墳（末永・森 1953）、西小山古墳（梅原 1932）、奈良県円照寺墓山1号墳（佐藤・末永 1930）などからの出土が知られている。

以上のように、2号木棺上方から出土した須恵器群と、副葬品の間には、年代観のうえからは大きな齟齬はないものと思われる。よって、本古墳は古墳時代中期後半、実年代でいえば5世紀中葉に近い後半に位置づけられるものと考えられる。

〔註〕

- (1) ここでいう小形素文鏡とは、径3cm～5cm程度のものをいい、径10cm近くを測るものは合めていない。ただし、素材の点では、青銅製・鉄製を含んでいる。

〔引用文献〕

- 梅原末治 1982 「西小山古墳とその遺物」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯 大阪府
- 岡崎敬編 1979 「宗像沖ノ島」宗像大社復興期成会
- 北野耕平 1976 「河内野中古墳の研究」大阪大学文学部国史研究室研究報告2、大阪大学
- 佐藤小吉・末永雅雄 1980 「墓山第1号古墳調査」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第11冊 奈良県
- 末永雅雄・森浩一 1953 「河内黒姫山古墳の研究」大阪府文化財調査報告書第1輯 大阪府教育委員会
- 田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群」I 平安学園考古学クラブ
- 中村浩 1976 「大野池、光明池地区の須恵器編年に関する諸問題」『陶邑』I 大阪府文化財調査報告書第28輯 大阪府教育委員会
- 1977 「出土遺物の分類と編年」『陶邑』II 大阪府文化財調査報告書第29輯 大阪府教育委員会
- 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』III 大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会
- 樋口隆康・西谷真治・小野山節 1959 「大谷古墳」和歌山市教育委員会
- 森浩一・宮川渉 1953 「カトンボ山古墳の研究」古代学叢刊第1冊 古代学研究会

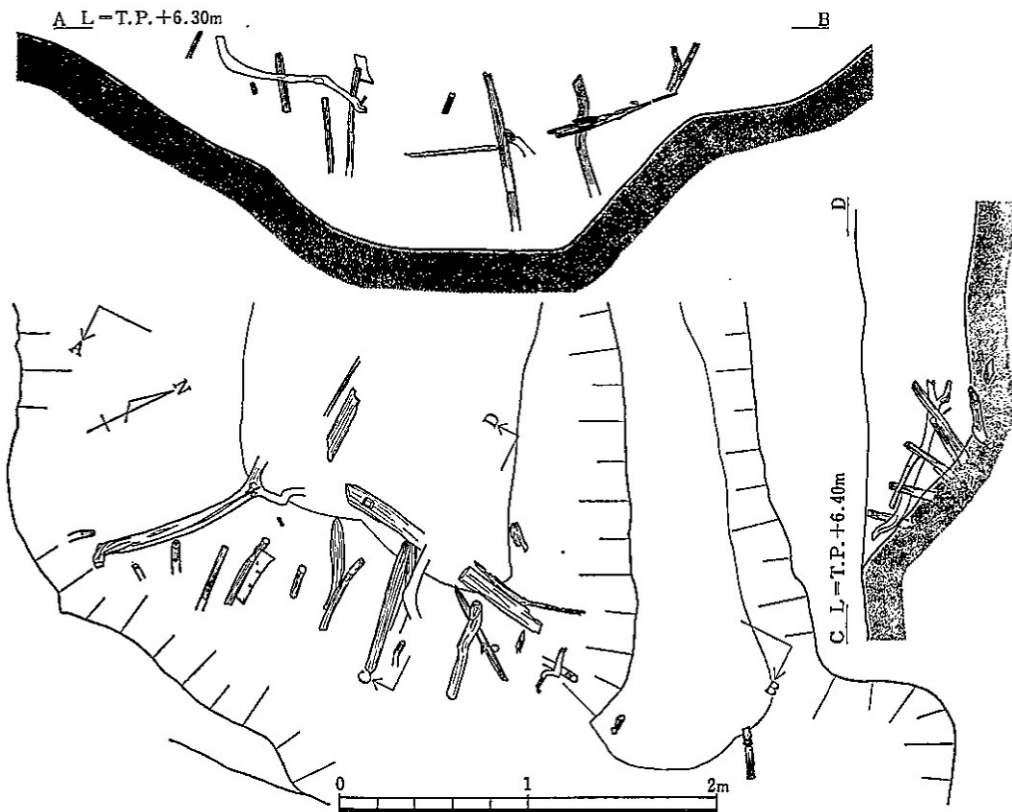
2 堤

堤は、E・F・G-1・2・3区で検出された。幅7~8m、T.P.+4.90m付近まで粗砂で埋没したNR3001の上にほぼ直交して南北に築かれている。堤の幅は上端で6m、下端で9~10mを測り、断面は台形を呈する。堤の築造はまず、NR3001に直交して流れに逆らわないように杭を約10mの間隔をおいて10数本ずつ打ち込んである。その杭列間に草本類を敷き（西側では杭の上にかぶせてある）その上に青灰色シルト、黒色シルト、灰色粘土のブロック層を置き、さらにその上に草本類を敷く、その作業を数回くり返している。上層1mは青灰色シルト・黒色シルト・灰色粘土のブロック盛土層で、草本類を敷いた痕跡はない。堤はいちばん高い所で1.5~1.8mを測る。北側へも盛土は薄くなりながらも続き、古墳の周溝も埋め調査区外へと続く。南側は南側トレンチで明確ではないが、NR3001の南肩部の傾斜と盛土上面から推定して連壁付近で終るものと考えられる（第303・304図）。

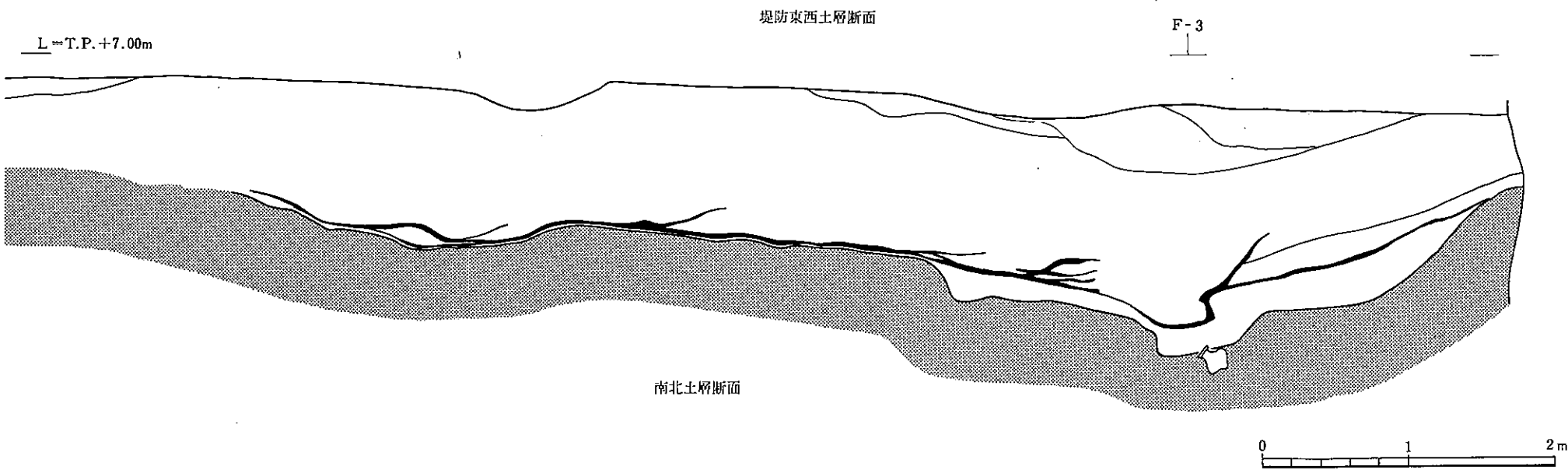
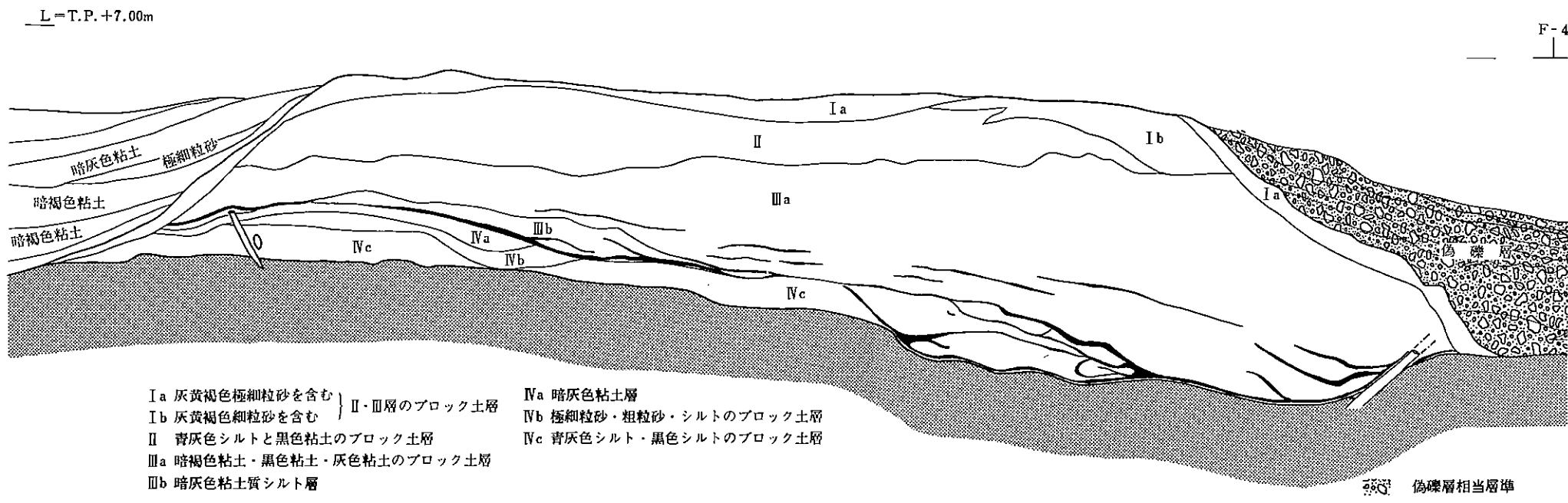
出土遺物（第305・306図）

〔木器〕

杭（1・2・4）（1）は、上部と先端を欠失するが、現存長は47.5cm、直径は太い部分で9.2cmである。（2）は上部を欠失するが、現存長は59.9cmある。先端は砂層に打ち込まれた際



第302図 堤西側杭列出土状況平面図及び見通し図（1/40）

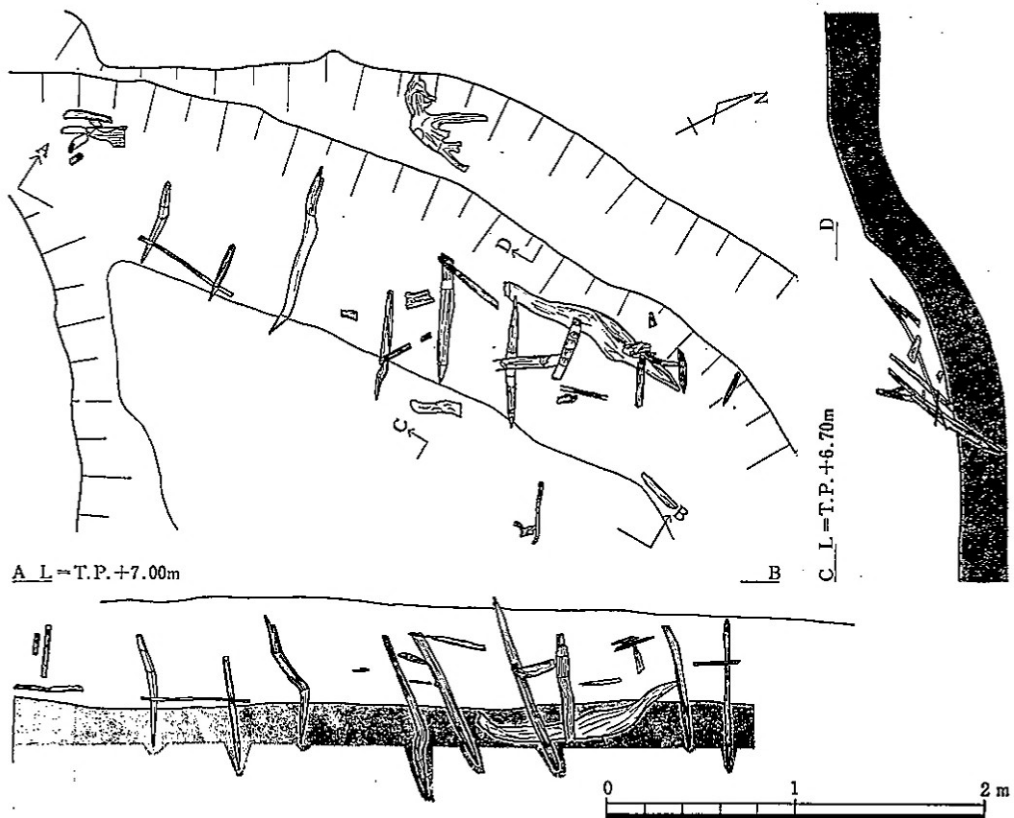


第303図 堤土層断面図 (1/40)

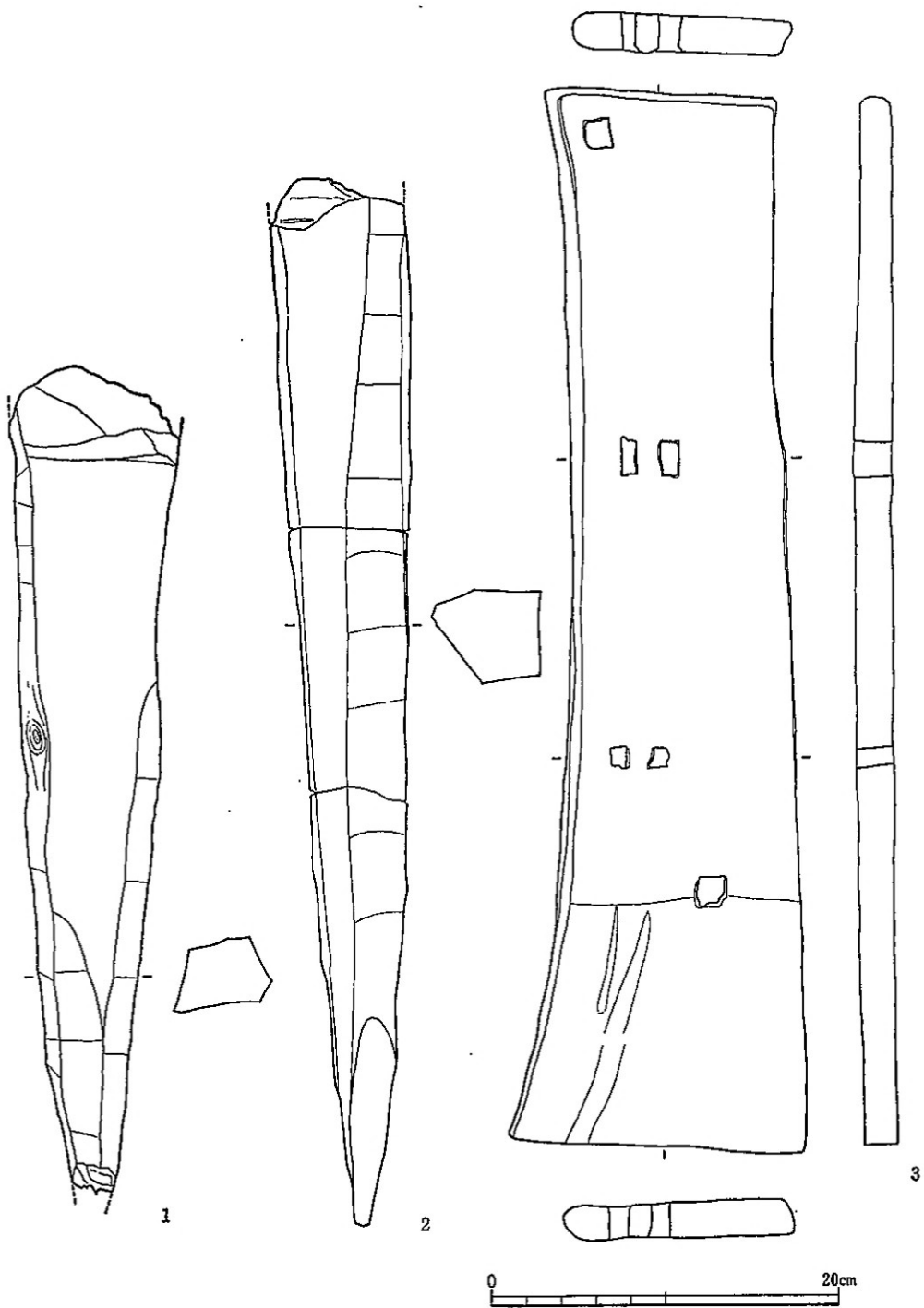
につぶれている。(4)は上部と先端を欠失するが、現存長は44.0cmである。(15)と(21)は、いずれも丸木をみかん割りにした原木に面取りを施し、先端をとがらせたものである。

樫(5) 柄と身の大半を欠損しており、約27.2cmが現存する。柄幅3.0cm、最大幅7.5cm、最大厚2.0cmを測る。身の周縁は0.5cmと薄く仕上げ、断面形は菱形を呈する。全体に摩滅しており、調整痕については観察できなかった。

有孔板状木製品(3) 杭列内の横木に転用されていたものであるが、本来どのような性格の木製品であるかは不明である。長さ60.5cm、中央部の幅12.6cm、厚さは約2.3cmで全体にほぼ一定している。幅は両端がやや広く、一方の長辺がゆるやかな円弧を描いているため中央部でやや狭くなる。この辺の断面形は半円形を呈する。6ヶ所に方形ないし長方形の穴が穿たれている。中央よりの4孔は2孔ずつセットになり、外側の2孔は対角線上に位置している。穿孔には丸ノミ状の工具が用いられており、一単位の工具痕から見て刃部の幅は0.6cm前後と考えられる。表面は腐蝕しているが、ヤリガンナによる仕上げ痕が一部残っている。



第304図 堤東側杭列出土状況平面図及び見通し図(1/40)



第305图 堤杭列出土遺物実測図

3 水田

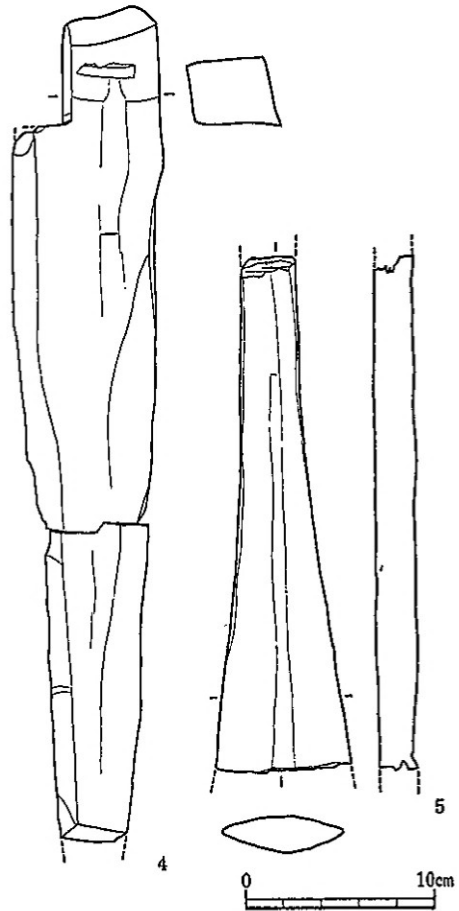
調査区南西区（E～H-15～19区）の褐色粘土層の上部で検出された。上層には、2～8cmの厚さで灰白色シルトが堆積し、これを除去すると畦畔と「島状高まり」が検出された。畦畔は褐色粘土で構成されており、盛土された痕跡は認められなかった。基底幅0.4～0.9m、上端幅0.2～0.4m、高さ0.1～0.2mを測る。「島状高まり」は、E・F-18区で西側の約半分のみが検出された。現存部分では、長軸3.8m、短軸1.5m、高さ0.2～0.4mの楕円形を呈する。上面は平坦で断面形は扁平な台形を呈する。「島状高まり」から更に西へ延びる畦畔が1条検出された。水田の全形を知り得たものではなく、規模、平面形、計画性については明らかにできなかった。水田面からは足跡・農耕具跡は認められなかった。用水路などの明確な取水・排水施設は検出されなかったが、H-17区で検出された畦畔の西端が途切れており、「水口」の存在が考えられる。調査区東側には大規模な堤が築かれている。水田が使用されている時にはまだ機能しており、水田と何らかの関係を有していたと思われる。

褐色粘土層は、厚さ5cm～15cmを測り、更に下層には厚さ7～15cmで黒色粘土の小ブロック・細砂を含む暗灰色粘土層が堆積している。乾田特有の酸化鉄、マンガン団塊は認められなかった。褐色粘土層、暗灰色粘土層は基本層序第Ⅶb層の直下に介在する粘土を含む植物遺体層である。水田は、その後に起こった第Ⅶa層の堆積によって埋没してしまう。

水田面、耕土中からは遺物を出土しておらず、水田の使用年代は知ることができなかった。しかし、堆積された時期は、本水田の存在期間も第Ⅶ層の状況から第Ⅳb層と平行する時期と考えられる。

4 SX4001（第313図）

古墳や堤が築かれた後、NR3001の検出中央部、6ラインより西側、11ラインより東側、Eラインより北側、Iラインより南側の範囲に楕円形に大きく掘り込まれた遺構である。東西径約23.5m、南北径約19m、深さ約4mで、最深部はH-7区付近でT.P.+2.5mに達する。



第306図 堀坑列出土遺物実測図

遺構の掘り込みはNR3001の堆積土（第Ⅶ層）を掘り込み、H-6～8区ではNR3001の北側肩部になる第Ⅶ層以下の層を掘り崩している。この為、H-6～8区、遺構の東側になる壁は垂直に近くなっている。また、他は、約30°の角度をもって急斜面と成っている。

埋土は3層からなる偽磔層（第Ⅶ層）が主体である。各偽磔層には弥生式土器、須恵器の完形品に近いものが出土し、更に、最大径約0.4mの角磔状の粘土塊をも含んでおり偽磔を構成している。これらの偽磔は、この偽磔の基質が粗粒砂～細礫と成る流速（自然の水の力）では、土器や粘土塊が運ばれる事はなく、遺構の遠くない所で人為的に投げ込まれたものと考えられる。

遺構自体の性格は不明であるが、H-6～8区では第Ⅶ層以下の土層一特に第Ⅰ層以下が、第Ⅷ層の粗粒砂層を除去する事により、第Ⅳ層以下の層が、他の地域で掘削するより簡単に露呈させる事ができる。この事から、あくまでも推測であるが、第Ⅰ層以下の粘土等を利用する際の採掘坑と考えることもできる。

出土遺物（第307・308・309・310・311・313図）

〔土器〕（1～25） 土師器と須恵器が出土した。

土師器、埴（17） 復元口径9.4cm、最大腹径7.5cmを測り、体部外面はヘラ削り、内面はナデ調整である。

須恵器 蓋杯、高杯、甕、台付短頸壺、壺、器台が出土した。

蓋杯（1・2・3・4・5・6・7・8） 杯蓋（1・2）と杯身（3・4・5・6・7・8）がある。「陶邑Ⅲ」の編年によれば、Ⅰ型式に属するものがほとんどである。（1・5）はⅡ型式に属す。（1）は復元口径15.2cm、器高5.3cmを測り、天井部はやや扁平である。退化しつつある稜をもち、口縁端部は内傾し段をなす。天井部にヘラ記号の一部が残存する。ロクロは左回りである。（2）は復元口径12.7cmを測り、稜はやや鋭く、口縁部は丸い。天井部に自然釉がかかり、回転ヘラケズリが明瞭でない。（3・4・5）は復元口径10.5cm前後の杯身で、受部は（3・4）が水平、（5）がやや上向き、立ち上がりは内傾し、端部は丸い。色調は、（3）が口縁部と内面は紫灰色の他は灰色、（4）が外面灰青色で内面は灰色、（5）が灰色である。（5）は底部にヘラ記号が若干残存する。（6・7）は静止ヘラケズリ調整で古式の様相をもつ。（6）は復元口径10.2cm、器高3.5cmを測り、体部はやや扁平である。外底面は静止ヘラケズリ調整である。色調は灰色で、底部は白灰色である。（7）は復元口径11cm、器高5.5cmを測り、体部はやや丸みをもつ。外底面は静止ヘラケズリ調整で、底部はその上をナデ調整する。外面は灰青色、内面は灰色を呈す。（8）は復元口径12.4cmで、受部はやや上方に突出し、立ち上がりは内傾する。端部内面は段をなす。ロクロは右回りで、色調は灰色である。

高杯形土器（9・10・11・12・13・14・15・16） 有蓋高杯（9・10・11・12）と無蓋高杯（13・14・15・16）に分かれる。（9・10）は有蓋高杯の蓋で中央の凹むつまみをもつ。（9）は復元口径14.1cm、器高5.4cmを測り、天井部は低く扁平である。稜線が明確で、天井部は回転ヘラケズリである。暗灰色を呈す。（10）は口径12.9cm、器高6.2cmを測り、天井部は丸く高い。

稜はやや退化気味であり、天井部は回転ヘラケズリと思われる。暗灰色で灰をかぶっている。

(11) は口径11.5cm、器高10.6cmを測り、体部はやや扁平で、口縁部はやや内傾気味に外反し、端部は丸い。体部下半部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整の他は回転ナデ調整である。灰色を呈する。(12) は口径12.2cm、器高10.8cmを測り、受部は水平にのび、体部に比べて小さい。口縁部は内傾し、端部は丸い。暗灰色を呈す。(13) は口径13.1cm、器高 8.6cmを測り、体部に凸帯が施され、口縁部はやや短く外に開き、端部は丸い。脚は稜をもち、2段の裾部になる。体部外面が回転ヘラケズリ、内面がナデ調整、脚部内面が指押えナデの他は回転ナデ調整である。灰色を呈す。(14) は静止ヘラケズリ調整で古式の様相をもつ。復元口径15cmを測り、口縁部と体部に凸帯が施され、口縁部は外傾し、端部は面をなす。脚部は稜をもち、2段の裾部になる。透し穴は丸く1個しか残存しない。体部下半部は静止ヘラケズリ調整である。白灰色を呈す。

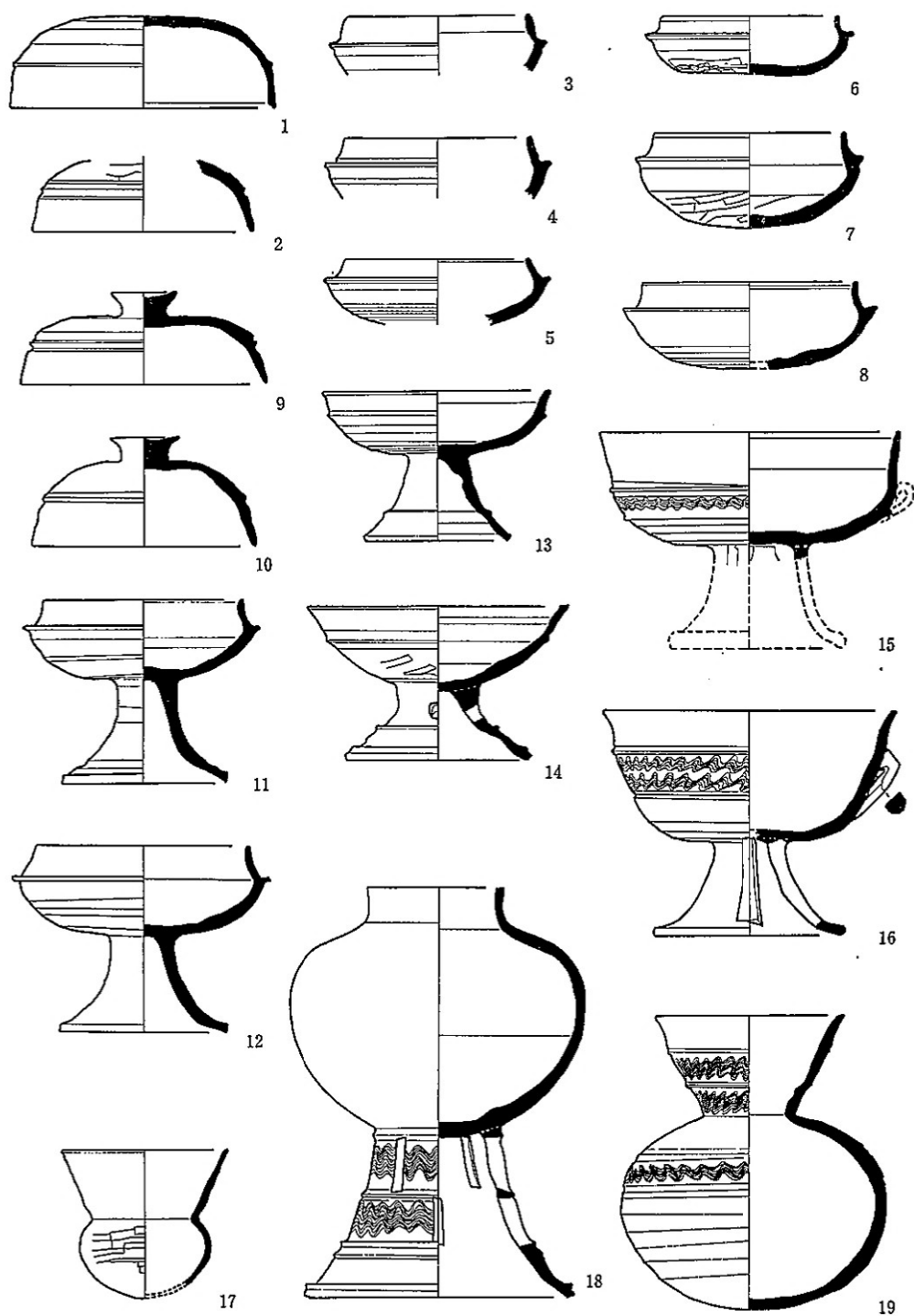
(15) は口径17.4cmを測り、体部に凸帯2本で区切られ波状文1帯が施される。一方に縦位の把手があったと思われる。杯部下半部外面は回転ヘラケズリ調整である。青灰色を呈し、内面に自然釉が見られる。(16) は口径17cm、器高13cmを測り、体部に凸帯と凹線に区切られ2帯の波状文を施す。一方に把手が縦につく。透し穴は長方形で4ヶ所に施す。杯底部外面は回転ヘラケズリ調整である。暗黒灰色を呈す。

甕形土器 (22・23・24・25) (22) は復元口径25.4cmを測り、頸部に凸線を4本施し、その間を波状文で飾る。肩部外面は格子タタキ調整で、内面に青海波文が若干残る。灰青色を呈し、内面は自然釉がかかっている。(23) は復元口径15.2cmを測り、頸部に3本の凸線を施し、その間を波状文で飾る。灰青色を呈する。(24) は復元口径18.9cmを測る。暗赤褐色を呈す。(25) は復元口径15.6cm、最大腹径20.6cmを測り、胴部下半部外面は平行タタキを施し、肩部はカキメ調整である。内面は回転ナデ調整である。暗灰色を呈し、口縁部に自然釉がかかる。

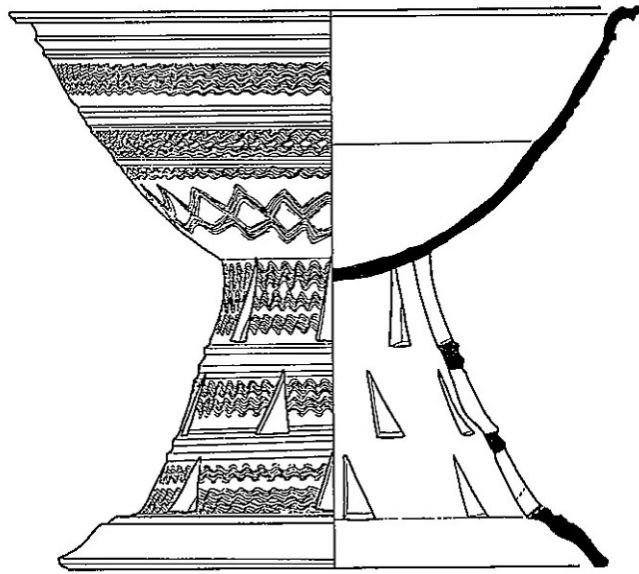
台付短頸壺 (18) 復元口径 7.7cm、器高23.5cm、最大腹径17cmを測る。脚部は3帯の凸線を施し、その間に13条の波状文を飾る。透し穴は方形で交互に2段に施す。上段は推定6個、下段は5個である。体部下半部外面はヘラケズリの上を回転ナデ調整を施す。回転は左回りである。暗灰色を呈す。

壺 (19) 口径10.9cm、器高17cm、最大腹径15.5cmを測る。口頸部に2本の凸帯を施し、その間と下に波状文を飾る。胴部にも波状文を施し、その後上下に凸帯を施す。体部下半部はヘラケズリ調整である。ロクロの回転は左回りである。暗灰青色を呈す。

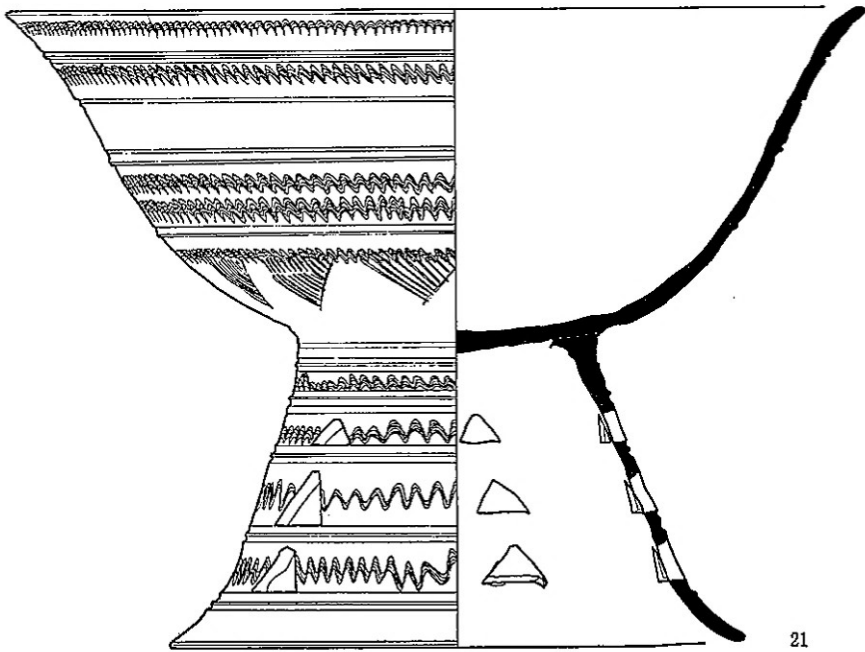
器台 (20・21) (20) は復元口径33.4cm、器高29.4cmを測り、口縁部は短く外反し、端部は上方に突起する。体部と脚部をそれぞれ3条の凸帯で区切り、波状文を施す。体部下半には荒い波状文を2帯施す。透し穴は三角形で3段あり、交互にずれて21個ある。黒い灰色を呈する。内面全体と、口縁部と脚部の一部に自然釉がかかる。(21) は復元口径45.2cm、器高33.8cmをはかり、口縁部は外反気味に丸く終る。体部は4条、脚部は5条の突帯で区切り、波状文を施す。体部下半にヘラで鋸歯文を描く。透し穴は三角形で3段あり、6ヶ所に施す。青灰色を呈し、脚部



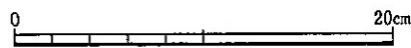
第307图 S X 4001出土文物实测图



20



21



第308図 S X 4001出土遺物実測図

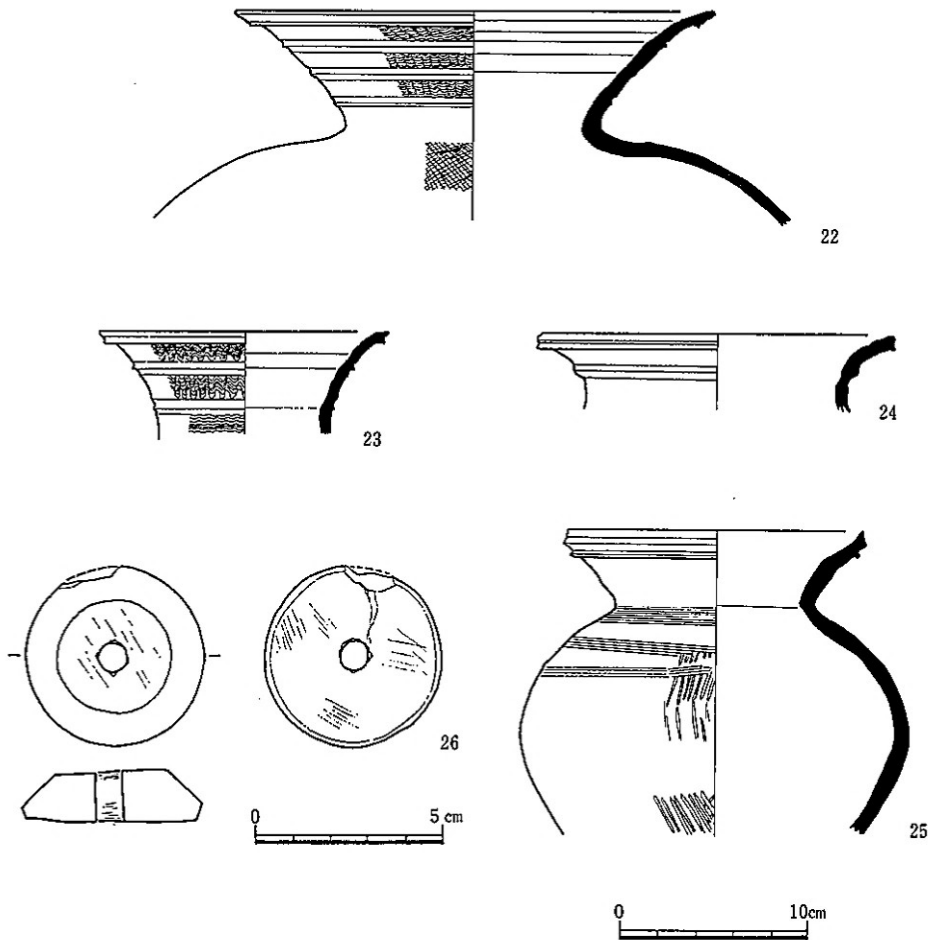
と口縁部の一部に自然釉がかかる。

〔石器〕

紡錘車 (26) 滑石製で直径4.8cm、厚さ1.3cm、重量は48.7gある。中心の穴の内径は0.7cmで断面形は截頭円錐形を呈す。全面を丁寧な研磨で仕上げているが、周縁は研磨とは違って磨滅によるツヤが出ている。実用品であると考えられる。古墳時代に属す紡錘車はこれ1点である。

〔木器〕 (30・31)

代掻 (30) 弥生時代後期の溝SD3032埋没後の窪みに堆積した暗褐色シルトと灰色細砂の互層から出土した。層位的には、基本層序の第5層と同時期の堆積層である。代掻は、現存長28.1cm、約4.4cm四方の方形の断面形をした台木に方形ないし長方形の穴を穿ち、角柱状の歯をはめ込んだものである。現存する歯穴は4ヶ所で、うち3ヶ所に折損した歯が残っている。台木の一端を欠くが、本来歯は5本あったと推定される。また、台木の中央には、2.1×4.7cmの長方形を呈する着柄孔が歯穴と直交して穿たれる。柄は、中央の歯によって台木に固定されたと考え

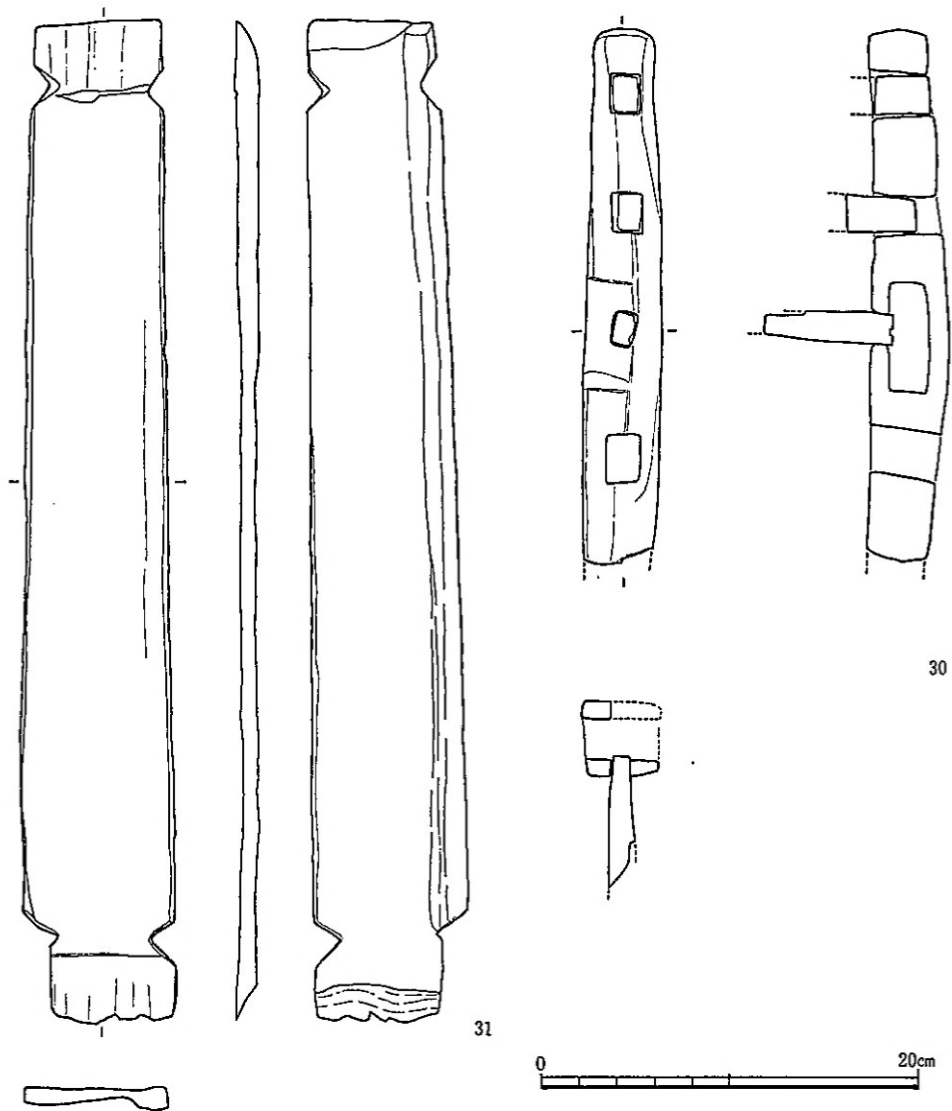


第309図 SX4001出土遺物実測図

られる。台木の推定復元長は約33cmになる。

静岡県伊場遺跡では、8世紀後半～9世紀初頭の例としてこれとほぼ同じ大きさ、形態の代搔が報告されている⁽¹⁾。ここに報告した例は、相伴する遺物（主として須恵器）が古式の様相を呈する須恵器であることからこの須恵器（第307図）とあまり変わらない時期であることは確実で、代搔がこのような早い時期に完成した形態を備えていた例として興味深い。

織具(31) 長さ52.9cm、幅7.7cm、厚さ1.3cmを測る。両端近くの両側縁に三角形の抉り込みを有し、一面には両側縁の抉り込みをつなぐように細く浅い溝を彫る。また、他の一面は両側を斜めにそぎ落している。全体に腐蝕が著しく、工具痕は明瞭でない。



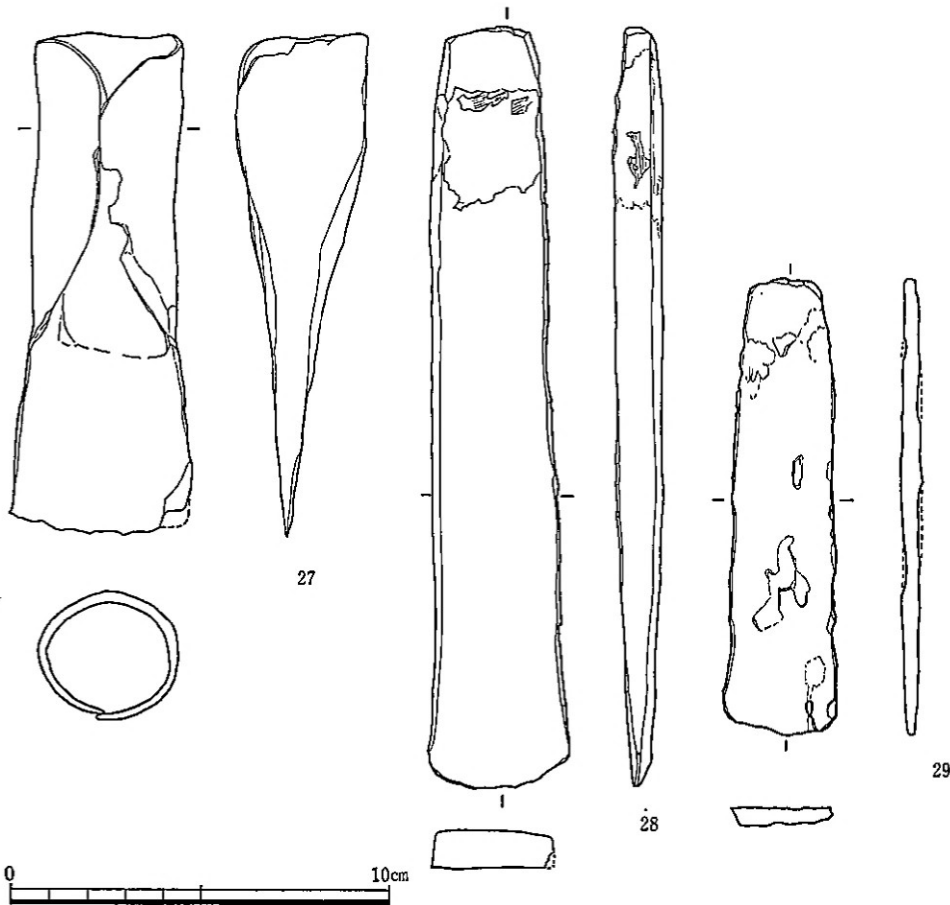
第310図 SX400I出土遺物実測図

〔鉄器〕 (27~29) 短冊形鉄斧2本、袋状鉄斧1本が出土した。

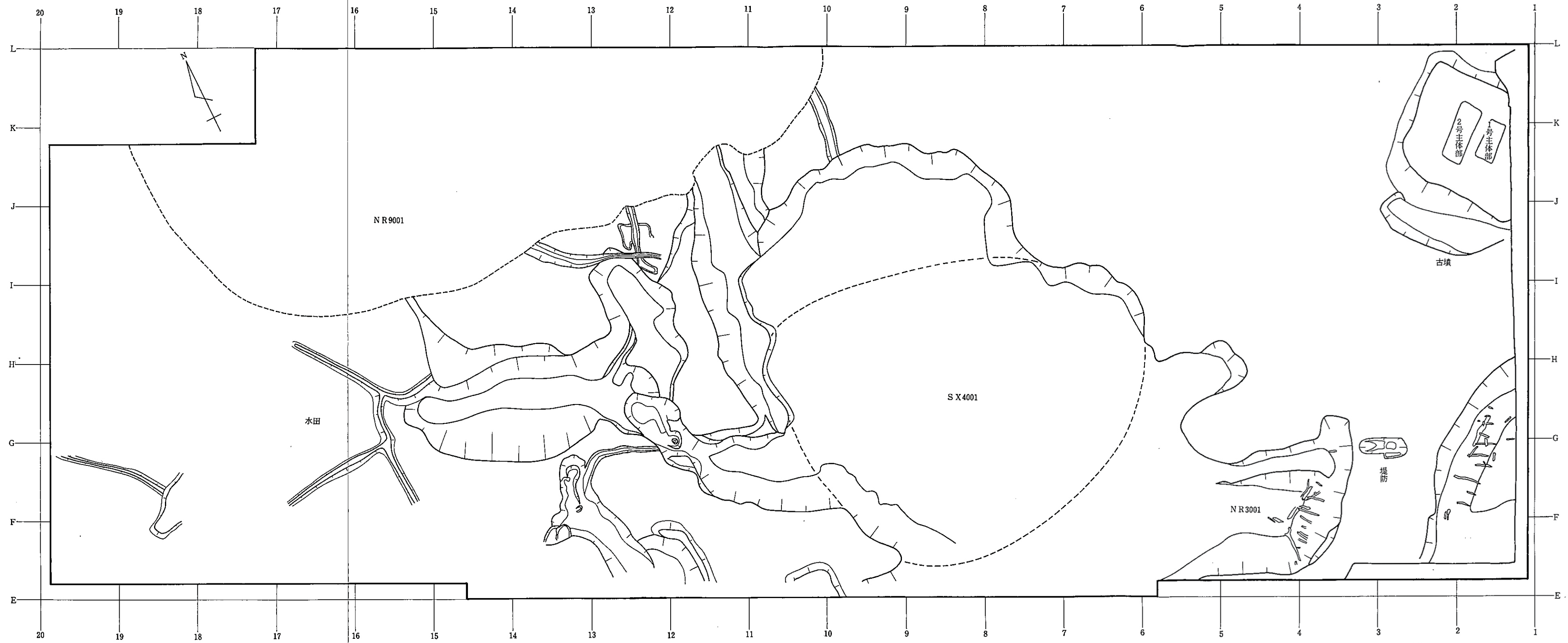
鉄斧 (27・28・29) (27)は袋状鉄斧、(28・29)は短冊形鉄斧である。(27)は全長13.3cm、刃部幅4.8cm、厚さ0.9cm、重さ235gを各々測った。上部は左右から付き合せて袋部を形成している。袋部長は8.4cm、断面がやや楕円形となっているが、径3.4cmを測った。(28)は全長20.5cm、基部の幅2.9cm、刃部幅3.7cm、厚さ1.1cm、重さ395gを測る大形の鉄斧である。形態は刃部にかけてやや幅を拡げる。刃部は両刃で左側が磨滅している。また基部には柄の着装痕が残存し、その幅は3cmを測った。(29)は全長12cm、基部の幅2cm、刃部幅3cm、厚さ0.45cm、重さ68gを各々測った。形態は刃部にかけてやや幅を拡げる。刃部は両刃を成し、全体にやや腐蝕が進んでいた。

〔青銅器〕

銅鐸片 (32) 5×2.2cm大で厚さは1~1.5mmを測る鈕の一部である。下端が少し上へ折れ曲っており、色調は錆で黒灰色を呈するが地は赤銅色である。文様や鈕の大きさ等から扁平鈕式銅鐸の4区画袈裟文鐸で高さ23~5cmぐらいのものと推定される⁽²⁾。現存する類似の銅鐸には、大



第311図 SX4001出土遺物実測図



第312図 古墳時代遺構全体図 (1/200)

阪府・四条畷2号、滋賀県・山面2号、岐阜県・上呂2号、和歌山県・新堂石井谷2号、岡山県・種松山、徳島県・安都真1号（種松山と同範）等がある。

銅鐸細片が発掘中に見つかった例として、奈良県・纏向遺跡、大阪府・利倉遺跡、大阪府・池上遺跡、愛知県・朝日遺跡等がある。いずれも突線鈕式銅鐸の一部であり、細片として見つかった中では、これが一番時期がさかのぼる。

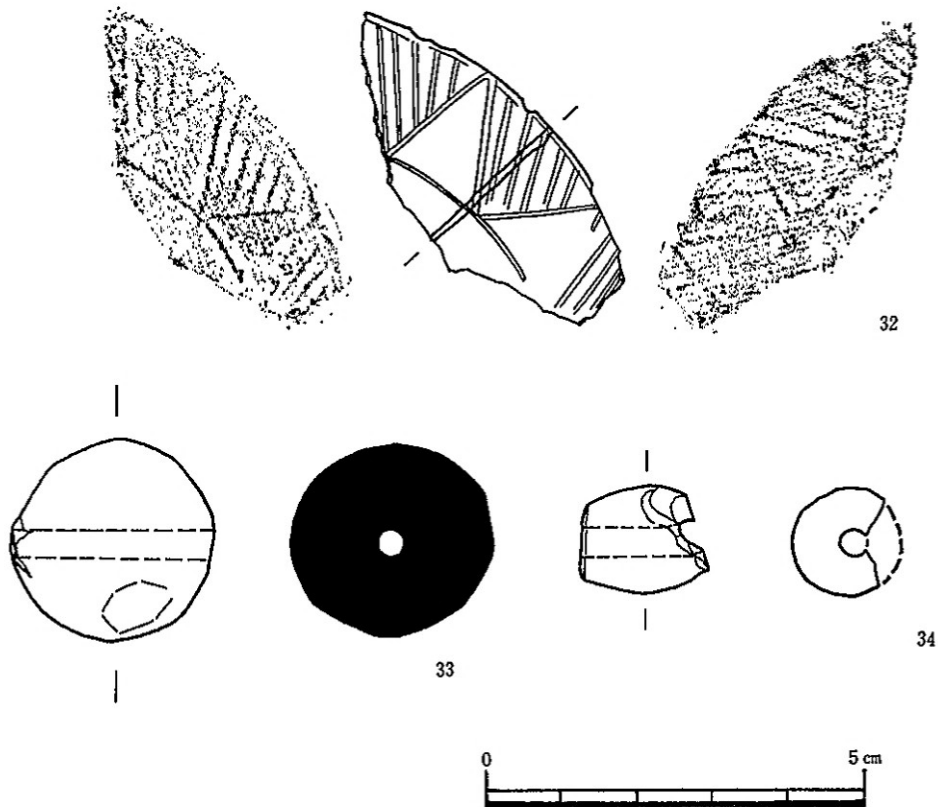
〔玉類〕

土玉 (33) 径 2.6cmを測る球形のものである。ただ1ヶ所だけ0.9×0.9cm大の平坦な面がある。穿孔は焼成前に両側から施している。孔径は 0.4mmである。丁寧になでている。生駒西麓型の胎土である。

稗玉 (34) 径1.45cm、現長1.75cmを測る。3分の1を欠損する。アメ色を呈し、琥珀製と思われる。

〔註〕

- (1) 浜松市教育委員会「伊場遺跡遺物編1」伊場遺跡発掘調査報告書第3冊 1978
- (2) 佐原 真氏に御教示願った。



第313図 S X 4001出土遺物実測図

第 7 節 飛鳥時代・藤原時代

SX4001 (第 313 図) 第Ⅳb層上面より約 0.5m掘り下げると暗灰色粘土(第Ⅴ層)が検出された。この層を除去すると、平面形が長楕円形を呈する大きな落ち込みが検出された。

この長径は約37m、短径約22m、深さ1.5mを測り、底部の標高はT.P.+5.7mを測った。長径が南北方向を示している。この落ち込みの肩部は緩斜面となっている。

堆積土は暗灰色粘土で、この粘土内には肌色の塊状の炭酸第一鉄や藍色の藍鉄鉱を多量に含んでいる。また、植物遺体が多量に出土した。遺物は土師器、須恵器が出土し、他に木器、特に下駄が出土した。

この埋土の状態や自然遺物の出土などから、この落ち込みは滞水の状態となっており、沼沢地状に成っていたと考えられる。

この沼沢地が形成されたのは、NR3001が東側の堤により西、北への流れが塞ぎ止められた後の偽礫層に代表される水の流れにより、西、北側のSX4001が埋没し、大きな凹地となり、この大きな凹地に周囲の水が流入したりして、滞水域となったと考えられる。SX4001の埋没過程での最終的地形であり、NR3001の流路が後世にまで地形に影響を与える程いかに大きなものであったかを示している。

出土遺物(第314・315・316図)

〔土器〕 須恵器の杯蓋、土師器の杯、埴が出土した。

須恵器 蓋杯 身(1)と蓋(3)が出土した。(1)は復元口径10.8cm、器高3.5cmを測る。受部は外上方にのび、端部は丸い。たちあがりは短かく内傾し、端部は丸い。体部外面は $\frac{3}{4}$ まで回転ヘラケズリ、底部は切り離れたままで未調整、安定が悪い。内面は回転ナデ調整と底部内面は不定方向へのナデ調整である。ヘラ記号が底部外面にある「キ」。(3)は復元口径10.4cm、器高3.2cmを測る。擬宝珠のつまみ、内面にかえりをもつ。口縁部は外下方に下り、端部は丸く、内側にやや短いかえりが付く。かえりの端部は丸い。天井部はやや丸味をもつ。外面は $\frac{3}{4}$ が回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。内面は不定方向へのナデ調整である。

土師器 杯(2・4・5・6・7) (2)は復元口径10.8cm、現高3.5cmを測り、口縁部がほぼ垂直に近い角度で立ち上がる形態をもつ。調整は、外面口縁部がヨコナデ、底部が指押え、内面ヨコナデを施す。(4)は復元口径14.6cmを測り、口縁端部が外反する。内面には1段の放射状文、体部外面はヘラケズリ調整である。(5)は復元口径16.2cm、器高5.8cmを測る。口縁部は外反した後やや内彎気味になる。内面に1段の放射状文、底部内面に螺施文を施す。底部外面ヘラケズリ、口縁部外面はナデの上をヨコ方向のヘラミガキを施す。(5)・(6)ともに(西1978)によると飛鳥Ⅲの型式に近い様相を示す。(6)は復元口径18.0cmを測る。口縁部がやや外反しながら立ちあがり、端部で内彎し、丸味をもつ。内面は2段重ねの放射状文を施す。(7)は復元口径17.5cmを測る。調整・内面の2段の放射状文は同じである。いずれも(西1978)によ

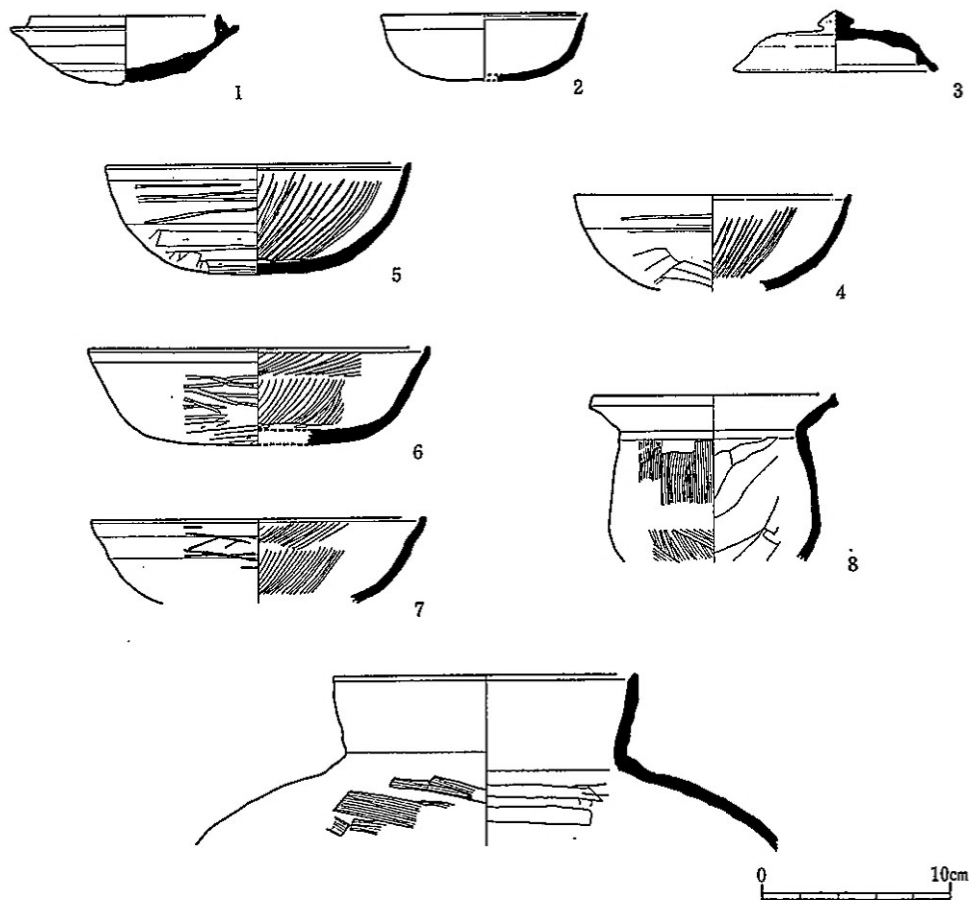
る飛鳥Ⅳの型式に近い様相を示す。

土師器 甕(8) 復元口径12.08cm、最大腹径15.2cmを測り、下膨れの体部に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや肥厚する。外面は体部上半が細かいハケメ、下半が荒いハケメ、内面はヘラケズリ調整である。外面全体に煤が付着する。

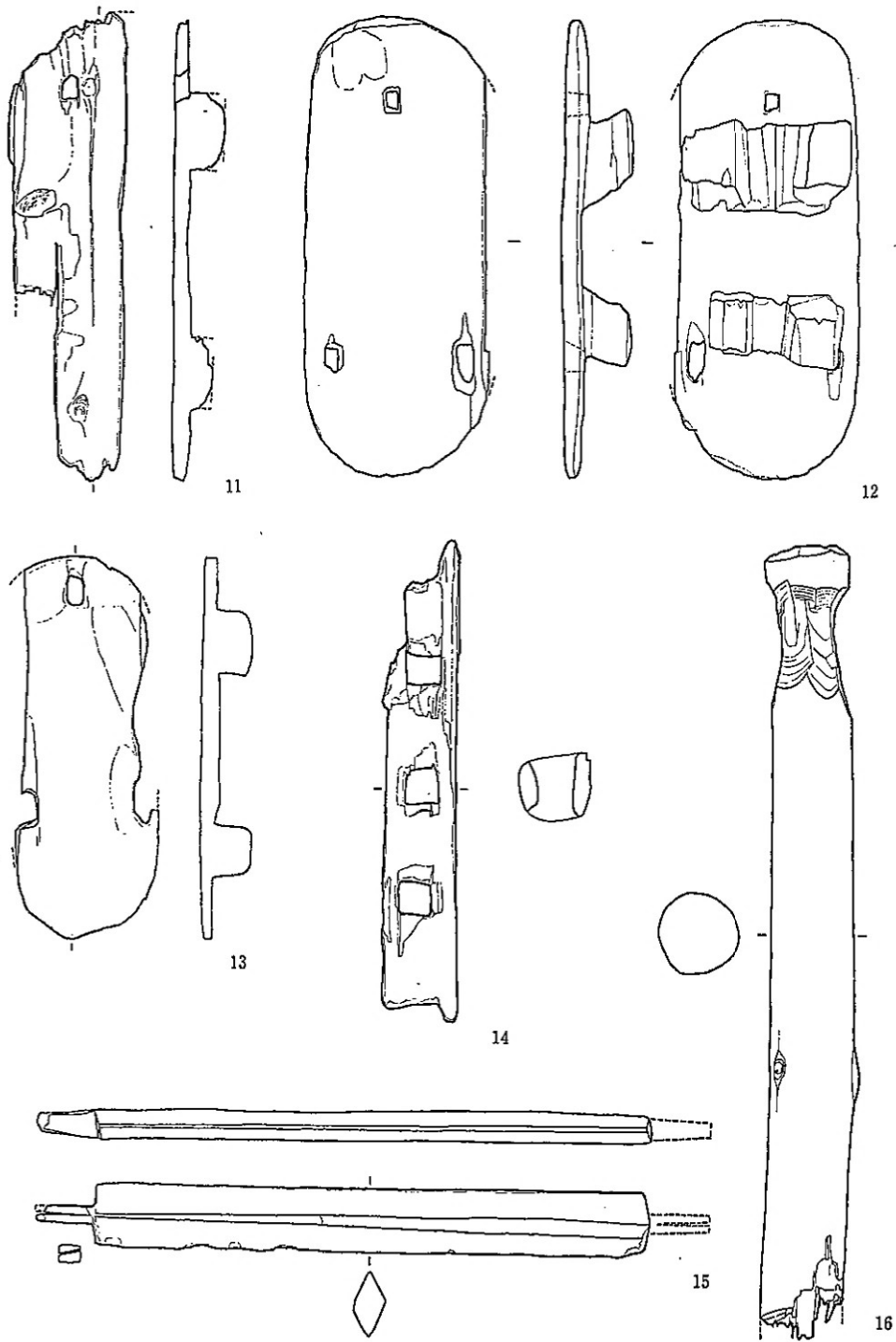
土師器 短頸壺(9) 復元口径16.0cmを測り、端部は内傾し、沈線を1条施す。体部外面はハケメ、内面はユビナデ調整である。

〔木器〕

下駄(11・12・13) (13)は両側が若干欠損しているが、ほぼ全容を知る事ができる。長さ21.5cm、現存幅7.8cm、高さ2.9cm、台板厚1.15cmを測る。平面状態は、前後を丸く削り出した長方形である。緒孔は、0.9×1.5cmの方形である。鼻緒孔は、前端より1.05cmのほぼ中央にあけられ、前歯のすぐ前に位置する。後緒の2孔は、後端より6.2～6.1cm、後歯のすぐ前に位置する。歯は、前歯が前端より2.95cm、厚さ3.5cm、現存高1.0cm、後歯が後端より3.9cm、厚さ3.5cm、現存高2.0cmで、削り出されている。前歯は、右側がよく摩滅している。(12)は完形品である。



第314図 SX4001出土遺物実測図



第315图 SX4001出土遗物实测图

長さ25.8cm、幅10.0cm、高さ3.9cm、台板厚1.0cmを測る。平面形は、前後を丸く削り出した長方形である。緒孔は、1.0×1.5cmの長方形である。鼻緒孔は、前端より4.2cm、ほぼ中央に位置し、前歯のすぐ前にあけられている。後緒の2孔は、後端より約5.8cm、後歯のすぐ後の位置にあけられている。歯は、高さ2.4～2.5cmを測る。側面形態は台形を呈し、前後にふんばったつくりである。両歯とも中央が若干凹んでいる。(11)は縦に約1/2が残っている。現存長26.6cm、現存幅6.3cm、高さ2.8cm、台板厚0.6～0.9cmを測る。緒孔は、現存後端より21.1cm、割れ面より右へ約3cmの位置にあけられ、1.0×3.0cmの方形である。歯は、前歯が幅4.1cm、高さ1.2cm。後歯が幅4.4cm、高さ2.0cmを測る。後歯の方が摩滅が著しい。

織具 (15・16) (15)は暗灰色粘土が堤の斜面に薄く堆積している部分から出土した。一端の突起部を欠くが、復元長は約38cm・突起部を除いた部分の長さ31.3cm、幅3.6cm、厚さ1.8cmを測る。幅、厚さはほぼ一定しており、中央の断面形は菱形を呈する。突起部の幅は1.1cmあり、端に近づくにつれて厚みを減ずる。突起部には縦に割れ目を入れており、一部に紐ずれかと思われる溝状の窪みが認められる。全体にいいないな仕上げであるが工具痕は明りょうには認められず、糸の擦痕なども認められない。(16)は杭に転用されていたものである。弥生時代後期の溝SD0033埋没後の窪みに堆積した暗灰色シルトと灰色細砂の互層に打ち込まれていた。この層は、基本層序の第Ⅴ層と同時期の堆積層であることから、杭として転用されたのは一時期新しい沼沢地と同じ時期と考えられる。織具は、樹表をはいただけの丸棒の端近くに幅の広い荒いえぐり込みを入れたものである。一端を欠失するが現存長は43.6cm、直径4.7cmを測る。表面は特に調整していないがなめらかである。先端の削りやえぐり込みの工具痕はかなり鋭利で力強い。

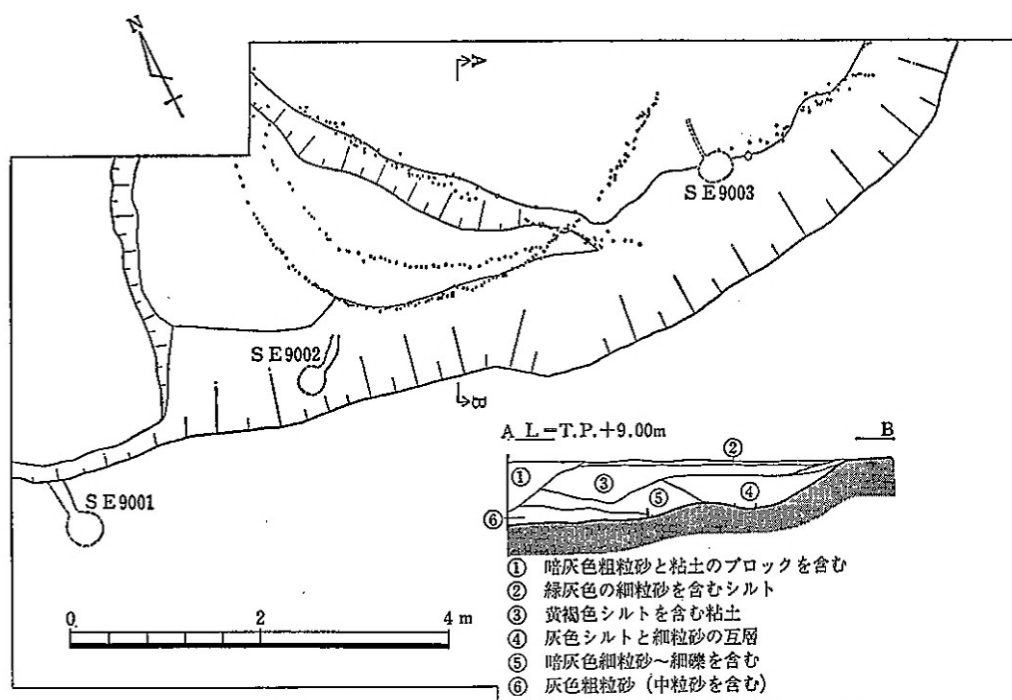
大足 (14)

現存長29.3cm、約4cm四方の方形の断面形を有する角材に約2cm四方の方形の穴を穿ったもので、両端とも折損するが5孔まで確認できる。横棒が残存していないため台木の長いタイプの代掻である可能性もあるが、この部分では着柄孔はない。全体に火を受けているが、それほど炭化はしていない。また、方形の穴の内面が焼けていないことから横棒のある状態で火にあったことがわかる。沼沢地西北端近くの暗灰色粘土より出土した。これとよく似たものとしては、静岡県伊場遺跡出土の例がある。

〔鉄器〕

鹿角装刀子 (17) 全長19.6cm、刃部残存長6.5cm、刃部幅1.3cm、背部の厚さ0.3cm、柄部径1.7×1.5cmを測る。刃部先端は欠損し、銹化のため刃こぼれする。柄部の先端両側面には、自然の凹凸を残す。刃部と柄部との接合部の状態は、銹化のため観察できない。

鉄鎌 (18) 長さ17.6cm、幅は基部において2.6cm、中央部で1.5cm、背部の厚さ0.2cmをはかる。刃は、ゆるやかに内彎し、基部は、側縁全体を上方へ折り曲げる。他遺跡の出土例は、大多数が、これとは逆である。基部には、鎌身とほぼ直角に木製の柄がとりつけられる。上端部と下方は欠損するが、外側を挟って丁寧につられている。



第319図 NR9001平面図及び土層断面図

なされたもので、流路が北へ移動すると共に打ち変えられたのであろう。

埋土は、基本層序（第IV章）の第IV層がこれに当る。

出土遺物（第320・321図）

〔陶磁器〕 染付碗、緑釉陶器碗、すり鉢等が出土した。江戸時代のものと思われる。

染付碗（1～9）（7・9）は淡緑色の釉が施される。口縁内面に淡青色の方格文様が施され、外底面には淡青色で印と思われるものが描かれている。脚下部は無釉である。くらわんか茶碗と思われる。（7）は復元口径11.1cm、器高6.4cmを測り、体部は丸みをもって立ち上がる。内底面は淡青色の釉で圏線を、濃青色と淡青色の釉で花が描かれている。（9）は復元口径10.5cm、器高5.7cmを測り、体部は逆台形状を呈し、内底面に淡青色の釉で圏線を、濃青色の釉で花が描かれている。（2・6・1）は緑がかった白灰色の釉がかけられている。（2）は復元口径9.2cm、器高5.5cmを測り、体部はなだらかなカーブで立ち上がる。高台外面に濃青色の釉で線が2本描かれている。高台底面は砂粒が付着している。体部には雲状の文様が描かれている。（6）は復元口径9.3cm、器高6.9cmを測り、体部は底部から屈曲してまっすぐに立ち上がる。高台底面は砂粒が付着する。体部外面には緑がかった淡紺色の釉で網文様が描かれているが、これは古伊万里系の特徴である。（1）は復元口径12.6cm、器高5.0cmを測り、体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はやや外反する。高台底面は砂が付着し、体部外面と口縁部内面は淡い紺色の釉で曲線的な雷文状の文様が描かれている。（8）は少し青味のある透明の釉がかけられている。口径

10.6cm、器高 5.8cmを測り、体部はカーブをもって立ち上がる。口縁部内外面に淡青色の釉で線が、体部に濃淡の紺色の釉で「井」と花の文様が、高台部外面に緑褐色の釉で線がそれぞれ描かれている。(4)は灰色の釉がかけられ、復元口径11.0cmを測り、体部は外に開き屈曲して立ち上がる。内底面は無釉であり、絵柄は不明である。(10・11)は碗の破片である。(10)は透明に近い釉がかけられ、外面に蔦状の文様が描かれている。(11)は外面に濃淡青色の釉で梅の花の絵が描かれている。以上、濃淡の染付等から古伊万里系と思われる。

緑釉陶器碗(3) 高台径 4.4cmを測り、灰緑色の釉がかけられ、貫入がある。内面に三叉トチの痕跡がある。底部は回転ヘラケズリ調整である。

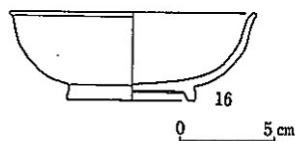
その他の磁器碗(5) 高台径4.6cmを測り、淡灰褐色の釉がかけられている。

すり鉢(12) 復元底径13.2cmを測り、外面は回転台使用のナデ調整である。内面は5条の櫛で左回りに浅く刻まれた後、ナデ、その後4条の櫛で左回りに下から上へ刻まれている。

軒丸瓦(13・14) いずれも巴文であり、珠文を指頭で押さえている。(13)は径12.3cmを測り、左回りの巴文で珠文は13個である。成形はナデ調整である。瓦当と丸瓦の接合部は棒状のもので刻んだ痕跡がある。(14)は径13.7cmを測り、左回りの巴文で珠文は12個である。ナデ調整である。側縁の幅が広く、円形の頭と尾の長い巴文なので江戸時代のものと思われる。

土管(15) 口径 9.8cm、長さ23.8cmを測り、丸瓦を2つ合せたようなものである。瓦質である。内面に布目が見られ、その他の調整はナデ調整である。

〔木器〕



漆器碗(第16図) 口径12.6cm、器高4.6cm、高台径6.6cmを測る。体部は丸く、口縁端部はやや外反する。高台は大ぶりで底部から 0.7cm突出する。内外面とも朱漆が塗られている。

第321図 NR9001出土遺物実測図

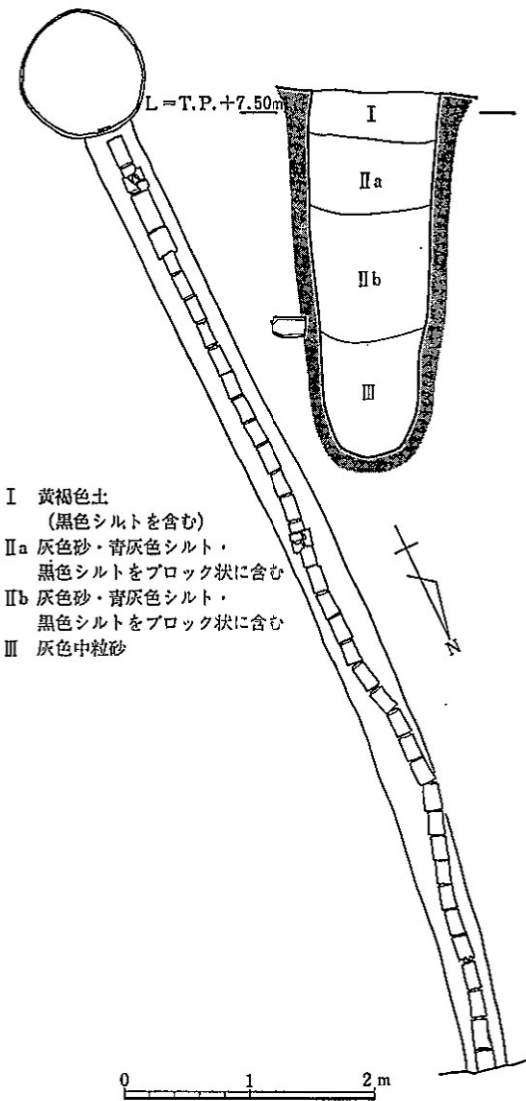
2 井戸

SE9001(第322図) F-18、19区で検出され、掘方径 1.0m、深さ2.85mの円形素掘りである。他の2基と同様北方向にのびる土管が検出されている。土管が埋設された溝は、上部幅 1.0m、深さ2.0mを測る。埋土は、下層から青灰色砂、黒色粘土と青灰色粘質シルトのブロック層、黄褐色砂と灰色粘土塊のブロック混入層である。土管はこの溝の底に設置されており、検出数は37個であるが、更に調査区域外にのびている。土管の法量は、井戸寄りの4個が径0.15m、長さ0.33m、他は径 0.1m、長さ0.20mを測る。これらの土管も接合方法から井戸への取水用と考えられる。

SE9002 (第323図) H-16区で検出され、掘方径 1.5m、深さ 1.4mを測る。井戸枠は木製桶2段積みで、下段の井戸枠から土管が北東方向へのびていた。瓦管は径0.15m、長さ0.23mで10個残っており、この下には板が2枚敷いてあった。また、この瓦管は下段の井戸枠に差込まれており、その接合方法から井戸への取水と考えられる。遺物は出土しなかった。

SE9003 (第324図) J-12区で検出され、掘方径 1.8m、深さ1.85mを測る。井戸枠は、木製桶を2段に積み重ね、更に上に瓦1段が積まれていた。上段の桶は土圧で変形し、それに伴って瓦も一部倒れ込み落ち込んでいる。下段の桶は径0.83cm、長さ 0.9mを測り、この中心部から北方向に土管が出ており、それに平行して東側に断面四角形の木製桶がある。更に土管の西側には北西方向に、竹の節を抜き外側に紐状のものを巻きつけた竹管が上下2段検出された。土管

は径0.15m、長さ0.33mで10本残っており、井戸枠に差し込まれ、井戸枠寄りの2本の上と左右には、幅0.1m、長さ0.6mの板が4枚載せてあった。土管と木製桶は共に川に向かい、土管の接合方法から井戸への取水用と考えられる。竹管2本は上が長さ 2.6m、下が2.0m残るが、井戸枠に差し込む施設はみられなかった。遺物は出土しなかった。

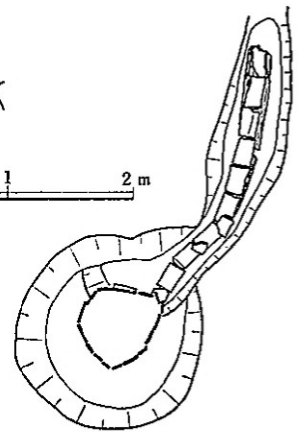


- I 黄褐色土
(黒色シルトを含む)
- IIa 灰色砂・青灰色シルト・
黒色シルトをブロック状に含む
- IIb 灰色砂・青灰色シルト・
黒色シルトをブロック状に含む
- III 灰色中粒砂

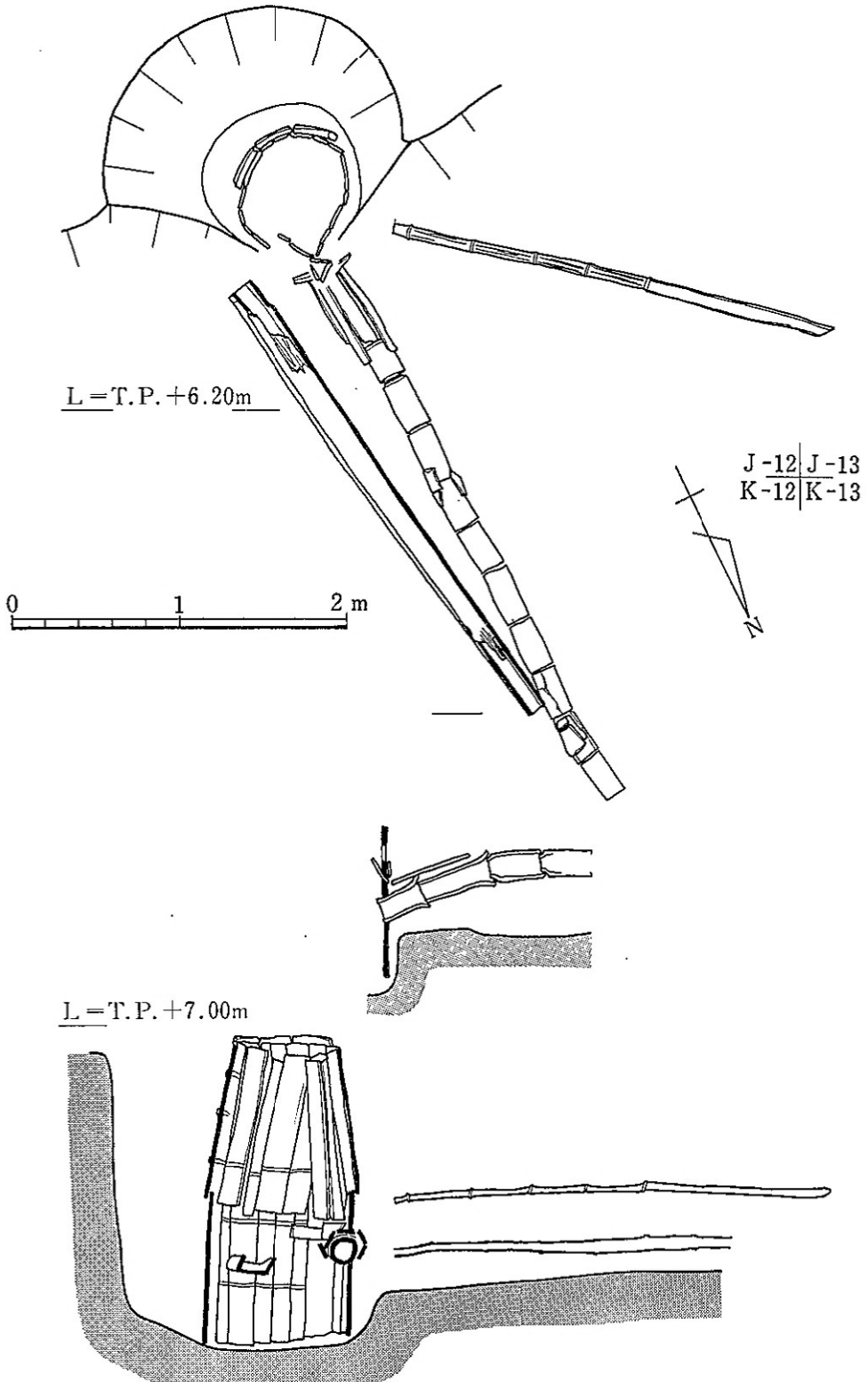
第322図 SE9001遺構平面図及び土層断面図 (1/50)

J-18J-17
I-18I-17

0 1 2m



第323図 SE9002遺構平面図 (1/50)



第324図 SE 9003遺構平面図及び断面図 (1/40)